
ユニヴァース

クモガミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユニヴァース

【Nコード】

N0994Y

【作者名】

クモガミ

【あらすじ】

6つの大陸大国と9つの中小島小国が存在し、？無数の世界を宿す？『世界樹』を中心として成り立った、世界『アメストラル』昔、この世界に魔装器まそうぎと呼ばれる不思議且つ絶大な力を持った武器が現れ、現代の人々や各国々はこの魔装器まそうぎの研究や開発に本格的に乗り始めた頃。

何故か、空から記憶を失ったある一人の少年？カレン？が落ちて来て、その落ちて来たカレンに偶然出会ったある一人の美少女がペンダントを置き忘れ、カレンはそのペンダントを届けるためにその少

女を追いかけるが……………

ひよんな事から、魔装器を手に入れ、そして、少女を追いかけている途中、運命的或いは必然的な出会いと、それに伴って次から次へと厄介事の嵐が待ち構えているなど、行く先々に波乱が満ちたカレシの冒険が始まったのだった。

P・S・ 作者より

この小説はド素人が書いた物で、見られる方は遠慮なく叩いても、辛口評価しても良いのでは非、評価してください。ついでに宜しかったら、アドバイスや注意点、もしくは疑問に思った事を気軽に指摘してくれたら幸いです。（※この作品は某小説サイトで投稿済みなので、二重投稿になります）

世界『ア메ストラル』

葉の一つ一つに一つの世界を宿す、世界の母『世界樹』

その『世界樹』の葉の一つ、世界『ア메ストラル』。

この世界は6つの大陸大国と9つの中小島小国で出来た、『世界樹』の？枝？を中心に作られた世界。

『アメストラル』では、あらゆる不思議な出来事とあらゆる不思議な生物が存在し、人間たちと共に共存し合って生きています。

遙か昔、魔人『アルタイル』と呼ばれる。常識を超えた異常なまでの力を持った邪悪なる者が世界を我が物にしようと企み、その力を持って世界を恐怖と混乱の渦に巻き込み、人々を不安と恐怖で支配しました。

しかし、それを止まるかの如く世界樹から現れた、『光の戦士』と呼ばれる者が魔人『アルタイル』を討ち、世界は救われた。

それから約600年後、空からとても巨大な？船？が落ちてきて、その？船？にはこの世界には無い遥かに進歩した技術と科学、そして？魔装器まそうぎ？と呼ばれる。強力で不思議な力を持った武器がありました。

人々はその？船？に居た人達を？『神の遣い』？と呼び、崇められました。

ちょうどその頃、死んだはずの魔人『アルタイル』が復活し、人々

は再び恐怖と絶望に支配されました。

しかし、それを討たんとせん勇者『トラル』とその仲間達が現れ、共に力を合わせ、見事魔人『アルタイル』を倒し、世界は再び安寧と平和を取り戻した。

そして、しばらくの年月が経ち、『アルタイル』が居なくなり、人々はこの平和の時が何時もでも続くかと思っていたが、その人々の思いとは真逆に各国々は自国の覇権の為、もしくは国の存続や繁栄の為、或いは利己的な目的か己の正義や理想の為、それぞれの思惑の元。

各国々は『神の遣い』が齎した魔装器まそうぎを使って、戦争を勃発させ、長い時の間、争い続けました。

それから約400年後、戦争状況は一旦落着き、大きな戦争が無くなった現代の人々は『神の遣い』の技術と科学を吸収して、目覚ましい程の技術力と科学力が進歩し、昔より暮らしが豊かになった各国々は、？魔装器？の研究と開発に本格的に乗り始めた頃。

新たな物語が動き出そうとしていた……………

世界『アメストラル』（後書き）

このヘンテコなプロローグが読者の皆さんにちやんとご理解いただけるか
心配です。

空から落ちてきた少年と湖に居た少女

朝日が昇り、新しい日を教えてくれる日差し、空は晴れ、雲はあるが、太陽を包み込む大きさは無く、日光が雲によって、隠たり出たりする程度であつた。

そして、鳥たちは空へ羽ばたき、雲の下まで飛び上がった。その鳥たちの上の雲より、さらに上から、少年？が落ちてきた。

少年は重力に沿って、どんどん下に進み、雲の中を突き破り、更に下へ落ちて行つた。やがて鳥達も通り過ぎ、その落ちている？少年？がやっと目を覚めます。

.....

少年は、まだ寝惚けたような顔で、周りを見渡した。

.....

少年は、今自分が置かれている状況をまだ理解しておらず、落下していく中で、自分が今何処に居るのか、よくよく考えてみると。

!

少年は、やっと、自分の状況を把握し、慌てて周りを見回りだした。一方少年の遥か下にある湖に人影があった。その人影は水浴びをしている一人の少女でした。

少女は上機嫌に水を体に浴びさせていた。少女はもう十分だと思
い、大きな岩場の上が小さな滝になっている岩場の溝の中に昇り上
がり、中に置いた服を取って、着替えをしようとした。

.....!

.....!!

一方少年の方は、慌てるも虚しく、みるみると地上に近付き、下にある湖がハッキリ見えてきて、後数十秒で湖叩きたけられる事は目に見えていて、少年は咄嗟に手を前に出して、腕をクロスさせて、身を固めて目を固く閉じた。

「!?!」

ついに湖に激突し、落下の衝撃で大きな爆音と共に大きな水柱が立ち、岩場の溝の中に居た少女は、突然の出来事に驚く。

「! なっ、何!？」

困惑する少女。一方少年は、湖の深い処まで入り込み、湖に激突した衝撃のせいで意識が朦朧となり、意識を放しそうになるが、息が出来ない事に我を取り戻し、上を見上げ、日差しが差し込む水面を見て、無我夢中に上を目指して泳ぎ、数秒経たない内に湖に顔を出した。

「プハッ!」

息が出来る事を確認したちようどその時、太陽に雲が掛り、日差しが途切れ、湖一帯が薄暗くなった。少年は、そんな事も気付かず、何度も呼吸が出来ることを確認し、ようやく周りを見渡し、薄暗い中をとりあえず前に進み、目の前にある、小さい滝がある岩場まで近づこうとしたその時。

雲は太陽から離れ、日差しが戻り、湖は再び照らされ、辺りが瞬時に明るくなった。

「!」

視界がハッキリして少年は、岩場の溝の中に誰か居る事に気付く、一方少女も湖の中に誰かが居ることに気付いた……………

「……………」

二人はやっと、お互いの存在に気付き、目と目が合い、見詰め合った。しかし、ここで一つの問題があった。それは少女が、まだ服を着る前であり、下着は手に持ったままで、言わば少女は全裸の状態であり、少年はその事に気付き、目のやり場に困り、目を背ける。

「……………」

気まずい空気が流れ、長い様な短い沈黙が続く。そして。

「イヤアーーーーーっ!」

叫び声と共に、魔法陣が現れ、魔法陣から大きな水の塊が少年に向かって飛び勢い良く飛び出し、少年は避ける余裕も無く。

「！！！」

爆音と共に水柱が立ち、少年はまともに少女の魔法を喰らい、再び水の中に入り込む。

一方、少女は慌てて服を取って、少年の事など見向きもしないで、その場を急いで離れ。

そして、少女の渾身の重い一撃を喰らった少年は朦朧とする意識の中で、ついに意識を手放した……………



……………いつしか時が経ち、少年はいつも間にか陸に上がり、小さな岩を背にし、眠っていた。そして、少年は目を覚まし、辺りを見渡す。左の方を見ると、さっきまで居た湖がすぐ傍に見える。すると右の方から足音が聞こえ、足音がする方に顔を向けると、そこには、やや太った髭の生えた男性が歩いてきて、男性は少年の事に気付く。

「おお、起きたか！ どうだ、何処か痛い所は無いか？」

と、男性は、心配そうに声を掛け、傍に寄ってくる。

「やあ、驚いたぞ！ 水を汲みに此処の湖に寄ったら、急に馬鹿デカイ音が響いてな！ ビックリしたら、そう経たない内にまた同じぐらいのデカイ音がしてな！」

男性は自分が此処まで来た経緯を話し出した。

「何事かと思ってやって来たら、その湖の真ん中で、お前さんがプカ〜と水の中に浮かんで居たもんだから、たまげたよ！ もうビックリの連続だ」

と男性は淡々と話を進めて行く。

「急いで、お前さんを引き上げて、容体を調べて診たら、気絶してるみたいだったんでなあ、だからお前さんが目を覚ますまで、介抱していた訳だ。」

全ての経緯を話した男性は、ゆっくり腰を下ろし、少年の横に座

り、手に持っていた、水筒を少年に差出した。

「飲むか？」

少年は、男性の心遣いに感謝し、水筒を手にした。

「ありがとう」

礼を言い、水筒を口に含み、中の水を口に流す。喉を2、3回鳴らし、乾きを潤いだ。少年は水筒を男性に返し、男性はそのまま水筒を口に含み、喉を鳴らす。水を飲み終わり、男性は少年に尋ねた。

「所でお前さん、湖で何があったんだ？」

少年は男性の質問に対して、湖での出来事を思い浮かべた。目を開けたら空の上で、何が分からず、そのまま湖に落ちて、水面から顔を出して、そして前を向いたら。

「女の子が……」

ボソッと少年が呟く。

「女の子が？」

反応して、男性も言い返す。

「女の子が……」

少年は湖で遇った女の子を思い浮かべる。つらりとした綺麗な肌に、腰の辺りまで下ろした長くて美しい金髪、濁りの無い水のように蒼く透き通った瞳、それに見合った気品さを感じる顔、そして豊かな……。

邪的な事を思い出そうとしてしまうところだった少年はそれ以上、思い出すのをやめ、頭を左右に振る。

「お、おい、どうした？ 女の子が一体どうしたんだ？」

男性は少年の行動に困惑する。

「い、いや！ 何でもない……何でも……」

何かを隠そうとしている少年の言動を察した男性は。

「じゅあ、質問を変えるが、お前さん何処から来たんだ？」

此処から近い村から来たのか？」

この質問に少年は……。

「何処から……？」

顔を俯き始め、考える少年……………。

「何処から……………来たんだろう？　僕は……………一体何処から来たんだろう？」

何も思い出せない少年の発言に『まさか』と言葉を無くす男性。そして。

「僕は……………誰なんだろう？」



思いも由らない言葉を口にした少年は、その後、男性に自分の身元が確認できる物を持っていないかどうか、少年に確認させる。

「身元がわかる様な物無し、所持金も無し、服以外何も無し。困ったなあゝゝ、これじゃあゝゝお前さんが何処から来たかさっぱりわからんよゝ」

ハアッと溜息を吐く男性。

「本当に何も思い出せないのか？」

この問いに、少年は首を縦に振って答える。男性は再び溜息を吐く。

「しかし、本当に困ったなこりゃゝゝ……………ん？」

男性の視線が少年の顔から下に向き、左腕の手首に止まる。

「お前さん……………その左手首に付いているのは……………」

「えっ？」

少年は男性に指摘された左手首を見ると、手首にリング状のような物が付いていた。それに触れて、何なのか確かめた男性が。

「ほう……………木製のブレスレットかあ、良く出来てるなあゝゝ」
ブレスレットの出来まいに関心したのか。興味深そうに少年の手を取り、手の平の方まで見る。すると。

「おっ、文字が刻み込んであるぞ！　えっとなにになに……………」

そこには、 K A R E N と刻み込んであり。

「カ・レ・ン？」

その名前に聞き覚えを感じた少年は。

「きつとこれがお前さんの名前だよ。ブレスレットに名前が刻んである。ということは、お前さんの物であり、同時にお前さんの名前でもあるんだよ。」

確信したのか男性は安堵の息を漏らす。少年もこの名前を何度も呟く。

「カレン……カレン……」

少年は自分が口に出している名前を言う度、強い確信に近い物を感じ。それを察した男性は。

「で、それがお前さんの名前だよな」

期待に満ちたような目で、少年の心境を窺う男性、そして。

「うん……これが僕の名前だと思う……」

少年は自分の名前がわかった様で、笑顔で答える。

「よし！ これは大きな一歩だぞ。名前さえわかれば、少しはお前さんの身元が分かるかもしれん。最もお前さんの事を知っている人に出会えばの話だが……まあなんとかなるだろう。あつ、そうだ！」

何か思い出したのか、男性は自分の胸に手を当てた。

「ワシはコルト。世界を旅して渡る商人だ」

「商……人……？」

「そうだ。最も世界中の国々を周っている訳じゃ無いけどな」

頭をポリポリ掻きながら、照れ臭そうに言うコルト。

「ああ、そういうば、これから近くの村に行こうと思うんだが、お前さん——いや、カレンも一緒に来るか？ 乗せて行ってやるぞ」
その発言に首傾げるカレン。

「乗せる？」

「おおそうだ。ほれ、あそこに馬車が見えるだろう？ あれがワシの馬車だ」

指を指す方に木岐を越えた先に馬車が止まっていた。

「……………」

その提案について考え込むカレン、そんなカレンの様子を見たコルトは気を遣って。

「まあ、突然の出来事で、そう簡単に決められる事じゃないよな…………。じゃあ……少し時間をやるから、決心したら馬車の方まで来てくれ」

「ありがとう……………」

カレンは礼を言い、コルトは『じゃあな』と手を上げ、振り返って馬車の方に向かう。一人になったカレンは湖の近くを歩きながら頭の中を整理しながら考える。

「（僕は何で空から落ちて来たんだろう……？　なんで記憶を失ったんだろう……？　そしてこのブレスレット以外、何で何も持っていないんだろう……？）」

しかしどんなに思い出そうとしても何も浮かぶ事は無かった。

「（だめだ！　考えても全然思い出せない！　どうして何だ！！）」

「

頭を左右に振って、行き場の無い不安や焦りに取り払おうとした。

「本当に……………どうしてこうなったんだろう……………」

「…？」

ブレスレットを見詰めながらボソツと呟いていると、あの時の少女が立っていた小さな滝が掛った岩場の溝に近付いていた。

「ん…………？」

視界にあの少女が居た岩場の溝の中に何か光る物を見つけ、カレンはそれに近付き、手を伸ばして拾い上げる。

「これは…………ペンダント？」

拾い上げた物は綺麗な金色のペンダントで中央に小さな宝石みたいな物が埋め込んである。何となくカレンはペンダントの上の部分を押してみると、ペンダントの前部分が開き、そこには。

「これは……………」

そこには、破れた小さな写真があり、その写真の中にあの時の少

女と小さな男の子が居た。しかし、写真に写っている少女はあの時の少女に比べて幼く、これは昔の写真と思ったカレンはそのペンダントを見詰め、ゆっくりフタを閉じた。すると。

「あれ？ このペンダントにも裏に文字が刻んである」

ペンダントをひっくり返して見ると、そこにはカレンのブレスレットと同じく、文字が刻み込まれてあった。ペンダントには B L U E——とそれ以上は磨り削られたのか、よく読むことが出来なかった。

「ブルー？ これがあの子の名前？」

ブルーという名前かどうか分からないが、このペンダントがあの少女の物という可能性は高かった。

「（これは……………あの子にとって、大切なもの…………………………？）」

何故かそう思ったカレンは再びペンダントを見詰める。

「………………………………………」

そして数秒間の沈黙が続き、カレンは何か決心したかの様に強く頷き、ペンダントを胸ポケットにしまい、コルトの馬車の方に向かって走り出す。木岐を抜けた先に馬車の席で待っているコルトを見つけて。

「コルトさん！」

名前を呼ばれて、コルトは振り向き。

「おお、来たか！ で、決心したか？」

待っていたのか、答えを早速、返事を聞き始め。

「はい、とりあえず。その近くにある村に行ってみたいと思います。だから連れて行ってください！」

「よし！ そうと決まれば、お安い御用さ！ さっ、早く乗んな！」

「はい！」

了解したカレンは、馬車に昇り上がり、トルコの隣の席に座る。そして。

「ちゃんと乗ったな？　よし！　出発だ！」

ハイイツ！　と、馬に出発の掛け声を出し、馬車を前進させる。

「その村って、此処からだとほんの十分程度で済むか？」

「なーに、此処からだとはんの十分程度で済む。あつという間さ」

そう言いながらコルトは馬車を進め、限りなく続く青い空の下で

土の大地を走り始めた……………

盗賊と謎の物体 出現



……そして、馬車を走らせてそう経たない内に、遠くからだが一つの村が見えてきて。

「ほれ！ あそこに見えるのが『カムーシャ』村だ」

「あれが……」

もうすぐ着く村を眺めていると、カレンは道の先に人影を見つける。

「あつ！ 人が倒れてる！」

道の真ん中で人が倒れているとカレンはコルトに伝える。

「ぬお！ 本当だ！」

コルトは、倒れている人の前で馬車を停止し、二人は馬車から降りる。

「大丈夫ですか!？」

「やれやれ！ 今日には倒れている人が多い日だ」

倒れている人に駆け寄るカレン、溜息を吐きながらカレンに続くコルト

「ううっ……」

小さくて弱った声を出すうつ伏せ状態の男性に、急いで駆け付けたカレンは手を伸ばして、立ち上がらせようとするが……

「！」

突然、カレンの動きが止まり、カレンの目先に一本の剣が突き付けられていた。その剣は倒れていた男性から伸びていて、うつ伏せだった男性はゆっくり立ち上がった。

「動くなよ。ボウズ。そっちのじいさんもな」

立ち上がったスキンヘッドの男は歪んだ笑みを浮かべ、剣をカレ

ンの喉元に移した。剣を突き付けられたカレンは動く事が出来ず、コルトも突然の出来事に呆然としていたが。

「お前……盗賊だな！」

「今頃気付いたのかよ……おい！」

男は近くに在った大きな岩に声を掛け、そこからやたら髪の毛が長い男が出て来て、その後から、その長い髪の毛の男の2倍以上大きい大男が登場し、二人はスキンヘッドの男と同じ服装をしているからにして、仲間である事は明らかだった。

「へへっ、うまくカモが引つ掛かったなあ！　ハン！」

「ああ！　しかも見た所あの馬車は、商人の馬車だ！　金目の物だけじゃなく、食い物や酒も入っているかも知れねえ」

ハンと呼ばれたスキンヘッドの盗賊は、良い獲物を捕まえたみたい嬉しそうに話す。

「おい！　ラジリカ！　お前はハンと一緒にあのガキとじじいを見張れ、俺はあの馬車の中身を探る」

「おろろ、わかったよ。ケビー」

なまった様な声を出し返事する。ラジリカと呼ばれた大男は、スキンヘッドの男の隣まで移動し、ケビーと呼ばれたロン毛の盗賊は、コルトの馬車の中に入り込む。

「いいかお前ら、動くんじゃねーぞ。抵抗さえしなけりゃ命までは奪う事はねえ。大人しくしてるんだな」

カレンに剣を突き付けたまま警告をするスキンヘッドの盗賊、その隣でのほほんとした顔で、カレンとコルトを見詰める大男。もう一方の馬車の中に入り込んだロン毛の盗賊は早速、金目の物を探そうとした。

「さてさて、金目の物は——、ん？」

するとロン毛の盗賊はある物に目が止まる。

「何だこれ？　剣の取っ手と虫？」

そこには、古びた錆付いた剣の取っ手の様な物と虫の置物の様な物が置いて在った。

「何だよ。ガラクタかよ」

ガラクタだと即決めつけたロン毛の盗賊は、つまらなさそうにガラクタと思った二つを無視し、金目の物を探し続けた。

そして、カレン達の方では未だに剣を突き付けられて、動けない状況が延々と続いても取り乱す事も無く、じっと待ち続けた。

「おい、ケビー！ 何か金目の物を見つけたかー！ー！ー？」

スキンヘッドの盗賊が馬車の中に居るロン毛の盗賊に呼び掛ける。

「まだだー！ もうちょっと待ってくれー！ー！ー！」

「早くしろよー！ー！ー！」

スキンヘッドの盗賊が馬車の方に顔を向け、カレン達から目を外し、その一瞬を見逃さなかったコルトは、懷からナイフを取り出し、スキンヘッドの盗賊に斬りかかる。

「！ぬおっ！！」

それに気付いたスキンヘッドの盗賊は素早くバックステップを行い、ナイフをギリギリに避ける。

「大丈夫！？ ハン！？」

大男は仲間が斬りつけられ、心配そうに声を掛ける。

「テメー……、じじい！ よくもやりやがったな！！」

思わぬ攻撃をされたスキンヘッドの盗賊は、怒りを露わにし、コルトに怒鳴りかかる。

「おい！ どうした！ 何があった！？」

馬車の中に居たロン毛の盗賊は、外の騒ぎを聞き付け、馬車から飛び出す。

「お前達にやる物は無い！ さっさと何処かに行け！！」

ナイフを構え、盗賊達に強気な態度を見せるコルト。

「コルトさん……」

コルトの突然の行動に驚くカレン。

「この野郎……調子乗りやがって！ おい！ ラジリカ！ は~~~~い」

スキンヘッドの盗賊に呼ばれ、大男はトルコに向かって、その重

そう体を突進させる。

「うおおおおお!!」

ナイフを両手で握り締め、大男に突進して突き刺そうとするコルト。だが。

「!」

あっさりと大男の片手だけで、両手を握り締められ、突撃を止められるコルト。

「くっ!!」

「そりあ!」

大男はコルトの両手を握り締めながら、コルトを軽々と投げ飛ばし。投げ飛ばされたコルトは地面と激突して、転がっていった。

「があ!!」

「コルトさん!!」

投げ飛ばされたコルトに駆け寄るカレン。

「大丈夫ですか!? コルトさん!?」

「う……………」

何処か痛めたのか弱った声が漏れるコルト、地面に仰向けなコルトの上半身を抱き上げるカレン。すると、スキンヘッドの盗賊が傍に寄って来て。

「抵抗しなれりゃ、命まで取らねーつつたのによー。ばかなじいさんだぜ」

まるで自業自得だと言わんばかりの言葉を吐き、スキンヘッドの盗賊は剣を振り上げ、コルトに斬りかかろうとした。

「待って! もうやめて!」

カレンはスキンヘッドの盗賊の前に立ち、コルトを、身を挺して守ろうとする。

「ああ? なんだボウズ? おまえから先に斬られたいか?」

スキンヘッドの盗賊は、カレンの行動に苛立ちを感じた。

「お願いだから、許してやってください! この人はもう戦う力は残っていません!」

盗賊相手に必死に訴えかけるカレン。しかし。

「だめだ。そのじじいは俺達の警告を無視して抵抗した。だからもう抵抗しないよう、殺すんだよ」

理不尽な事をして、理不尽な物言いと言う盗賊に、カレンは。

「どうしても、許してくれませんか？」

一歩も引かこうとしないカレンは、どうしたら許してくれるか問
い出した。すると、スキンヘッドの盗賊は。

「そうだなあ、お前が代わりに斬られるってんなら。許してやっ
てもいいぞ」

悪意の塊のような理不尽な要求を言い出した盗賊達は、歪んだ笑
みを浮かべ。カレンの反応と返事を楽しもうとした。

「カ、カレン……」

「……………」

心配そうにカレンを呼ぶコルトにカレンは少しの間、目を閉じ、
そして、決意した。

「わかりました。それで許してくれるなら……」

「！ お、おい！ カレン！！」

まさかの返答したカレンにコルトは慌てて叫ぶ。そして盗賊達も
予想外の答えに少し驚いた顔をするが。スキンヘッドの盗賊は、ニ
ヤッと笑う。

「そうかあ……………じゃあ、遠慮なくやらせてもらうぜ！！」

スキンヘッドの盗賊は、剣を振り上げ、垂直にそのまま振り下ろ
す。

その瞬間、カレンは死を覚悟して目を深く閉じた。そして。

「ヒヒ……………」

突然、馬車の馬が叫び、盗賊達は驚き、振り下ろされた剣はカレ
ンの頭上数センチ上で止まり、その場に居た全員が馬車の方を見る
と、そこには。

「な！ なんだありゃ！！」

「……………」

馬車の中から日光のような強い光が漏れ出していた。

「まっ、まぶしいいゝゝゝ！」

「ど、どうゆう事だこりゃ！」

「……………?」

全員が不可解な出来事に驚いていた。そして、フッと馬車から光が無くなった。

「い、一体何が……………!!」

すると馬車の中から山吹色の謎の物体が飛び出してきて、スキンヘッド盗賊は眼を見開いた。

「あ、あれは……………!!」

「何だあれ!!」

その謎の物体に見覚えがあるコルトと、ついさっき見つけた物とは気付いていないロン毛の盗賊の眼に映った、謎の物体はスキンヘッドの盗賊の方に突撃するかのように突進した。

「なっ……………!!」

謎の物体はスキンヘッドの盗賊の剣の方に体当たりし、剣を弾き飛ばした。

「な、何だコイツ!!」

スキンヘッドの盗賊は、慌てて剣の所まで拾い直す。すると謎の物体はカレンの周りをグルグルと回り始め。カレンの手元に、持っていた白く染まった剣の取っ手の様な物を落とす。

「うわっと！」

何の前触れも無く落としたそれを慌ててカレンはキャッチしたら、謎の物体は取っ手の剣格にある、青い珠の反対側部分に差し込まった。

『RE^{レジ}GI・I^{イン}N』

謎の物体と剣の取っ手様な物から突然声が出て、それと同時に、剣の取っ手様な物の剣格の上に昇るようにみると形が形成されてゆき、大きな剣のような形になり始めた。

「あ……………!!」

目の前で起こった事に目を疑うカレンであったが。

「くそ！ 何だか知らないが！！」

「ッ！」

何が起こったか分からないが、スキンヘッドの盗賊はカレンに突進し、剣を振り下ろした。

振り下ろされた剣をカレンは謎の物体によって出来た剣で受け止め、強い金属音が生じた。

「ぬ！」

「ッ！」

力の押し合いにカレンは力一杯に剣を押し出す。

「うわっ！！」

スキンヘッドの盗賊の剣は、力尽くでカレンの剣にあっさりと弾き飛ばされ、同時にスキンヘッドの盗賊の身体も一緒に弾き飛ばした。

「この！！！」

「！」

仲間が続くように、隙を突いて後ろから斬り掛かろうとロン毛の盗賊はカレンに向かって剣を垂直に振り下ろしたが……………

「！」

素早い反応で振り下ろされた剣をカレンは横にズレてかわし、そして避けた直後、剣を持ち直して、剣の剣背部分をロン毛の盗賊に向かって、打ち上げるように振り上げた。

「ぶふっ！！！」

剣はロン毛の盗賊の上半身の正面に当たり、まるで鳥が飛び立つように吹き飛び。そしてそのまま落下して地面に激突し、ガクッと気絶する。

「く、くそ！ おい！ ラジリカ！ やっちまえ！！」

「アイアイサ~~~~」

今度は大男がカレンに突進し、背中に背負っていた大きな斧を取り出し。

ラジリカ「チョイサ~~~~!!」

力強い一振りをカレンに向けて振り下ろした。

「!!」

さつきとは比べ物にならない激しい金属音が生じ、その中でカレンは大男の一振りを受け止めていた。

「ば、バカナ! 俺達の盗賊団の中で自分と同じぐらいの大きな岩を持ち上げる程の怪力を持つラジリカの一撃の止めるなんて!」
信じられない光景を見ているような声と顔を出して、スキンヘッドの盗賊は啞然としていた。一方、大男の方も自分の一撃を止められたがショックだったのか、動揺する。

「そ、そんな~~~~~……」

カレンは大男が剣の押し合いの中で、ショックで力を抜き始めた事に気が付き、腕に更に力を強める。

「っあああああ!!!」

大男の斧を力尽くで弾き飛ばし、後ろに下がって、カレンは剣を後ろに構え。

カレン「はあああああ……!!」

刃先に力のような物を溜め込み。そして。

「剛魔!!!!」

掛け声と共に剣を振り払い、剣は空中で大きな風の波を作り、その波が次第に衝撃波となって大男のところまで走り飛び、真っ正面に直撃する。

「ぶへへっ!!」

風の壁のような物に激突した、大男は空高く吹き飛んだ。

「へ?」

呆然としていたスキンヘッドの盗賊の上空に大男の影が覆い被る。

「わあああああ!!!」

さつき、カレンに剣ごと弾き飛ばされた時のダメージで動く事が出来ず。そのまま大男がスキンヘッドの男の上から迫り来るように降って来て。

「ぐふっ!!!」

「ぐえっ!!!」

グシャッとスキンヘッドの盗賊は大男の下敷きになってしまい、ガクツと気絶する。大男は地面に叩き付けられ同じくガクツと気絶する。

「ふう……………」

盗賊三人組を倒したカレンは溜息一つ零した。

「……………」

「! コルトさんっ!」

戦いが終わって啞然と地面にまだ座り込んでいるコルトにカレンは身を案じて駆け寄った。

魔装器と人探し

三人の盗賊をたった一人で倒したカレンは、戦いで疲れた様子は全く見当たらず、しゃんしゃんとコルトの傍にたどり着いて、起き上がらせようと手を伸ばす。

「大丈夫ですか？ どこか怪我とかありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だ。よっこいしょっと！」

カレンの手を借りて地面から起き上がったコルトは、カレンが持っている。謎の物体によって出来た大きなライトピンク色の剣に視線を外さなかった。それに気が付いたカレンは。

「あのコルトさん、これの事を知っているんですか？」

剣を正面に運んで、カレンはコルトにこれが一体何なのか問いかける。

「ああ、これはたぶんあの古びて錆付いた剣の取っ手と虫の置物だ」

「？ 何ですか、それ？」

言っていることが理解できず、カレンはコルトに言葉に首を傾げると、剣の取っ手に差し込まれた謎の物体が勝手に剣格部分から飛び出した。

「REGI・OUT^{レジ アウト}」

続いて、声と共に取っ手から剣の刀身が花びらが散るように消え、謎の物体は取っ手から飛び離れた次には、またカレンの周りを飛び回る。

コルト「ああゝゝ、そうだなゝゝ、詳しい事はまず『カムーシャ』に着いてから話そう」

その提案に頷いたカレン。二人は馬車に乗り、『カムーシャ』に再び向かった……………



……………そして馬車を走らせてそう経たない内に目的地の村に着いた。

「おゝゝ、着いたぞ。此処が『カムーシャ』だ」

「……………」

『カムーシャ』に着いたカレン達は、馬車を村の出入り口の近くに止め。馬車から降りる。

「ちいさな村だか……………どうだ？ 見覚えあるか？」

「……………」

村を見渡すと丘の上に家と思われる建物が幾つもあり、そしてこの村の中央ら辺に井戸がポツリとあり、その他には野菜畑が村の至る所に在るだけだった。

「……………」

村を見渡しただけで何かを思い出すという都合の良い展開は訪れず、コルトの問いにカレンは首を横に振る。コルトは溜息を吐き、目の前を通り過ぎる鍬を持った村の男性を呼び止める。

「すまないが、あんた」

「はい？」

村の男性はコルトに呼び止まれ、カレン達の方に振り向く。

「この子に、見覚えはないか？」

コルトはカレンに指を指して、村の男性に尋ねる、男性はカレンに近付き、顔を覗かせる。じっくり見た後、男性は。

「いいやゝ、見掛けない子だなゝ。この子が一体どうしたんだ？」

村の男性はカレンを知らないかと答え、コルトの方に窺う。

「いいや！ 知らないならいいんだ！ すまないな、呼び止めてしまった」

村の男性に謝り、その場を離れる、コルトとカレン。

「んゝゝゝゝ、どうやら此処の住民じゃないようだな、お前さんは？」

此処の住民じゃない事に、再び溜息を吐くコルト。そんなコルトの顔を眺めていたカレンから。

「（グウウ~~~~~）」

「？」

気が抜けるような腹の鳴き声がカレンから聞こえた。それを聞いたコルトは。

「なんだ、腹が減ったのか？　しょうがないな~~~~、じゃあ~~~~」
コルトは辺りをキョロキョロ見渡し、ある一軒屋に目が止まる。

「あの宿屋で、腹ごしらえをするか」

宿屋と言ったと家に入るコルトに後に続いて入るカレン。二人は中に在った、テーブルの所に置いてある椅子に適当に座り、宿屋の受付にオニギリを注文した。間もなくオニギリがテーブルの上に置かれ、二人はオニギリを手に取り。

「いただきます」

カレンは一言挨拶を言い、コルトと一緒にオニギリを口に運ぶ。そして幾つかあったオニギリを食べ終わり、コルトの方から口が開く。「お前さんには、助けられたな。お前さんが居なかったら、ワシはどうなっていた事やら」

カムーシャに着く前に襲われた盗賊の件で、お礼を述べたコルト。それに対してカレンは。

「僕の方こそ、色々と助けて貰って、ありがとうございます」

自分も助けられたと、お礼を言い返すカレン。お互い心から感謝し、優しい笑みを浮かべる。

そんな二人の周りを飛び回る物体が居た、それは馬車から飛び出したあの山吹色の謎の物体であった。

謎の物体はまたカレンの周りをグルグルと回り、ピタッと肩に着地した。

「ところで……、これは一体何ですか？」

自分の肩に止まった謎の物体に指を指してコルトに尋ねるカレン。

「ああ、それはな—————」



………一方、カムーシャの外で。

「いててて、おい！　いつまで寝てんだ！　ラジリカ！　さっさと退け！」

大男の下敷きになっていたスキンヘッドの盗賊は、目を覚まし、自分の上でまだ気絶してる。大男に退けるように大声で起こす。

「むうううう、もう食えないようううううう」

起き上がった大男はまだ眠そうに呟く。

「何寝惚けてんだ！！　しっかりしろ！　くそ！　せっかくの獲物が！」

寝惚けた大男に喝を入れる。それに続いて同じく気絶していたロン毛の盗賊も目を覚まし。

「痛つつううううう！！　くそあのガキ！」

ロン毛の盗賊は起き上がって、打たれた箇所を撫で、恨めしそうにカレンの事を呟く。

「逃がしやーしねーぞー！　今度会ったら………」

「所であの剣………、何処かで似たような物を見たような………」

スキンヘッドの盗賊はやっと大男の下敷きに解放され、カレンの持っていた剣に見覚えのような物を感じていた。

「ああううう、オデもううう、どこかで見た事あるううう」

「そういえばそうだな………、確か何処かで………？」

盗賊達は首を傾げ、思い出そうとする。すると、スキンヘッドの盗賊が思い出したような素振りを見せた。

「思い出した！　あれは――――」



………そして、『カムーシャ』の宿屋に戻る。

「………魔装器？」

カレンは聞いた事が無いような言葉に首を傾げる。

「そうだ。今お前さんの肩に乗っている奴が？核^{コア}？という物で、お前さんがその手に持っている剣の取っ手の様な物が？ガジェットー？ていう物さ」

コルトはカレンの肩の上に居る謎の物体と手に持っている、剣の取っ手のような物の通称を、指を指して語り、魔装器についての説明を淡々とし始めた。

「ガジェットーは言わば、ツールの様な物さ、そこにその核^{コア}をはめ込む事で、形を形成して、武器の様な形になり、この二つで一つに成った姿を魔装器と言うんだ」

コルトはカレンにわかり安いように、丁寧に説明を続ける。

「核^{コア}のほとんどが虫の形をしているそうだな、その核^{コア}の体の何処かに名称が書かれている筈だ。調べてみる」

カレンはコルトの言われた通りに、肩に乗っていた謎の物体もとい核^{コア}を抵抗などはされずに掴み取り、名称を調べた。

全体を大まかに見渡すと、背中の辺りに小さいが文字が刻まれており、カレンは眼を凝らし。

「STRIKE……………BEETLE^{ビートル}？」

そう書かれており、カレンは手に持っている核^{コア}の全体をもう一度、よく見てみると、確かにカブトムシの様な形をしていた。

そして、カレンが核^{コア}の名称を判明したところで、コルトから溜まった気苦労を吐き出すような溜息が漏れた。

「まさか……………そいつが、魔装器だったとは……………」

コルトは意味深く呟き、カレンはその言葉に疑問を抱く。

「どうゆう意味ですか？」

カレンはコルトの言葉の意味を尋ねる。

「それを見つけたのは2年前の話だ、ある海岸に打ち上げられていてなあ、見つけた時、当時は古ぼけた錆付いたガラクタだと思っていたが、どうしてか……………拾っちゃってな。馬車の中ずっと置きっ放しにしてたんだ」

コルトは当時の経緯を語った。そしてカレンにはまた新たな疑問が

浮かぶ。

「えっ？ それじゃあ何でこれは、こんなに……………新品同様な姿をしているんですか？ 古ぼけて錆付いていたんですね？」

核とガジェットを両手でそれぞれ持ち、コルトに見せ付け、当時と今が矛盾していることを指摘するカレン。カレンの問いにコルトはその矛盾の訳を話す。

「それはたぶん、魔装器が持ち主を選び見つけ、自己再生を行なったからだろう。」

「魔装器が持ち主を選ぶ……………？」

魔装器が持ち主を選ぶという事に、反応し再び首を傾げるカレン。その疑問を打ち払うようにコルトが述べる。

「魔装器は誰でも使えるって訳じゃない。嘘か本当かは知らないが魔装器には意思と心が在って、魔装器が持ち主を自分で選び、持ち主が死なない限り一生付き従うらしい」

「（僕が……………選ばれた？ ………………何故？）」

カレンはコルトの説明の中で、自分は何故選ばれたのか、フと頭の中で思う。

「つまり、あの時、お前さんがあの盗賊にワシを庇って斬られそうになった時、馬車の中から強い光が出ていたろう？ あの時あの中で、魔装器がお前さんを持ち主に選び。自己再生を行っていたからあんなに光っていたんだろう」

カレンはあの時の盗賊に襲われた時の事を思い浮かべる。

「そして自己再生が完了し、光が消えた共にお前さんの所にやって来たという訳だろう」

コルトはあの時の出来事を納得いくように推測して言い当てた。カレンはその推測を何となくだが理解し、コルトの説明が終わる。「まあ、ワシが分かる事はこれだけだ。他については何もわからない」コルトはお手上げのように手を上げ、話は終了し、カレンは魔装器についての情報がある程度得て、二人は一息を着いた……………



.....少しの時間が経過し、またコルトの口が先に開いた。

「ところで、カレンはこれから一体どうするんだ？」

「え？」

突然の問いに反応が遅れるカレン。

「お前さんが『カムーシャ』の住民じゃないって事がわかった時点で、お前さんの帰る場所はわからない事に振り出しだ。このままわからないって訳にはいかないだろう？」

「.....」

コルトはカレンがこれからどうするかを尋ね、その問いにカレンは考え込む様に黙った。そして少しの間が経ち、口を開いた。

「人を.....探しに行きます」

やっと開いたカレンの口から、予想外の言葉が出てきた。

「探すって.....、誰を？」

コルトは少し驚いた顔をした。そしてカレンの言う探しに出す人物について聞いた。その問いに対し、カレンは胸ポケットからあるペンダントを取り出した。

「それは.....？」

「ある一人の女の子が落として行った、ペンダントです。僕はこのペンダントを届けるために、その女の子を探しに行きます」

カレンの答えに戸惑うコルト。

「おいおい、おまえさん。自分が記録喪失だって事を——」

「確かに、今の僕は自分が何処から来たのかも、帰る場所も分かりません。でもこのまま此処に居たって何も解決しない事は変わりません。だから、今は自分が何をすべきかを考えたんです」

カレンはコルトに自分の答えを聞かせ続けた。

「だからまずは、このペンダントを届けに行くんです。」

「い、いやゝゝ、しかしだねえ——」

「それに——」

「？」

コルトは自分の意見を言う前にカレンの言葉に口が止まる。

「それにこれは彼女にとって、とても大切な物だと思うから……………」

「……………」

「だからこれを届けたい。届けてあげたいんです」

カレンの真っ直ぐな思いと目を見たコルトは。

「やれやれ……………、記憶を失って、どうなることやらと思っていたが、ここまで物事をハッキリと決められる物とはね……………、いやいや大したもんだよ」

カレンの決意に感心したのか呆れたのか、コルトは苦笑いを浮かべた。

「そこまで、決心しているなら、ワシがともかく言うのはおかしいよな」

「いえ、そこまで、言ってくれるのは僕を心配してくれたからなんですよね。ありがとうございます」

カレンはニコッと笑い、コルトは図星を突かれたかのように照れ臭そうに目を背けた。カレンは椅子から立ち、宿屋から出ようとした。

「お、おい。何処に行く気だ？」

コルトがカレンに行き先を尋ねる。

「その子が一体何処に行ったのか、村の人達に聞いてみたいと思います」

「え？ 何処に行ったかわからないのか！？」

「はい！ だからこれから聴きに行きます！ それじゃ！」

別れの挨拶と共に、外に出て行ったカレン。コルトはその背中を見て。

「やれやれ……………、一度決めたら止まらない。意外と頑固かもしれないなあ……………」

コルトは溜息を吐き、一人椅子に座り呆けた……………

パンチョー

颯爽とカレンは宿屋から出て、村に居る住人を手当たり次第、少女に関する情報の聞き込みを開始した。しかし……………現実
は甘くはなかった！

「女の子？ さあ……知らないなあ？」

「知らないの……？」

「女の子？ 見てないわねえ……？」

「おやおや、お前さん、もしかしてその子の追っかけかい？」

「えっ？ いやだ。まさかあなた、ストーカー？」

「ねえねえ、お兄ちゃんって、ストーカーなの？」

「わー！ ストーカーだ、逃げろ……！」

「……………」

何やら、いつの間にか誤解されたような感じになってしまったカレンは、それでもめげずに聞き込みを続けていった……………



……………そして、カレンが聞き込みを始めてかれこれ
一時間経とうとしていた。

「……………だめだ。誰もあの子を見たっていう人が居ない。こ
の村を通った訳じゃないのかなあ？」

まったくあの少女に関しての情報が些細なことも手に入らず、困り
果て大きな岩の前で座り込むカレン。

「困ったなあ……」

首を傾げ、悩み込み、どうしたらいいのかそんな事考えていたら。

「ふっふっふっ、何か困っているようだな……？」

フと大きな岩の裏から声が聞こえた。

「だったら、この俺様にまかせろ……！」

声が岩の裏から岩の上から聞こえ、それと同時にカレンの頭上に人影が被った。カレンは上を見上げると、そこには腕を組みながら仁王立ちした瞳孔が細い茶色い眼とライトグリーン色の髪と猫の様な耳が生えた一人の少年が立って居た。

「誰？」

「よくぞ聞いてくれた！ 俺はこの村を仕切る、バンチョー・ロロ！！」

そこまで聞いていないが、ロロと名乗る少年は岩から飛び降り、カレンの前に着地する。

「お前か、この村に来た？二人目？のよそ者はくくく」

「（？二人目？……………？）」

顔をのぞみ込むように近付き、ふてぶてしい態度で接するロロに対してカレンは接し方より、ロロが今言った？二人目？の方が気になった。

「！———君……………今、二人目って！」

立ち上がったカレンは、ロロの肩を掴む。

「僕たちより先に『カムーシャ』に来たのは、長い金髪の女の子だった！？」

「な、なんだ！？ おまえら知り合いなのか！？」

動揺したロロに目もくれず、問い続けるカレン。

「長い金髪で、蒼い目をした女の子だったんだよね！？」

「あ、ああ。そうだよ。そいつがどうしたんだよ？」

ロロの答えにやっと光が見えたカレンは、彼女が何処へ行ったか尋ねる。

「それで、その子は何処に行ったの？」

まるで子供のようなカレンの期待に溢れた目を見たロロは、ニヤツと笑う。

「ふっふっふっ、知りたいか？」

肩を掴まれていたカレンの手から離れ、勿体つけるように焦らすロロ。

「うん！ 知りたい！」

とバカ素直にカレンが答えると。

「そうか！　じゃあそれは俺に勝ってから聞くんだな！！」

「へ？」

ロロの予想外の発言にキョトンとするカレン。

「その女の行き先を聞きたいなら、このバンチョー・ロロに勝ってからにするんだな！」

あっはっはっは、と高笑いし、困惑するカレン。

「えっ、だってさっき、困っているなら俺にまかせろ！　って？」

「ああ！　だからその協力を得るためには、俺様に勝ってからじゃないとダメなのだ！！」

まるで後で、取って付けたような発言で、カレンに勝負を吹っ掛けるロロ。

「……………」

むちゃくちゃな吹っ掛けにカレンは少し考え込み、そして。

「わかった。勝ったら教えてくれるんだよね？」

覚悟決めたカレンは、ロロに再び問う。ロロはカレンの答えを聞いて、またニヤツと笑う。

「ああ、勿論だ♪」

余裕の表情を見せ、ロロは楽しそうに答える。

「じゃあ……………」

身を構えるカレン。

「ああ、始めようぜ……………」

同じく、身を構えるロロ。カレンは辺りを見渡し。

「えっと……………、ストライク！！」

叫び声と共に、カレンの魔装器の核^{コア}が何も無い所から飛んで現れ、カレンの手の平に止まり、カレンはズボンにぶら下げていたガジェット^{ゴア}を取り出し、核^{コア}をガジェットに差し込む。

「REGI・IN^{レジイン}」

声と共にガジェットの上から形を形成し、盗賊たちを撃退した時

と同じ、大きな剣の姿を現した。

「な、な、なんだよそれ！？　なんなんだよ！？」

見た事が無い物を見た様な分かりやすいリアクション取り、動揺を隠せないロロ。

「魔装器って、らしいよこれ」

ロロの動揺を解くために、親切に教えるカレン。

「ま、魔装器？　それが？」

はじめて見るのか、珍しそうにカレンの魔装器を見詰めながら、警戒をするロロ。

「ま、まあいいさあ。魔装器だろうが、昨日徹夜で作ってこれで！」

腰に掛けて合った、鞆から何か取りだすロロ。

「ロロ特製お手軽爆弾！！」

取り出した物をカレンに見せつけるように前に出し、自分が作ったとわざわざ伝えるロロ。

「昨日まで徹夜で作った、小型爆弾だ！　いや～～～ここまでのサイズにするのは苦労したな～～」

「そうなの？」

「ああ！　なんとって火薬の量と導火線の配置がなかなかうまく決まらなかつくてよ～～～！」

「それでそれで」

「それでな～～～って……………、そうじゃね！！」

戦いの中でのん気に話をしている事に気付き、我を取り戻すロロ。

「とにかく！　こいつの威力を見よ！！」

振りかぶったロロは、カレン目掛けて導火線に火が付いた特製爆弾を投げ付け。カレンはそれを横にずれて避ける。爆弾はカレンを通り過ぎて地面に落ちる。

「！！」

爆弾は地面に落ちた後、瞬く間に爆発し、爆発した所の地面はポツカリと凹んで、土は小さい土の塊に成り、上からパラパラと落ちて

来る。

「どうだ!! このサイズでこの威力!! 喰らったら只じゃあ、すまねーぞ」

確かにあの小さな物であるの威力とは思えない代物だった。ロロは我慢そうに喜ぶ。カレンは爆発した所を見ていると。

「へへっ、どうだ? 降参するならしてもいいぞ——?」

まるで勝ったかのように誇らしげにカレンに降参を薦めるロロ、だがカレンは。

「降参は……しないよ!」

「!」

「君に、彼女の事を聞き出すまで、逃げたりはしない!」

カレンの強気な態度にロロは目を丸くする。

「ま、マジでやり合う気か?」

自分の爆弾の威力を見ても逃げないカレンに驚くが。ロロはゆっくりと顔を俯いて、不敵に笑う。

「いいぜ……、そっちがその気なら————」

言い終える前、ロロはカレンの方に顔を向けると、カレンはそこに居ず。いつの間にかロロの頭上に飛び上がり……………。

「せいっ!!」

カレンは大きな剣を力の限り振り下ろす。

「ぬわっっ!!」

ロロは後ろに飛び下がって間一髪で避ける。振り下ろされた剣は地面を叩き割り、いきなり不意に斬りかかったカレンに対してロロは。

「あ、あ、あぶねえな!! いきなり!! 急に斬り掛ってくるな!!」

思わぬ反撃を喰らったロロはカレンに怒鳴る。

「……………」

カレンは黙って剣を持ち直し、再び構える。ロロも体制を立て直し。

「しょうがねえ…………、だったら、俺様の実力を……………思い知らせてやるぜ!!」

すぐさまロロは鞆から数個の爆弾を取り出し、カレンに向かって投げる。カレンはその爆弾たちを掻い潜って避ける。

「ッ！」

放たれた爆弾は次々と爆発して、粉塵を撒き散らす。その中でカレンはロロに接近するが、ロロはまた爆弾を取り出し、カレンの前の辺りに放り投げる。

「！！！」

慌てて後ろに下がり、爆発から逃れようとするカレンにロロは不敵そうに笑う。

ロロ「近づけさせないぜ！」

爆弾は間もなく爆発し、カレンはとっさのバックステップでどうにか爆風から逃れられた。

「くっ！！！」

思うように近付けないカレンは焦りを感じる。それに対してロロは自分が優勢だと感じて、笑みを浮かべ、次々と爆弾を投げ付ける。

「っ！！！」

状況を打開しようとカレンは、向かって来た爆弾の一つを打ち返す。

「なぬっ！」

打ち返した爆弾はロロの方へ飛び戻って行った。

「ぬおっっ！！！」

思いも依らない爆弾の帰宅にロロは慌てて横に飛んで避け。

「っ！」

爆弾はロロを通り過ぎて爆発したが、避けたのは良いが慌てて飛んで避けた為、着地の際、ロロは体制を崩した。

「今だ！」

その出来た隙を見逃さず一気に接近するカレンであったが。

「甘いぜ！！！」

カレンの接近を読んでいたのか、一個の爆弾を懷から取り出しカレンに投げ付ける。

「！！！」

慌てて腕に力を入れて爆弾を打ち返すが……………

「あ……………」

勢い余ってか、スルツとカレンは手を滑らして、打ち返して振り上げた剣を上空に放り投げてしまった。ロロも予想外だと思ったが。

「へっ、これでお前の獲物は無くなったな……………」

「……………」

カレンは唯一の武器の無くし、焦ってしまう。ロロはそんな焦ったカレンの表情を見て、勝利を確信したような笑みを浮かべる、そしてまた鞆から爆弾を取り出し。

「じゃあ……………、これで終わりだ!!!!」

そして、カレンに向かって爆弾を放り投げようとした瞬間……………

「!!!!」

爆弾を投げ飛ばす瞬間、ロロの頭の上からカレンが上空に偶然放り投げてしまった剣が、ロロの頭に落ちて来て、剣の剣背部分に当たった。

「……………」

「か……………か……………」

啞然とするカレン。あまりの痛さに言葉にできない声を出すロロ、カレンに向かって投げ飛ばす筈だった爆弾をポロッと自分の足元に落としてしまい、爆弾の導火線の火は火薬部分に到着し。

「!!!!」

足元で爆弾は爆発し、爆発の後、煙の中に黒焦げたロロが立っていた。

「……………」

バタツつとそう経たない内にロロは倒れ、啞然としていたカレンは、ハッと気付いてロロの元へ慌てて駆け寄る。

「だ、大丈夫!？」

しゃがみ込み心配そうに体を揺さぶって声を掛けるカレン。

「……………」

返事がない……………、カレンはロロの命が危ないと思い、誰かを探そ

うと立ち上がった時。

「すいませー！ー！ー！ー！ー！ーん！！」
「？」

声が聞こえた方に視線を移すと、遠くから人影がカレンたちの方に
向かって声を掛けて走っていた。

やがて、その人影はカレンたちの所までたどり着いた。

自爆兄貴の妹の証言

やって来たのは、一人の少女だった。

「すいません！ 兄が迷惑を掛けてしまつて！」

ロロを兄と呼んだ一人の少女はカレンに頭を下げて謝罪した。

「兄？ 彼が君のお兄さん？」

カレンは黒焦げたロロを指して少女に尋ねる。

「はい！ そこで黒焦げているロロ・グライヴィーの妹、イミナ・グライヴィーです！」

黒焦げた兄を全く心配せず、自己紹介をするロロの妹イミナ。

「イミナちゃんか……」

外見上カレンやロロとは年が離れいるそうには見えないが、ロロと同じ瞳孔が細い茶色い眼とグリーンライトの髪と猫の様な耳をしている、それにロロと似たような物を感じ、カレンは彼女がロロの妹だと納得した。

「本当にすいません、家の兄が迷惑を掛けてしまつて……、後でキツク言っておきますので！」

イミナはまた頭を下げ、カレンに謝罪する。カレンは困ったように焦り。

「いやいや！ いいよ謝らなくて！ それより、君のお兄さんがこうなつてしまった事を聞かないの？」

カレンのもっともな質問にイミナは溜息を吐く。

「どうせ兄の事です。きっとあなたに勝負だとか勝手に吹っ掛けて、昨日徹夜で完成した爆弾の威力を試して自慢したかっただけなんですよ」

まるで知っていたかのように兄の行動原理を推測で言うイミナ

「もしかして……、見てたの？」

「まさかぁ、爆発の音を聞き付けて、急いでお店を飛び出して駆け付けたら、黒焦げた兄を見つけた瞬間、大体の想像が尽きました、

朝の店番をしていたイミナの所に一人のお客が入って来た。その客は長くて綺麗な金髪に蒼く透き通った瞳、メイドのようなドレスのような服にそれに似合う美しく整った顔をした少女であった。イミナはその少女を一目で見たら。

「(うわ~~~~~、綺麗な人~~~~~、きっと外から来た人だ~~~~)」

女性のイミナでも見惚れる容姿の少女は、店内を少し見渡し、イミナの居るカウンターまで歩いてくる。少女はカウンターにあるメニュー表を見て。

「これと……………あと……………これもちょうだい」

少女はメニュー表にある食糧を指で指し、イミナに注文をする。

「あっ、はい！ 少々お待ちください！」

ボ~~~~と見惚れていたイミナは、少女の注文に我を取り戻し、少し慌てて少女の注文通りカウンターの後ろの棚から注文の品を取り出し、袋の中に包もうとした。そのイミナの後ろ姿見ていた少女は。

「ねえ、あなた、『カムーシャ』から『レイチィム』に向かうには、どう行けば良いの？」

不意に少女はイミナに尋ねた。

「えっ？ 『レイチィム』って軍用都市『レイチィム』事ですよね？」

少女の方に顔を向け、作業を続けるイミナ、イミナの返答に首を頷く少女。

「今は無理だと思いますよ。一月前の大地震のせいで『レイチィム』に向かうための一本道の大橋が壊れてしまって、今は修理中ですから渡る事ができないんですよ」

イミナは残念そうに少女に説明する。

「他に行く道は無いの？」

少女は他の道を尋ねる。

「他に……………ですか？ 『カムーシャ』を少し東に行った所に『水底の洞窟』が在って、そこ通り抜けてば『レイチィム』に着きます

が……………」

「そう……、わかったわ、ありがとう」

少女の返答にギョっとするイミナ。

「お、お客さん！ 言い遅れましたけど、あの洞窟は最近魔物が大量発生して、とても危険ですよ！ やめておいた方がいいと思います……………」、それに洞窟の先に在る、大きな運河を渡ることとはできませんよ……………」

「運河？」

少女はイミナの言った運河に反応した。

「はい、この大陸特有のとても大きな川で、その川を渡る為にさっき言った、大橋が作られたんですけど……………」

イミナの言った『レイチウム』の一本道の大橋を思い出した少女は、理解したように頷き。

「そう……………そうゆう事なら問題は無いわね……………」

「えっ……………」？

少女の言葉に耳疑うイミナ。そして丁度良くイミナは注文の品を袋に入れ終えて。

「もう、できた？」

「えっ？ あっ……………は、はい！」

少女の指摘にイミナは急いで注文の品が入った袋を少女に渡す。

「全部で、980トルになります！」

袋を受け取った少女に注文の品の値段を告げるイミナ、少女は手に持っていた1000トル札を差し出し、お釣りを貰わないまま出口に向かう。

「あっ！ お客さんお釣り！」

イミナは呼び止めようとするが……………」

「急いでいるから、いらないわ」

ランコロンとドアのベルが鳴り、少女はその言葉を残して、そのままお店を出てしまい、イミナはその少女の背中を見詰めながら立ち尽くした……………」

カレンを応援するように励ましの言葉を贈るイミナ。

「ところで……………、彼の事は良いの？」

黒焦げたロロを指で指すカレンは、イミナに尋ねる。

「ああ、大丈夫ですよ、あれくらい！ 頑丈ですから家の兄は！」
と言いつつイミナは、未だに倒れている黒焦げた兄もといロロの首根っこを掴み。

「それじゃあ、私は帰って兄の看病をするので、カレンさん本当に兄がご迷惑を掛けました！ 機会があれば、また会いましょうね！」
ペコリツと頭を下げて、別れの言葉を告げ、兄のロロをズルズルと引きずりながら自分らの家に帰っていくイミナの背中を心配そうに見詰めたカレン。

「だいじょうかな……………？ 彼……………？」

ロロの身を案じながら、地面に放置したままの魔装器を拾って、そのまま宿屋に戻るカレンであった……………

感謝と別れ……………そして、思わぬ再開

ロロの妹、イミナから有益な情報を手に入れて、金髪の少女の行き先が分かったカレンは村を出る前に会っておかなければならない人の元へ、駆け走っていた。

「お！ 来た来た、おーーい！！」

「あっ」

そして、待っていたのかコルトは宿屋の前に立って、宿屋に戻ってきたカレンを見つけ、呼び掛ける。それに気付いたカレンは会って話しておきたい恩人コルトの元まで走って行った。

「コルトさん！」

「おお！ どうだったカレン？ その子に行き先がわかったか？」
帰って来たカレンに結果がどうだったか聞くコルト、カレンはコルトの前に止まり。

「はい！ わかりました！ 彼女は軍用都市『レイチウム』に向かったそうです！」

カレンは嬉しそうにコルトに答える。

「『レイチウム』にいい？ でもあそこに行くための橋は、今は修理中……………」

「はい、だから『水底の洞窟』に通りに行くんです」
カレンの返答にギョッとコルト。

「ま、待て！ カレン！ 最近あそこは魔物が大量……………」

「はい！ それも聞きました！」
「……………」

自分の発言を悉く打ち払うように遮るカレンの返答は、悪意がこればっちも無いその笑顔を見ると何とも言えない感覚を覚えるコルトであった。そんなコルトにカレンは。

「コルトさん！ 本当にありがとうございました！」
「へっ？」

カレンの唐突のお礼にキョトンとするコルト。

「僕がここまで足を運べたのも、湖で助けてくれたのも、ご飯を御馳走したくれたのも、見ず知らずの僕を助けてくださって、本当にありがとうございます！」

カレンは頭を下げ、自分の感謝の気持ちを全て、コルトに伝えた。コルトはカレンの感謝を照れ臭そうに頭をポリポリと指で掻いて。

「そう畏まらなくても————」

「後、これをお返しします」

またコルトが言う前にカレンは手に持っていたガジェットをコルトに差出す。

「！ カレン……………」

コルトは目の前に出された魔装器の一部ガジェットを見て、カレンの顔を見る。

「これは元々僕のじゃなくてコルトさんの物ですから、僕が勝手にお借りしていただけなので、これはコルトさんにお返しします」

カレンはそう言うと、ストライクと呼び、自分の魔装器の《（コア）》を呼び込み、もう片方の手で核^{コア}を掴み、ガジェットと一緒にコルトに差出すが、コルトは手を前に出して、制止した。

「いや……………それはもうお前さんの物だ」

「コルトさん……………いや、でも！」

カレンはそれでもコルトに返そうとするが、コルトは手を前に出したまま、首を横に振る。

「これはお前さんを選んだんだ……………、だからお前さんしか使えない、説明したろ？」

「でも、これは……………」

コルトの発言に戸惑うカレン。コルトはそんなカレンに淡々と語りかける。

「例え、ワシがこれを持っていたとしても、ワシにはこれを使う事ができない。そんなのは宝の持ち腐れという奴なもんよ」

「宝の……………持ち腐れ？」

言葉の意味が理解できないのか、首を傾げるカレン。

「まあ、とにかく……それはお前さんにやるよ」

あっさり自分の物だった魔装器をカレンに譲るコルト。そんなカレンの手に握られていた核は力ずくでカレンの手から離れ、またカレンの周りを飛び回り、また肩に止まる。

「それに、そいつはお前を気に入ったみたいだな！」

会って間もないのにもう核に懐かれているカレンにコルトは微笑ましそうに笑い、カレンに一袋を渡す。

カレンはそれを受け取り、中を確認する。

「！ これは……」

中には一つの本といくつかの食材と赤い色の付いたゼリーみたいなのが入っていた。

「ウチの商品の余り物だが……、もしかしたらこの先、何かしら役に立つかもしれんぞ」

袋に入っていたのは、コルトの商品だった。

「その本は自分の記憶や思い出を書いて、次にまた記憶を失っても大丈夫のように日々の日記として使ってくれ、そして中に入っている食材は道中でお腹が空いた時に使った方がいいぞ、後最後に――」

「コルトさん……」

震えたカレンの声に、言い止まるコルト。カレンは目線をコルトの目に向け。

「本当に……お世話になりました！ この恩は忘れても、忘れません！！」

「……」

再び頭を下げたカレンは、しつこいくらいの感謝と、思いっきり矛盾に満ちた発言だが、コルトにあなたへの恩は絶対に忘れないと心強く伝え、そんな気恥ずかしいセリフを吐いたカレンにコルトは呆れたのか感心したのか、溜息を吐き。

「気を付けて……行ってこいよ……！！」

「君は……………!!」

息を切らせて現れたのは『カムーシャ』で会ったロロ・グライヴィーだった。

「決着を……………付けにきたぜ!」

「決着……………?」

息を切らしながら言うロロ、そのロロの発言の意味が理解出来ないカレン。そしてロロは呼吸を整え、深呼吸を行ない、顔をゆっくり上げ……………

「お前との決着を付けに来たに決まってるだろう!!」

「え?」

何を言い出すと思えば、ロロはカレンとの闘いに、決着を付けにわざわざここまで来たようだ。見た所あの時の焦げ跡はすっかり無く、服も新しいのに変え、元気な姿だった。だがそれに対しカレンは。

「いや……………、あれは僕の勝ち—————」

「勝負っていうのは! 自分が負けたと思わなかったら永遠に決着は付かないんだ!!」

カレンの言葉を跳ね除け、断固自分は負けてないと主張するロロ。そしてカレンにビシッと指を指し。

「とにかく! 決着を付けるまでお前を逃がすかよ!!」

「まったくその通りだぜ!!」

何処からか、カレンでもロロでもない声が聞こえ、ロロはその声に驚き、後ろに振り向き。

「だ、誰だ!??」

ロロは謎の声の人物に向かって呼び掛けた。すると木や草の茂みから一人の人物が出てくる。その人物にカレンは見覚えがあった。

「やっと、見つけたぜ! くそボウズ!」

「! あなたは!」

そのスキンヘッドの男は、カレン達が『カムーシャ』に向かっていく途中、コルトの馬車を襲った。スキンヘッドの盗賊だった。スキンヘッドの盗賊は何かの合図のように手を振って、その直後、他の

木や草の茂みから盗賊らしき人物がゾロゾロと現れ、カレンとロロの前を囲む。

「な、な、何なんだよ！ お前ら！！」

突然の事態に状況が見えないロロは、現れた盗賊たちに動揺していた。

「お前には用はねえよ、用があるのはそのボウズだ！」

スキンヘッドの盗賊はロロの事をまったく気にせず、カレンの方を向き続ける。

「……………」

「お前には、せっかくの獲物を邪魔されたからな……………」

スキンヘッドの盗賊は忌々しそうにカレンを睨め付けながら言う。

「だが……………今もうあの獲物はいらねえ……………」

そう言うと、スキンヘッドの盗賊は腰に掛けてある剣を抜き、カレンに向けて指す。

「お前の持っている魔装器を売れば、一生遊んで暮らせる金が手に入るんだからよ！！」

最高の獲物を見つけた様な大声を出したスキンヘッドの盗賊、そしてスキンヘッドの盗賊の声と共に後ろに居た、盗賊達が一斉に武器を出して、ジリジリと近付いてくる。

「いいかお前ら！ ガキだからって油断するな！ こいつも魔装器使いだ！！ 舐めて掛らず全力で叩き潰せ！！！」

「……………」

スキンヘッドの盗賊の警告に気合い十分な盗賊達、そしてさらにまた木や草の茂みから盗賊がゾロゾロと出て来て、その数ザッと見た所、50人はくだらなかった。

「ところでハン、この獣人のガキはどうするんだ？」

盗賊の一人がスキンヘッドの盗賊に近付き、ロロについて尋ねた。

「そうだなあ……………見た所あのボウズの知り合いみたいだなあ……………」

スキンヘッドの盗賊はロロの方をチラと向き。ロロは盗賊の反応に

困惑した。

「こいつだけ逃がすって訳にもいかねえ！ ついでにこいつも殺っちまえ！！」

「ええ！？ そ、そんなぁ……………」

何で俺までつと言いたそうな情けない声を出すロロ。盗賊はまだジリジリと近付き、ロロは怖気付いた表情をして、カレンの隣まで後退りをする。

「お、おい！ どうするんだよ……………、こ、このままだと俺達やべえーよ！」

「……………」

圧倒的な数の盗賊達に戸惑いを隠せないロロは、カレンに尋ねる。その問いにカレンは目を閉じ少し考え込む、そして。

「逃げるよ！！」

声と共に洞窟に入って一目散に逃げ出すカレン。

「えっ！？ あっ！ ちょ、ちょっと待て！！」

唐突に走りだしたカレンに反応が遅れたロロは、急いでカレンの後を追って洞窟に入る。

「なっ！ 逃げたぞ！！ 追え追え！！」

逃げだしたカレン達を追って洞窟に入る盗賊達であったが。洞窟の中は暗くて狭く、大人数で走る程の余裕は無く、全力疾走しているカレン達に差を付けられる事になった、

「くっくそ！！」

スキンヘッドの男は舌打ちをし、暗い洞窟の中で盗賊達の先頭に立ち、カレン達を追いつける、一方カレン達はこの暗くて長い洞窟の奥をさらに進み続けた……………

水底の洞窟に二人のストーカー

「……………暗く狭く何処までも続くと思えてしまうくらい長い通路、その中を全力疾走で走っているカレンとロロは、盗賊達の手から逃れるため、光の见えない先をひたすら進み続けた。

「ハア……………お、おい……………！ 待て！ 待ってて！」

カレンの後に付いて走っていたロロはカレンの隣まで追い付き。

「ハア……………このまま逃げて大丈夫なのか！？」

「わからない……………でも、あの数人達に戦っても勝てるとは思えない……………！」

ロロの問いに走りながら答えるカレン。

「それに……………」

「それに……………？」

急に言葉が止まるカレンにロロは顔を覗く。

「それに、あの人達と戦っていたら、彼女に追い付けなくなってしまおう！」

カレンの言う彼女とは、カレンが見つけたペンダントを届ける相手で、あの盗賊達と戦えば彼女に追い付けないと踏んだカレンは盗賊達から逃げ。

「この洞窟で、あの人達を振り切るしか無い！」

このまま逃げて、あの盗賊達を撒くと結論至った。

「それは……………賛成だ……………、さすがに俺様もあの人数じゃ勝つ気がしねえよ」

どこか歯切れの悪い返事したロロはカレンの提案に賛成する。そんなロロを見てカレンは。

「どうしたの？ さっきから震えているみたいだけど？」

「そ、そんな事はねえよ……！」

あっぱっはっはっと笑い、恍けるロロ、カレンはそんなロロに違和感を覚えながら、狭くて暗い通路を進み続けた……………



……………走ってもうどれ位経ったろうか、やがてカレンとロロの体力に限界が訪れ、走る速度が徐々に落ちて来て、そして二人の足が止まる。

「ハア…ハア…ハア、これだけ走れば……………あいつらもう追って来れねえよな」

息を荒くしながら、後ろを振り向きカレンに話を振るロロ、カレンも息を荒くしながら。

「た、たぶん……………」

息を整えようと何度深呼吸を行なうカレンにロロも息を整えながら。

「あの人数だ、この狭い通路を早く移動をすることは出来ない筈だ」

「確かにね……………」

いくら数があちらの方が圧倒的に上だとしても、この狭くて暗い洞窟では逆効果であった。

ロロは盗賊達に随分着き離れたと思い、再び足を進める。

「よし、この調子でこの洞窟から出て———」

ロロが言い終えるまえに突然ロロの頭上の岩の壁にヒビが入り、そこから水が噴き出し、ロロの顔に直撃する。

「！！　　ブハッ！！」

突然水が顔に掛り、慌てて水から離れるロロ。カレンは何が起こったか分からず、水を被って咽るロロを心配して駆け寄る。

「大丈夫！？」

「ゲホッ！　くそ！　水脈が噴き出したか！？」

自分の顔を服の袖で拭きながら、水が噴き出している壁に見るロロ、カレンはロロが言った水脈という言葉に反応して首を傾げる。

「水脈？」

カレンが疑問そうに呟くとロロは。

「あ？　何だお前？　此処が何で「水底の洞窟」って、呼ばれてい

るのか知らないのか？」

ロロがそう尋ねるとカレンは首を縦に振る。

「いいか？ この洞窟の上に運河っていう大きな川が在るんだ、その川の底に無数の穴が在って、この洞窟のさらに下の所まで繋がっているんだ、で……この噴き出した水がその無数の穴の一つから出てきた水って事だ」

今でも水を噴き出している所に指を指してカレンに解説するロロ。

「へえ……、そうなんだ……」

「そうなんだってお前……、何も知らないで此処に来たのか？」呆れて溜息を出すロロは、淡々と話を進める。

「今噴き出した水は、水が土や岩を少しずつ何十年も掛けて削って出来た穴なんだ、それ以外の穴はこの洞窟じゃない所を通して、何処か別な所に水を貯めているって話だ」

「つまり、この水は偶然この洞窟の中に出てしまった水って事？」

ロロの解説を理解したカレンは、噴き出して来た水の訳を指摘する。

「まあ、そういう訳だな」

カレンが納得した所で、説明が終わるとロロはまた再び歩き出し、カレンもその隣を歩く。

「盗賊達もそんなに早く俺たちに追い付く事は無いが……、問題はこの先だ」

「？ 盗賊達以外にも何か問題でもあるの？」

ロロの言う問題に反応したカレンはロロに問い掛ける。

「あるだろ！ この洞窟には魔物が居るんだぞ！」

魔物という言葉に、イミナが言っていた事を思い出し、カレンはあつと呟く。ロロが呆れたように溜息を出すとカレンは。

「その魔物って何？」

ガクツとカレンの発言に体が傾くロロ、ロロはゆっくりと怪訝そうにカレンの顔を見る。

「お前………それ冗談だよな………？」

恐る恐るロロが聞いてみると。

「冗談じゃないんだけど……………」

苦笑いをしながら答えるカレンに対してロロは目を丸くする。

「お前本当に魔物を知らないのか!？」

そう叫んでカレンに尋ねるロロは信じられないと言いたいそう顔をしていた。

「本当何も知らない物は知らないよ」

そうカレンが返答すると、ロロはガクツと顔を沈め、ポリポリと頭を掻きながら、顔を上げて小さく舌打ちをする。

「魔物っていうのは、動物よりも危険で凶暴な恐ろしい生き物の事だよ!」

ロロは吐き捨てるかのようにカレンに説明すると、少し怒ったような顔でカレンに目を向ける。

「そんな事も知らないで、何で此処まで来たんだよ!？」

「彼女に会うためさ」

怒ったロロにカレンは至って冷静に返した。

「彼女って…………、村でもさっきも言ってたよな? 何なんだお前?」

怒りを鎮め始めたロロは、疑り深くカレンの素性を尋ねる。

「僕は……………」

自分が何者なのか、それが分からないカレンにはこの問いに答える事は出来ないが。

「僕は彼女に一刻も早く追い付かなくちゃいけないんだ! だから此処に来たんだ」

今のカレンは自分の事など覚えてはいない、だが自分がやらなきゃいけない事はしっかりと自覚しているため、ロロに対しての返答は自分の目的を話した。するとロロの顔から陰しさが無くなり、瞳孔の細い眼が更に細くなった。

「お前……………まさか……………」

「?」

ロロのカレンに対する視線が冷たい物に成り、カレンは首を傾げる

と。

お前って………ストーカーなのか!？」

身を引いてカレンから距離を取るロロ、カレンは何故ロロが自分から遠ざかるのか分からないでいた。

「どうしたの? そんな顔をして?」

カレンはロロの引きつった顔に疑問を抱き、ロロに一步近づくと。

「よ、寄るな! このストーカーめ!!」

カレンが近付くとロロも一步下がり、再び距離を取る。

「どうして?」

「どうしてって? そんなの聞かなくたって分かるだろう!？」

ロロが何故自分から距離を取るのか分からないカレンは、自分が思った疑問を口にする。

「分からないよ? それに………君の言うストーカーって一体何なの?」

ガクツとまたカレンの発言に体が傾くロロ。

「ストーカーも知らないのかよ!？」

「うん」

カレンは首を縦に振って答える。

「ストーカーって言うのは、ある一人の人物を追っ駆け回す人の事を言うんだよ!」

明らかに語弊と偏見が混ざった、間違えた意味をカレンに説明するロロ。するとカレンはストーカーの本当の意味を知らずに理解し、少し考え込む。

「どうしたよ?」

考え込むカレンに問い掛けるロロ、カレンは目線をロロに戻しニコっと笑い。

「じゃあ、君もストーカーなんだね!」

「はっ!？」

笑顔で思いもよらない発言したカレンに驚くロロ。

「だって君も僕を追いつけて此処まで来たんだよね?」

「えっ!?! あっ、いや…………それは…………その…………」

返す言葉が見つからず戸惑い黙りこむロロは、カレンをチラッと見て考え込み、そして少しの間が経ち……………、やっと口を開く。

「すまん……………俺の…………勘違いだ……………、今のは忘れてくれ……………」

「?」

何が言いたかったのか分からずにいたカレンをよそにロロは気を取り直して。

「と、とにかく! こんな所で立ち止まっていた盗賊達に追い付かれる! 先に進むぞ!」

今のやりとりをもっともな理由ではぐらかし、ロロは暗くて狭い通路の中で足を進めようとしたが……………

「ワル……………」

「「!」」

暗くて先の見えない通路で何か不気味な声が聞こえ、それはロロの正面から聞こえた。

「な、何だ…………?」

その声に反応し、足を止めるロロ。カレンはロロの前に出て声の元を確認しようとするが。

「! まっ、待て!」

「え?」

声の持ち主を確認しようと先に進もうとするカレンを呼び止めるロロは暗闇の奥に何かを捉えたようで、険しい表情に変わっていた。

「どうやら……………お出ましましたぞ……………」

そうロロが言くと、通路の先の暗闇の中から複数の小さな影が見えた。

遭遇

地面を這いずって歩くような、物音を発しながら、暗い通路を小さな影達は進んでいく。

「ワル！」

「！」

その声はゆっくりとカレン達の方に近付き、そして、カレン達が暗闇の中でやっと見える程度の距離からその姿を露になる……………

「こいつらが……………魔物だ……………」

「これが……………」

カレン達の目の前に現れた存在は、人々から魔物と言われている存在で、その魔物の姿はまるで、ダンゴみたいな丸状の形でそこに目と口と犬のような耳としましま模様な外見をした、とても動物には見えない生き物がそこに6匹も現れた。

「ワルワル……………ワルワル」

独特な鳴き声を放つ魔物はその丸い目でカレン達を睨み、少しずつ距離を詰めていく。

「戦う気かな…………？ やっぱり？」

「だろうな……………」

相手は人の言葉は話さないが、その小さい体から放つ殺気が語っていた。

「……………ストライク！！」

カレンは避けられない戦いだと察し、自分の魔装器の核コアもといストライクを呼び出し、ガジェットを取り出して、ストライクをガジェットーにはめ込む。

「REG I・I N^{イン}」

声と共にカレンの魔装器まそうぎは形を形成し、盗賊達とロロと戦った時と同じ、ライトピンクな大剣が姿を現す。カレンは剣が現れるとすぐ剣を構え、警戒しながらジリジリと近づく魔物達から目を離さず、

意識を集中させ、戦闘の準備を完了させる。

「よし………いっちゃやるか………」

カレンの後ろに居る口は肩に掛けてある鞆を探り始めた。

「ワルワル!!」

「「!!」」

魔物達がとうとう動き出し、先手は魔物の中から3匹が突進してきた。

「ワーーーール!!」

突進して来た中で先頭にいた一匹の魔物が跳び上がり、口を大きく開けて、そこから外見には似合わない鋭い牙を出し、カレンの頭に向かって正面から食い掛ろうとする。

「ッ！」

飛び上がって正面から襲い掛って来た魔物をカレンは同じく正面から剣を縦に振って打ち払い、魔物の顔面に直撃させる。

「！」

鈍い音ではなく風船が割れたような音を出した魔物は、鳴き声を出せずに勢い良く吹き飛び、暗闇の先に消えて行った。

「「ワルワーーーール!!」」

「!!」

続いて残りの2匹の魔物が左右からカレンの首の辺りを噛み付こうと跳び掛る。

「「!!」」

歯と歯がぶつかり合う音が響く。カレンの首を捉えた魔物2匹であったが、カレンは素早く首と腰を下げて、2匹の襲撃を避ける。

「おお! やるう！」

感心したのか口は歓喜の声を出す。2匹の魔物は攻撃を避けられたため、空中でお互いクロスして左右を入れ替わり、カレンの後方に着地して、カレンはすかさずそこを狙い。

「てえい!!」

魔物が着地して一旦動けない所を狙って、素早く振り向きカレンは

自分から見ても左側の魔物に突進する。

「ワル！！！！」

剣を横に打ち払い魔物を壁に叩きつけ、壁にめり込ませた。

「ワルワル！！！！」

仲間がやられた事に腹を立てた右側に居た魔物はカレンの横から噛み付こうと跳び掛る。

「あぶねえ！！」

「くっ！」

腕を噛み付こうとした魔物は、距離は近かったものの、カレンは剣を両手で振り上げて間一髪で避けられる。

「ワルワル！！」

避けられても素早く振り返って再び噛み付こうと跳び掛る魔物であったが。

「！！」

カレンは剣を持ち直し、突進して来た魔物を横にズレテ避ける。

「せいっ！！」

自分の目の前に入って来た魔物を剣で打ち上げる。

魔物「ワル！！」

打ち上げられた魔物は上の壁に叩き付けられ、2匹目に倒した魔物と同じく壁に深くめり込む。

「ワルワーーーーール！！！！」

「っ！」

急に魔物の鳴き声がして、顔を左に90度に曲げて後ろを見ると、さっきまで後ろで待機していた残りの3匹の中の1匹がいつの間にかカレンの後ろに迫り、噛み付こうと跳び上がった。

「（しまった！！）」

気付くのが遅い上に後ろを取られたカレンは、体を動かす事が出来ず、魔物は大きく口を開け、その鋭い牙でカレンの頭を狙って、頭上から迫り来る。

「！！！！」

何かが刺さった様な音がカレンの耳に響く、カレンを喰おうと跳び掛った魔物は、噛み付く前に顔の中央に何かが刺さり、カレンの目の前で絶命し地面に落ちてしまう。

「……………?」

何が起こったか分からないカレンは、魔物に噛み付かれそうになった時、顔の横を何かが通り過ぎた感じがして、その何かが来た方向に視線を向けると。

「へへ……………」

そこには、得意げに笑みを浮かべているロロの姿が在り、ロロの手には弓と矢を持っていた。

「君……………」

今カレンを噛み付こうとしていた魔物に何かを刺したのは、ロロの放った矢で、ロロは魔物からカレンを守ってくれた。

「ワル……………」

一方魔物は仲間が次々とやられ、残り2匹なって、慌てふためく表情を隠せない魔物達は鳴き声が弱弱しくなっていた。

「俺様が居るって事を忘れるな!」

魔物に向かって叫び、弓を構えに標準を合わせるロロ、弓糸と矢を引き、魔物の1匹を捉えたらすぐさま矢を放った。

「!!」

放たれた矢はカレンの横を通り過ぎ、真っ直ぐ伸びて1匹の魔物を顔の中央を的確に射抜いた。射抜かれた魔物は避ける事も出来ず、その横にいた魔物はまた仲間がやられて、口を開いて大きく驚く。

「!」

ロロに続いて攻撃を仕掛けようと突進するカレン、魔物は呆気を取られ反応が遅れて為、カレンの素早い接近に容易に間合いを取られ、カレンは魔物の一歩手前で大きく剣を振りかぶり。

「たあ!!」

「!!」

剣を下から上へ垂直に打ち払い、魔物は逃げる事も出来ず、そのま

まモロ顔面に直撃して、また風船の様な音を出して魔物は通路の闇の中に吹き飛んで消えて行ってしまった。

「……………」

辺り見渡し、もう魔物が居ない事や倒した魔物がもう動く事がないと確認したカレンは安堵の息を漏らし、構えを解き、剣を下ろした。

「ふう……………」

「まあ……俺様に掛ればこんなもんだなあ」

誇らしげに勝利を喜びながらカレンの隣まで来るロロ。

「あれが魔物なんだね……………」

「ああ、そうだよ。お前本当に見た事ないのか？」

「……………うん」

しかめっ面で『おいおい』っと呟き、頭をポリポリと掻くながらカレンをまた呆れたロロの視線は、カレンの右手に止まる。

「お前その手……………怪我してるじゃないか」

言われて見るとカレンの右手の甲に切れ目が伸びていて、そこから真っ赤な血が溢れて出ていた。

「いつの間に……………気が付かなかった」

「最初に突っ込んで来たあの3匹の魔物に付けられたんじゃないか？」

傷を付けられ事を気付かない程、戦いに集中していたカレンは、ロロの指摘により初めて己の傷を発見した。

「どれ…………俺様が治してやるから、見せてみる」

「えっ？ 治すって…………どうやって？」

ロロの治すという言葉に疑問を感じたカレンは、ロロに視線を移した。

「いいから、その右手を出してみろって！」

「……………」

ロロの言う通りに右手の甲を前に出して、ロロに見せるカレン、するとロロは両手を前に出して、カレンの右手の上で手の平を開いた状態で手を翳した。

「慈悲たる心に、天からの癒しを、今ここに汝に与えん」

目を閉じて何かに祈るように唱えるロロ、その言葉に反応したのか、カレンとロロの周りに複数の白い色の光の珠が現れ、そしてロロとカレンの手と手の間に謎の文字が書かれた白い輪のような円が現れた。

「これは……………!!」

カレンはあの時、湖で出会った少女が同じような物を出した事を脳裏に思い浮かぶ。

「ヒール!」

「!」

『まるで何かを呼ぶようにヒール』と叫ぶと、ロロとカレンの手と手の間に在った白い輪のような円が眩い光を放ち、瞬く間にその光は一瞬で消えて、白い円も周りに浮かんでいた白い光の珠も消えていた。

「どうだ? 治ったろ?」

「え? あっ!」

右手の甲を見てみると、切れ目が無くなり、傷跡も血も綺麗さっぱり消えていた。

「すごい……………」

何が起こったか分からないが、驚きと感動を覚えたカレンは、治った右手をあらゆる角度から見直した。そんなカレンをロロは。

「お前……………まさか魔法も知らないのか……………」

また怪訝そうな顔でカレンを尋ねるロロ

「えっ? 魔法って?」

大体予測が着いていたのか、ロロは「やっぱりか」っと呟き、もう溜息など尽きた様な引きついた表情だった。

「魔物を知らない、ストーカーって言葉も知らない、魔法も知らない……………お前って一体何なんだ……………」

「?」

急に言葉を止め、考え込むように黙り込んだロロ。カレンは急に黙

り込んだロロの顔を覗いた。

「まさか……………お前……………!!」

「!」

何かに気付いたのかロロは、カレンに指を指す、カレンはロロの態度に思わず生唾を呑む。

「お前……………俺よりも田舎者だなあ!!」

「えっ?」

何を言い出すかと思いきやロロは見当違いの勘違いをした発言にカレンを哑然とさせる。

「そうかそうか! 俺達の村より田舎だったら仕方ないな!」

一人で妙に納得したロロはカレンを自分よりも田舎者だと勘違いをしていた。

「いや……………僕は……………」

「そうゆう事なら、お前より何でも知っている俺様が、手取り足取り教えなきゃな!」

天井を見上げて『あっはっはっは』とまるで自分が偉いかの様に高笑いし、カレンの声はロロの耳に届いてはいなかった。

「いや……………だから……………」

「オシ! 俺様は優しいからな! 直々にお前の知らない事を沢山教えてやるから感謝しろよ!」

勝手に話を進めるロロはもうカレンの声など全く耳に入っていないなかつた。

「ん? そういえば、何か忘れているような……………?」

そんなカレンをよそに何か重要な事を忘れてかけていたロロは、首をすくめた。

「あっ! そうだ、こんな所に立ち止まっている場合じゃなかった! おい! 早く先に進むぞ!」

盗賊達の事を思い出した、ロロは再び走り出し、カレンに急いで先に進むよう呼び掛けた。

「……………あっ! うん!」

先に走り出したロロを追い掛けて、走り出すカレンは自分が記録喪失だという事はゆっくり話せる時に話そうと心の中で思いながら、魔装器もとい大剣を背中に背負って、ロロの後を追った……………

分かれ道

「……………盗賊達に追われて、洞窟内に逃げ込んで大分時間が経っている中、カレン達は暗くて狭くて長い通路をひたすら前に進み続けていた。」

「ねえ…………この洞窟は後どれ位進めば出られるの？」
後を付けていたカレンはロロの隣まで近付く。

「そうだな、俺の村の話によるとこの洞窟を脱け出すのに最低でも一時間掛るって、言ってるなあ」

「そんなに？」

「そこまで時間が掛るとは思わなかったカレンは、ロロに言葉に耳を疑う。」

「まあ、この洞窟は上に在る、運河や山々の下を通り抜けているからなあ、そんなに時間が掛っても不思議じゃない」

「そうなんだ……………」

走りながらこの洞窟の構造をあやふやに想像するカレンに、ロロはカレンの顔を見てニヤニヤ笑う。

「？ どうしたの？」

「いや……………まさか俺様よりも田舎者が居ると思うと……………」
口を押さえ、笑いを堪えるロロ、カレンは何故、ロロが笑うのかを理解する事など出来なかった。

「まあ、田舎者だから仕方ねえか！」

「？」

急に機嫌が良くなったロロは、カレンより前に出る。

「しかし、お前……………いや、そういえばお前の名前を聞いていなかったなあ？」

今になってロロはカレンの名前を聞いていなかった事ようやくに気付く。走る速度を下げ、カレンの方に顔を向く。

「お前、名前は？」

「カレン」

「『カレン』？　なんか女っぽい名前だな」
「女っぽい？」

走る速度を下げたロロと同じく速度を下げたカレンは、自分の名前が『女っぽい』という言葉の意味に首を傾げる。

「『カレン』っていう名前は、そんなに女の子っぽいのか？」

「そりゃあ、そうだろ！　『カレン』なんて女の子の名前か花の名前だぞ」

「花？」

花という単語に反応するカレン。

「何て言ったけなあ、確か名前が……………なんちゃらカレンだったような……………」

「『なんちゃらカレン』っていう名前なの？」

「いや違う！　その『カレン』っていう先の名前が思い出せねえんだよ！」

カレンの天然ボケに素早く突っ込むロロ。

「そうなんだ……………」

「そうなんだって……………お前、自分の名前がどうやって付けられたのか分からないのか？」

記録喪失なので、ブレスレットに刻まれた名前を自分のだと思っているカレンは、自分の名前が何を元に付けられたのか分からないので、ロロの問いには答えられる訳が無く。

「それは……………分からない」

「……………」

口に出したカレンの答えは、何処か重くて暗いような感じで、ロロは何か聞いてはいけない事だと悟り。

「まあ……………名前なんて人それぞれだもんな！　はっはっはっは」

笑ってカレンを励まそうとするロロは、カレンが落ち込んでいると勘違いをしていた。

「あ！ そうだ！ 俺様の名前はロロ・グライヴィー！ 前にも言ったが『カムーシャ』のバンチョーだ！」

その場をはぐらかそうとロロは自身の自己紹介を始めた。

「ああ、知っているよ。イミナちゃんから聞いたよ」

「何！ イミナから！？」

自身の自己紹介をした途端、カレンは自分の事を妹から教えられ知った事に驚くロロ。

「イミナちゃんから。僕の事を聞いていないの？」

「聞いている訳ないだろ！ 俺が目覚まして妹にお前が何処に行ったか聞いてだけで、それ以外は何も聞かず、急いで準備して出て行ったんだからな！」

「どうしてそこまで？」

「お前との決着を付けるためって、言っただろう！！」

忘れていた訳じゃないが、ロロの突っ込みで確かそんな事を言っていた事を思い出すカレン。

「そういえば、そうだったね」

「ハア……………、お前が盗賊に追われている事が分かっていたら、わざわざこんな所まで追っかけて来なかったのに……………」

溜息を吐いて、自らの行いを後悔するロロをよそにカレンはある事について尋ねる。

「ところで、魔法って僕でも使えるの？」

「ああ？ 何だよ急に？」

唐突に話題を変えて来たカレンにロロは眉を吊り上げ。

「いや、僕も使えるかなあ……………」

「確かにお前にも使えるかも知れないが、簡単に使える物じゃないんだぞ！ 特に魔法に使う『マナ』をうまくコントロール出来ない奴はな！」

「『マナ』？」

「……………やっぱり『マナ』も知らないのか……………」

溜息混じりに呟やくロロ。

「『マナ』って言うのは、全ての生物に宿る命の源の事だよ！」

「命の源？」

「そうだ！ 俺たちがこうやって生きているのも、俺たちと言う生物が生まれたのも、この世界が出来たのも、全て『マナ』の御陰なんだ！」

両手を広げ、『マナ』の偉大さをアピールするロロ。

「その『マナ』って言うのは、僕にも在るの？」

「当たり前だろ！ 俺にもお前にも体の中に『マナ』が在るんだ」

「体の中に？」

体の中に在ると聞いて胸に手を当てるカレン。

「俺達の体の中に『マナ』が在るから、俺達は今こうやって生きていられるんだ。その『マナ』を消費して、魔法が使えるんだよ」

「『マナ』を消費？」

「もっと詳しく言えば、何かをする時も、何かを生み出す時も、生きている事すらも、あらゆる事に『マナ』を消費しているんだ」
走りながら淡々と説明を続けていたロロは、自分の足に指を指す。

「俺とお前が今こうやって、走っていられる体力も『マナ』に関係しているんだ」

「体力も『マナ』に？」

「体力だけじゃない、気力も精神力も『マナ』に関係しているんだ」
説明を少しずつ理解しつつあったカレンは、ロロの話を聞き続ける。
「そしてこれらを司る『マナ』を『力のマナ』って言うだ」

「『力のマナ』……………?」

「その『力のマナ』を消費して、魔法が使えるって訳だ」
説明が終わったみたいで、ロロの口が止まる。

「……………」

「どうだ？ わかったか？」

魔法やマナについての説明が終わって考え込むカレンに、ロロは心配そうに顔をのぞみ込む。

「うん……………何となく分かったよ」

「！　そうか！　やっぱり俺様の説明は分かり易かったか〜〜〜！」
「？」

言葉の割には何処か安心した表情を見せるロロにカレンはその表情の意味を理解する事はできなかった。

「あっ！」

「ん？」

走りながら続けていた話が終わった矢先にカレン達の前に、二つの分かれ道が視界に入ってきて来て、二人はその前に足を止める。

「分かれ道かよ……………」

厄介な物に出会ったみたいに眉が下がるロロ。

「どっちに進む？」

「う〜〜〜ん……………そうだな〜〜〜」

顎に手を当てて、分かれ道を観察するロロ。

「お前ならどっちにする？」

「僕？　……………そうだな〜〜〜？」

ロロに振られ、同じく顎に手を当てて、分かれ道をじっくり見るカレン。

「う〜〜〜ん……………右かな？」

考えた結果、右の道に指を指すカレン。

「おお、右か！？　俺もちょうど右かな〜〜〜っと、思った所だ！」

どうやらロロも同じ道を考えたい様で、意見が重なったのが少し嬉しかったのか。ロロは妙にテンションが上がった。

「じゃあ、お互い右って事で、右の道を行くぞ〜〜〜！」

「うん」

特に異論は無く、テンションが上がったロロに相槌を打つカレンは、ロロと共に右の道へ足を運んだ。

「お？」

右の道を歩いて、そう経たない内に今まで見て来た狭い通路とは違う、少し広がった空間の中に入っていた。

「此処は何だろう？」

その空間は、円状様な形に成っていて、見渡す限り来た道以外は全て壁に覆われていた。

「なんだなんだ？ 行き止まりかよ？」

たどり着いた円状の空間は行き止まりだと落胆するロロ。

「どうする？」

「戻るに決まってるだろ！ さっき選ばなかった左の道に行くんだよ！」

振り向いて来た道を戻ろうとするロロだったが……………

不意を突くように空間内に何かが鈍く軋む音が響く

「！」

突然、耳に聞こえた不吉な音に足を止めるロロ、その音が響いた後に続いてか洞窟内が激しく揺れ始めた。

「ッ！」

「な、何だよ！？」

激しく地面が揺れる事に動揺するカレンとロロに追い打ちするかのように、カレン達の来た道が揺れによって空間の壁が崩れ落ちて塞がってしまう。

「なっ！？」

「げげっ！？」

洞窟内の激しい揺れはまだ続き、カレン達の動揺を更に大きくしていく、すると揺れの音に混じって何か別の音がカレン達の耳に入った。

迫り来る水

揺れ動く狭い空間内で響く振動音とは違う、もっと別な音が聞こえたカレン達はその音が何処から発生しているのかが分からず、困惑していた。

「（何だ？ この音は！？）」

「！！ ま、まさか！？」

音の発生位置はまだ特定できないが、音の正体を察した口口は顔が青ざめる。

「！！」

音の発生源を探そうと空間内を見渡したら、さっき崩れ落ちた壁の所に穴が出来ていると気付いたカレンと口口は、その穴の中から揺れの音に混じっている違う音が出ている事も同時に気付く。

そして、それに気付いた直後……………

「！！！？」

突如、壁の穴から莫大な量の水が怒涛の勢いで噴射のように放水を始め、カレン達の居る円状の壁の空間を水浸しにする。

「くっ！！」

「ブハっ！！」

出る水の量は激しく、噴射している水の着地点の近くに居たカレンと口口は大量の水を被りながらも、何とかその場から離れ、今は壁の瓦礫に埋まっている、来た入口の反対側の壁に寄り添う。

「おいおい！ や、やべえーぞ！！」

「……………！！」

入口が塞がれた為、空間内は瓶に蓋をしたような状態になり、穴から出てくる大量の水が空間内に押し寄せて来る。

「み……………水が！」

時間が経つ事にみると空間内が水で溢れ、もうカレン達の足を浸す位に満たしていた。

「こ、このままじゃ、溺れ死んじまうよー！ー！！」

「……………」

唐突な非常事態にパニックになっているロロとは反対に、冷静に落ち着いているカレンは空間内を見渡していた。

「あっ！」

そして、カレンは何かを見つけ、上に方に指を指す。

「ねえ！ あれ！！」

「えっ？」

声に釣られ、カレンの指を指している方向に目を向けるロロは、意外な物が目に入る。

「あれは！！」

指が指した所には、もう一つの大きな穴が在り、それはカレン達が背にしていた壁のかなり上の方にぽっかり空いていた。

「あれで、ここから出られるのか！？」

「分からない！ でももし出られるとしたらあそこしか無い！」

「よ、よし！」

その穴に懸けたのか、腰に掛けてある鞆に手を突っ込むロロ、ちなみにその穴はカレン達の居る所から15メートル位の高さに在り、とても人の力で跳び移る高さでは無かった。だからこそロロはある物を取り出す。

「あったあった！ これで！」

鞆から取り出したのは、長い紐に手の大きさ位の鉄の爪が着いた物だった。ロロはそれを上空の壁に在る大きい穴に向かって、鉄の爪を放り飛ばす。

「届け！」

鉄の爪は紐を引っ張りながら上へぐんぐんと伸び、穴の手前に当たる。

「やった！」

鉄の爪は穴の手前に刺さり込み、カレンは心の中でガッツポーズを決める。

「大丈夫だな!? うん!」

爪が外れないか、刺さり具合を確かめる口口は、鉄の爪が外れないと確信すると。

「よし! じゃあ最初は俺様から——」

言い終わる直前、不意に水が弾け飛ぶような音が複数に鳴り響き、カレン達はその音が今でも穴から勢い良く出ている水の着地地点の近くから聞こえたを知る。

「な、何?」

「今度は、何だよ?」

カレンと弱気な声を出す口口は振り向いて音の正体を確かめると、そこには……

「プルルルルル!」

「!」

そこには、白いウロコと触覚のような目、そして鋭いハサミを持った謎の生物が複数にそこに居て、甲高い鳴き声を出しながらカレン達を威嚇していた。

「また……魔物……?」

「勘弁してくれよお……!」

またもや予想外の展開に戸惑うカレン達に対して魔物達は水が溢れているこの空間内でまるで魚のように水中の中でぴたりと動かず、カレン達の様子を窺っていた。

「動かないね……?」

「たぶん……こっち様子を窺っているんだ!」

魔物達の様子に気付いたカレン達であったが、空間内の水がカレン達の膝の所まで溢れて来て、カレン達の不安をより一層に深める。

「……君は先に登って!」

「ええっ? いや、それは有り難いが……」

思いもしない申し出に有り難みを感じながらも躊躇する口口。

「二人一緒に登っていたら、魔物からの攻撃を防げない。だから誰かが先に登って、後に登る人の手伝いをしなきゃ、二人とも登れな

い！」

記録喪失であることにも関わらずこの状況で最も最善な案を出したカレンに、ロロは元々自分から先に登ろうと思っていたが、カレンの提案に心打たれ。

「……………分かった！ 俺が先に登って、後から登るお前をキツチリと援護してやる！」

「うん！ お願い！」

「頼んだぞ！」

危機的状況の中、ロロはお互いの協力が不可欠だという事を身に染みて理解した。そしてカレンは魔物の方に視線を戻す。

「（魔物は……………5匹！）」

観察して見た所魔物は5匹、体格は前に遭遇した魔物とたいして変わらない大きさであり、そして前の魔物と同じ位の殺気を放っているのをカレンは肌で感じた。

「よっ……………つと！」

真後ろの壁の上の穴から伸びている紐を伝って登り始めたロロと魔物がロロに襲いかからないように、ロロの後ろを守るためと魔物を引き付けるために背中に背負っていた魔装器もとい大剣を下ろして構えるカレン。

「……………」

「プルルルル……………」

黙って魔物達の様子を窺うカレンと今でもカレン達を睨み、じっと動かない魔物達。お互い相手の出方を窺っているようだが、刻々と空間内の水が溢れている状況で、このまま時間が過ぎて行けば、カレンが一方的に不利になる事は目に見えていた。

「（このままじっとしてたら、こっちが危ない……………ならっ！）」

剣を後ろの方に振り被り、刃先に力を溜めて……………

「剛魔……………」

叫び声と共に剣を横に振り下ろし、振り下ろされた剣は大きな風の

波を作って、波は衝撃波と成って、魔物の方に飛ぶ。

「!!」

先制攻撃の衝撃波は魔物達に直撃し、空間内に響き渡る爆音と共に水柱と水しぶきが飛び立つ。

「「プルルルルル!!」「」」

「!」

水柱が立ったせいで、魔物達がどうなったのか確認出来なかったが、5匹居た魔物の中の内3匹が、水柱が引いた直後に水中から飛び出し、鋭いハサミを開いてカレンに襲い掛って来た。

「ッ!!」

足が半分水に浸っているせいで、陸とは違い、水が動くのを邪魔して、魔物の攻撃を回避できなくなってしまい、カレンは迫ってくる魔物を正面から立ち向かって対処するしか無かった。

「周体斬!!」
しゅうたいざん

足に力のような物を流し込み、右足を軸にして、カレンは高速回転を行い片手で剣を振り回わした。

「「!!!!!!」「」」

高速回転したカレンの周りの水は渦となり、襲い掛った魔物達は渦を作った高速回転して勢いが付いた剣に弾き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「おお! す、すげえ!」

登りながら戦いの様子を見ていた口口は感心の声を出した。

「.....」

回転を辞め、辺りを見渡す、最初に衝撃波を喰らった2匹の魔物は水の上に浮かびながらピクリとも動かず、壁に叩きつけられた魔物も同じく、魔物達が動かないと確認して、もう安全かなと思ったカレンであったが.....

「ん?」

穴から出ている水の中から小さい何かの影が見え、その影は次の瞬間にカレンの目に姿を現す。

「プルルルルル!!」

「なっ!!」

一安心かと思った矢先にまた水を噴射している穴から、同じ魔物がまた出て来てカレンは動揺する。そして更に穴の水からまた影が現れ。

「プルルルルル!!」

追い打ちを掛けるように、更に魔物が次々と出現し、数は当初の5匹から3倍の15匹に跳ね上がった。

「く……………」

数匹の魔物なら対処は出来るが、数が圧倒的に開いた上に空間内に溢れる水はカレンの下半身の全てを浸す程に溢れていた。次々と起こる出来事にカレンの不安を強めて行く。

「プルルルルル……………」

地の利を得ている魔物達は、自分達の数を利用し、囲みながらカレンとの距離を少しずつ縮めながら近づいてくる。

「「!!」」

刹那……………突如、矢が3本同時に飛んできて、魔物をそれぞれ3匹を射抜く。

「!」

矢は上から降って来て、カレンは矢が飛んで来た方向に顔を向けると。

「おい! 早く登れ!!」

その矢を放ったのは、もう壁を登り終えて、穴の中から弓で魔物を射抜いたロロであった。

「あっ! うん!」

ロロが登り終えて、自分が登る番が来たと分かったカレンは、魔物達の方に顔を戻して剣を振り被り、刃先に力を溜め。

「剛魔!!!!」

振り下ろした剣が放した衝撃波は魔物数匹に直撃し、大きな爆音と共に水柱を作る。そして、カレンはその隙に急いで上に登る為の紐

を手に取り、登り始めた。

「プルルルルル!!」

「!!」

登り始めてそう経たない内に水柱が引いて、魔物の一匹が飛び跳ね、登っているカレンの後ろを襲い掛かる。

「!!」

しかし、襲い掛かって来た魔物はカレンに届く前に口口が放った一本の矢に射抜かれ、力尽きてそのまま下に落ちる。

「ありがとう!」

「礼はいいから、さっさと登れ!」

礼を言って顔を上げると魔物からカレンを守るため、矢を放ち、魔物の数を減らしていく口口。カレンはそんな口口の働きを無駄にしないためにも登る早さを強めた。

「プルルルルルル!!!!」

次々とカレンに跳びはねて襲い掛かる魔物達であったが……………

「やらせっかよ!!」

器用に矢を素早く補充しながら、口口は魔物達を次々と撃ち落とす。

「ついでに、これも喰らえ!!」

そう言うとき口口は一本の矢に『力のマナ』を流して、『マナ』が流れた矢は刃の部分に赤いにオーラが宿った。

「彗星^{すいせい}!!」

放たれた赤いオーラを纏った矢は、普通に放たれた矢よりも比べ物にならない程に早くで一匹の魔物を射抜く。

「!!!!」

赤いオーラを纏った矢に射抜かれた魔物が当然赤い光を放って爆発し、近くに居た魔物2匹も爆発に巻き込まれ、水しぶきを起こす。

「……………!!」

何が起こった分らないカレンであったが、15匹だった魔物達がいつの間にか4匹になっており、魔物達も怯み、そして登っていたカレンも穴からあと少しだった。

「あともう少しだ！ 踏ん張れ！」

魔物達がもう飛び上がったても届かない距離だと悟ったロロは、矢を撃つのを辞め、地面に体を着いて穴先から手を下に伸ばす。

「うん！」

カレンも上に手を伸ばしてロロの手を取る。

「ふんぐうう！！」

カレンの手をしっかりと掴んだロロは、歯を食い縛りながら、力いっぱいカレンの体を引っ張り上げる。

「よいしょ……………っと」

ロロの力も借りてやっと穴の中にたどり着いたカレンはロロと共に安堵の息を漏らす。そしてカレンは穴の中を見渡すと。

「……………どうやら、奥に繋がっているみたいだね？」

顔を上げて、穴の奥に道が続いている事を目で確かめたカレンはゆっくり腰を上げる。

「ああ、そうみたいだ！」

相槌を打ちながらロロは、鞆の中から爆弾を取り出す。

「それは……………！！」

見覚えがあるそれは、『カム―シャ』村でロロとカレンが戦った時に、ロロが使っていたロロ特製お手軽爆弾であった。

「これでも……………喰らえ！！」

取り出した数個の爆弾の導火線に火を付けて、まだ空間内に居る残りの魔物達に投げ込む。

「よし！ 逃げるぞ」

「あ！ 待って！」

爆弾を投げてすぐさま振り返り、穴の奥に走りだしたロロと後に付いて行くカレン。投げ込まれた爆弾は空間内の水の中に入り込み、カレン達が穴の奥に向かってそう経たない内に……………空間内の方から強い耳鳴りを起こす程の大きな爆発音が響きく。

「！」

その聞き覚えのある爆音にカレンは走りながら後ろを振り向く。

「これであの魔物達も、もう追っかけてこれねえだろ！」

自分の爆弾が役に立ったと笑みを浮かべるロロ。

「あの爆弾を喰らったら、只じゃあゝゝすまねえからな！」

「……………そうだね」

あの爆弾の威力を身に染みて理解しているロロだからこそ、分かる事の様だとカレンは心の中でそう察した。するとロロは走っている中、急に息が荒くなり、顔から元気が無くなっていくように疲れた顔に変わっていった。

「ハア……………もう……………だめだ……………」

段々と走る速度が落ちて行くロロはどうとう立ち止まり、息が乱れように激しい息遣いをして、顔を下げて、腰を低くして両手をそれぞれ両膝に置く。

「どうしたの？ 大丈夫！？」

後を付いていたカレンはロロの様子が変だと気付いて、ロロの隣に止まり、下から顔を覗み込んだ。

休憩

顔色は正常だったが、表情は如何にも苦しそうで、額から数本の汗が垂れ流れ、口と鼻の息は荒れて、呼吸が随分と乱れていた。

「ハア……ハア、緊張が解けたせいで、疲れが一気に出たみたいだ……」

思いもしない出来事が立て続けで起こったせいで、精神的にも身体的にも過労したようで、体に限界が来たロロは、もう走る事は出来なかった。

「本当に大丈夫？」

体の具合を心配するカレンは、ロロに体の安否を尋ねる。

「心配すんな、歩きながら体力を戻すさ」

問いに対し、強情を張って返したロロは体を立て直し、歩きながら前に進む。カレンはロロが強情を張っているのが余計に心配になり、隣を歩きながら後を付いて行った。

「しかし……お前、見掛けによらず結構戦い慣れてんだなあ」

「えっ？」

不意にロロがカレンに話を振り掛ける。

「だってよ、俺様と戦った時も、魔物達と戦った時も、妙に戦い慣れた動きだったぞ」

「そ、そう？」

「ああ」

「そっか……」

そう言われてみると確かに思い当たる所があると頭の中で浮かんだカレンは、手を顎の所に当てる。

「所でお前の技って……」

「……」

話を続けるロロをよそにカレンは、指摘されて初めて、自分の動きが戦い慣れている事に気付かされ、疑問を浮かべ、何故自分が戦い

慣れているのか考え始めた。

「（そういえば、何でなんだろう？ あの手盗賊の人達と戦った時も体が勝手に動いて……………、さっきの戦いもそうだ……………）」

頭の中で、今までの戦いの光景を思い出し、自分が使っていた技の事を思い浮かべる。

「（あの技はやっぱり、僕が記憶を失う前に使っていた技なのかな？）」

自分の失った記憶の中で、体だけは戦いの動きを覚えている事に知ったカレンであったが。

「おい！ 聞いてんのか!？」

「あっ……………」

考え事に周りの声が耳に届いていなかったカレンは、やっと口口の声に気付く。

「な……………に、ボー……………としてんだ？」

「ご、ごめん、ちょっと考え事があった……………」

「しょうがねえ……………、もう一回言うぞ」

軽く息を吐いた口口は、再び口を開く。

「お前の技にも俺の技にも、『マナ』を使っている事は知ってるか？」

「僕の技に、『マナ』を使っている？」

意味が分かるようで分からないカレンは、目を細める。

「前にも言った通り、どんな事をする時も体内の『マナ』を消費しているんだ。技も例外じゃねえ」

「それって、君が言っていた『力のマナ』の事？」

『マナ』についての知識に乏しいカレンは、口口が前に説明した『力のマナ』の事を思い浮かべ口口に出す。

「まあそうだ、どうやって使っているか、分かりやすく言うとな……………」

考え込むように、口を閉じる口口。そして少しの間後、その口を

開ける。

「つまりだな、さっきの戦いで俺が使った『彗星』っていう技は、俺が矢の刃に『力のマナ』を流し込んで、その矢は『マナ』のお陰で通常の何倍のスピードで飛ぶ事が出来るんだ。しかも、射抜いた標的の体の中に『マナ』を残して、その残った『マナ』は風船みたいに膨れ上がって、ボン！　っと爆発するって訳だ！」

説明を分かり安くするように両手をグーにして、パツと手を開いて爆発を表現するロロ。

「そんな事ができるんだ……………」

『マナ』に隠された力がある事に驚くカレンは、自分の技の事を思い出す。

「じゃあ……………僕が使った技も？」

「だから言ったら？　お前の使った技にも『マナ』を使ってるって！」

今更になってやっと気付いたカレンに呆れそうになったロロは、溜息が喉から出てきそうところで辞め、話を続ける。

「つまり、どんな技にも『マナ』を使ってるって事だ！」

「どんな技にもか……………」

『マナ』について新しく知識を得たカレンは、ロロの方に視線を向けると、ロロの鞆から少しはみ出ている弓に目が止まる。

「そういえば、君は爆弾以外にも弓が使えたんだね」

「な、なんだよ、いきなり」

唐突に話題を変えたカレンに、戸惑うように猫のような耳をピコピコさせながら目を丸くするロロ。

「だって、『カムーシャ』で戦った時は、そんなの使ってたかったよね？」

鞆からはみ出ている弓に指を指して、ロロに尋ねるカレン。

「でもすごいな……………弓矢で魔物に一回も外さず倒せるなんて」

「ま、まあな！　物作りは得意だが、射撃はもっと得意だぞ！」

尊敬の眼差しで純粹に褒めてくるカレンに自慢げに人指し指で鼻の

下を擦るロロは、自分の特技を明かす。

「何で、使わなかったの？」

「あ？」

「だから、何で、村で戦った時に弓矢を使わなかったの？」

「どうやらカレンは、『カムーシャ』でのあの時の戦いで、どうして弓矢を使わなかったのかという素朴な疑問を抱いたようだ。

「あ~~~~~それはだな」

「それは？」

「それは.....」

「.....」

何故か焦らすように躊躇って口を開かないロロにカレンは何の違和感を感じず、ロロの口から答えが出るのを待っている。そしてロロはその固く閉ざした口をようやく開く。

「く、苦勞して作った自信作の爆弾を自慢したくて、誰でもいいからその爆弾の威力を見せ付けてやりたかったんだ、ついでに実戦結果も.....」

「.....」

「お前に戦いを申し込んだのは、お前を偶然近くで見掛けたからで、弓矢を使わなかったのは、爆弾が完成したから、つい忘れていたからで.....」

「.....」

「まあつまりだな.....要約すると」

そして、ロロは空気が重くなったその場で、勇気を出して告白する。

「つまり.....全部、勢いなんだ.....」

「.....なるほど」

「.....」

「.....」

「？」

理由が分かったカレンだったが、それ以上何も言わず、ロロはカレンの反応にキョトンとする。

「お、怒っていないのか？」

「え、何が？」

まるで何も感じては、いないようにカレンはロロの問いの意味を理解してはいなかった。

「いや、だから……………俺の勢いだけの行動を怒っていないのか!？」

「怒る？ 何で？」

「何でって、おまえ……………」

呆れて物を言えないロロはカレンの態度に心底呆れ、今までの中で最大の溜息を出す。

カレン「そんなに怒って欲しいの？」

自分のせいで呆れられている事に気付かず、カレンはロロの大きい溜息が気になり、上目遣いで尋ねる。

「もういいよ……………」

「？」

結局カレンはロロの溜息の理由が分からず、歩きながらの会話が終わった矢先に、二人の目に微かな光が映る。

「あれ？ 何か先に光が見えるね？」

その光は白く輝き、光はカレン達が進んでいる通路の先から見え、同時に水が流れる音が聞こえてくる。

「出口かな？」

「とにかく行ってみようぜ！」

期待を胸に抱いて、白い光が指す方に駆け込むカレンとロロは、その光の先に入り込む。

「ここは……………」

光が発する所まで来たカレン達の目に入って来たのは、前に見た円状の壁だけの空間と同じような形状の空間に入っていた。

「また似たような所が……………」

愚痴を零しながらも辺り一帯を見渡すロロとカレン。この空間は前の空間とは違い、カレン達から見て、まっすぐ行った先の奥に通路

と思わしき穴が在り、そしてこの円状の空間の片隅に泉のような大きな水の溜まり場が在り、その上から滝のように大量の水が流れていた。

「この光は……………」

この空間内を照らす白い光に空間内の壁や地面から至る所から放ち、その光は大小とそれぞれ大きさが異なっていた。

「浄化石か……………」

フッと呟いたロロの発言に気付いたカレンは、首を傾げながらロロに視線を移す。

「浄化石？」

「奇石類きせきの浄化石だよ！ 知らないのか？」

首を縦に振って頷くカレンに対し、ロロは顔にシワを寄せながら、気が抜けた様な目でカレンを睨む。

「奇石も知らないって、お前……………：どんだけ田舎者だよ！？」

今更だがカレンの常識知らずに呆れを通り超えて、怒りに成った感情を露わにするロロであったが、何を怒っているのか分からないカレンに対しては虚しくも空振りに終わってしまう。

「はあ…………もう疲れた！ 此処で休憩するぞ！」

疲れて半分やけくそになったロロは、泉のような水の溜まり場の近くまで歩き、その場でしゃがみ込み、胡坐を掻きながら休憩を宣言する。

「此処で立ち止まっていいいの？」

休憩体形に入ったロロに近づくカレンは、自分達の置かれた状況に對して、此処で休憩する事に疑問を感じた。

「このまま、休憩しないで先に進んでいたら、俺がくたばっちゃう！」

カラ元気な声で自分には休憩が必要だと訴えるロロ。

「どんな生物でも適度な休憩が必要なんだよ！」

体力や精神にもピークが来ている今のロロにとって、休憩はとても

魅力的で必然的に求めている物だった。

「……………」

休憩は確かに今のロロには必要だと思ったカレンの気持ちに対し、一刻も早く目的の少女にペンダントを渡さなければならぬという元々在った気持ち、今の気持ちと葛藤し合い、カレンは眉を下げながら顔を堅くして悩んだ。それを察したのかロロは。

「何もそんなに焦らなくていいだろ？　ちょっと時間が経ったぐらいでその女に追い付けないって訳にはならねーぜ、きつと」

悩むカレンに助言を言うロロ。そのカレンは意外そうな顔でロロの言葉に耳を傾ける。

「要はそいつに追い付けば、良い話だろ？　そんなに悩むなよ！」

「……………」

助言のおかげか、さっきまでの堅くなっていた顔が、柔らかな笑顔になり、カレンもロロと一緒に地面にしゃがみ込み、ロロの隣で休憩を取る。

カレン「此処で休憩するよ」

その言葉を聞いたロロは、安心したかのように顔に笑みを浮かべ、地面に大の字になって寝っ転がる。

「(ぐううう……………」

「？」

「……………」

直後に何処かで聞いたような気が抜ける音が聞こえ、カレンはその音が聞こえた方向、隣に居るロロの方に顔を向けると、ロロは頬を少し赤くして何食わぬ顔をしていた。

「そういえば……………」

「昼に何も食ってなかったな……………」

自分のお腹を擦って、空腹を自白するロロ。

「でも今は、食材なんて物は一切持っていないんだよね……………」

「……………」

空腹に悩まされているロロを見て、カレンは自分の腰にぶら下げている、商人のコルトから貰った、本と食材と赤い色のゼリーのよう

な物が入った布の袋の事を思い出し、それを手に取り。

「これ……………商人のコルトさんって言う人から貰ったんだけど」
寝っ転がっているロロに見えるように、袋の口を出来る限り広げ、
ロロに差出す。

「おお!?! これは!」

目を見開き、上半身だけを起こして、袋に手をつ突っ込んで中身を確認する。

「何だよ!?! こういう物を持ってるなら早く言えよ!」

瞳を輝かせ、ヨダレが垂れそうなニヤけ顔で袋の中の食材を見詰めるロロ。

「この先、何かの役に立つかもしれないから持って行けて、その人に貰ったんだ」

この発言にロロの体はピタリと止まり、さっきまでニヤけ顔が消え、
神妙な表情でカレンの顔を見る。

「いいのか? これ……………お前の為にあげた物だろ?」

例え貰った物でも、カレンの為にあげた物なら、それを他人である
自分が使っているのかをカレンに問うロロ。

「良いよ、君がお腹を空かせているなら、使っているよ」

と何の躊躇も無く、ロロに使用を勧めるカレン。

「本当にいいのか?」

「良いんだよ。コルトさんは何かの役に立たせるために僕にあげた
なら、まず君の空腹を無くすために役に立たせたいんだ」

自分の為だけでは無く、誰かの為に役に立たせる事も含まれている
と思ったカレンは、ロロの為に使っても何の問題も無いと判断し、
快くロロにあげる事を選んだ。

浄化石

陳腐な嘘偽りなんて物は完全に感じない、思いやりのあるカレンの優しい一面を目の当たりにした、ロロは面を喰らったかのように呆けてしまう。

「お前……………」

意表を突かれたかロロは、目を丸くし、腑抜けた顔で呆気を取られたが、すぐその後、苦笑いを浮かべ、そして今度は清ました顔に変わり。

「サンキューな！　じゃあ、ちよつと待ってろ！」

さっきまでの真剣な表情は何処かに消え、カレンの手に在った袋を手に取り、中身を探る。

「これと……………あとこれと……………、おお！　これも在るのか！」

嬉しさうに笑みを浮かべ、袋の中から四角形のパンと丸く切り取られたハムと瓶に入ったケチャップを取り出す。

「何を作るの？」

「良いから、見てろって！」

まずロロは、丸く切り取れたハムをパンと同じ位の厚さに2枚切り、ケチャップの瓶のフタを取って、その切った二つハムの表と裏にケチャップを適量に塗り、そして二つのそれぞれのハムを四角形のパンとパンの間に挟み込んで。

「ほら！　？サンドイッチ？の完成！」

「？サンドイッチ？」

「この料理の名前だよ！　ほい！」

完成した内の1枚のサンドイッチをカレンに差出し、もう1枚は自分の片手に持つロロ。

「お前の分だよ」

「あ、ありがとう」

自分の分を用意してくれた事に驚きつつサンドイッチを受け取り、

カレンは作ってくれた口口に礼を言う。

「「いただきます」」

二人は食事の挨拶を行ない、サンドイッチを口に運ぶ。

「あ……………おいしい……………！」

「だろ？」

おいしい物に有り付けた二人は微笑ましそうに笑い、その後、黙々と食事を行ない、二つのサンドイッチはそれぞれの胃袋に消えて行った。

「ふう、少しは腹の足しになったな」

「うん、おいしかったよ」

お腹を擦って、空腹から逃れた事に安心する口口と素直においしいと伝えるカレン。

「よつと」

急に起き上がった口口は、上から水が流れている泉の端に近付き、そこにしゃがみ込んで、両手で溜まり場の水をすくい上げ、その水を飲み込む。

「プハー！　生き返る〜〜〜！」

喉が渴いていたのか、口口は歓喜の声を出す。その声に釣られ、カレンも起き上がり、泉の端に傍に近付く。

「おいしいの？」

「うめえよ！　お前も飲んでみるよ！」

どうやら口口には好評なようで、カレンは口口の勧めでその場をしゃがみ込み、泉の中の水を覗いてみる。泉の中は白い光を発する石が無数に在り、石のおかげで中は明るく、水は何の濁りも汚れもなく、透明で綺麗な水だった。

「……………」

その透き通った水を口口と同じ両手で水をすくい上げようとするカレン。水はひんやりと冷たく、肌に潤いを与え、両手に満たされたその水はまるで宝石の様に輝いていた。そしてじつくりと観賞したカレンは、ゆっくりと水を口に運び、飲み干す。

「（あれ？ この味……………」

「ん？ どうした？」

飲み終えたカレンの顔が何かに気付いたような表情して、ロロはそれが気に止まり、カレンに問い掛ける。

「これと同じ味の水を前にも飲んだ事があるんだ」

その水の味に身に覚えが有るカレンは、あの金髪の少女に出会った湖で、コルトから分けてもらった水筒の水を思い出す。

「……………」という事はお前、此処（水底の洞窟）に来る前に何処かの湖の水でも飲んだか？」

「……………多分そうだと思う」

確信が無いため曖昧な返答をしてしまうカレン。

「だったら、此処の水脈が繋がっている湖の水でも飲んだんだな、きつと！」

「湖と繋がっている？」

水脈が此処に繋がっている事は前にロロに教えて貰ったカレンであるが、湖と繋がっている事は初耳だった。

「上に在る運河から通じている水脈が何もこの洞窟だけに繋がっているんじゃない！ 水脈はあらゆる所に繋がっているんだ！」

つまり上の運河から流れる水脈は、此処の『水底の洞窟』だけに繋がっている訳では無く、あらゆる至る所に繋がっていると、ロロはカレンに解説を再び行う。

「じゃあ、『カムーシャ』の少し離れた所に在る、あの湖にも繋がっているの？」

「おっ！ 何だ、あの湖に立ち寄ったのか？」

『カムーシャ』の少し離れた所に在る湖という言葉だけで、カレンの言う湖が、ロロ思い当たる湖と合致する。

「あの湖も運河の水脈で、繋がって出来た湖なんだ」

「そうなんだ……………」

自分が落ちた湖の水と同じ水を飲んだと、ロロの説明で初めて分かったカレンは、あの湖と上の運河から流れる水脈が繋がっているも

知った。

「所で、この光る石は何なの？」

続いてカレンはこの空間内に来てからずっと気になっていた、この場所を照らしている無数にある白い光を発する石について、カレンは泉の中に光る石を眺めながら口口に尋ねる。

「その石は、奇石っていう鉱物に当たる石なんだ」

「奇石？」

これも知らないカレンに、口口はもう呆れずに受け流すように淡々と説明を続ける。

「奇石って言うのは、普通の石とは違い、あらゆる特性を持っている石の事を言うんだ」

「特性？ この石に特性が有るの？」

泉の中に手を入れて、壁に張り付いている奇石と呼ばれる、光る小さな石を掴み取り、カレンに見せるように目の前に付き出す口口。

「この石は、浄化石っていう水を浄水にする事が出来る石なんだ」

「浄水？」

「浄水の意味は、汚くて飲めない水を濾過と殺菌をして、綺麗な水になった水の事を指すんだ」

手の平に在る小さな奇石もとい浄化石を指でなぞりながら、口口は浄化石の特性を語る。

「まあ、簡単に言うと、この石は水を綺麗で安全なうまい水に変えてくれるっていう代物だ」

「それが………この石の特性………？」

知らない物の物への興味心か、カレンは口口の手の平に在る、小さな浄化石を渡してもらって、自分の手の平に乗せて、まるで宝石のようにその白い光を発する石を見詰め続ける。

「浄化石はこの大陸特有の原産物だから、この洞窟以外にも色々な場所に有るんだぜ」

「此処以外にもいっぱい有るの？」

「ああ、この大陸のほとんどの場所に在るって噂だ！ 探そうと思

えばいくらでも在るみたいだぞ」

「そんなに……………」

この光る石が他の場所に沢山在ると知って、驚いたように目を細めるカレン。

「この浄化石は、この大陸全ての連中の生活を支えているんだ、昔から。だからこの大陸に住んでいる奴で、この石の事を知らない奴はいないってくらいだからなあ」

「生活を支えている？」

「俺の村（カム―シャ）もこの石のおかげで、安全な飲み水を井戸の中から、確保できるんだ、他の所も大して変わらねえ」

ロロのこの言葉で『カム―シャ』で見掛けた井戸の事を思い浮かべて、カレンは一つの答えを見つける。

「それってつまり、この石が在るから、汚い水を飲まなくて済むって事？」

「そうゆう事だ、ちょっとは分かってきたな」

教えた甲斐があったかのように、上機嫌になったロロは、先に進めると思われる、来た道の真っ直ぐ前に在る、奥の穴の方に体を向ける。

「さて、そろそろ行くか！」

「えっ？　もういいの？」

この場所に来て数十分しか経っていないので、この短い休憩の中で、ロロの回復の早さに信じられないと言いたげ顔に変化するカレン。

「大丈夫！　腹も少しは膨れたし、水も飲めたし、これくらいの時間で休めたから、もう全開だ！」

「本当に？」

「本当に大丈夫だって！　それに此处でぐずぐず時間を潰していたら、後ろで追っかけて来る盗賊達に追い付かれるからな」

「……………それもそうだね」

自分達が追われている身だという事は、この洞窟に入った時から分かっていた事だから、ロロは確実に逃げ切れるように此处で休憩し

て体力の回復を短時間で済ましてようだ。

「それに、また地震が起こって、壁にヒビが入って、水脈が噴き出すのはもう勘弁だ」

前の空間内の出来事を予測して、この空間内でも起こるかもしれないと恐れたロロは早く先に進む事にしたようだ。

「地震って、此処（水底の洞窟）でよく起こるの？」

「此処だけって話じゃねえ、この大陸事態でよく起こるんだ！」

「？ それって……どうゆう意味？」

「この地震もこの大陸特有の現象なんだ。この地震は毎年何十回も起こる！ おまけに今年は特に多いんだ！」

「現象………」

地震は毎年起こって、今年は特に多いと口走るロロは、カレンの反応を見向きもしないで話を進める。

「俺様が生まれる前のずっと前の話だが、昔は今と違って、此処は運河の先を渡る為に普通に人々が渡っていたみたいでな。多くの人が此処を通っていたんだ」

「え？ じゃあ何で此処は、誰も通らなくなったの？」

「………昔ある時、大きな地震が起こってな、その地震であるの時に壁にヒビが入って、それが運悪く大きな水脈に当たっちゃったみたいでな」

声が急に質が低くなったロロの声は、カレンの耳に小さく響く。

「洞窟内をあっという間に埋め尽くす程の水が流れ込んでな………」

………その時、洞窟内を通っていた人達は水に飲み込まれ、大勢の犠牲者を出したそうだ………」

「そう………か………」

「まっ、聞いた話によればだがな………」

「………」

「………」

何て言えばいいのか、何となく言葉が見つからないカレンはロロが今話していた瞳の奥に悲しみのような物を感じた。そして二人の間

に少しの沈黙が支配した。」

「っで、でな！　それ以来、洞窟を通ろうとする人は居なくなつて、どうにか運河の先を渡ろうと洞窟と違つて、安全で早く運河を渡る為は何十年掛けて、今は地震のせいで修理中の大橋を建設したつて話だ！」

妙に気まずく感じたロロは、いつも通りに声の質を戻して話を持ち直す。

「その橋は、君が生まれる後に出来たの？」

調子が戻ったロロに、カレンは話を振りやすくなり、さっきと同じ調子で口を開く。

「いや、確か……………俺様が生まれるちよつと前に出来たらしいぞ」

「そうか……………その橋が出来たから此処はもう誰も来なくなつたんだね」

「俺達を除いてな……………」

「あつ、そうだった……………」

誰も、もう通らない洞窟を通ろうとしている事をうっかり忘れていたカレンに、ロロは忘れんな！と突っ込んだ後、足を進め、先に続いていると思われる奥の穴に向かう。

「ああ！　ちよつと待って！」

「ここで、もうたらたら話している暇は無いぞ！　さっさとこの洞窟から出るぞ！」

「……………ああ！　ちよつと！」

慌ててロロを追い掛けるカレンは、元気を取り戻したロロに何処か嬉しさを感じ、奥の穴に入つて行つたロロを駆け足で追う。

「待ってよ！」

「置いて行かねーよ！」

カレンを待っていたように、ゆっくりと歩いていたロロにカレンはすぐ追い付き、二人は隣り合わせでまた暗くて狭い通路を歩き続けた……………

待ち伏せ！……………のつまりが……………

……………そして、また暗闇の中を歩いて数十分、二人の目に白い光が暗い通路の先に見えた。

「あれは……………」

「また浄化石の光か……………」

二人は暗闇の先に輝く光は、浄化石だと視認し、その浄化石の光に誘われ、光の先に何が在るのか、確かめる為に前へと進む。

「！」

光の元にたどり着くと眩い光が、二人の目を一瞬くらまし、視界が正常に戻ると、二人の目に眩い光を放つ大量の浄化石が壁や地面に埋まっており、今までの空間より5倍くらいの広さの円状の空間に足を踏み入れていた。

「すげえ！ これ全部、浄化石か！」

「……………綺麗だね」

前に空間よりも比べ物にならない程の大量の浄化石を目に、驚愕する口と空間内を埋め尽くすほどの量の浄化石は、空間内を眩く照らし、宝石と思わせるそれぞれの綺麗な光は空間内を幻想的に美しく写し、カレンはその光景に目と心を奪われた。

「此処はさっきよりも広いな」

「うん、それに泉って言うのも二つ在るね」

この空間は前の空間よりも広いだけでなく、泉が壁の両方の端に円を描くように線状な形の泉が二つ存在していた。

「この量の浄化石はすごいが、此処は出口じゃないからな」

「此処も違うみたいだね」

期待していた訳じゃないが、早く洞窟から出て、盗賊たちから逃げたい口は、此処が出口である事を心の何処かで願っていたらしく、顔を少し沈め、軽く舌打ちをする口。一方隣に居るカレンは、口が浄化石の説明の時に泉から取り出した小さな浄化石をまだ手に

持っていたらしく、その手に在る小さい浄化石を今居る空間全体に埋まっている浄化石と見比べる。

「此処の浄化石は、さっきいた所よりずいぶん大きいね」

「言われてみればそうだな………って、お前まだそれ持っていたのか？」

声に釣られて、空間内の浄化石の大きさを改めて確認したロロは隣に居るカレンが前に居た空間で取った小さな浄化石を持っている事に気が付く。

「綺麗だから、持って来ちゃったんだ」

「持ってきてどうするんだよ！ 持っていたって役には立たないんだぞ！」

「そうかな？」

「………まあ、そんな気に入ったら、ずっと持っていれば良いんじゃないか？」

「じゃあ………そうするよ」

自分の宝物が出来たみたいに大事そうにズボンのポケットにしまい込みカレン。ロロは子供みたいな行爲をしたカレンを置いて、空間内の奥に前の空間同様、先に続いている通路と思わしき穴が在るという事を目視し、その穴に向かって足を進める。

「とりあえず、此処には用はねえ！ 先に進もうぜ！」

この場で長居している場合では無いので、ロロは一刻も洞窟から出たいが為にカレンの意見を聞かずに、奥に在る通路の穴に向かって足を進め………空間内の中心に差し掛かった時。

「おっと！ ここからは立ち入り禁止だ！」

「「！」」

不意に空間内にカレンとロロの声では無い声が響き、ロロは足を止める。

「この声は………」

聞き覚えを感じるカレン。その声はロロが向かおうとしている奥の穴から聞こえ、そして穴の中から人影が二人の目に映る。

「どうやら、ハン達をうまく撒いたようだな！」

穴の中に居た人影は、ゆっくりと歩きながら穴から出て、薄暗くて姿は良く見えなかったが、空間内に入って来て、辺りの広がる浄化石の光でその姿がハッキリと目で確認できた。

「運がいいな、クソガキ！」

「！　あなたは！？」

現れた相手はカレンがつい最近で見知った顔で、目が隠れるくらいのやたら髪の毛が長いその男は、カレンとコルトが『カムーシャ』に着く前に襲い掛かって来た盗賊の一人で、この『水底の洞窟』に入る前にカレンを待ち伏せしていたスキンヘッドの盗賊の仲間でもある。

「この間の借りを返しに来たぜ！」

ロン毛の男は腰に掛けてあった剣を抜き、空いた片手の手の平にポンポンと上から軽く叩いて歩きながら、ニヤリと笑い。それに続くかのように男の後ろから盗賊の仲間達がゾロゾロと奥の穴から出て来た。

「マジかよおい！　勘弁してくれよお！」

また不測の事態に顔が青ざめて、カレンの前まで後退りするロロ。それに追い打ちするように盗賊達は更に奥の穴の中からどんどん出て、数は一向に増えていき、見た限り洞窟の前で待ち伏せしていた盗賊達と同じくらいの数、50人は軽く超えていた。

「ケビー！　あいつが来たんだなあ~~~~~！」

出て来た盗賊達の中にロン毛とスキンヘッドの盗賊と同じ、『カムーシャ』の前で襲い掛かって来た盗賊の一人の大男の姿が在った。

「そうだぜラジリカ！　借りを返す時だぜ！」

「ああ~~~~~、でも~~~~~もう一人見慣れない奴が居るよ~~~~~」

相変わずなまった声で話す大男は、カレンの前に居るロロの存在を指摘する。

「そういえば、そうだな……………おい！　お前！　そいつの仲

間か!？」

大男に指摘され、視線をロロに移し、正体が気になったロン毛の盗賊はロロにカレンとの関係呼び掛ける。

「お、おれは……………」

「?」

口籠るロロはチラッとカレンを見て、何か決心したかのように大きく口を開く。

「俺はこいつとは何の関係もない赤の他人だ!! 決して仲間じゃない!!!」

大声で自分とカレンは全くの無関係だと何故か全く説得力を感じない大嘘をつくロロ。

「という訳で、君! 後は頑張れよ!!」

身体を回れ右をして、カレンの肩を軽く叩いて応援の言葉を贈り、来た道に戻るロロに、カレンは振り返って。

「そっちに戻ったら、あの盗賊の人達に捕まっちゃうよ?」

「あ……………」

来た道に戻れば、後ろからカレン達を追っている盗賊達に会ってしまふ事をカレンに指摘されて、はっと気付いたロロは、うっかりしていたと声を漏らす。

「そういえばそうだった!! 危ねえ危ねえ!」

「それに、僕達の来た道の一つは岩に塞がれて、水で溢れ返っているよね?」

「う……………そうだった……………」

カレンの無自覚で駄目だしを喰らって、追い詰められている感覚になるロロ。

「なんだよ、やっぱり仲間じゃねえか!」

「なかまなかま……………」

「ッ! し、しまった!」

盗賊達は話を聞いていたようで、話の内容によってカレンとロロが共に行動していた事を察したようだ。「そうと分かれば、容赦しね

え！ てめえら、やっちゃまえ！！！！」

ロン毛の盗賊の掛け声と共に他の盗賊達は、カレン達を円のように全方向で囲み、武器を取って構え、威圧を掛ける。

「来るよ！」

「ち、ち、ちくしょう！！！」

背中を合わせて、お互いそれぞれの武器を構え、カレンとロロは迎撃態勢を取った。

「この数で勝てると思うなよ！！ クソガキ共！！」

カレン達を囲んでいる盗賊達の外で、ロン毛の盗賊が叫んだ直後、突然、天地がひっくり返るように空間内が激しく揺らいた。

「おっ、な、何だ！？」

「ま、また地震か！？」

「ぬっ！」

その場に居た全員が突如起こった激しい揺れに戸惑う、しかし揺れは一瞬で終わり、空間内は落ち着きを取り戻したが、束の間また再び激しい揺れが起こる。

「な、何だってんだ、一体！？」

「じ、地震じゃ無いのか！？？」

揺れが起きたら、すぐに止まり、そしてまた揺れが起こる。そんな事が何回も繰り返され、カレン達は何が何だか分からず、混乱せざる負えなかった。

「（気を付けろ……………大きい何かが来る……………）」

「（えっ……………？）」

混乱の中、カレンの頭の中から声が聞こえた。

「い、今、声が！？」

「ああ！？ 何だって！？」

突然聞こえた謎の声に困惑するカレンは、ロロを呼び掛けるが、止まない揺れのせいでロロはカレンの声の全ては聞き取れなかった。

「！ お、おい、何かさっきより揺れが強くなってないか！！？」

地震と思われた揺れは、何回も繰り返されていく内に次第にその揺

れは強くなっていく一方で、揺れは一向に終わる事はなかった。

「これって、本当に地震なの!？」

「? どうゆう意味—————」

言葉の意味を問い掛ける前に、空間内の壁が突如、ピシッと嫌な音を発したと一緒にとても大きなヒビが入った。

「か、壁にヒビが!!」

「でやんす~~~~!!」

空間内を揺れは壁にヒビを入れ、更に揺れはますます激しさを増し、ヒビを次第に拡大していく。

「! この音は？」

「何だ、この音!？」

揺れの音の中で、不可思議な音が混じっている事に気付くカレンとロロ、その音はまるで壁を砕き割っているような鈍い音。

「あっ! か、壁が!!」

「く、崩れるぞ!!!」

壁はもう無数のヒビが出来、限界を達しようとしていた。

「(……………来るぞ!)」

「!」

「プルルルルルルルルルル!!!」

また聞こえた謎の声に、カレンは首を左右に振って、声の主を探そうとしたが、壁のヒビの奥からまた聞き覚えのある鳴き声が空間内に響く。

「これは!？」

この鳴き声にロロとカレンは気付かない訳がなかった、そして、ヒビが入っていた壁を爆発したかのように粉々に飛び散り、壁に埋まっていた浄化石も塵となって綺麗な白い光を放ちながら飛び散る。

「! あ、あれは？」

「……………あ」

砕け散った壁に巨大な穴が出来ていた、その穴に粉塵のせいで良く見えないが、とても大きな影が穴の中にそこに在った。その巨大な

影は穴の中から飛び出し、カレン達の少し離れた所に着地し、地面を揺るがす程の振動を出して、その姿を現す。

「「「「「!!!!!!」」」」」」

その巨大な影の正体は、前に行き止まりだと思った空間で出会った、あの白いウロコと触覚のような目、そして鋭いハサミを持ったあの時の魔物だった。しかし、前に会った奴よりも、比べ物にならない程の巨大さだった。

「な、な、何なんだよコイツ!!!!?」

「ちょ、超デカイよ~~~~~!!!!」

あまりの大きさとその巨大な身体から出る威圧感に、カレン達や盗賊達も戸惑う。しかしそんなカレン達の心情などお構い無しに、魔物はその巨大な体を震わせて……………

「プルルルルルルルル!!!!」

耳鳴りが起こる程の大きな鳴き声と共に、カレン達目掛けて突進した。

「「「「「!!!!!!」」」」」」

「な! は、早っ……………?!」

魔物はその大きな身体に似やわず、俊敏な動きでカレン達の所まで一気に近付き、大きな鋭いハサミで盗賊達を薙ぎ払った。

「「「「「ぐわっああああああ!!!!」」」」」」

「ひ、ひっ!!!」

カレン達を囲んでいた盗賊達の一角は、魔物の薙ぎ払いにあっけなく吹き飛ばされ、ロン毛の盗賊は、その圧倒的な力に恐怖を感じ、体を震わせた。

「い、今だ! 逃げるぞ!!!」

「う、うん!!!」

盗賊達は魔物の攻撃に手が負えず、混乱状態に陥り、その混乱に乗じてロロとカレンはその場から離れようとした。

「う……………うわああああああ!!!! に、逃げろ—————」

とても敵う相手ではないと、怖気づいた盗賊の一人が、叫び声を上げて、逃げだした。それに乗じて他の盗賊達も次々と逃げ出し、奥の穴の通路に走って行った。

「あ！ お前ら！！」

盗賊達が次々と魔物にやられ、そして追い打ちを掛けるかのように味方の逃亡に更に焦りを感じたロン毛の盗賊は、このままでは自分もやられると思い。

「くそ！ おいラジリカ！！ 俺達も逃げるぞ！！」

ロン毛の盗賊は自分も逃げる事に決め、仲間の大男の名前を叫びで体を振り向かれるが。

「あわわわわわわ………」

魔物のあまりの強さと迫力に、外見に似合わず怖気付いて腰を抜かしまった大男は、地面に尻もち付いたまま、震えながら呆然としていた。

「お……おい！ ラジリカ！！ 逃げろ！！！」

「あ、あ、足が………足が震えて、動けないよ……！」

腰だけじゃなく、足まで動けない大男にロン毛の盗賊は駆け寄って、助けようとしたが、魔物が殆どの盗賊達を蹴散らした後、次はロン毛の盗賊に目を付け。

「け、ケビー！！ 後ろ！！！」

「え………？」

ロン毛の盗賊が後ろを振り向くと、そこに大きなハサミを振り上げているあの巨大な魔物が居て、ロン毛の盗賊はその魔物の大きなハサミで薙ぎ払われる。

「ぐふうっ！！！」

「け………ケビー！！！」

大男の呼び掛けも虚しく、あっさりと魔物に吹き飛ばされたロン毛の盗賊は、まるで風船みたいにフワッと上空に舞い上がり、遠くまで飛ばされ、奥の穴の手前にたどり着いていたカレン達の前に降り落ちた。

「ぶふっ!!」

「うわぁ!!」

「なっ!!」

突然上から自分達の目の前に降って来たロン毛の盗賊に驚き、穴の手前で立ち止まるカレンとロロ。カレンはロン毛の盗賊が吹き飛ばされて来た方向に目を向けると、そこには、今度は大男に目を付けて、ゆっくりと近づく魔物と腰が抜けて動けない大男の姿が目飛び込んできた。

「!!」

「あっ!! おい!!」

瞬く間に駆け出したカレンを呼び止めるロロであったが、カレンの耳には届かず、カレンは魔物に襲われている大男を放っては置けず、魔物と大男の所に全速力で駆け寄った。

「プルルルルルルル!!」

「あ……あ……ああああ!!」

勢い良く降り上げられた鋭い大きなハサミに、大男は恐怖のあまり思わず目を瞑ってしまい、そして巨大なハサミは大男に向かって振り下ろされた……

巨大魔物戦

『カムーシャ』の住民たちの一軒家やよりも大きい、白い鱗を纏ったザリガニのような魔物は怯えて地面に伏せている盗賊の大男を叩き潰そうと容赦なくハサミを大男に叩きつけた。

「！！」

「ぐううう！！！」

だが、振り下ろされた巨大なハサミは獲物に届く寸前に駆けつけて来たカレンに受け止められ、カレンは魔物の攻撃から大男を守った。

「お、おまえ……………」

「ぐっ……………！！！」

魔物の攻撃を受け止めたカレンであったが、力押しでは魔物の方が圧倒的な上で、徐々に体が押されていき、カレンを支えている両足首が少しずつ屈んでいった。

「おい！！ 何やってんだよ！！ 俺達も逃げるんだよ！！」

魔物の力押しに必死に耐えているカレンの耳に口ロの声が響く。

「そんな化け物に勝てる訳無いだろ！！ 早く逃げろ！！！」

この状況でこの巨大な魔物に勝てるとは、思ってもみなければ、戦う事も考えてはいない口ロは一目散に逃げる事をカレンに必死に叫んで伝えたが、カレンは口ロの方に顔を向け、首を横に振る。

「でも…………… 此処で逃げたら、この人達は殺されちゃうよ！！」

魔物の攻撃で地面に横たわっている盗賊達に目を向けながら、今でも魔物の押し潰されそうな力に両足が折れそうなカレンは、声が大にして口ロに伝える。

「な、何を言って……………」

「僕は……………！！」

言葉を遮るようにカレンは口ロの言い分を跳ね除けて、心の底から湧き上がってくる気持ちを籠めて、口に出す。

「僕は……………命を守る！！！」

眼つきが変わって、目の前の命を見捨てないと叫んだカレンは、頭上に在る大剣で受け止めている魔物の巨大なハサミを受け流し、ハサミはカレンの体を横に通り過ぎ、地面を叩き割る。

「!!」

「せいやっ!!」

受け流して、すかさず攻撃に転じたカレンは自分の横を通り過ぎたハサミの腕に大剣を縦に振り下ろす。

「っ!？」

振り下ろされた大剣は魔物の腕に直撃するが、魔物の白いウロコは鉄のように硬くようで、剣はその硬いウロコに守れた腕に何のダメージも与えられず、弾き返される。

「プルルル!!!!」

「!!」

これはお返しだと、言わんばかりに魔物はもう一方の鋭く巨大なハサミを開いて、カレンを挟み込もうとした。

「よ、避けるー!ー!ー!ー!!」

「くっ!!」

ロロの叫びも虚しく、カレンは避けきれず、そのまま鋭いハサミに挟み込まれる。

「!!」

「あ……………!!」

しかし、カレンは体が挟み込まれる前に、自分より横幅が広い大剣を利用し、それを自分の体の前に剣背が前になるように構え、鋭いハサミの刃と刃の間に隙間を作り、何とか体を切断されずに済んだ。大男は魔物の攻撃を二回とも防いだカレンに驚く。

「ぐっ……………うう!!」

だが、カレンが魔物のハサミを剣で挟み止め、体を挟まれないようにする状態はそう長く続かないようで、ハサミの挟み込む力はとても強く、カレンはその力に耐えきらずにいた。

「プルルル……………!!」

剣の剣背を縦にすれば、体は挟み込まれてしまうし、剣を離してハサミから逃げても、武器を失ってしまうため、カレンは動く事が出来なかった。そして、カレンの剣を支えている力が限界に達しようとしていた。

「ああ、もう!!」

見てられなかった口は、カレンの元に駆け出し、走りながら弓を構えて、一本の矢に『マナ』を流し込み、矢の刃に赤いオーラが宿り、カレンを挟んでいるハサミに狙いを定めた。

「すいせい彗星!!」

放たれた赤いオーラを宿した矢は魔物のハサミの根元部分に浅く刺さり、矢は刺さった直後赤いオーラの『マナ』は赤くて眩しい光を放って爆発した。

「!!!!」

「うわっ!!」

空間内に響き渡る爆音、ハサミの先の方に挟まっていたカレンは、爆発した根元部分から少し離れたいたおかげで爆発に巻き込まれずに済み、更に爆発の衝撃で魔物はハサミの力を緩めてしまい、カレンを離してしまう。

「よし!!」

「プルルルルル!!」

ハサミから解放されたカレンであったが、魔物のハサミは爆発したのにただ焦げただけで、その焦げたハサミを振りまわす魔物の姿に、まだまだ元気に使えるように見えた。

「う、うそ!!?」

たったそれだけで済んだ事に驚く口を置いて、魔物は邪魔をされた事に頭が来たようで、今度は口口に目を付け、その巨大な体を口口の方に向け、口口と思われる三角形状に開いた穴が触覚のような眼の下に現れ。

「プーーーーーッ!!!」

三角形の口から、洪水でも起こったかのような怒涛の勢いの大量の

水が噴き出し、ロロに向かって一直線に伸びて突進する。

「ええっ!!」

予想外の攻撃だったが、距離があった御かげで、紙一重で避けられたロロであったが、放たれた大量の水は、行き止まりの壁を当たり、水は壁を削り取るように砕いて破壊し、その攻撃の破壊力の強さを物語っていた。

「はあああああ!!!」

魔物がロロに体を向けた為、カレンは魔物の背後を取る事ができ、その巨体な体の腰から上に飛び上がり、背中の部分と思われる所に十字斬りを放った。

「がっ……………!!」

しかし、カレンの攻撃は、あの硬くて白いウロコのせいでまた弾かれ、魔物の体はビクともせず、何も堪えてなかった。魔物はカレンが襲ってきた事には目も繰れず、引き続きにロロを狙い続けた。

「ぐっ!!」

何の成果も無く、虚しく着地したカレンの顔に焦りが浮かぶ。元々カレンの大剣のような形をした魔装器まそうきは、剣の形をしても剣のように刃はそれ程鋭く訳では無く、まるで剣に鞘を被せたように刃の部分は滑らかな円状で、斬るというより叩くという鈍器のような攻撃しか出来ない。

「この……………喰らえ!!」

「プルルル!!!」

魔物はカレンが襲ってきた事には目も繰れず、引き続きにロロを狙い続け、ロロも自分の有利な距離を保ちながら応戦する。

「十点矢じゅうてんや!!」

構えた弓に矢を十本揃え、その十本を器用に一斉に放つなどという離れ技を見せるロロ。

「!!」

全ての矢は魔物の体の至る所に刺さる。体が大きい為、当てるのはそう難しくは無かった様だか、刺さった矢は白いウロコに浅く刺さ

ただだけで、魔物には何のダメージも与える事はできなかった。

「プルルルル！」

「くそ！　なんて頑丈なんだよ！！」

攻撃がまったく効かない相手に口ロも焦りを強くしていく。そして、魔物は両手のハサミを高速回転をし始めた。

「？　何だ？」

「……………ドリル？」

ドリルと見抜いた口ロの応えるようにその両方のハサミを地面に当て、まるでドリルのように岩の地面をみるみると削っていき、空間内を強く揺らしながらあつという間に地面の中に潜っていった。

「消えた……………」

「ありかよ……………あんなの！」

地面の下に消えて行った魔物に啞然とする口ロとカレン。

「（どうやら……………あのドリルみたいな物で、この洞窟内を削って、道を作っていたみたいだな？）」

魔物が地面に作った大きな穴を見ながら、魔物の洞窟内での移動方法を憶測だが理解した口ロであったが、その直後に空間内がまた激しい揺れに襲われる。

「チッ！　またかよ！」

繰り返される揺れに苛立ちと焦りを抱きながら、魔物が何処から現れるのかを警戒しながら探す口ロにカレンは直感的に魔物が何処から来るのか予測がついた。

「に……………逃げて！！」

「え……………？」

気付いて叫び呼んだ時にはもう遅かった、口ロの地面の所だけ一番激しく揺れ、やがて地面にヒビが入り、何かを削り取るような音から聞こえた瞬間、口ロの足元の近くから巨大なハサミが地面から飛び出した。

「がっああああああ！！」

「っ！　口ロ！！！！」

ドリルみたい高速回転したハサミ自体には当たらなかったが、突然、
ロロの下から飛び出して来た魔物の巨大な体に吹き飛ばされ、受身
を取れずロロは地面に叩きつけられる。

「プルルルル……………」

「う……………うう……………」

当たり所が悪かったのか、すぐには立ち上がれずいたロロに、魔物
は倒れて身動きできないロロにゆっくりと大きな足音を起たせなが
ら近づいて行く。

「や、やめろ!!」

剣を腹の横に持ちながら構え、ロロを助ける為に魔物の方に刃を向
け、突進しようとしたカレンに。

「（取っ手の上の方にあるトリガーを押せ!）」

「えっ!？」

また聞こえた謎の声に驚くカレンにあったが、何故か言われた通り
に取っ手の上の方にあるというトリガーという物を急いで探して見
ると、剣格の前の辺りに四角形状に凸みみたいな部分があり、カレン
はそれを親指で押してみる。

「!」

凸部分を押すと、突如刃先の中央が別れ、その刃と刃の隙間からピ
ンク色の光の矢が飛び出す。

魔物「!!!」

光の矢は魔物の腹の横に直撃し、白いウロコは黒く濃く焦げ、魔物
は悲痛な悲鳴を叫ぶ。

「こ、これは……………?」

「び……………ビーム……………」

カレンの魔装器まそうきから出た光の矢をビームだと推測したロロはボソツ
と呟く。一方カレンは何が起こったか分からず困惑するが、それを
助けるかの如く、大剣の剣格部分に在る碧い珠から文字が浮かび出
て、カレンはそれに驚きつつその文字を読みが挙げる。

「BEAM・CANNON……………?」

首を傾げながら呟いたカレンは、この名前が何なのか、また聞こえた謎の声がどうか、そんな頭の中で思い浮かんだ疑問を後回しにして、今は戦う事が最優先だと割り切り、刃先を魔物に向き直し、凸部分みたいなトリガーを再び押す。

「プ、プルルルルルルルル！！！！」

トリガーを引く度に刃と刃の隙間から光の矢が目にも止まらぬ速さで発射され、魔物はその光の矢を喰らう度、身が焦げる程の熱さと痛烈な痛みが体を走り、悲鳴を上げ、足を後退させ口から離れて行き、ハサミで体を庇いながら怯んでいった。

「（効いている……………！）」

剣先から次々と発射させる光の矢に、魔物は耐える我慢の限界が来たように怒りが最頂点に達し、光の矢をハサミで薙ぎ払い。標的をカレンに変えて、三角形の口を開き。

「プーーーーー！！！！」

「！！！！」

三角形の口をカレンに向けて、口から大量の水を放射し始めた。

「くっ！！」

前から怒濤の勢いで迫り来る大量の水をカレンは慌てて避けるが、放射されている水は止む事は無く、魔物は追い掛けるように水をカレンの方へ走らせ、カレンも今度は横から迫り来る鉄砲水から逃げるために走り出した。

「ま……………まずい！！」

まだ地面に叩きつけられたダメージで動けない状態の口は、迫り来る大量の水から逃げているカレンを見て、このままではまずいと思いい、腰に掛けてある鞆に手を伸ばした。

変貌

ザリガニ的な魔物の口から大量に飛んで来る鉄砲水に当たらないよう、目を配りながらカレンは全力疾走で水との距離を伸ばしていた。
「！！！！」

このまま鉄砲水から逃げ続け、水が尽きるのを待とうと思っていたカレンであったが、視界にある物が飛び込んで来て、急に足を止めてしまう。

ラジリカ「あ……………お、おまえ……………」

そこには未だに体が竦んで、地面に尻もちを付いている大男がカレンの走る道の前に居て、カレンはこのまま進み続けたら彼が水に襲われてしまうと気付き、この先には進めないと足を動かさなくなってしまう、そして、魔物の放つ鉄砲水がすぐそこまで迫っていた。

「させるか！！」

その時、ロロが鞆から取り出したのは、ロロ特製お手軽爆弾で、その導火線に火を付けて、魔物の口に向けて放り投げた。

「！！」

爆弾は魔物の顔の近くで、爆発して空間内また爆音が響き渡り、魔物は突然が喰らった爆風のダメージの所為で、放射していた水の方針が大きくズレ、水はカレンの横を斜め上に上がって外れる。

思わぬ妨害で魔物は怯んで一旦、水の放射を止め、そのお陰でカレンは一時難を逃れた。

「（た……………助かった……………」

心の中で安堵の息を漏らすカレンは、すかさず辺りを見渡し、まだ地面に倒れて動かけない盗賊たちの存在を見て改め、このまま戦いが長引いたら彼らを巻き込んでしまうと悟る。

「このままじゃだめだ……………もっと決定的なダメージを与えないと！」

この戦いを速やかに終わらせるためにはあの巨大な魔物に倒すしか

ないと悟ったカレンに反応するか如く、突如カレンの魔装器まそうぎが眩い光を放った。

「こ、これは!？」

「な……………何だ？」

「プルルル!？」

「この光は……………!？」

その場に居た全員がカレンの魔装器まそうぎに目を向ける。眩い光を放ちながら大剣の剣格に付いている核コアであるストライクの背中が中央に別れて、その別れた隙間にピンク色に光る小さい珠が現れ、それと同時に刃の中央から刃の至る所に切れ目みたいな別れが複数も出始め、カレンは一体全体何が起こるのか全く見当が付かなかったが。

「(解放するのだ……………!)」

「(ま、また!?)」

再び不意に謎の声がカレンの頭の中で響く。

「(核コアの……………開いた背中の中のトリガーを……………押せ!)」

「(と、トリガーって……………き、君は……………)」

頭の中で響く謎の声はカレンの問いを答えもせずに淡々と語り続ける。

「(この魔装器まそうぎの……………『ゼオラル』のもう一つの姿を……………解き放て!)」

「(もう一つの姿……………?)」

やがて謎の声は、頭の中で途切れ、カレンは言われた通りにストライクの背中が別れて現れたトリガーと思わしきピンク色に輝く珠を、ゆっくりと指先に触れ、少し力を入れて珠を奥に押し込むように押した。

「P U R G E ・ O

N!

声と共に剣の刃の切れ目の部分が全て外れ飛び、カレンの大剣の姿をした魔装器まそうぎは、以前の姿とは大分異なり、少し小さくなったが形はスリムになり、刃の方は触れる物を全て斬り裂くと思える程鋭く

輝き、それと刃の部分だけがストライクと同じ山吹色に染まっていたが、剣背部分だけはライトピンクのままだった。

「コード・ゼオラ

ル」

姿がガラリと変わり終わった時に、また魔装器まそうぎから声が発し、その声の中にカレンの頭の中で聞こえた、あの謎の声が口にした言葉が入っていた。

「(ゼ・オ・ラ・ル……………?)」

その言葉に反応したカレンは、自分の魔装器まそうぎが変わったのに何か関係があるのかと思った。

「プルルルルル!!!」

「!」

そうこう考えている暇は無く、魔物は何が起こったかは分からないが、お構い無しに攻撃しようと雄叫びを挙げ、再び三角形の口をカレンに向ける。

「(これなら……………やれる!)」

剣の変貌に驚きはしたが、以前には無い刃の鋭さと手に伝わる力に何とも言えない確信を持ったカレンは、剣を強く握り締め、颯爽と魔物に向かって走り出す。

「プ……………ル……………!!!」

「お、おい! 避ける!!!」

躊躇なく真っ直ぐ突っ込んできたカレンを返り討ちするみたいに、魔物は三角形の口から大量の水は放射し、水は勢い良くカレンに向かって真っ直ぐ伸びて行った。

「っあああああああ!!!」

迫り来る大量の水を、正面から真っ直ぐ剣を振り下ろし、飲み込んだ物は全て破壊するような爆発的な勢いの水を一刀両断する。

「!!!」

大量の水をたった一振りで斬り裂き、カレンは走る勢いを衰える事は無く、そのまま魔物の懐に入り込む。

「プルルルルルル!!!」

懐に來たカレンを向かい討つ様に魔物はハサミを振り上げ、剛腕の腕でハサミを力任せに振り下ろし、カレンを叩き潰そうとした。

「はああああああ!!!」

振り下ろされた巨大なハサミにカレンは正面切って上空から来るハサミを打ち払うように大剣を振り上げる。

「!!!!」

巨大な鋭いハサミは、カレンの振り上げられた大剣にいとも簡単に両断され、魔物は目の前の出来ごとに驚愕し、体を硬直させてしまう。

「もらった!!!」

魔物に出来た隙を見逃さず、もっと深い懐に入り込んで、魔物の腹に目掛けて剣を力強く真っ直ぐ突き刺した。

「プルルルウ!!!!」

剣は魔物の腹に深く突き刺さり、赤い血が噴き出す。魔物は激痛が走って、苦しみながらも腹に剣が刺さったままの状態で、力を振り絞ってもう一本のハサミを高速回転させ、そのままカレンに勢い振り下ろした。

「!!」

頭上から来るドリルのような巨大なハサミに慌てる事も無くカレンは、剣に力を溜め込み、その力を爆発させるかのように一気に刃の外側に解き放つ。

「裂閃衝!!!!」

まるで爆発したかのように腹に刺さった剣先から強い衝撃波が炸裂し、魔物はその衝撃でその巨大な体を宙に浮かせ、後ろの壁まで吹き飛ぶ。

「!!!!!!」

吹き飛ばされた魔物は壁に激突し、そのまま重力に従ってゆっくりとその巨大な体を下に在る空間内を囲むようにある円状の泉に落ちる。

「はあ……………はあ……………」

魔物は大きな水しぶきと水柱を作って泉の中に落ちて行って、カレンはその様子を見届けるかのように呼吸を整えようとした。

「す……………すげえ……………！」

間近で見ていたロロは、あの巨大な魔物を捻じ伏せたカレンに驚きつつ歓声の声を上げる。

「あ……………大丈夫？　ロロ？」

魔物は動く様子は無く、もう安全だと思ったカレンは、まだ地面に横になっているロロを心配して駆け寄る。

「あ……………ああ、ありがとよ！」

手を差し伸べられ、カレンに礼を言いつつその手を掴んで起き上がるロロ。

「プルル……………！！！」

「！！！」

不意にあの巨大な魔物の鳴き声が聞こえ、カレンとロロは魔物が居る泉の方に振り向くと、そこには大きな水しぶきが上がり、数秒間の後、水しぶきが止むとそこにはもうあの魔物の姿は何処にも居なかった。

「あ、あいつ、あの状態でまだ動けるのか！？」

計り知れない魔物の生命力に驚きを隠せないロロ。

「でも、あの状態でもう戦う事はできないよ、多分逃げたんだよ」
傷の具合から、もう戦う力はもう無いと冷静に判断したカレンは、ロロに安心させるように解説をする。

「そうだな……………大丈夫か！」

妙に説得力のある発言に納得して安堵の顔を見せるロロに、カレンも笑顔で応える。

「す、すげえんだな、おまえ……………」

「ぬお！　お、お前居たのか！？」

「……………何の用？」

いつの間にかカレン達の所まで来ていた大男に驚くロロとは反対に

カレンは落ち着いた態度で大男に問い掛ける。

「も、もうオイラ達に戦う力は無えだ、だから今はお前たちを襲う事は無いから安心しろ！」

見ての通りこの空間内で、盗賊達の中でまともに動いていられるのはこの大男だけで、自分一人じゃどうにもならない事を察した大男はカレン達に自分達はどう戦う意思は無いと告げに来たようだ。

「そう……………分かった」

事情が分かったカレンは、大男の意思を承諾する。

「おーい！！ ケビー！ ラジリカ！ 獲物は捕まえたかー
ー！！！！？」

するとカレン達の来た穴の通路から、この『水底の洞窟』の出入り口の前で待ち伏せをしていたスキンヘッドの盗賊の声が空間内に届いて、ロロは顔をギョツとせさる。

「げ……………あいつらもう此処まで来たのかよ！」

「ロロ、走れる？」

「あ……………ああ！ 大丈夫だ！」

このまま此処に居たら、あのスキンヘッドの盗賊達に見つかるので、カレンとロロは急いで外に続いていると思われる奥の穴の通路に向かって走り出す。

「あっ！ 待ってくれ！！」

「えっ？」

走り出した直後に大男に呼び止められたカレンは、キョトンとした顔で振り向く。

「その……………助けてくれて、ありがとうなんだな……………」

大男のお札に意表を突かれたカレンであったが、すぐに顔に笑顔を浮かべ、手を振って返事をし、奥の穴の通路に再び駆け足で足を進めた……………



………また暗くて狭い通路に入り込んだカレンはそう
経たない内にロロの背中を発見する。

「あっ！ どうしたんだよ、遅かったじゃねえか！」

先に穴に入って進んでいたロロに追い付いたカレンに遅れて来た理由を尋ねる。

「お礼を言われたただだよ」

「？」

その問いに笑顔で返すカレンにロロはまったく理由が分からず首を傾ける。

「まあ、どうでもいいけどよ………それよりお前さ………」

…

「ん？」

急に改まった態度になったロロにカレンはどうしたのかと耳を傾ける。

「あのさ………怒ってないのか？」

「何が？」

「だから………その………お、お前を置いて逃げようとした事について怒ってないのか？」

「………そうなの？」

「「………」」

少しの沈黙が二人を支配し、カレンはいつも通りの緊張感の無い顔のまま、一方ロロはまた怪訝そうな顔に変わる。

「そうなのって………お前、あれは明らかにお前だけ置いて、俺だけ逃げようとしたじゃないか!？」

「え？ あれって君だけがにげようとしたの？」

「そうだよ！ だから、それについて怒ってるかどうか聞いてるんだよ!！」

若干、逆ギレ気味なってしまったロロは、一旦我に返り、咳払いをして話を戻そうとする。

「で、どうなんだ？ やっぱり………怒ってるか………？」

恐る恐る尋ねるロロにカレンは何も怒った様子は無く。

「別に怒ってないよ」

「……………本当か？」

「うん、僕は何も怒ってないよ」

「ど……………どうしてだよ？」

怒っていない理由をロロは勇気を振り絞って聞く。

「どうしてって、君には色々助けて貰ったからね」

「えっ……………？」

助けて貰ったという言葉にロロは、どういう意味なのか分からず、カレンにその言葉の意味を尋ねようとする。

「魔物と戦った時も、怪我を治してくれた時も、この洞窟の事や色々な事を教えてくれた事に助けて貰ったから」

尋ねる前にカレンが話を勝手に進め始め、ロロは意外そうに目を見開く

「助けて貰ったって……………まさかそんな事でかっ!？」

「うん、そうだよ」

「いやでも、それとあれとではちよつと話が……………」

「それにさ……………」

言葉の続きをカレンの言葉に口が止まるロロ。

「あの大きい魔物が出た時、逃げるぞって言いながら、僕を助けてくれたじゃない」

「あ、いや……………それは……………何て言うか……………」

あの巨大な魔物の戦いの時に、勝てる訳がないから逃げる事を優先しようと言っていたロロが、自分の身を省みず、カレンを助けた事にカレンはロロに恩を感じていた。ロロも自分の行動を今振り返って、照れ臭そうに頬を微かに赤くする。

「お、お前には……………俺様の力が必要だと思ったからだよ!」

「……………そうだろうね、本当に君の助けが無かったら……………僕はきつとあの魔物にやられていたと思うよ」

自分の気持ちを誤魔化すロロと素直に自分の気持ちを伝えられるカ

レン、この二人の会話のグタグタ感は今になっても変わってはいないようだ。

「けどよ……………」

「？」

ところがロロは何か言いたいそうに口をモゴモゴさせ、そして少し間が経って、口を再び開く。

「俺様も……………お前の助けが無かったら、きっとあの馬鹿デカイ魔物に食われていたと思うから……………」

「……………」

「だから……………ありがとうな、カレン！」

「……………うん！ こっちこそありがとう、ロロ！」

お互いやつと名前で呼び合う事になった二人に小さな繋がりが出来たと思える瞬間だった。

「「！」」

そしてこの洞窟内の通路を走って長い二人の目に、眩い太陽の光と出口と思われるシルエットが視界に入ってきた。

「おっ、出口だ！ 急ぐぞカレン！」

「あっ、待ってよ！ ロロ！」

走る速度を上げたロロに置いて行かれないようにカレンも速度を上げて一緒に、外の世界に続いている光が差し込む出口に走って行くのだった……………

全身全霊全力全開の空振り

………外は昼を過ぎてもう数時間が経ち、日も少し落ちて来た頃、カレンとロロは長くて暗い『水底の洞窟』をようやく脱け出したていた。

「うわっーーーー！ やっと出られたーーーー！！」

久しぶりに見るかのように外の風景と日差しに懐かしさを感じるロロ。

「うん！ 外の空気がおいしい！」

深呼吸をして外の空気を楽しむように吸いながら賛同するカレン。

「はぁ~~~~~………しんどかった………！！」

「本当………そうだね」

口から零れる疲労の溜息と本音とは裏腹に、此処に来るまで数々の障害に出くわした『水底の洞窟』の出口を振り返って見て、此処まで来た事にカレンとロロは何処か達成感のようなものを感じていた。

「だがしかし、此処まで来たら『レイチム』までもう少しだ！」

「確か軍用都市『レイチム』って言うんだよね？ 何処に在るの？」

「ああ、あそこに見えるのが『レイチム』だ！」

指差す方にカレンは目を向けると、少し遠いが丘の下を通り超えた先に木に覆われた山々の間に囲まれた細長い建物のような物が幾つもそこに立っていた。

「あのビルが見える所が、この大陸一番の軍事力を持つ軍用都市『レイチム』だ！」

「ビル？」

説明の中で大陸一番という言葉より、先にビルという単語に反応するカレン。

「まさか………ビルも知らないのか？」

「うん」

記録喪失である事を知らないロロはカレンの常識知らずに頭を悩ませる。

「ビルって言うのは、あのデッカイ縦長の建物の事だよ」

幾つも在るビルという細長い建物をそれぞれに指を指してカレンに教えるロロ。

「あれ全部が？」

「そうだよ、あそこは軍の活動範囲を広める為と補給や増援、兵器の研究や開発を効率よく行う為に作られた都市なんだ」

「軍？」

「……………軍って言うのは、国や市民を守る為に作られた組織の事だよ」

呆れながらもカレンに分かるように説明するロロにカレンはある疑問が浮かび上がり、その疑問を口に出す。

「そういえばロロは、これからどうするの？」

「ああ？ どうするって？」

急に話題を変えて来たカレンはロロにこの後どうするのかを尋ねた。

「だって、もう『水底の洞窟』を抜けられたんだから、もう僕と一緒に居る必要は無いでしょ？」

「あ…………ああ、そうだな」

思い出したかロロは、当初の洞窟を脱け出す目的を果たした事に対して、この後どうするのかを考え込むように頭を低くする。

「『カムーシャ』へ渡る為の大橋が直るまで『レイチウム』で待っているようかな？」

考えた結果、ロロは大橋が直るまで『レイチウム』に滞在する事に至った。

「じゃあ、『レイチウム』までは一緒だね？」

「まああ、そうなるな」

元々カレンは湖で会った少女にペンダントを届ける為に彼女が軍用都市『レイチウム』に向かったというので同じく『レイチウム』に用が出来たロロとは洞窟内と同じ、目的地まで同行するという形に

なった。

「それじゃあ、早速、行こうかカレン？」

「うん！」

二人は『レイチィム』に向かうために前の方にある丘の下に降りる為、木や茂みが生えていて下り坂になっている所に足を進めた……

……………



……………二人の歩いている道は昔、『水底の洞窟』を通っていた人達が使っていた道なのか、雑草が生えているがけもの道にみたいに先が木や茂みに邪魔されないように先に進めるようになっていた。

「しかし、あの馬鹿デカイ魔物に勝っちゃうなんてなあ……」

「？ どうしたの急に？」

不意に呟きだした口口にカレンは呟きの内容に首を傾ける。

「だってよ……絶対には勝てる訳が無いと思っていたあの化け物に倒しちゃったんだぜ！」

「でも最後は逃げてったよ？」

「まあ、そうだけだよ」

話の腰を折られそうになった口口は自然に話を戻そうとする。

「完全に倒すまでは行かなかったが、最後にあの魔物を捻じ伏せちゃうなんて……お前って本当に見掛けに寄らず、すごいんだな！」

普段からいつも緊張感の無いような顔している割には、『水底の洞窟』で遭遇したあの巨大な魔物を撃退したカレンの強さには驚きはしたが同時に尊敬に近い物を口口は感じていた。

「僕だけの力じゃない、口口の御かげでもあるよ……でも……でも最後はこれが姿を変えてくれた御かげで、あの魔物を追い払う事が出来たんだと思う」

自分の背負っている大剣の姿をしている魔装器まそうぎに視線を移すカレン。
この大剣があのだ大な魔物戦で今のように鋭い刃に成ってくれた御
かげで、魔物を撃退出来たのはその場に居た口口でも納得するもの
だった。

「魔装器か……いいなあ！ 俺様もそんな武器がほしいぜ！」
羨ましそうにカレンの魔装器まそうぎもとい大剣に見詰める口口。

「あっ………そういえば………」

何かを思い出したように口口は、視線をカレンに戻す。

「お前どうして、あの時にあの無駄にデカイ盗賊を助けたんだ？」
「えっ………？」

突然、話題を変えた口口はカレンに『水底の洞窟』で待ち伏せして
いた盗賊の一人の大男があのだ大な魔物に襲われそうになった所を
何故助けたのかを尋ねて来た。

「放って置けばいいのに、あそこまでして助けるか？ こっちがあ
の魔物に殺られるかもしれないなかったんだぜ？」

「………」

この言い分にカレンはその時の自分の心情を振り返ってみると。

「どうしてだろ………？ あのだジリカって言う人が襲われそうな
所を見た瞬間、体が勝手に動いたんだ………」

ラジリカと言うのは口口が言った、大男の盗賊の事である。

「体の奥底で、助ける！ って………そう言う声が聞こえて、そ
したらそのラジリカって言う人も倒れている盗賊の人達も助けなき
ゃ！ って………良く分からないけど」

今思い返して見たカレンは、自分でも何で助けたかは分からないよ
うで少し困った顔をする。

「う………ん………つまり………その………」

「要するにあれか？ 困った人を見て、放っては置けなかったって
事か？」

助け舟を出すようにカレンに助言を加える口口。

「多分………それだと思う………」

答えに困っていたカレンはロロの助言の御かげで答えの糸口を見つけ、ロロは予想が的中したかのように溜息を吐く。

「わざわざペンダントを届けるために此処まで来るわ、仮にも命を狙いに來た盜賊の命を助けるとは、とんだお人好しだな……………お前は」

「そうかな？」

「ああ……………それも、『ド』が付く程のな……………」

苦笑いをするロロに自分はそんなにお人好しかと思うカレンは足を止めずに二人は歩き続けた。そして二人がそうこう話している内に、下り坂をいつの間にか下り終え、丘の下まで辿り着いていた。

「下り終えたから、このまま真っ直ぐ行ったら『レイチィム』にたどり着くと思うぞ」

下り終えた先には、今でも人が使っているような道が続いており、ロロはその道を指してカレンに真っ直ぐ行けば目的地に着けると伝える。

「あと少しだ……………さっさと行くぞ！」

「ねえ、ロロ？」

最後の道のりだと気を高くして進もうとしたロロにカレンが呼び掛ける。

「あ？ どうした？」

呼び掛けられて、どうしたのかとカレンに顔を向けるロロ。

「君が帰らなかったら、イミナちゃん心配するんじゃないかな？」

確かに『カム―シャ』と『レイチィム』を行き来する橋が直るまで、『レイチィム』に滞在していたら、事情を知らないイミナが帰らない兄であるロロの事を心配するのではないかとカレンはそう思い浮かんで、ロロに聞いてみると。

「大丈夫！ 俺、一週間も家に帰らない事も有るからな！ たった数日くらいどってことねえ！！」

何故か自慢げに鼻の下を人差し指で擦りながら事情を話すロロ。それを聞いたカレンは。

「一週間も何をしてたの？」

一週間何をしていたのかという素朴な疑問をロロにぶつける。

「……………知りたいか？」

「うん……………知りたい」

少し興味が浮んだカレンは焦らすように勿体付けるロロに更に興味が湧く。

「実はな……………」

「実は……………」

「この大陸の海の支配者、巨大大タコと戦っていたのだ!!」

「……………」

その時、時間が止まったような音が響いた。

「小さな島を飲み込む程のとてつもなくデカイそのタコは、人々が怯え逃げる程の強さと凶暴さを持ち、誰もがその巨大なタコに手が負えなかった」

「……………」

「しかり~~~~し! 人々に助けを求める声に応えるように、このバンチョー・ロロが現れ、巨大大タコと真正面から決戦を挑み、そして激闘の末、一週間という期間を掛けてやっと倒す事が出来たのだ!!」

「……………」

話を盛り上げようと、ロロは声の音量を高くしたと共に身体を最大限に使って自分の激闘^{うそ}を表現し、大袈裟に話の内容の凄さをカレンに語り続ける。

「そんでもって、『カムーシャ』に帰った俺様は……………村の皆から英雄と称し、バンチョー・ロロと称えられて崇められ、尊敬と憧れの眼差しを向けるようになったのだ!」

「……………」

「(さあ、どうだ! こんだけ言ったら、後は何をすべきか……………おまえにはわかるよな!!)」

期待に満ちた眼で、心の中で何かを要求しているロロは、カレンに

ある行動を求めている。

「……………す」

「？」

ボソツと呟いたカレンの声が聞き取れなかったロロは、耳を立てて声を良く聞こえるようにする。

「す……………す……………」

「す？」

「凄い！！」

「……………はっ？」

予想外の発言に思わず耳を疑うロロ。

「凄いよロロ！ 一人でそんな大きな強いタコを倒しちゃうなんて！！」

「えっ！？ いや、あの……………その……………」

「洞窟で会った、あのデカイ魔物よりもっと大きいそのタコを倒すなんて、ロロって本当は凄いんだね！」

事もあるうかロロの作り話を本気で信じてしまったカレンは、ロロの言った通り、尊敬と憧れの眼差しでロロを見詰める。

「『カムーシャ』の皆からそんなに慕われているなんて、ロロは人氣者だね！！」

「ま……………まあ……………ははははっ」

ここまでマジマジと本気で信じて見詰められると今更、嘘だ！ っと言えなくなってしまうたロロは、自分に眼差しを向けるカレンを余所に心の中で。

「（何でそこで突っ込まないんだよ！ 普通は……………ハイ！ 嘘でしょそれ！！ とか、馬鹿じゃないの！？ とか、色々突っ込むだろ！！！！）」

本当は突っ込んで欲しくて、わざとデタラメな嘘を付いたのに、こちらの期待を裏切るかのように本気で信じたカレンにロロは、全身全霊、全力全開で空振ったような気持ちになった。

「……………これじゃあ、イミナと喧嘩して、一週間も家に帰れな

軍用都市『レイチィム』

……………そして、膨大な高原の中にある、野道を話しながら歩き続けた二人の目に、大きな影が映る。

「此処が……………『レイチィム』」

「何年振りだろうな……………此処に来るのは……………」

二人の眼の先には山と思えるような長くて大きい建物、ビルという物が聳え立っていた。

「何年振りって……………前にも来た事があるの？」

「ああ……………一回だけな……………」

何処か低い声でロロは何かに浸っているような感じで、カレンはそんな態度なロロに心配そうに声を掛ける。

「ロロ？」

声を掛けられ、ハッと目が覚めたように眼を見開くロロ。

「どうしたの？」

「いや……………何でもねえよ、さっさと入ろうぜ……………」

いつもとは何か違う感じがしたロロにカレンは不審に思うが、ロロは誤魔化すように『レイチィム』に入る為に足を進める。

「しかし……………やっぱり大きいよな……………」

「そうだね……………」

見上げて改めてビルの高さを確認するロロとカレンは、そのビルたちを囲むように円状の高くて厚い壁が都市全体を包み込んでおり、その壁に出入り口と思われる大きな門のような物が二人の目に入り、カレン達はその門の前で立ち止まる。

「これが、入口かな？」

「そうだよ……………あつ、そうだ、カレン！」

「？ 何？」

門の中に入る前に何かを思い出したかのようにカレンを呼び掛けるロロ。

「入る前にその剣……………魔装器まそうぎを閉まっとけ」

「えっ……………何で？」

突然カレンが背負っている、大剣の形をしている魔装器を元に戻せ
と言いつつ口を閉める。

「此処は民間人の武器の持ち込みは、厳しく規制されているんだ、
もしそんな物を背負って都市の中をうろついて、怪しく思われたら
軍の警備兵に事情聴取されるぞ！」

「事情聴取？」

門の左右の端に居る警備兵と口が呼ぶ人物二人に指を指して、怪
しく思われると事情聴取されるとカレンに注意するが、カレンは事
情聴取という意味が分からないようである。

「事情聴取って言うのは……………あれだ……………あの……………」
事情聴取という意味をカレンに説明しようとする口であったが、
詳しい事を言葉にして説明するのが難しいみたいで、どうも歯切れ
が悪い。

「と、とにかく！ 面倒な事は極力避けたいから、入る前にそれを
しまいでめ！」

「う……………うん、わかった」

よく分からないが血相を変えて警告する口を押され、カレンは背
中に背負っている魔装器を取り出し、剣格コア辺りに収まっている核で
あるストライクを取り外す。

「REGI・OUTレジアウト」

声と共にカレンの魔装器は剣先が消え、ガジェットだけが残り、
外して手に持っていたストライクが手から飛び離れ、カレンの肩に
止まる。

「よし……………それじゃあ中に入るか」

「うん」

ガジェットを腰に掛けて、カレンの準備が整った事を確認した口
は、門の先にある都市の中に入ろうと足を進め、カレンのその後
に付いて行く。

「……………」

「……………」

二人とも無言で都市の中に入って行き、同じく無言で門の端に居る警備兵の視線の感じながらも、カレンとロロは特に怪しい点が無い
ため声も掛けられずに何事も無く門を通過し、二人は無事に『レイ
チム』に入る事が出来た。

「怪しまれずに済んだね」

「当たり前だよ！ 俺達は何にも悪い事はしてねえし、怪しい所な
んて一切無いわ！」

まるで自分たちが怪しい人物だと思われるような発言したカレ
ンにロロは呆れながらも素早い突っ込みをかます。

「まああ……お前の服はここら辺じゃ、見掛けない格好だが……
…それ以外は何も怪しい所なんて、見当たらないぞ」

「そうなの？」

山吹色のジーンズに白いパーカーのような物に黒い線が縦と横に入
った上着を着ているカレンの服は、黒いズボンに茶色と緑のセータ
ーのような上着のロロとは対照的にかなりかけ離れてはいるが、外
見年齢はロロと大して変わらない為、この辺りでは見掛けない服装
だとしてもロロと一緒に居る御かげで特に気になる感じを起させな
い。

「もし怪しかったら、門の前で捕まってるだろ？」

的確な指摘にカレンは納得したかのように気付き、そんなカレンに
ロロはやれやれと呟く。

「そんな事により………先に進むぞ」

「あ……………うん」

再び足を進めたロロにカレンは隣に付いて、都市の中を探索し始め
た。

「うわあ……………すごい！ これ全部ビルって言う建物なの？」

「ああ、そうだ」

山のように高くて見上げるほどの長さではないが、都市中にあらゆ

る長さのビルが沢山在り、都市全体を覆い尽くしているようで。カレンは都市の中を並び立つビルの数とその風景に興味心が湧き、すかさずロロに尋ねる。

「この『レイチィム』って、どうしてこんなにビルが多いの？」

「それりゃあ、人が多く住む為に土地の幅を無駄に使わない為に、ああゆう縦長の建物が必要なんだよ」

人混みの中を掻い潜りながら、都市の中のビルの在り方を解説するロロは、カレンと共にこの広い都市の中心と思われる噴水の在る広場に行き着く。

「へえ〜〜……………なんだか『カムーシャ』とは全然違うね」

「比べんなよ、あそことは人口も設備もまったく次元が違う！」

都市と村ではまったく比較にはならないのに自分の村の『カムーシャ』と比較されて、ロロはやや怒った素振りでカレンに反論する。

「ご、ごめん……………『カムーシャ』ではこんなに人も居ないし、建物の大きさや数も全然違うから、何だか凄く意外で、つい……………」

この『レイチィム』に入ってからそうだが、この広場に来るまで、『カムーシャ』では比べ物にならない程の人だかりやビルという建物や設備に圧倒されたカレンは、無意識に比較してしまい、悪い事を言ってしまったと思って、ロロに謝罪する。

「まあ……………いいけどよ、俺の村が田舎だって事は、この大陸に住む皆が知っている事だから……………」

どうやら自分の村が田舎だって事は自覚しているようだが、それを口にするロロの顔は何だか何食わぬ表情をして、何処か不満そうだった。

「だがな……………お前の育った所がどんな所かは知らないが、魔物も魔法も知らない常識知らずのド田舎の場所よりは、断然マシだ！」

開き直ったようにカレンの育った所が、自分の所よりド田舎でカレンの常識知らずに繋がっていると勘違いしているロロは、勝ち誇っ

たかのように仁王立ちの姿勢になる。

「（あっ……………そういえば、僕は記憶が無いって事をまだ言っ
てなかったんだっけ……………）」

記憶喪失である事をまだロロに伝えていなかったと思い出したカレンは、このまま何も知らせないままにはしてはいけないと思って、告白しよう口を開く。

「ロロ……………僕は……………」

「そういえば、カレンはこの後どうするんだ？」

言う前に割って入るようにロロが、急に話を振る。

「どうするって……………何を？」

「決まってるだろ？ お前の探しているペンダントの持ち主をどう
するかって話だよ」

「えっ……………ああ、その事？」

何を言い出すのかと思いきや、ロロはカレンが探している金髪の少女の事が今になって気になり、興味心で行方をどうやって探るのかを聞いて来た。

「そうだね、やっぱり……………レイティム此処に住んでいる人や僕達みたいに
外から来た人たちに聞き回ろうと思っっているんだ」

探している人物が此処レイティムに来ているならば、この都市に居る人々に聞いて回れば、必ず誰かが見掛けていると悟ったカレンは、手当たり次第に尋ねようと考えていた。

「成る程な……………でもカレン、そんなチマチマした方法より、宿
屋で情報収集した方がいいぞ？」

提案を出すようにカレンにアドバイスを贈るロロ。

「宿屋？……………何で？」

何故宿屋なのかと疑問に思い、聞き返すカレン。

「宿屋では、色んな所から来た外の連中が泊まりに来る場所だ、もしかしたらお前の探しているその女が泊まっているかもしれないぞ
！」

「本当！？」

この発言にカレンの眼に希望の光が宿り、ロロのアドバイスを一言も聞き逃さないように耳を傾ける。

「例えその女が宿屋に泊まって居なくても、宿屋には色んな情報が入って来る！ 情報収集には売って付けの場所だ！」

記憶喪失で世間にも常識の疎い今のカレンにとっては、少女の行方の情報が欲しい状況で、この情報はとても嬉しい物であった。

「宿屋か……………ロロ！ レイタイム 此処に在る、その宿屋は一体何処に在るの！？」

「宿屋だったら、俺も泊まりに行こうと思っていた所だからな！ 付いて来いよ！」

「うん！」

自分も宿屋に泊まるついでにカレンも案内してやろうと思ったロロは、カレンを引きつれて、宿屋が在る場所に向かった……………

……………

しつこい盗賊根性

……この『レイチム』に入る前にロロが『前にも来た事がある』と言っていた事が有るだけに、とてつもなく広い都市の入れ乱れた道を宿屋に着くまでに一回も道に迷わず、宿屋の前に辿り着いた。

「大きい……これが宿屋なの？」

「ああ、この『レイチム』で一番デカイ宿屋だ」

宿屋を見上げるカレンとロロ、この宿屋は他のビルと同じ高さであるが横幅は他のビルよりも断然広く、まるで巨大な壁のように圧倒的な存在感を露わしていた。

「此処に彼女が居るのかな？」

「さあな………入ってみねえと、分からねえよ！」

そう言っ、宿屋に向かって歩き出すロロ、カレンはその後に付いて行くと、ロロは宿屋の壁に埋まっているように見える宿屋の中がハッキリと見える透明なガラスに近付き、その透明な壁はロロ達を招き入れるように中央から別れて開き、入口を作る。

「わっ！ 勝手に開いた!？」

「驚くなよ………自動ドアだよ」

「自動………ドア？」

透明なガラスが勝手に開いて入口が出来た事に驚くカレンは、呆れた表情で自動ドアだと呟いたロロに首を傾げる。

「この勝手に開く、ガラスのドアの事だよ」

「どうして、勝手に開くの？」

「それは、分からん」

何故勝手に開くのか疑問に思っ、カレンはロロに尋ねるが、ロロはカレンの質問を分からないと答え、一蹴する。

「こればかりは、俺様でも分からん！ だがこの自動ドアが便利な物って事だけは分かる！ こんな物、俺様の村には無いからな」

「そうか……………」

残念そうに顔を暗くするカレンに口口は溜息を吐く。

「……………てゆーかお前の知りたい事はこんな事じゃないだろ！ さつさと中に入って来い！」

喝を入れるように自動ドアの前で立ち止まっているカレンに早く入って来るように呼び掛ける口口。

「う、うん」

口口から叱られたように早く入れと要請されて、カレンは急いで宿屋の中に入って行った。

「でも、中も『カムーシャ』の宿屋とは大違いだね」

宿屋の中は、木製の壁では無く、全て大理石で出来ていて、カレンにはこの宿屋の壁がどれだけすごいのかは分からないが、ピカピカに磨いたように輝いている大理石に見ただけで『カムーシャ』とでは比べ物にならない程の豪華さを感じた。

「だから、比べなつうの！ ……………それよりほら！ あそこのカウンターに居る定員にお前が聞きたい事を聞いてみたらどうだ？」

また比較されて、反射的に突っ込んだ口口はカレンを手引きするように指を指した先に居る、カウンターで受け付けしている定員に情報聞き込みしないのかと忠告する。

「あつ、そうだね！ じゃあ聴きに行くよ！」

言われた通りにカウンターに居る定員の所まで走っていくカレン、口口は走って行くカレンの背中を見送りながら、宿屋のフロアの中央辺りで待つ事にした。

「すいません！ 此処で長い金髪の女の子が泊まりに来ていませんか？ 泊まって無かったら何処かで見掛たりしませんでしたか？」
カウンターの前に辿り着いたカレンは、定員にあのペンダントを落とした金髪の少女の事を尋ねる。

「長い金髪の女の子ですか？ 当店では毎日100人以上のお客様がお越しになっていますから、金髪の女の子というだけでは、どち

ら様かはわかりませんねえ……………」

大きい宿屋だけにあって、泊まりに来る客も大勢でその中から金髪の女の子という情報だけでは、この宿屋に何人も居るらしく、探し出すのは難しいと定員は困った表情で答える。

「所でお客さまはそのお方に、どのようなご用事がありますか？」
顔を窺うように定員はカレンにその少女にどんな用件があるのかを尋ね返して来た。

「このペンダントを落として行っただけです！　だからこれをお届ける為を探しているんです」

胸ポケットの閉まっていたペンダントを取り出し、定員に見せるカレン。

「ペンダントですか……………」

目の前に突き付けられたペンダントを調べるように眺める定員は、顎に手を当て、少し考える表情を見せる。

「分かりました……………事務所に戻って、泊まっているお客様にご確認を取らせますので、少々お待ちくださいませ……………」

そう言ってカウンターの奥に在る扉の向こうに定員は入って行って、カレンは定員が戻るまで待つ事にした。一方ロロはカレンが聴き終わるのを待っていて、暇つぶしに宿屋の中を眺めていると、チラッと自動ドアである透明なガラスが視界に入る。

「！！」

何かを見つけたロロは態度が一変して表情が慌ただしくなり、慌ててカレンの元まで走り、今でも定員が戻るのを待っているカレンの肩を掴み、自分の方に引き寄せるように引っ張る。

「わっ！　な、何をするのロロ！？」

「いいから、こっち来い！！」

言葉に耳を貸さずに問答無用でカレンを引っ張って連れて行くロロは、カウンターから離れた上の階に行く為の階段の近くに在る壁に身を隠し、壁から顔を覗かして透明なガラスの自動ドアの方に目を向ける。

「どうしたの？」

「お前も見えてみる」

険しい表情で自動ドアの方を見詰める口口にカレンも壁から顔を覗かして目を凝らして自動ドアの方に目を向ける。

「！ あれは！」

透明なガラス越しに見える自動ドアの先には、『水底の洞窟』で待ち伏せをしていたあのスキンヘッドとロン毛と大男とその他の盗賊たちがそこに居た。

「確かこの辺りに居るって言う情報だが……………くそっ！ あ
のボウズに二人に何てぞまだ！！」

不愉快そうに怒った表情を見せるスキンヘッドの盗賊はどうやらカレン達を追って来たようだ。

「都市って言うだけあって、此処は本当に広いからな……………た
ったガキ二人だけを探すってのは、いくら何でも難しいんじゃない
か？」

「お、オイラもそう思うよう……」

怒りを鎮めさせるようにロン毛の盗賊はスキンヘッドの盗賊に人口が多い上に都市面積も広いこの『レイチム』で、カレン達を探しだすのは無理なのではないかと大男も一緒になって意見をする。

「何か話しているみたいだね？」

「あ、ああ……………しかもあいつ等、自分たちが盗賊だって事を隠す為に旅人のマントを着て、正体を隠してやがる！」

階段の近くに在る壁から顔を覗かして、透明なガラスの自動ドア越しに見える宿屋の前に居る盗賊達を見張っているカレン達は距離と障害物がある為、話し声を聞き取る事も出来ず、しかも盗賊達は旅人のマントを着て、盗賊だという事を隠していた。

「バカ野郎！ このままあのボウズ達を取り逃せば、俺達の名が廃るってもんだ！」

怒鳴り付けるように、スキンヘッドの盗賊は仲間の意見に耳を貸さずに跳ね除けて、カレン達の搜索を諦めようとはしなかった。

「おい、お前ら！ 宿屋の中に入って、先に入って搜索している仲間と合流して、あのボウズ共を探しに行つてこい！」

スキンヘッドの盗賊は一緒に連れて来た、他の盗賊達に命令をする。ハン「いいか！ もしボウズ共を見つけたら、俺達と他の仲間にも居場所を無線で連絡して教えるんだぞ！ わかったな！」

盗賊達「おう！！」

指示を受けた盗賊は、5、6人で宿屋の中を颯爽と入って来る。

「や、やべっ！ 上に逃げるぞ！！」

「わかった！」

何時までも此処に居たら、見つかるのは時間の問題だと悟ったロロは、カレンと一緒に上に昇る階段で上の階に足を運んだ。

「お待たせさしました、お客様……………」

すると確認を終えて、カウンターに戻って来た定員は、カレンが居ない事に気付く。

「……………お客様？」

辺りを見渡す定員だったが、何処を探してもカレンの姿を見つけない事は出来なかった。そして、今階段を昇っているカレンは……………

「どうして、此処が分かったんだろ？」

定員のことなど忘れ、階段を昇りながらカレンは何故、盗賊達は自分たちの居場所を知っていたのかを疑問に思い、ロロに聞いてみた。「この大陸には盗賊が沢山居る！ 大陸のあっちこっちに自分達の隠れ家が無数にあるって言う噂だ！」

昇りながら尋ねて来たカレンにロロも昇りながら答える。

「多分この『レイチム』にも奴等の隠れ家が在って、そこに居る仲間と連絡を取って、その仲間へ俺達を搜索させて、居場所を突き止めたんだろ！」

「……………成る程！」

何となくだが理解したカレンは、ロロと共に上の階に進み続け、6階辺りで足を止め、昇るのを中止し、階段から出て広くて長い通路

に出る。

「とりあえず……………此処の階で、隠れられそうな所を探そうぜ……………」

「……………うん」

急いで階段を昇っていた為、少しの疲れを感じた二人であったが、そんな事を言っている場合ではなく、盗賊達の目から逃れる為にこの階（6階）で身を隠そうとしていた。

「何処か身を隠せそうな場所は……………」

辺りを見渡す口、この宿屋は外見もデカイだけあって、中身を広く、カレン達が今居る階段を出て直ぐの広く長い通路は左右の壁に部屋と思われるドアが縦並びに沢山在った。

「部屋が良いじゃないかな？」

「まあ……………妥当な線だな」

二人は部屋の中に隠れようと思い、足を通路へ運ぶ。

「どの部屋に隠れる？」

「う……………ん、そうだな……………」

隠れようと思えば幾らでも隠れる場所は在るが、口は歩きながらどの部屋にしようかとそんなどうでもいい事について悩んでいた。

「……………」

そんな事を悩んでいると数十歩先の通路の曲がり道から、男4人組の姿が現れて、カレンと口はその男達の姿が視界に飛び込んで来て、つい足を止めてしまう。

「……………」

同じくカレン達が視界に飛び込んできて、足を止めた男達であったが、その直後何故かカレンと口を調べるような目付きで、ジロジロと見詰めだした。

「……………グリーンライトの髪と獣人のガキ……………情報と一致するな……………」

小さい声でボソボソと話しながらカレン達に目を離さない男たちに

カレンとロロは不穏な空気を感じた。

「ロロ……………あれって……………」

「ま、まさか……………」

男達の不自然な行動に嫌な予感するカレン達、それを裏付けるかのように男達の服装は追い掛けて来た盗賊達を同じ旅人のマント着ていて、それとその盗賊達と同じ雰囲気を感じ、顔付きも何処か似たような物だった。

「……………」

「……………」

お互いは両者の放つ雰囲気を感じ取り、沈黙して見詰め合い、長いようで短い不穏な空気続き、お互い相手は何者であるかを悟り、カレン達は見詰め合いの中、足を一步下がらせ……………
そして。

「逃げるぞ!!」

「うん!!」

勢い良く振り向き、全力で走りだし、カレンとロロは昇って来た階段に戻って、上の階に逃げ出す。「あ……………に、逃げたぞ!!」

追ええ!!」

正体が見破られた男達は逃げだしたカレン達を追い掛ける。どうやら男達の正体は盗賊のようだった。

「聞こえるか、ハン! 獲物と思われる二人のガキを宿屋『カルテル』で発見した! 今、二人が逃げ出して、俺達が追い掛けている所だ!!」

追い掛けている盗賊の一人が、懷から小さな箱のような物を取り出し、それに向かって、誰かに話しかけるように言葉を発した。そして一方、スキンヘッドの盗賊達方では……………



……………今でも宿屋の前で、他人の視線など気にせず立ち尽

くしていた。

「そうか、やっぱり此处に居たか!!」

スキンヘッドの盗賊も小さな箱のような物に向かって話し掛け、まるで誰かと話しているようだった。

「そのまま追い掛けて、とっ捕まえてこっちに連れ出して来い! 絶対に逃すんじゃないぞ!!」

「ああ、分かってる!」

その小さい箱のような物から、カレン達を追い掛けて同じ箱を持って、箱に向かって話し掛けている盗賊の一人の声が聞こえる、どうやらこの箱のような物は同じ物を持っている者と遠くからでも話が出来るようだ。そして、その声が間もなく途切れる。

「よし! 追い詰めたぞ、ボウズ共!」

話が終わったようで、スキンヘッドの盗賊は箱を服の内側に戻す。

「で、でもよ……………ハン……………」

機嫌が上がったスキンヘッドの盗賊とは違い、ロン毛の盗賊は心配そうに尋ねる。

「追い詰めたって、どうなるんだよ? あのガキはラジリカの話によれば、大人数だった俺達でも手に負えなかった、あの化け物を倒すくらい強いんだぜ?」

前に『水底の洞窟』でカレン達を待ち伏せていたロン毛の盗賊達であつたが、偶然にも巨大魔物に遭遇し襲われ、盗賊達では手に負えない程の凶暴さと強さに恐怖を覚え、震え上がる程だった。

「俺達が束になつても、勝てる相手じゃあねえよ!」

「うんうん!」

実際ロン毛の盗賊は巨大な魔物の攻撃で気絶し、残った大男は襲われそうな所をカレンに助けて貰い、戦いの一部始終を見ていた為、カレンが巨大な魔物を倒すまでには行かなかったが、撃退したので、とてもそんな相手には勝てないと思い、二人は意見を述べる。

「心配するな……………秘策がある!」

しかし、二人の意見とは裏腹にスキンヘッドの盗賊は秘策があると

述べ、歪んだ笑みを浮かべる。

「あのボウズがその化け物みたいな魔物を倒すくらい力を持っているなら、俺達もその魔物を倒せるくらいのを手に入れればいい！」

「え……………いや……………でも、そんなの一体どうやって手に入れるんだ？」

答えの意味が分からないロン毛の盗賊が答えの意味を尋ねると、スキンヘッドの盗賊は都市のある場所に顔を向ける。

「忘れたか？　俺達は盗賊だ、欲しい物は手に入れる……………そうだろう？」

悪巧みを考えているその微笑んだ顔は、この軍用都市『レイチウム』に在る、ある軍の兵器保管倉庫を見詰めていた……………

銀髪の少女と金髪の……

………一方カレン達は通路でバツタリ会った男達が盗賊だという事がわかり、おまけに自分達が目標の獲物である事がバレてしまい、今、その盗賊達から逃げる為に更にもっと上の階に逃げ込んでいた。

「上の階に行ったぞ！ 逃がすな！！」

下の階段から、カレン達を追い掛けて来た盗賊達の声が響く、カレン達は盗賊達から逃げようと上の階の長くて広い通路を全速力で走っていた。

「どうするの、ロロ？」

「と、とにかく！ こうなっちゃったら、もう四の五の言ってもらえねえ！」

走りながら対策を練るカレンとロロ。

「いいか？ 1、2の3！ って言ったらお互いそれぞれ違う反対同士の部屋に飛び込むんだ！」

「反対同士のそれぞれ違う部屋？ どうして？」

お互いに別々の部屋に逃げ込む事に疑問を感じたカレンはその理由を尋ねる。

「こうゆう時、二人一遍に捕まったら、助かる術が無い！ もしお前か俺のどちらかが捕まった時に、捕まっていない方が捕まった方を助けに行けるからだ！」

例えばどちらかが捕まっても、捕まっていない方が助けに行ける、もしくは誰かに助けを呼ぶ事が出来るからと、ロロは振り絞った知恵でこれが最善策とカレンに説明した。

「成る程………わかった！」

「よし！ じゃあ早速行くぞ！ 1、2の………」

理由を理解したカレンは、ロロと一緒に走りながら部屋に飛び込むタイミングを計って、指示通りのカウントダウンが始まり、最後の

合図を心の中で待っていた。そして。

「3!!!!」

「!!」

最後の合図が出され、左右に在る部屋のドアにお互いそれぞれに体当たりをする。タイミング係のロロが一番早くドアに体当たりして、その部屋に入り込み、一方カレンは一步遅かったが、ロロより奥の反対側のドアに体当たりして無事に部屋に入り込んだ。

「ふう……………ん？」

何事も無く部屋の中に入り込めたと思ったカレンであったが、今カレンが居るリビングと思われる所に人の気配を感じ、その気配がする方に目を向けると……………

「……………」

そこには、風呂上がりだったのか、バスタオルを体に巻いて、小さなタオルで頭を拭いている、潤いた銀髪の少女が居た。

「……………」

まさか部屋の中に人が居るとは思ひもしなかったカレンは、まるで見つかったかのように体が硬直してしまい、少女のバスタオル姿に思わず啞然とする。

「!!」

突然の不法侵入と思ってしまう程の訪問に、少女も少し啞然としたが、素早く我を取り戻し、タオルを投げ飛ばして近くの低い棚の上に置いてあった、手と同じ位の大きさの銃を取り出す。

「動かないで!!」

「!!」

眼つきが鋭く変わって、取り出した銃をカレンに一瞬と思えるくらいの速さで向け、撃つ構えを取る少女。

「あ……………」

そして、少女が銃をカレンに向けた瞬間、体に巻き付けていたバスタオルが勢い良く銃を構えた所為で、外れてしまい、重力に従ってゆっくりと落ちて行った。

「……………」

「……………」

全身大半を隠していた一枚肌のバスタオルが取れてしまって、少女は文字通り、全裸になってしまい、カレンはモロ、少女のスラックとした細くて綺麗な手足とたわわに実った二つの果実を宿した豊満な裸体を直視してしまい、つい見惚れてしまうが直ぐに顔を背けた。一方少女は自分が全裸になっても、男のカレンに見られても、まったく動じず、頬も赤く染まらず無表情のまま、銃をカレンに向けて構え続けた。

「両手を上げて、両膝を床に着いて……………」

目を鋭くしたまま声を尖らせ、冷静な態度でカレンに自分の指示を要請させる少女。カレンは少女の言われた通りに無言のまま両手を挙げ、両膝を床に付けた。カレンはこの後どうなるのか今はそんな気持ちで一杯だった……………一方ロロの方では。

「（無事に入り込めたな……………カレンの方も多分大丈夫だろう）」

ドアを背後して部屋のドアを閉め、自分とカレンが何事も無く入り込めたと思い込んだロロは部屋のリビングに足を運ぶ。

「さて……………問題はその後……………」

溜息を吐いて、次はどうするべきか口に出して考えようとしたロロであったが、リビングの奥の方から扉を開けたような物音が聞こえた。

「（！ や、やべ！ だ、誰かいるのか！？）」

物音に驚いたロロは部屋の中に誰か居るのかと警戒する、物音がする方に目を向けると『バスルーム』と書かれたドアが在り、その扉がゆっくり開き始めた。

「……………」

生唾を飲んで、誰が出てくるのか胸の鼓動が昂る中、その扉から、長くて綺麗な金髪をした人物がバスタオルを巻いて出て来た。

「（ま……………まさか……………！？）」

湯気が舞って良く姿が見えないが、ロロはバスルームから出て来た人物がカレンの探している長くて綺麗な金髪の少女かと心の中でそう思ってしまう。だが。

「あら？ ボウヤ、何の用かしら？」

「……………」

出て来たのはバスタオルを身体に巻いた長くて綺麗な金髪と、ムキムキと筋肉が膨れ上がった肉体や体毛が濃いのが特徴の、唇に真っ赤な口紅をした中年の男性で、その姿を見た途端、ロロは体が真っ白く硬直し、顔に生気を無くし、開いた口が塞がらない長い唖然を体験した……………



……………そして、数分の時が流れ、ロロは部屋に居た、金髪の男性に事情を話し、事情を理解してくれた男性は、快くロロを部屋に匿ってくれる事になった。

「エライ目にあったわね……ボウヤ、私はクレオ・トッピー、クレオって呼んだね♪」

「ろ……………ロロ・グライヴィーです……………」

着替えが終えたクレオという金髪の男性は如何にも、一見筋肉質で逞しい体をしている背の高い巨漢に見えるが、体をクネクネさせて、裏声のような高い声を出し、まったく普通の男性としても捉える事が出来ないロロであった。

「（部屋に匿ってくれたのは嬉しいけど……………何故か身の危険を感じる！）」

騒がれる事も無く、部屋に匿ってくれたクレオに自身も自己紹介するロロであったが、相手の外見には全く当て嵌まらないクレオの態度とオカマ口調に、引き気味というか完全に引いているロロは相手クレオの顔から目を背けていた。

「でも…………盗賊に追われている理由は分かったけど、ロロちゃ

んともう一人のボウヤは何で此処レイチウムに来たの……？」

もう馴れ馴れしく人をちゃん付けで呼んで来るクレオは、興味本位なのかロロとカレンが此処レイチウムに来た理由を尋ねて来た。

「お……俺は『カム―シャ』に向かう為の大橋が直るまで、この宿屋に泊まりに來ただけで………あと連れは、此処に來たと思う、金髪の女の子を探しに來たんだ」

連れと言うのはカレンの事を指しているらしく、ロロは目を背けながらも自分達の目的を素直に、クレオに話す。

「金髪の女の子？ どうゆう女の子なの？」

金髪の女の子という言葉に反応したクレオは、首を傾げて聞き返す。ロロは特に話してはいけない理由も無く、匿ってくれた恩もあり、これも素直に話そうとする。

「えっと………長くて綺麗な金髪に、蒼く透き通った瞳で、それに見合った整った顔の美少女っていう外見だったような………？」

その少女の特徴を妹のイミナの証言を思い出しながら、口に出すロロ。

「それだけ？ 他にはもっと特徴は無いの？」

「あと他には………」

今の話した特徴では掴めないらしく、クレオはもっと他の特徴を尋ね、ロロもイミナが言っていた証言を更に思い出す。

「メイド服とドレスを2で割ったような見慣れない服を着ていて、あとは………」

思い出そうとロロは頭の片隅にうろ覚えな記憶、今日の朝、妹のイミナとの会話を掘り起こそうとした………



………今日の昼になる前のロロの記憶。

「はい！ お兄ちゃん、お店の差し入れだよ！」

お店の休み時間を利用して、家に戻って来たイミナは自分の働いている食糧屋の雇い主からいつも良く働いているご褒美という理由で、お店の食糧を少しであるが有り難く分けて貰い、ようやく起きた兄の口口の為に、貰った食糧を朝食として差出す。

「ああ……………ありがとうな……………イミナ……………」

昨日徹夜でお手製爆弾を作っていた口口は、眠たそうでもわざわざ朝食を持って来たイミナの為に重い腰を上げて欠伸を掻きながら家の食卓テーブルの所まで起きて歩いて来た。

「あっ、お兄ちゃん聞いて！ 今日朝早くお店に、外から来たお客さんが訪ねて来たんだよ！」

「へえ……………そいつは珍しいな……………」

『カムーシャ』では余所の所から来る人は珍しく、イミナは今日朝早く出会った人物について口口に話し、口口はイミナが出会ったその人物について少し興味が湧き、食卓テーブルの椅子に座って、眠たそうだが妹の話を聞きを聞く。

「その人、すごく綺麗な人でね！ 同じ女の私でも惚れ惚れしちゃうくらい綺麗な女の人なんだ！」

「ほう……………それで？」

「それで、長くて綺麗な金髪で、蒼くて透き通った様な瞳で、顔はそれに以上に綺麗なお肌で、とっても美しく可愛い顔なの！！」
少し興奮しているのか、特徴の表現が大袈裟に感じる口口であったが、特に気にする事も指摘する事も無く、妹の話を淡々と聞き続ける。

「あと、見た事の無い服を着ていたわ……………まるでメイド服とドレスを2で割ったような青と白の服を……………」

「なんだそれ？」

我が妹ながらよく分からない服の表現をして、突っ込みを入れる口口。

「あっ！ あと確か……………頭に……………」

この後のイミナの発言に口口はある事を思い出す……………



……………そして、掘り起こされた記憶にある事を思い出したロロは、それを腹から昇って口に吐き出すようにクレオに話す。「確か……………右耳の上の辺りに碧い円状の髪留めを付けていったって……………」

この最後の特徴が決め手だったのか、これに反応したクレオは何か心当たりがあるようなかのように思い出して、ハッと目を見開く。

「そういう子……………私、見掛けたわよ！」

「えっ!？」

やっと思い出した特徴に、応えるかのように見覚えがあるとクレオはロロに告白する。

「ど、何処で見掛けたんですか？」

恐る恐る低姿勢でロロはクレオにその心当たりがある人物を尋ねる。「あれは……………今日の朝が来て、大分経った後の事だったかしら、この『レイチム』に入る為の門の出入り口で入れ替わるように会ったわ……………」

遠い過去を思い出すように目を細くして遠くを目詰めるクレオ。

「私よりも綺麗な金髪だったから、よく覚えているわ……………確かに見た事の無い、メイド服のようなドレスのような服を着て、右耳の上に宝石のような碧い円状の髪留めをしていたわ……………」
羨むようにその少女の見掛けた時の事を語るクレオの目は、まるで憧れを見るような少女の目であったが、クレオは実際、男であるから、そんな似やわかない目をロロは見て、吐きそう気持ちを必死に心の中で抑えた。

「で……………で、何処に向かったか、分かりますか？」

込み上げる気持ち悪い気分を必死に隠しながらロロは、少女の行方を尋ねる。

「そうね……………あの先は多分、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』だったわね」

「ほ、『白霧山脈』!？」

その言葉を耳にした瞬間、ロロは顔をギョツとさせた。

「そ、それは間違いないんすか!？」

「ええ、あの先に在るのはそれしか無いわ」

聞き間違いだと淡い願いが崩れたように愕然として両手と両膝を床に着いてしまうロロであったが、直後に頭の中で過去を振り返って見ると在る事に気付く。

「あっ……………そうだ! その女を追い掛けているのは、俺様じゃなくて、カレンの方だった! 何だ、別に俺が気に悩む事じゃ無かったんだ!！」

少女を追い掛けているのは自分じゃなくて、カレンの方だと思い出したロロは安堵の表情を見せ、後ろの在ったベッドの上に座り込む。
「お役に立てたかしら？」

自分の見た少女が探している人物で、お役に立てたかをロロに聴くクレオ。

「えっ? あ、ああ……………も、もちろんです! ありがとうございます!」

証言の外見が一致した事にその少女がカレンの探している人物で在る可能性が高い為、情報をくれたクレオにカレンの代わりに頭を下げて感謝をするロロ。

「あらん♪ お役に立てて、よかったわん……………そ・れ・で……………ロロちゃん……………♪」

気分が良くなったのか、急に声を高くして、甘い声とは違い、奇声のような気味の悪い声でロロの名前を呼び、一步近づくクレオ。

「は……………はい？」

一步こちらに近付いてきたクレオに、何故か背筋がゾツと凍りつくみたいな寒気を感じるロロ。

クレオ「一目見た時から……………ずっと思っていたけど……………」

内股で体をクネクネさせながらまた一步、更にもう一步、そしてま

たもう一歩とどんどん近付いて来るクレオ。

ロロ「な……………な……………何でしょうか？」

近寄って来るクレオに猛烈に引きたいロロであったが、ベッドに座っている状態なので引く事が出来ず、全身の毛が反り立つような感覚に襲われ、ロロは身の危険という物を肌で今日2回も感じる。

「あなたって……………私の……………好みなのよねっ!!」
「っ!!!!」

嫌な予感的中したように突然上着を脱ぎ出したクレオに絶句するロロ。クレオは露出した上半身のまま腕を大きく広げ、ロロに抱き着こうとした。

「し、し、失礼しましたっ!!!!」

至近距離に近付いて来たクレオをスレスレに掻い潜って避け、出口の扉に一直線に走りだし、勢い良く体当たりをして部屋の外に転び上がりながら脱出し、ロロは通路に戻って、振り掛けて来た身の危険を回避した。が……………

捕まった二人

持ち前の身体能力でクレオの攻撃？ から逃れたロロは一刻も早くどこか別の場所に逃げたいが為に、ドアにまた体当たりして強引に部屋の外へ飛び出したが……………

「あ……………」

「「「「あ……………」」」」

部屋を飛び出した先にタイミングが悪い事に盗賊達に鉢合わせになり、しかも盗賊達はロロの左右を二人ずつで囲むように立っていた。「「「「……………」」」」

沈黙するお互いは、時が止まったように見詰め合い、ロロはまた振り掛けて来た身の危険に冷や汗を体中にタラタラと垂れ流し、そして。

「にゃ……………ニャーーン♪」

「「「嘘付け！！」」」

嘘を付いて、その場をやり過ごそうとしたがあまりにも無理が有りすぎる為、素早い突っ込みを入れられた後、抵抗も出来ずに盗賊達にあっけなく取り押さえられ、通路にロロの乾いた叫び声が虚しく響いた……………一方カレンの方では。

「（あれ？……………今、叫び声が聞こえた様な……………？）」

閉じた出口の扉の方に目を向けて、声が聞こえたような気がしたカレン。

「（……………気のせいかな？）」

気のせいでは無いが、ロロの助けを呼ぶ声は、虚しくもカレンの耳には届かなかった。

「どうしたの？」

「あ……………いや、何でも無いよ」

部屋に飛び込んで、盗賊達の目からは逃れられたカレンだが、部屋

に居た銀髪の少女に銃を向けられ、抵抗しないまま両手と両足を縄で縛りつけられ、正座のような拘束状態になり、満足に動けない状態と今でも少女から顔を背け続けているのであった。

「そう……………」

「……………」

無表情のまま頷いた少女は、拘束状態にしたカレンから目を離さず、カレンの目の前で着替えを終え、今でも銃口をカレンから外そうとはしなかった。

「一応聞くけど……………」

さっきまでの格好とは違い、頭の上に水色のニット帽にグレー色のジーンズに黒いジャケットのような上着を着ている。外見から見れば年齢はカレンとロロと同じぐらいで、雪のような白い肌と後ろの髪は首の辺りまで伸びた氷のように潤いた銀髪、宝石みたいに輝く深紅の瞳と人形と思えるような端正な顔立ち、この容姿を見れば男女関係無く大半の人は、美少女と思うだろう。

「この部屋に入って来た理由は何なの？」

相変わらず無表情で、氷のように冷たく鋭い眼で、カレンに自分の部屋に入って来た理由を尋ねて来た少女。

「なんて言うか……………盗賊って言う人達に追われているんだ、この宿屋まで追い掛けて来て……………」

「盗賊？」

盗賊という言葉に反応した少女は、カレンの話続けさせる。

「この『レイチム』に一緒に来たロロって言う子が居るんだけど、その子も盗賊に追われる事になっちゃって……………」

拘束されたまま、淡々と事情を話すカレン。

「それで、ロロの提案でお互いそれぞれ違う部屋に入り込んで、盗賊の人達から逃れようって、事になったんだ」

「それで、偶然私が入っている部屋に入り込んで来た……………という事？」

「うん……………そうゆう事になるね……………」

申し訳なさそうに顔を下げるカレン、中に人が居たと知っていた訳では無いが、断りも無く勝手に部屋に入り込んで、更に相手の体を見てしまった為、非常事態だったとはいえ、とても気まずい気持ちになってしまったカレンに少女は。

「そう……………じゃあもう一つ尋ねたいんだけど……………」

怒る素振りも無く、まったく何も感じていたはいないように、心身共に変化が見当たらず、顔に一切感情を表せないまま、落ち着いた態度で少女はカレンに質問を続ける。

「この『レイチィム』に來た理由を話してくれない？」

その赤く染まった深紅の瞳に感情の色が無いと感じ取ったカレンは、まるで感情が氷のように凍っているようだと、記憶喪失のカレンでも普通の女の子では無いと悟る。

「人を……………探しに來たんだ、長い金髪の女の子を……………」

「……………女の子……………」

女の子というカレンの発言に眉がピクッと反応する少女。

「その子を探しだす為に、此処まで來たんだけど……………今はそれ所じゃないんだけどね……………」

今、カレンと口は盗賊達に狙われているので、目標の金髪の少女を探すのは困難な状態が現状なのであった。

「その探している人は、知り合いなの？」

「いや……………今日会ったばかりなんだけど、その子が落とし物をしたから、届けに行かなきゃって、思ったんだ」

「落とし物……………？ 一体何を落としたの？」

興味が湧いたのか、カレンに詳しい事情を聞き出そうとする少女、カレンはそんな少女の言動にまったく疑問も不審も感じずに、詳細を明かす。

「ペンダントを落としてたんだ、君は此処で見掛けてない？ 長くて綺麗な金髪をした、蒼い瞳の女の子」

この「レイチィム」に來て、少女の行方を尋ねた最初の相手がその

金髪の少女と同じぐらいの年齢に見える銀髪の少女に窺うカレンであつたが、少女は首を横に振る。

「残念だけどそれだけじゃ、分からない……………でも容姿がもつと分かるような物が在れば、或いは……………」

二つの特徴だけでは、判断し辛いと言う少女の発言にカレンはある事を思い出す。

「あつ……………そうだ！　僕の胸のポケットに入っているペンダントを取ってみて！」

「え？」

自分の胸ポケットに締まっているペンダントを取ってみてくれと少女に頼み、少女はカレンにゆっくりと近付いて言われた通りに、胸ポケットの中に在るペンダントを取り出す。

「！」

ペンダントを取り出した少女は、何故か目を見開き、瞳を細くにしてペンダントを注意深く見る角度を変えながら眺め出す。

「そのペンダントの上の部分を押ししてみて」

そして、次にカレンは少女にペンダントの上の部分に在る、ボタンのような物を押ししてみたと促す。

「これは……………！」

ボタンを押すと、ペンダントの前部分が開き、破れているがそこにはカレンが探している金髪の少女の昔の写真と思われる物が入っていた。

「会った時の姿とは違うけど、それは幼い頃の写真だと思うんだ。その写真に映っている女の子の成長した姿が、僕の探している子なんだ！」

この写真は以前、その少女と出会った場所でその写真が締まっているペンダントが落ちて在るのを見つけ、拾った時に何となくペンダントの中身を開いてしまい、中に写真が在ると分かったと同時に少女の幼い頃の姿だと分かったカレンは、これが彼女の所持品だという可能性が高かった為、届けに来たと銀髪の少女に説明をする。

「……………」

「どう？ ……見覚えあるかな？」

また注意深く真剣に写真を見詰める少女にカレンは顔色を窺うように尋ねる。

「……………ごめんなさい、やっぱり見覚えは無いと思う……………」

「……………そう……………」

申し訳なさそうに首を横に振って、見ていないと答える少女にカレンは、残念そうに顔をうつ伏せる。

「……………でも、君の事情はよく分かったよ」

そう言うと少女は銃を腰に掛けてあるホルダーの中にしまい込み、静かに歩き出して、カレンの後ろに回り、カレンの両手両足に縛ってあった縄を解く。

「あ……………」

「ずっと縛り付けてごめんなさい、あなたが私を狙って来た、敵という可能性が捨て切れなかったから……………」

どうやら事情を理解してくれたようで、少女は拘束状態にしていたカレンを解放する。

「いや……………謝る事は無いよ、勝手に入って来た僕が悪いんだから、謝るのはこっちだよ、でも……………ありがとう」

やっと解放されたカレンは笑顔を浮かべ、少女に自分の話を聞いてくれた事に感謝する。

「僕はカレン、カレンって呼んで……………君は？」

「私はアイシャ・フレイク、アイシャでいいよ」

立ち上がって自身の名前を明かしたカレンに応えるように、少女は『アイシャ・フレイク』と名乗り、さっきまでの無表情な顔と冷たく鋭い眼差しとは違い、少し笑って顔を和らげ、温かい微笑みの姿を見せてくれた。

「じゃあアイシャ、僕はこれから……………」

「うわああああああ！！ カレン……………！！ 助けてくれ」

「……………！！！」

突然、部屋の窓越しからロロらしき叫び声が響いた。

「？」

「！」

ロロの叫び声にカレンはいち早く反応し、声のした窓の方に急いで向かい、窓を開いて、窓から顔を出して、辺りを見渡すと。

「！　ロロ！！」

下に目を向けると、遠くからではあるが両手両足を縄に縛り付けられ、カレン達を追って来た盗賊達がロロに剣を突き付けている姿があった。

「カレンーーーーー！！　早く助けに来てくれーーーーー！！」

情けない声を出して、正座のような態勢で拘束されているロロはさっきまでのカレンの状態とまったく同じで、必死にカレンの名前を叫んで、助けを求めている。

「知り合い？」

同じ窓から顔を出して、カレンの名前を呼んでいるロロを知り合いかと聴くアイシャ。

「僕がさっき話したロロって言う子だよ！」

「彼が？」

「そう……………彼がロロ！　盗賊の人達に捕まっちゃったんだ！」
指を指して、盗賊達に捕まっている人物がロロだとアイシャに説明したカレンは、ロロの状態を見て、焦りを感じ、顔を曇らせる。

「ロロ！　今助けに行くよ！！」

「！」

そう言ってカレンは、窓の上に身を乗り出す。

「ちょっと待って！　此処は12階だよ、落ちたら只じゃ……………」

「ごめん！　今は……………そんな事を言ってられないんだ！！」
「っ！　待って—————」

強引にアイシャの制止を振り切って、窓から下へ身を投げ出したカ

レンは、その直後に腰に掛けて合ったガジェットを取り出す。

「ストライク！！」

落下中に自分の核コアの名前を呼び、何も無い所からカレンの魔装器まそうきの核であるストライクが現れ、そしてカレンの手まで飛んで行って、カレンはストライクを空中で掴み取り、ストライクをガジェターの剣格部分にはめ込む。

『REGI・IN』
レジ イン

ストライクをはめ込むと、声と共に、カレンのガジェターの剣格の上から形を形成し、いつもと同じ、刃が鋭くない大剣の姿が現れ、カレンは遥か下に居るロロ達の所に大剣を刺すように向けて、衝撃に備えて身を構えた。

「魔装器！」
まそうき

窓から飛び出して魔装器を出した所から一部始終を見ていたアイシヤは、カレンが出した物は魔装器だと一目で分かり、そして少し考えるように目を閉じて、短く沈黙をする。

「！」

何か決心したようにアイシヤの眼つきが変わり、テーブルに置いて在った自分の荷物を取って、颯爽と部屋から飛び出して行った……

……………

助ける理由

……………今日一日で不幸な出来事が度々起こり、そして、ついに年貢の納め時のようにまんまと盗賊達に捕まってしまったロロは……

「あ~~~~~~~~！ カレン！！ 早く、早く！ へ、ヘルツ・ミー！！」

「？ヘルプ・ミー？な」

盗賊の一人に突っ込みを貰いながら、宿屋の人気の無い片隅で、追い掛けて来た盗賊4人組みに拘束され、連れて来られたロロ、大声で何処かに居るカレンに救援を求めている。

「ハン達の奴、遅いな？」

「ああ、何でも在る物を取りに行くって言っていたが……………」

「で……………それを取って来るまで、この獣人のガキを見張って、もう一人のガキがコイツを助けに来るのを待ってろ！ って事だしさ」

スキンヘッドの盗賊達の合流が遅いから雑談を始めた盗賊達の話によると、ロロを囷にしてカレンを誘き出し、在る物という物を取り出すまで、待っているという指示であった。

「でもよ~~~~~そのもう一人のガキっていう奴は本当に来るのか？」

つまらなそうに溜息を零す盗賊の一人は、どうやらカレンがロロを助けに来るのを疑っていた。

「さあな？ でもハンが言うからには本当に来るんじゃないか？」

「でもよ、自分からわざわざ身を危険に晒してまで他人を助けに来ると思えないぜ？ 俺は」

「そうだな~~~~~……………案外もう一人でトンスラしてんじゃないかね？」

「！」

ギクツと盗賊達の会話を聞いて、体が跳ねると同時に心が動じる口。

「(そ、そうだ……………俺とアイツは一緒に行動していた中だが、良く考えりゃ今日初めて会った他人だ！ アイツが必ず俺を助けに来るとは考え難い！)」

「だよな~~~~~！ 俺でも迷わずにトンスラしてるぜ！」

心の中で、カレンが自分を本当に助けに来るのかと不安が出て来た口口に、追い打ちを掛けるように盗賊達は口口の不安を更に煽るみたいに会話を続ける。

「まっ、他人の為に命を投げ出すような馬鹿はいないよな！」

「言えてる言えてる！」

「残念だった！ ボウズ！」

そう言っただけに哀れみの言葉を盗賊の一人が言ったのを切っ掛けに、盗賊達の中で笑いが飛び交う。

「……………」

何も言い返せない口口は悔しそうに歯を食いしばり、込み上げる怒りと不安を必死に抑えようとした。

「(確かにアイツ……………カレンは、俺よりも田舎者で、世間知らずの常識知らずで、何かこう……………変な奴だけど……………)」

心の中で、カレンの事を思い浮かべ出した口口は、今日初めて会った間も無いが、行動を共にして、カレンという人物を少しだけ知った。

「(でも……………悪い奴じゃない、どっちかと言えば良い奴だ)」

そう思っていると何故か心の底から少しだけ希望と期待が溢れて来る口口。

「(そう、『ド』が付く程の……………)」

「口口……！」

「！」

心の文章を遮るように突如、今頭の中で思っていたカレンの声だけ

が耳に響き渡る。

「なっ、何だ!？」

「声? ど、何処から!？」

突然、聞き慣れない聞こえた声に、驚いて辺りを見渡す盗賊達、だが、盗賊達は上には目を向けてはおらず、その上から声の主、カレンが落ちて来た。

「「「「!!」「」「」」」」

持った剣の剣先を前に出して、逆立ちのような落下態勢で地面に剣を深く刺して着地したカレン、地面に刺さった剣は上から落ちて来た勢いで、大地を割り、辺り一帯に在る物全てを揺るがした。

「「「「な、な、なっ、何い!??」「」「」」」」

「「「「「……………」」」」」」

大胆かつ無謀な登場に、度肝を抜かれた盗賊達と口口は啞然とし、言葉を失う。

「助けに来たよ、ロロ!」

逆立ち状態を、踏ん反り返るように体を半回転し、今度は自分の足で地面に着地して、その回転した勢いで地に深く刺さった剣を抜き取り、すかさず剣を構え戦闘態勢に切り替えるカレン。

「こ、このお!!」

「野郎!」

予想外の参上の御かげでうわの空だった盗賊達であったが、間もなく我を取り戻し、慌てながらも腰に掛けて合った剣を取り出し、二人の盗賊がカレンに向かって斬りかかろうと突進して来た。

「ふん!!」

しかし、行動の早さはカレンの方が上で、向かい打つように素早く盗賊二人の懐に入り込み、二人の体を正確に捉え、剣を力一杯、横に流す感じで振るった。

「「「「!!」」」」

二人の盗賊が剣を振るう前にカレンの攻撃がやって来て、二人まとめて薙ぎ払われる。

「がっ?!」

「ぐふう!?!」

剣の剣背部分が当たって、大事には至らなかったが、振るった剣に体ごと吹き飛ばされ、かなり距離が有った後ろの壁に激突し、二人は体を小刻みに震えながら気絶した。

「こ、このお!!!」

「っ!」

戦闘開始僅かで見えなくなった盗賊の一人がカレンの後ろに回って、背後から斬りかかろうとしていた。

「カレン!」

見ていたロロは危ないと思い、カレンの名前を叫ぶが。

「!」

剣を振り下ろした盗賊であったが、そこにはカレンが居ず、代わりに地面に突き刺さったカレンの大剣があり、振り下ろされた剣は大剣に受け止められ、一方そこに居た筈のカレンは、剣を地面に突き刺した状態でまた逆立ちみたいになり体を浮かせ、攻撃を避けていた。

「たあ!」

逆立ちの状態を剣の取っ手を片手だけ掴みながら体を支え、そして体を前に傾け、盗賊の頭上に片足を振り下ろす。

「ごっ!!!」

脳天に勢いが付いた蹴りを喰らわされた盗賊は、顔から地面に激突し、そのまま大地に体を預けるように何も言わず、痙攣する事も無く、静かに気絶する。

「く、くそっ!」

「げっ!?!」

残りに一人になってしまった最後の盗賊は、自分が不利になったと思いい、咄嗟に近くに居る拘束状態のロロに剣を突き付ける。

「動くな! コイツがどうなっても良いのか!?!」

「!」

3人目の盗賊を倒して地面に着地したカレンに、最後の一人の盗賊

はロロを盾にして脅しを掛けた。

「まずは、その武器を捨てろ！」

「か……………カレン……………」

「……………」

動けないロロを人質にして武器を捨てろと呼び掛ける盗賊に、カレンは無言のまま、大地に刺さった大剣を抜き取り、大人しく剣を捨てようとした。その時に……………

「！！！」

刹那……………突然、ロロを人質してカレンを脅していた盗賊の顔にカレンの魔装器、大剣が目にも止まらぬ速さで顔面に向かって、そのままモロに直撃していた。

「なっ！」

「ぶはっ……………！！！」

何が何だかよく分からずに剣の剣背部分が直撃した盗賊は、ゆっくりと地面の方に傾き、重力に従って、疑問を考える間も無く、大地が揺れるような音を出して倒れて行った。

「ロロ！ 大丈夫！？」

「あ……………ああ」

何が起こったか分からない盗賊とは裏腹に人質だったロロの目は全てを見ていた、カレンが大人しく剣を捨てようとした時、そう思い込ませてカレンは、剣を素早く持ち変え、一瞬で盗賊に向けて投げ飛ばした所を一部始終の全貌をロロはその目で捉えていた。

「……………おい、カレン」

「ん、何？」

心配そうに駆け寄って来たカレンにロロは何処か不満そうな顔でカレンを睨み、声を低くして名前を呼ぶ。

「お前な……………俺にも当たったらどうすんだよ！？」

「え？」

何を言い出すのかと思いきや、ロロはカレンの助け方に文句を言い出して来た。

「もっとまともな助け方は無かったのかよ？」

「ごめん……………ロ口を傷付かないで、この人を倒すのはこれしか
思い浮かばなかったんだ」

大剣を顔の上に乗せながら気絶している盗賊に目を向けて、歩きながら自分の考えを伝えたカレンは、ロ口の背後に近付き、体を縛っている縄を解こうとしやがみ込んだ。

「……………何で、助けに来たんだ？」

「何でって……………助けてって、叫んでいたじゃない？」

「そ、そりゃあそうだけだよ……………でも……………」

自分が助けを求めていたくせに、カレンが何で自分を助けに来たのかをロ口は恥ずかしくように顔を少し赤くしながら話を続ける。

「でも、俺達は今日初めて会って、知り合った仲……………ハッキリ言えば赤の他人だ、そんな知り合って間も無い俺を何で助けたんだ？ 身の危険を晒してまで？」

バツが悪そうに顔を背けながらも、カレンがどうして今日会ったばかりの他人である自分を助けに来たのか、その訳を問い掛けるロ口。

「僕がロ口を助けるのに今日初めて会ったとかは関係ないよ」

「えっ？」

何の迷いも考える素振りも無く、すぐさまカレンの口から出て来た言葉は、真っ直ぐ前を見詰める瞳と同じくロ口の心に響く。

「僕はロ口を助けたいと思ったから、助けたんだ。だからそれ以外、何の理由も無いんだ……………たったそれだけだよ」

「……………」

大義とか信念とか、そうゆう大層な物ではなく、ただ純粹に自分を助けたいという理由で助けに来たカレンにロ口はカレンの優しさ触れ、心が温かい気持ちになり、ロ口は目を丸くして声を出せず、大人しくなってしまう。

「それに、君の言う通り僕達が今日初めて知り合った他人だったとしても、僕は多分理由が無かったってロ口を助けていたと思うよ」

喋りながらロ口を縛っていた縄を解こうしていたカレンは、ようやく

く縄を解き、口を解放し、静かに立ち上がる。

「……………カレン」

「何？」

やっと自由になれた口はカレンが先に立ち上がったのを続くかのように起き上がり、立ち上がった後に、呼び掛ける口をカレンは笑顔で聞き返す。

「はっ……………お前って、結構クサイ奴なんだな」

「くさい？ えっ、何処が？」

クサイと言われ、自分の体の匂いを嗅ぎ出すカレン。

「そういう意味じゃねーよ」

大体予想が付いていたのか、カレンのボケに苦笑いしながら、さらっと突っ込む口。

「そうだな、簡単に言うば、お前が『ド』付く程のお人好しなんかじゃない……………」

頭の後ろに腕を組んで、歩き出してカレンから少し離れた口は、足を止めて、顔だけを振り向かせてカレンに目を移す。

「お前は『超』が付く程のお人好しだって事だ！」

「？」

馬鹿みたいにお人好しにちょうど良いと思った口は『ド』を『超』に変えて伝える。その違いの意味が分からないカレンは、頭の上に？マークが付いたかのように首を傾げ、そんなカレンを見て、口の顔に微笑みと失笑が零れる。

「まあ、そんな事はどうでもいいか！ 後さ……………カレン」

笑みを浮かべたまま、口はカレンを真っ直ぐ見詰めて、口を再び開く。

「助けてくれて……………ありがとうな」

「……………うん」

随分な前置きのような言い回しだったが、照れ臭さはあるが最後は素直に感謝の気持ちを、ちゃんと面と向かって伝えて来た口にカレンは、ニコッと笑って頷く。

「さ、さて、他の盗賊達が来る前にさっさと此処から逃げようぜ」
札を言った後に恥ずかしさも加わったのか、それを隠すようにもつとも理由を言って誤魔化し、この場から逃げようとしたロロであったが……………」

「まだ、帰るには早すぎるぜ！　ボウズ共！！」

「！！」

急に何処から音波のような大きい声が聞こえ、カレンとロロはその聞き覚えのある声に反応する。

「この声って……………」

「ロロ、あれ！」

声の持ち主を探そうと辺りを見渡たそうとしたロロにカレンは空に指を指して、ロロに何かを見つけたかを教える。

「あ、あれは！？」

指を指して方向に釣られて顔を空に向けると、そこには、空高く太陽を背にしてよく見えないが謎の黒い影の物体が複数と浮かんでいて、その黒い物体達はゆっくりとカレンの達の前に降りて来る。

「な、何、あれ？」

降りて来た謎の物体達の姿を間近で目に捉えたカレンは、目を細くし眉を吊り上げて、その物体の外見に驚きを隠せなかった。

「魔物じゃない……………これは？」

その降りて来た複数の物体は、明らかに魔物とは違い、今までに見た事が無い、3メートル位の丸い形をした鉄で出来ているような硬そうなイエロー色の体に、棒状みえる両腕と両脚に長い四角形のような手とまるでお餅のような円状の足、そして丸い体の中央より上の部分に、大きな六角形のガラスが張っていて、その姿はまさに機械的な感じであった。

「BATTLE・MACHINE？」

「その通り！」

「！」

この物体の正体を知っているのか、「BATTLE・MACHINE

E」と呟いた口口に応えるように、物体の一体からさつき聞こえた、聞き覚えのある声を発した。

「迎えに来たぜ！ お前達を葬る為に持って来た、『BATTLE・MACHINE? TYPE II HUMAN?』だ！！」

「！！！！」

全身殆どイエローに染まった物体の複数の中からある一体が前に出て来て、その丸い形をした物体もといバトル・マシンと自ら紹介し、球体に見える体の中央より上の部分に張り付いていたガラスが起き上がるように開き、中にあのスキンヘッドの盗賊が入っていた
.....

バトル・マシーン

………突如として現れた、バトル・マシーンと呼ばれた十機の機械人形。

その中の一機のコクピットに居たのは、あのスキンヘッドの盗賊だった。

「お、お前は！」

「どうだ、ボウズ共！ さすがにお前達でもコイツには敵わなえだろ！」

バトル・マシンの丸い体の中にスッポリと自分の体が入っているスキンヘッドの盗賊は自慢するようにそのバトル・マシーンの中をバンバンと軽く叩き、まるで勝つ事が目に見えているみたいに余裕の笑みを浮かばせていた。

「く、くそ！ 何であんな物が！？」

「ねえ、あのバトル・マシーンって言うの、そんなにヤバイ物なの？」

あのバトル・マシーンがどのような物かロロは知っているようで、焦った表情を見せる。そんなロロを見て、カレンはスキンヘッドの盗賊達が乗っているバトル・マシーンという物がそんな危険な物なのかロロに尋ねてみた。

「知らないのか？ バトル・マシーンって言うのは機械兵器の事だよ！」

「機械兵器？」

機械兵器と言う単語だけでは、どうゆう意味なのか分からないカレンは首を傾げ、ロロは溜息を吐きながらもこんな状況下で親切と言えるぐらいに説明を開始する。

「バトル・マシーンって言うのは機械で出来た兵器の事さ。対人、対魔物戦や拠点制圧、殲滅戦などあらゆる状況で適切に対応できるように作られた戦闘用の乗り物だ」

「乗り物？ バトル・マシーンって乗り物なの？」

「そうだ、色んな種類が有るが、バトル・マシンは人が乗って操作するのが殆どだ。装甲は剣や銃みたいな平凡な武器じゃ貫けない程の硬さを持ち、そして、普通の人間じゃ太刀打ちできない程のパワーと火力を搭載しているっていう、現代のハイテク兵器だ！」

簡易的な説明であるが、無駄に細かく詳しく説明している状況では無いので、ロロは自分が今説明できるだけの事をカレンに伝える。

「へえ〜〜〜何だか凄そうだね！」

「凄そうだねじゃねえよ！ 今の俺達にとっては厄介この上無い相手なんだぞ！」

説明を聞いて、こんな状況下でのん気にバトル・マシーンがどうゆう物なのか、興味を持ちだしたカレンにロロは喝を入れるように突っ込む。

「あれはバトル・マシーンⅡ？タイプ・ヒューマン？って言う汎用性が高い人型機械兵器で、今はどの国でも開発や改良が進められ、国の主戦力として注目されている程の機体がよりにも依って10体も居るんだぞ！ 少しは焦れ！！」

緊張感が無いにも程があるぞと言いたげな眼差しで、カレンに説明と同時に注意を行なうロロにスキンヘッドの盗賊は、もっと焦らせるように話しに加わりうとする。

「それだけじゃねえ！ この？タイプⅡヒューマン？は背中にホバージェットが搭載された最新鋭の量産型だ！ ある一定時間内なら空に飛ぶ事だって出来るんだぜ！！」

「な、なんだってー！ー！ー！」

「ああ……………そういえば、さっき空から来たよね？」

スキンヘッドの盗賊が暴露した盗賊達が乗っているバトル・マシンの性能に耳を疑って驚くロロに対して、カレンはさっきスキンヘッドの盗賊達が空から降りて来た登場に冷静に一人で納得していた。

「け、けどよ……………あのバトル・マシンの体に付いているマークって、『トロイカ』軍の物じゃねえか！？ どこからあんな物

を？」

バトル・マシンの急な登場の所為で気付かなかったのか、どうやらロロは機体に付いているマークについて知ってようで、ロロが『トロイカ』と言った軍の物だと示しているマークに目を向けて指摘する。

「あん？ 何だ……教えて欲しいのか？」

「うん、知りたい！」

何処から持ってきたのか疑問に思うロロに、スキンヘッドの盗賊は答えを教えてもよさそうに薄笑いを浮かべ、挑発染みた質問を掛けて来たのに対し、カレンは嫌みを感じずに、素直に回答を求め、そんなカレンにロロは鋭く冷めた眼差しを向けて突っ込む。

「まあ……教えてやるよ、コイツを手に入れた経緯を……

……」

予想とは違うカレンの返事にスキンヘッドの盗賊はつまらなさそうに眉と口を曲げて、声を低くするが、とりあえず自分達がバトル・マシンを手に入れた経緯を語る……



……カレン達が宿屋でバツタリと遭遇した盗賊達に追われていた時にスキンヘッドの盗賊達は軍用都市『レイチム』の一部の兵器保管倉庫に居た。

「……」

上に鉄製網が張った壁によって四角形状に囲まれた4つもの倉庫にロロが指摘したバトル・マシンの体に付いていた『トロイカ』と言う軍の同じマークが倉庫のシャッターの隣の壁に看板のように張り付いており、そのシャッターの前に軍の警備兵が数人でそれぞれの倉庫を見張っていた。

「……ん？」

倉庫を見張っている一人の警備兵が背後に人の気配を感じ振り向こ

うと顔を横に向けると。

「！！！！」

当然、首に何かで叩きつけられ、警備兵は何者かに不意を突かれて気絶し、地面に倒れ込む。

「！　おい、どうした！？」

隣の倉庫を見張っていた警備兵が仲間の異変に気付き、倒れ込んだ警備兵に呼び掛け、駆け寄ろうとするが。

「！！！！」

足を一步前に出そうとした瞬間に、背後から鈍い痛みが走り、隣の倉庫に駆け付けようとした警備兵は、最初に倒れた仲間と同じく地面に倒れ込んで気絶する。

「！！！！！！！！！！」

それに続くかのように、次々と倉庫を見張っていた警備兵達が背後から何者かに不意を突かれて気絶し、地面に降り伏して行く。

「悪いな……………ちよっとお寝んねしてもらうぜ」

倒れた警備兵の後ろにスキンヘッドの盗賊とその仲間の盗賊達が立っていて、倉庫の警備兵達を襲って気絶させたのは盗賊達であった
「えっと……………どれどれ……………」

気絶して動けない警備兵の一人の服の中を探るスキンヘッドの盗賊、そして仲間の盗賊達も倒れている他の警備兵達の服の中を探り始めた。

「おっ！　あったあった！」

警備兵の服の中から目的の物を見つけたようで、スキンヘッドの盗賊の手に鉄製のリングに繋がっている幾つもの鍵を握っており、他の盗賊達も、警備兵達の服から同様の鍵を取り出した。

「コイツで倉庫のシャッターを開けろ！」

倉庫のシャッターの近くに居た仲間の盗賊に鍵を投げ渡すスキンヘッドの盗賊。鍵を渡された仲間の盗賊はシャッターを開けようと開閉用の鍵口に鍵を刺し込み、他の仲間の盗賊達もそれぞれの倉庫の鍵口に鍵を刺し込み、シャッターを開口させる。

「ね、ねえ…………ケビー、やっぱりあいつ等と戦わなきゃいけないのかなあ？」

「な、何だよ、いきなり……………」

すると倉庫の影から二つの人影が出て来て、その人物はスキンヘッド盗賊と一緒に軍の保管倉庫に来ていた大男とロン毛の盗賊で、二人は仲間達とは少し離れた所で話の内容を聞かれないようにヒソヒソと何かを話していた。

「だ、だって……………あいつ等は『水底の洞窟』であの馬鹿でかい魔物からオイラ達の事を守ってくれたんだよお」

どうやら大男は、『水底の洞窟』での出来事で、カレンに恩を感じ、今カレン達への更なる襲撃に躊躇していた。

「お、お前が言う、あいつ等が俺達を助けてくれたっていうのは信じるよ……………でも俺達は狙った獲物は逃さない、それが俺達盗賊だ！」

戸惑いながらも、自分達が盗賊である限り、譲れない物があるとロン毛の盗賊は躊躇している大男に喝を入れるように反論する。

「で……………でも……………」

「確かに、お前の言う通りあいつ等には恩が有るかもしれない、でも盗賊である俺達がたった二人のガキに後れを取るのは、世間のいい笑い物だ！」

二人は心の中で助けてくれた恩と盗賊である使命が葛藤し、大男は頭を悩ませるが、ロン毛の盗賊は苦悩の末、盗賊である事を割り切り、大男にも割り切りせようと説得を試みる。

「それに俺達がこうやって食って生きるのは、お前の兄である、あのお方の御かげなんだぞ！」

「！　そ……………それは……………」

ロン毛の盗賊が言う『あのお方』という言葉が止めになったのか、喉に何かを詰まらせたように言葉を詰まらせ、大男は顔を曇らせる。

「お前には悪いと思うが、あのお方の為だ！　お前も割り切るんだ！」

「う……………うん……………」

心が折れたように顔を下に向かせて、小さい声で了承した大男は、カレン達に対する襲撃に躊躇していたが、『あのお方』という単語が心の中で重く押し掛かり、苦悩の末、カレンに対する恩を仇して返す事を割り切ってしまう。

「おーい、ハン！ こっちの倉庫に在ったぞ！」

「おお！ 在ったか！」

二人の話が終わった直後に、盗賊の一人がスキンヘッドの盗賊を呼び掛ける。

「情報通り、上物があるぜ！」

「そいつ、結構な事だ！」

スキンヘッドの盗賊は嬉しそうに笑いながら、呼んで来た仲間の盗賊が居る倉庫の方に歩いて行く。

「（しかし、助かったぜ……………此処レイタイムの『トロイカ』軍がタイミン

グ良く、合同演習で兵の大半が出張で居なくなった所為で、警備が薄くなっている所を容易に忍び込む事が出来た……………御かげで目的の物が手に入る！！）」

ラッキーな事が重なって、心の中でも笑みを浮かべながら歩いていたスキンヘッドの盗賊は、目的の物があると仲間の盗賊が言った倉庫の中に到達する。

「やっぱりバトル・マシーン……………？タイプⅡヒューマン？の最新の量産型か！」

倉庫に在ったのは、『トロイカ』軍のマークが付いたバトル・マシーンと言う機械兵器が静止状態のまま、正座のような態勢で10体も並んでそこに在った。

「確かにコイツは上玉だ……………おい！ お前らの中でコイツを操縦できる奴は早く搭乗しろ！」

仲間の中からバトル・マシーンを操縦できる仲間だけをバトル・マシーンに搭乗しろと指示を出したスキンヘッドの盗賊は、10体の内の一体に近付き、丸い体の上の部分に付いているコクピットに入

る為のガラスを開けて、奥にコクピットが在るのを確かめる。

「さうして、これであのボウズ共に一泡吹かせられるぜ」

コクピットの中に入って、座席に座わり、座席から見て頭上の壁に付いている幾つものボタンの中に在った『ON/OFF』というボタンを押して、スキンヘッドの盗賊は、まるで眠っているかのようなだったバトル・マシーンを起動させる。

「コイツさえあれば、例え馬鹿デカイ魔物だとしても一捻りだぜ！」
そう言うとスキンヘッドの盗賊は、バトル・マシーンを立ち上げらせ、その棒状みたいな両脚とお餅のような形をした足で、機体を出入り口まで歩きださせ、他の盗賊達も残りの9体のバトル・マシンに搭乗し、起動させ、倉庫の出入り口に向かって歩き出す。

「ケビー、ラジリカ、それとお前ら！ 俺達は先にボウズの一人を捕まえた仲間の所に行つて来る、お前達は速やかに此処（兵器保管倉庫）から出て、後から合流しろ！」

倉庫から出て来たスキンヘッドの盗賊は、外に居た大男とロン毛の盗賊と他の盗賊達に先に行っているから、後から合流するぞと指示を出す。

「あ、ああ……………わかった」

「わ……………わかった……………」

「まあ、お前達が着いた頃には、もう終わっているかもしれないかな……………そんなじゃ先に行ってくるぜ！！」

バトル・マシーンという強力な力を手に入れて過信を抱いたのか、スキンヘッドの盗賊は大男とロン毛の盗賊の歯切れの悪さに気にも止めず、間も無く倉庫から出て来たバトル・マシーンに搭乗した仲間の盗賊達と共に出撃態勢を取る。

「オシ！ 行くぞ野郎共！！」

「……………おう！！……………」

気合いを入れる掛け声と共に、バトル・マシンの背中に付いて在るホバージェットに火を点け、機体が地から少し浮び上がり、やがて一気に空まで上昇し、カレン達と仲間の盗賊達が居る宿屋まで飛

んで行った………

助っ人登場



……以上でスキンヘッドの盗賊はバトル・マシーンを手に入れた経緯を説明し、そして、現在に至ると語る。

「……………と言う訳だ！」

「此処レイタイムのトロイカ軍の兵器保管倉庫から盗んだのかよ！」

「人の物を盗むのはいけない事なんだよ！」

「突っ込む所そこじゃねえよー！」

盗賊相手に盗む事はいけないと注意するカレンにロロは反射的に突っ込む。

「俺達は盗賊！ 相手が誰であっても欲しい物は何だって奪う！」

お前の魔装器まそうきもな！」

「！」

スキンヘッドの盗賊は、カレンの持っている魔装器まそうきに指を指して強奪宣言を隠す事無く堂々と言い、そして、更にその発言が合図だったのか、何処からか他の盗賊達がゾロゾロと30人ぐらい湧いて出て来た。

ハン「今度はもう逃げ場はねえぞ！ 観念するんだな！！」

乗っていたバトル・マシーンのコクピットの扉であるガラスを閉じたスキンヘッドの盗賊は手を振って、仲間に突撃の合図を出し、沸くように現れた盗賊達は合図に従い、それぞれの武器を取り出しカレン達に向かって一直線に走って、突撃を開始し始めた。

「ロロ！ 来るよ！」

「ああもう！ 結局こうなるのかよ！！」

大きな声で愚痴を零しながらも、ロロは鞆の中から弓と矢を取り出し、カレンも魔装器まそうきでも武器でもある大剣を構え直し、二人は突っ込んで来る盗賊達に対して迎撃態勢を取った、その時……………

「「「!?!?!?!」」」」
「「「!?!?!?!」」」」

刹那……………何処からか何発撃った銃声が聞こえ、それと共にカレン達に突進して来た盗賊達の一角が地面に倒れ、盗賊達は突然の出来事に足を止めてしまい、カレンも口もスキンヘッドの盗賊も何が起こったか、分からなかった。

「今のは？」

「じゅ、銃声？」

突如鳴り響いた銃声にその場に居た誰もが、その発砲音がした所を限なく見渡した。

「お、おい！ 大丈夫か!?!」

撃たれて、悲痛な叫び声出す仲間を抱きかかえる一人の盗賊は、体の撃たれた箇所を見ると、仲間は手足を撃たれて動けなくなっただけで、命に別状は無いと確認し、他の撃たれた仲間も同じ状況だと気付く。

「あっ！ あそこ！」

一人の盗賊が何かを見つけ、声と共に指を指し、その場に居た全員がその指を指した方向に顔を向けさせる。

「一体何処の誰だ!?!」

「！」

指を指した方向に在った物は、宿屋の非常階段で、その非常階段の3階辺りに一つの人影が在った。

「アイシャ……………!」

「えっ……………?」

その人影は、カレンが盗賊から隠れる為に飛び込んだ宿屋の部屋の客人であり、さっき盗賊達を撃ち、今でも銃を盗賊達に向け構えている少女アイシャであった。

「てめえ…………… 一体何者だ!?!」

「……………」

怒鳴るようにアイシャに何者であるかを呼び掛けるが、アイシャは

答えようともせず、非常階段の手摺りを飛び越え、非常階段から地上に降りて、カレン達の元に駆け寄った。

「アイシャ……………どうして君が此処に？」

「今は、その事について話している場合では無いでしょ……………カレン」

「な、何だよ、知り合いかお前ら？」

顔を合わせる3人は、お互い顔見知りが居れば、初対面の相手もあり、カレンは何故アイシャが此処に來た理由を問い掛け、アイシャはカレンの問い掛けに今は目の前の事だけに集中しようと答え、口は二人が知り合いなのが意外だったのか、思わず尋ねてしまう。

「あのアマ、あのボウズ共の仲間か！ まあい……………どこちらにしても俺達の邪魔をしようてんなら、容赦はしねえ！！」

自身の問い掛けを無視されて、腹を立てたスキンヘッドの盗賊は、再度仲間の盗賊達に突撃の合図を出して、合図を出された盗賊達は動ける者だけで突進を再開した。

「！！」

「……………」

再び突進を行なった盗賊達にカレンと口は、気を取り直して戦闘態勢に戻るとそれに対してアイシャは如何にも落ち着いた態度で銃を構えていた右手を下ろし、左手を盗賊達に向けて伸ばし、手の平を開き、目を静かに閉じる。

「死の後に、肌を冷やす氷よ、今我に仇名す、かの者を凍て尽くせ！」

唱えるように呟きだしたアイシャに応えるように、アイシャの周りに銀色の光が無数に現れ、その現象は以前『水底の洞窟』で口はカレンの傷を治す為に魔法の呪文を詠唱し始めた時の現象と全く同じであった。

「氷の砲弾^{アイス バルカン}！！」

左手を最後の言葉を言い終わった時に斜め下に振り下ろし、それに続くかのように突如アイシャの体に前に、何かの文字が描かれた銀

色の円状の輪が現れ、その輪から複数の氷の刃が盗賊達に向かって飛び出して行った。

「!!!!」

真っ直ぐ伸びて盗賊達の方に飛んで行った複数の氷の刃は、カレン達に向かつて来る盗賊達の一角の武器や足元に当たり、当たった所から氷が浸食していくみたいに広がっていき、盗賊達の手足をみるみると凍らせていった。

「な、何い!？」

「おお、すげえ! 氷の魔法か!」

手足を凍らされた盗賊達は地面に倒れ込み、手足を撃たれた仲間と同様に戦闘不能に陥り、スキンヘッドの盗賊はアイシャの氷の魔法の威力に驚き、反対に口口は歓声の声を出す。

「剛魔!!!!」

「「「「「!!!!」」」」」

追い打ちを掛けるようにカレンは突進して来る別の盗賊達の一角に衝撃波を放ち、風の塊が盗賊達に直撃し、盗賊達は鳥が羽ばたいたように吹き飛され。そして残った仲間は次々と味方が倒れて、再び戸惑い慌てふためき、進撃を停止してしまう。

「くっ! よくもやったなあ!!!!」

たった3回の攻撃だけで突撃した仲間の盗賊が半数も戦闘不能に陥らせたカレン達に対してバトル・マシーンのコクピット越しに怒りを露わにするスキンヘッドの盗賊。

「お前ら! あいつ等に一発かましてやれ!」

そう言ったスキンヘッドの盗賊に従って、2体のバトル・マシーンが右腕を前に出して、カレン達の方に標準を合わせるようにその四角形の右手をカレン達に向けた。

「ッ! 避けて!!!!」

「「!!!!」」

いきなりその場から逃げるとカレンと口口に呼び叫んで自分もその場から飛び逃げるアイシャ。一方、カレンと口口は言われた通りに

素早くその場から離れる。直後に、2体のバトル・マシンの右手から銃弾の雨が乱射され、カレン達が居た所がハチの巣になった。

「げげっ!？」

「……………!」

「……………『6mmバルカン』!」

武器の性能を見ただけでバトル・マシンの装備が一瞬で分かったアイシャは武器の名前を呟き。カレンとロロはアイシャが自分たちに声を掛けてくれなかったら、自分達もハチの巣になっていたと心の底からそう思い、啞然とした。

「何やってんだ! もっと良く狙え!」

仲間が外した事に喝を入れるスキンヘッドの盗賊は、再びカレン達を撃てと指示を出し、2体のバトル・マシンは更にカレン達に向けて攻撃を再開しようと右手の『6mmバルカン』で捉えようとした。

「う! またっ!？」

「っ!」

また右手を向けられて、焦るロロに対してカレンは、そうはさせないとか大剣の剣先を2体の内の1体に標準を合わせように向け、剣の取っ手部分に在る、凸型のトリガーを押す。

「BEAM・CANNON!」

トリガーを押した瞬間に叫んだカレン。そしてトリガーを押した直後に大剣の刃先が中央に別れ、その刃と刃の隙間から光の矢が飛び出し、目にも止まらぬ速さの光の矢は狙っていたバトル・マシンの右手を溶かすように射抜く。

「なっ!」

ライトピンクの光の矢に射抜かれた『6mmバルカン』が付いていた右手は、カレン達に撃つ前に爆散し、脆くも右手は使い物にならなくなってしまう、そのバトル・マシンに乗っている盗賊の一人は目の前の出来事に目を疑う。

「なんじゃありゃ!？」

「……………ビーム！」

剣も銃も通用しないバトル・マシンの装甲をいとも簡単に射抜いたカレンの攻撃に驚愕するスキンヘッドの盗賊は口を大きく開き。アイシヤはカレンの放った光の矢がビームだとこれも一目で見抜いた。

「くそ！　このお！！」

乗っていたバトル・マシンの右手をやられて、腹が立った盗賊の一人は、今度は左腕を前に出し、右手と同じ四角形の左手をカレンに標準を合わせて、その左手から火を噴きだして前進する鉄のような塊を撃ち出して来た。

「！　ランチャー LAUNCHER・ミサイル MISSILE！！」

「ロロ！！」

「ぬあ！？」

また武器の名前を言い当てたアイシヤをよそにカレンは自分達の所に音速並みの速さで飛んで来る鉄の塊を避けきれないと悟り、隣に居るロロだけでも逃すようにロロをアイシヤの居る所まで投げ飛ばした。

「危ない！！」

「くッ……………！！！！」

大剣を盾にするように剣背部分を前に出し、もう間近に自分の方に接近して来る鉄の塊もといミサイルを受け止めようとしたカレンであったが、人間の頭一個分の大きさのミサイルは大剣に直撃して、瞬く間に大地を揺るがす程の大きな爆発が炸裂し、耳が痛くなる程の爆音が起こり、カレンの周り一帯の物は全て吹き飛んだ。

エネルギー・フィールド

身を挺してロロだけを逃がしたカレンは寸前まで近寄って来た火の噴射で宙を音速で前進する鉄の塊を大剣を側面にして防ごうとしたが、剣がそれに当たった瞬間、鉄の塊は破裂するに爆散し、火柱を立てて、カレンごと周囲の物を爆風で吹き飛ばした。

「ッ！ カレン！！」

「はっはっはっはっ！ 木っ端微塵だぜ！！」

粉塵が舞ってカレンの姿は見えないが、カレンの周り在った物は粉々になっており、只で喰らったら一溜りも無い事は明らかで、ロロは自分だけを逃したカレンを叫んで呼び掛けるが顔は真っ青になっていて、それとは反対してスキンヘッドの盗賊は嘲笑うかのようにカレンが粉々になったと笑い飛ばしていた。

「「！！！！」」

しかし、粉塵が次第に薄れていくと、そこには一つの人影があり、その人影はカレンであった。

「な、なんだと！？」

目の前の光景に眼を疑うスキンヘッドの盗賊、それもそのはず、ミサイルの爆発をモロに喰らっていたはずカレンが立っていて、しかもそのカレンを守るように球状の山吹色の光がカレンの周りを包み込んでおり、当の本人は全くの無傷だった。

「カレン……………おまえ……………！！！！」

「エネルギーENERGY……………フィールドFIELD！？」

無事な姿でいたカレンにロロは安堵の表情を見せ、アイシャはカレンの周りを包み込んでいる山吹色の光に推測範囲ではあるが、その正体の名前を言い当てる。

「これは……………！？」

爆発の瞬間、眼の瞑ってしまったカレンは、今の状況が掴めず、何

が何だか分からない状態で自分の周りを包み込んでいる光に眼を奪われるが、その光は次第に薄れていって、やがて消滅するように消えていった。

「……………」

自分の体を見て怪我が一切無いと確認するカレン。どうやらあの光はミサイルが爆発する前に現れて、カレンを爆風から完全に守っていたようだ。

「！」

するとカレンの魔装器まそうぎでもある大剣の剣格部分に在る碧い水晶のような珠からまた文字が浮かび上がった。

「ENERGY・FIELD？」
エネルギー フィールド

『水底の洞窟』での時と同じ、この浮かび上がった名前が、あのカレンを包み込んで守った光の名称らしく、カレンはまた新しい魔装器まそうぎの力に助けられたが、ここで少しの疑問がカレンの頭の中に生まれた。それはカレンが『ビーム・カノン』の時とは違い、この新しい力をどうやって出すのかが、分からないのであった。

「しぶとい野郎だ……………お前ら！ ああのボウズに集中攻撃だ！！」
負けん気とスキンヘッドの盗賊は、バトル・マシン全機で集中攻撃の指示を出し、10体のバトル・マシンが両腕を前に出して、右手の『6mmバルカン』と左手の『ランチャー・ミサイル』をカレンに向けて標準を合わせる。

「ッ！！」

や、やべっ！ カレン、逃げろ！！！！」

「（だめ！ 此処では逃げ場が無い！！）」

逃げろと叫ぶ口口であったが、アイシャが思っている通りにカレン達が戦っている所、宿屋の片隅は大人数で戦うには大分狭く、しかもカレン達は宿屋の壁を背にしている為、距離を空けて避ける事も後ろに下がって避ける事も出来ない状態であるのであった。

「（このままじゃ……………やられる！！）」

今にも盗賊達の攻撃が火を噴きそうで、カレンは焦りながら頭の中

で打開策を考えようとした……………その時

「(……………念じるんだ!)」

「!」

頭の中で前にも聞いた事がある声が響いた。

「(これは……………あの時の同じ!?)」

「(念じるんだ……………そうすれば、さっきと同じように光が
前を守ってくれる)」

これもまたカレンが『水底の洞窟』で体験した謎に包まれた声であ
り、そしてカレンが『水底の洞窟』を脱け出すのに魔装器まそうぎの力の秘
密を教えてくれた声でもあった。

「(強くイメージして念じるんだ……………さすれば魔装器まそうぎはお
前に応えてくれる。そして……………また新たな力を解放する!)」

「(強く念じる……………?)」

以前、謎の声のアドバイスにより助けられたカレンは、今回もその
アドバイスを耳を貸し、素直に話を聞き、念じるという言葉に強
く反応する。

「(お前の心の力次第で、魔装器まそうぎは更なる力を発揮する! 今言っ
た事は決して……………忘れるな)」

「(……………!)」

言いたい事だけ言って、頭の中で語っていた謎の声は急に途切れ、
カレンは謎の声を聞いている中、まるで時が止まっていたかのような
感覚に陥っていて、盗賊達がバトル・マシーンで攻撃を開始する
所で我を取り戻した。

「野郎共、撃ちかましてやれー!ー!ー!ー!」

掛け声と共に10体のバトル・マシーンが火を噴き、カレンに向け
て銃弾とミサイルの雨を乱射した。

「強く……………念じる!!」

頭の中で語った謎の言う通りに、カレンはさっき自分を守って
くれた山吹色の光を強くイメージして、そして光が自分を包み込む
ように強く念じた。

「カレン!!!」

「!!!」

発射された銃弾とミサイルの雨は、瞬く間にカレンに直撃し、前の爆発と爆風とは比べ物にならない程の爆発と爆風が起こり、この『レイチィム』全体に響き渡る程の莫大な爆音が鳴り響いた。

「はっはっはっはっ！ 今度こそ、こっぱ……………」

圧倒的な火力で撃ちこみ、今度こそカレンが木っ端微塵になったと思ったスキンヘッドの盗賊は、言い終わる前に眼に信じられない物が飛び込んで来て、言葉を失う。

「……………」

それは、舞う粉塵の中でバトル・マシーン10体の攻撃を喰らいながら、その場に人の姿を保って立っているカレンの姿が在ったからだ。

「カレン……………お前って不死身かよ!!!?」

バトル・マシーン10体の攻撃に生きてはいないと思っていたロロは、2度無事な姿で生きているカレンに、感動を通り超えて、逆に突っ込んでしまった。

「(やっぱりあれは、『エネルギー・フィールド』!)」

「(出来た! 念じたら、本当に出来た!!!)」

粉塵が薄れていくとカレンの周りをまた球状の山吹色の光が包み込んでおり、今度はカレンの自身の意思で呼びだしたようで、体も2度目の攻撃でも全くの無傷であり、アイシヤも2度目の同じ光景にカレンを包み込んでいる光の正体を確信した。

「ど、ど、どうなってんだ!? 一体何なんだありゃ!???」

またしても無傷のカレンに、コクピット越しに一汗の焦りを見せるスキンヘッドの盗賊と驚きを隠せない盗賊達。カレンはその戸惑った隙を見逃さず、球状の光を瞬時に解き、大剣の剣先を最初にビームで射抜いたバトル・マシーンに向け、トリガーを3回押す。

「ビーム・カノン!!!」

取っ手部分に在るトリガーを3回押して為、中央から別れた剣の刃

と刃の隙間から光の矢が3本も飛び出し、真っ直ぐ伸び、光速の速さで狙いのバトル・マシーンに飛んで行く。

「!!」

3本の光の矢はバトル・マシンの左手と両脚にそれぞれを溶かし射抜き、左手は爆散し、両脚を無くした機体は崩れるように脆くも地面に仰向けに倒れ込む。

盗賊F「ひ、ひっ!!」

破壊された箇所から火が燃え上がり、怖気づいてバトル・マシンのコクピットから慌てて脱出する一人の盗賊。

「な、何やってんだ! もう一度撃てー!」

とうとう一機がやられて、焦ったスキンヘッドの盗賊は、再びカレンを撃てと指示を出し、バトル・マシーン達はもう一度カレンに攻撃を開始する。

「!!」

しかし、カレンはもう焦る事無く、大剣を前に構え、強く念じ、それに応えるように魔装器である大剣の全身から山吹色の光が漏れ出し、カレンの周りを再び包み込む光が球状の形を作り出す。

「ち、畜生!! 何で効かねえんだ!!」

バトル・マシーン9体が放つ、銃弾とミサイルの雨はカレンを守る球状の光もといエネルギー・フィールドによって、ことごとく弾き返され、かすり傷も付けられない事にスキンヘッドの盗賊は、更に焦りを強くし、そして顔に焦りと不安の色を出す。

「これ以上は、やらせつかよ!!」

このまま只見ていては駄目だと思ったロロは、例え相手の攻撃を防いでいても反撃できないカレンを援護する為に、ロロは弓を構えてまだ攻撃が続いているバトル・マシンの1体に矢を放った。

「ん?」

しかし、飛んで行った矢は、バトル・マシンのコクピットの中に入る為の扉でもあるガラスに少しヒビが入る程度に浅く刺さっただけであり、中に乗っている盗賊はガラスに矢が刺さっていると遅れ

て気付く。

「強化ガラス!?　ちっ、コクピットの防御も万全かよ!」

「……………」

剣も槍も通用しないバトル・マシンに装甲を狙わずにコクピットのガラスの扉を狙って矢を放ったロロであったが、鋼鉄には及ばないがガラスとは思えない強度のガラスに矢が通じず、舌打ちをするがロロに対して、アイシャは何も問題が無いみたいに銃を構え、別の1体のバトル・マシンに銃口を向ける。

「SONIC・BEST!!」
ソニック
ブレスト

そう言って銃の引き金を引いたアイシャの銃は、発砲時に銃弾が爆発したかのように衝撃波と共に発射され、まるで風を纏ったように風の塊が銃弾を包み、ソニック・ブームを起こして、狙ったバトル・マシンに一直線に伸びて飛んで行く。

「!!!」

「え……………!?!」

風を纏った銃弾はバトル・マシンの右腕の肘に当たる部分に直撃し、右腕は銃弾一発に射抜かれたと言うより砕かれたように破壊される。

「じゅ、銃弾一発で、どうやってあの装甲を!?!」

バトル・マシンの装甲に頭を悩ませていた時に隣で別のバトル・マシンを被弾させたアイシャにロロは一体どうやったのか疑問に思うと。アイシャはその事を予知したのか聞かれる前に答え出す。

「あのバトル・マシンの装甲は硬いけど、関節部分は極端に脆い!　そこを狙えば完全に破壊する事は出来なくても戦闘不能には出来る筈だよ!」

「関節部分を?　……………よし、分かった!」

意外な弱点が判明し、ロロはアイシャの有り難い助言に感謝しながら、もう一度弓を構え、矢の刃に『マナ』を流し込み、『マナ』は赤いオーラと成って刃に纏い、ロロはその赤いオーラを纏った矢をさっき狙った放ったバトル・マシンに再び標準を合わせる。

「彗星^{すいせい}!!」

赤いオーラを刃に纏った矢をバトル・マシンに放つロロ、矢は通常の放つ矢と3倍以上の速度で赤いオーラが線を作るように空中を進み、バトル・マシンの足の膝に当たる部分に食い込むように刺さる。

「!!!!」

膝に刺さった赤いオーラの矢は、刺さった直後、赤いオーラが膨れ上がるように眩い赤い光を放ち、突如爆発する。

「よっしゃ! どんなもんだ!!」

爆発の所為でバトル・マシンは両脚を破壊され、立つ事が出来なくなってしまう、木が切り下ろされるようにうつぶせに倒れ込む。

「よくも!!」

右腕を破壊され、仕返しに左手の『ランチャー・ミサイル』でアイシャに攻撃しようとバトル・マシンの一機が左腕を上げた。

「!!」

「あ、あぶねえ!!」

向けられた凶器の左手にアイシャは、避けようと体を動かそうとした時、ロロはアイシャの危険を反応して、手際の良い速さで弓をバトル・マシンに向けて矢を放ち、まるで吸い込まれるように矢はバトル・マシンの左手に飛んで行く。

「!!!」

針の穴に糸を通すように、矢はバトル・マシンの左手のミサイルの銃口の中に入って行って、矢が中に在る発射される前のミサイルに刺さり、ミサイルは中で起爆してしまい、左手はおろか、左腕ごと破壊してしまい、更にミサイルの爆発で発生した爆風で地面に沈むように倒れ込んでしまう。

「は……………入っちゃった……………」

「……………」

「「お、お助け……………」」

偶然なのか狙ってやったのか真意は分からないが、ロロは自分が極

めて難しいと思える芸当をやり遂げた事に自ら啞然とし、アイシャもロロの芸当に驚きの眼差しを向け、そしてバトル・マシーンを破壊された盗賊の二人は、バトル・マシーンから捨てるように脱出し、恐れをなして、助けを呼びながら逃げて行った。

「「「「ちょ、調子に乗るな！ 貴様等！！」」」」

「「！」」

怯んで攻撃を躊躇していた突撃係の盗賊達は、状況が変わって来たと不安になって、負ける訳にはいかないと思い。最初の方の攻撃で仲間の半数以上が戦闘不能になってしまったが、残りの人数でカレン達を倒そうとまずはアイシャとロロに突撃を再開した。

「（！ アイシャ！ ロロ！）」

「こ、こっちに来やがった！」

「けど、間合いは十分有る！」

自身に降り掛って来るバトル・マシーンの攻撃に防いで動けないカレンは、攻撃の最中、二人が自分の動けない隙に盗賊達に狙われていると気付き、ロロは自分達の所に突進して来る盗賊達を向かい撃とうと矢を大量に鞘から出そうとするが、アイシャはそれよりも早く弾を即座に補充し、銃口に狙いを定める。

「TRICK・BREST！！」
トリック プレスト

さっきとは違う名前で盗賊達に狙いを定めて発砲した銃口とは裏腹に、放たれた複数の銃弾は本来向けられた方向に進まず、まるで自由自在に空を飛ぶ鳥のように銃弾はあらゆる方向に向きを変えながら進み飛び、それぞれ銃弾は盗賊達の手足に直撃する。

「！！！！」

自分には銃口を向けられていないと思っていたそれぞれの盗賊達は、急に手足に激痛が走り、何故銃弾が自分の手足に当たったんだと、心の中で叫びながら、痛みで走る事を停止させられ、体が傾き、地面に転がり込んで倒れてしまう。

「た、弾が軌道を変えた！？」

「「「うおおおおおお！！！！」」」」

「！」

まるで手品みたいに銃弾の軌道を変えて盗賊達をまた倒したアイシヤに驚く口ロであったが、盗賊達は仲間がやられても今度は立ち止まらず、決死の覚悟で走り抜いた3人だけがアイシヤに襲い掛かると剣を振り上げる。至近距離まで来た盗賊達にアイシヤは冷静にかさず腰の辺りに掛けていた大きめのナイフを取り出し、脚を一步前に駆け出した。

追っ掛けに終止符を

やられた仲間の分までやり返そうと、やられた仲間を踏み越えて、アイシャの傍まで近づいた三人の盗賊は一斉に剣を垂直に振り下した。

「「っ！」」

決死の思いで振り下ろした3人の剣は、アイシャに体を掻い潜られるようにスルッと避けられ、しかも避けられた際にアイシャに胴体をナイフで薄い切り目を付けられ、そして、一方3人の盗賊の攻撃を掻い潜ったアイシャは3人の後ろを通り過ぎる。

「「この……………うっ！！！」」

もう一度攻撃しようと振り向こうとした3人の盗賊であったが、突如アイシャに付けられた大した傷じゃないと思っていた胴体の薄い切れ目から、まるで泡が増殖するように氷が発生して広がり、3人は上半身が氷に包み込まれ、凍らされ、動けなくなってしまった。

「このアマッ！！」

「！」

またしても仲間を氷漬けにしたアイシャに、盗賊の一人は凄じい剣幕で横から剣を振り下ろそうとした。それにアイシャは素早い反応で体を振り向かせ、一人の盗賊の体を正面に捉え、振り下ろされた剣を難なくナイフで受け止める。

「な、何っ！？？」

盗賊の一人は隙を付いて、攻撃したのにそれをあっさりと受け止められた事に驚いた訳では無かった。それはアイシャのナイフと自分の剣との攻め合いが始まると思った瞬間、突然自分の剣に氷が発生して広がり、凍らされたのであった。

「うわっ！　こ、氷がっ！！」

氷はすぐさま剣だけでは無く、遂には剣を持っている腕までも広が

って凍らしていき、盗賊は斬り付けられたような氷の冷たさに悲鳴を上げ、もう片方の腕で凍った腕を抱き庇え、怯んで後ろに後退してしまう。

「遅い！」

怯んだ相手の隙を見逃さなかったアイシヤは、疾風の如く、盗賊の片脚にまた薄い切れ目を付けて、横を通り過ぎる。

「……………がっ!？」

片脚の切れ目から氷が発生して広がり、今度は脚が凍らされ、盗賊は腕と脚を凍らされるというダブル・パンチを喰らい、体が動けなくなってしまう、他の仲間同様、地面に張り付くように沈む。

「な、何だ、あのナイフは!？」

沢山居た仲間が数十分足らずで殆どやられて、残り僅かになってしまった盗賊達の一人が、顔をギョツとさせる。仲間がやられて驚いたのもそうだが、アイシヤの持っているナイフが何処かおかしいと気付いたのであった。

「氷の刃……………!」
アイスサーベル

ナイフの刃に透明な薄い氷が張り付いており、その氷は刃物のように鋭く尖っていて、しかもその氷の周りに見えても寒気が感じる程の冷気が漂っていた。

「あ、あれに触れたら、凍らされるのか……………!？」

何故仲間が凍ったのか、さっきまでの事を思い返せば、アイシヤの持っている氷のナイフに斬られたら、触れた所が凍らされると考えれば、辻褄が合うと、盗賊の一人はこの事に他の誰よりも早く気付いた。

「よっしゃ! 後は俺様に任せろ！」

「!」

「「「「!」」」」」

何かの準備で攻撃の加勢に遅れていた口口は、今ようやく、準備が終わったようで、その場に居る全員に聞こえるように高らかと声を上げ、バトル・マシンに乗っているスキンヘッドの盗賊達とカレ

ンを除いて、皆がロロに視線を向ける。

「喰らえ！ ドリアン 異端の矢！！」

器用に5本の矢を弓一本で残り僅かになった盗賊達に飛ばしたロロ、しかし放たれた矢は矢先に刃が無く、代わりにオレンジ色の謎の玉状の物体が矢先に付いていて、その謎の球体を付けた5本の矢は、怪しい物体として盗賊達の方へ線を描いて飛んで行った。

「ぶふっ！？？」

謎の球体を付けた矢は、盗賊達の顔や手足にそれぞれに当たり、球体はグチャッと嫌な音をだして、潰れたトマトのように当たった箇所にはスライム状になって貼り付く。

「？ な、何だこれ？」

しかし、ロロが放った球体付きの矢は盗賊達に外見的な何のダメージも与えてはいないようで、何の害も無いと思った盗賊の一人が顔に当たった球体だった物を取り払おうと手を伸ばした、その時。

「うっ！！……………くさっ！！？」

突如、盗賊達は一斉に鼻を摘まんで全員が『くさい』と叫ぶ。

「おえ！ ゴホッゴホッ！！ ううう……………ああ！ くさっ！

！！」

その盗賊達が『くさい』と叫んでいる原因は、ロロが放ったあのオレンジ色をした謎の球体だった物から放つ、匂いであった。

「（ッ！ こ、この匂いは……………『ドリァロ』？）」

あまりの臭さに悶え苦しむ盗賊達にアイシャも、その臭い匂いを感じ、咄嗟に鼻を摘まんで、その異臭の元と思われる物をまたもや推測ではあるが、心の中で言い当てる。

「は、鼻が曲がる！！ 何なんだこれ！ 取れない！？」

匂いの元で体に付いた奇妙なスライム状の物体を取り除こうと手で振り払おうとする盗賊達であったが、体に付いた物体は強力な接着力を有していて、例えどんなに力を入れても剥がす事が出来ず、しかもその物体を取ろうとした手までも、その物体の接着力で逆に手が貼りついて取れなくなってしまうという散々な思いしてしまう者

も居た。

「ほれほれ！　まだまだあるぞ！」

「「「「！！！」」」」」

追い打ちを掛けるようにロロは、更に異臭の球体が付いた矢を今度は10本で盗賊達に放ち、盗賊達は更にそのスライムとなる球体を体に貼り付かせてしまう。

「うう！　うっ……………あ……………」

もうやめてと言いたいそう盗賊達は、逃げようとしても時は既に遅く、今度は全身に物体が貼り付く。

「おうえ……………が……………く……………！！」

スライム状の物体が貼り増え、しかも足に付いた物体は地面とくっ付いてしまい、強力な接着力の所為でその場から移動する事が出来なくなってしまう、そして盗賊達は物体の匂いに耐えきれず、そう経たない内にガクツと気を失ってしまう。

「どうだ！　『ドリアロ』で作った、ロロ特製スライム接着剤の威力は！？」

全身にまだスライム状の物体を残したまま、地面にピクピクと痙攣しているように横たわっている盗賊達に鼻を摘まみながら自慢げに自分が今さっき使った奇妙な物体の威力を尋ねるロロであったが、気を失っている盗賊達には答える事が出来ない事は明白だった。

「やっぱり……………『ドリアロ』か……………」

無残にも異臭が漂うロロ特製スライム接着剤という物体にやられた盗賊達に哀れみの眼差しを向けながらも鼻を摘まんで自分の推測が当たっていた確信するアイシャ。

「（二人とも凄い！　僕なんか居なくてもみんな倒しちゃった……………！！）」

エネルギー・フィールド銃弾とミサイルを防ぎながら、ロロとアイシャの戦いぶり見ていたカレンは、二人の事を心の中で感心する。

「あっ！！　てめえら、やりやがったなあ！！」

スキンヘッドの盗賊は、カレンへの集中攻撃に夢中だった為、更な

るバトル・マシン2機の大破や突撃係だった仲間の盗賊達が全滅させられた事に今やっと気付き、それ仕出かしたロロとアイシャに視線を移す。

「今度は、あいつ等を攻撃しろー！ー！ー！！！」

「「！！！」」

標的をカレンからロロとアイシャに変えたスキンヘッドの盗賊は、カレンへの攻撃をロロ達に変えて攻撃しろと全機のバトル・マシンに指示を出し、機体をロロ達に向かせる。

「ハチの巣にしてやる！！！」

「うわあ！！！」

「ッ！」

気を失って倒れてその場から動けない仲間の事を配慮して、右手の『6mmバルカン』だけでロロ達に攻撃を移したスキンヘッドの盗賊達にロロは慌てて銃弾の雨を避け、アイシャも素早く場所を変えて避ける。

「ロロ！ アイシャ！」

自身への攻撃が止んで、エネルギー・フィールドを解くカレン。攻撃の魔の手が今度はロロ達に伸び、早く何とかしないとと思ったカレンは強く念じ始めた。

「（頼む！ あの時のように力を貸してくれ！）」

そう強く願いように自分の大剣である魔装器マジックアームに念じるカレン。

「！！」

そして、それに応えたのか、『水底の洞窟』の時の同じ、カレンの大剣が眩い光を放ち出し、剣格部分に差し込んでいる核コアであるストライクの背中が開き、開いた背中からピンク色に輝く珠が現れ、そして剣の刃の中央から至る所に切れ目のような別れが出来る。

「（一気に片を付けなきゃ！）」

勝敗はどれだけ相手を早く倒せるかが、鍵と悟ったカレンは、即座にストライクの開いた背中の中で輝く珠の形をしたトリガーを奥に押し込むように押す。

N_ン!

声と共に剣の刃の切れ目で別れた部分が全て外れ飛び、『水底の洞窟』の時と同じ、最初の姿とは違い、刃は触れる物全て斬り裂くと思える程鋭くなり、形的にも少し小さくなってスリムな形となり、刃の部分だけが山吹色の染まっっていて、剣背はライトピンクのままでは何も変わってはいないが、武器の雰囲気ガラリと変わった事は確かだった。

『コード・ゼオラ

ル』

姿が変わり終わった後に前と同じ、言葉の意味が見当付かない単語を発した魔装器であったが、カレンはそんな事を今は気にせず、ロとアイシャに攻撃を加えているバトル・マシーン達に向かって、鉄砲玉のように駆け出し、一気に距離を詰めた。

「はああああああ！！」

「！」

不意を突いて、ロロ達に攻撃を移し変えて、カレンから目を外したバトル・マシーン達の一機の背後から剣を振り下ろして斬り掛ったカレンは、棒状に見える右腕を切り落とす。

「つああああああつ！！！」

「！！！」

そして、すかさず次は剣を振り上げて左腕を斬り飛ばし、そして最後にカレンは体を一回転させ、相手との間合いを調整し、身を低くして剣を横に払い、そのまま両脚を薙ぎ払うように一刀両断にして、バトル・マシンは両脚も失って、地面へ崩れて行った。

「いただきっ！」

「ッ！」

両腕両脚を切断されたバトル・マシンは戦闘不能に陥るが、もう一機のバトル・マシーンがカレンの横を取り、右手から細長い刃物のような物を出して、カレンに斬り掛ろうとし、咄嗟に反応したカ

レンは向かい撃とうと剣を相手の右手に向かって突き上げる。

「！」

「ぬっ！？」

そうするとカレンの大剣が勝手に刃の中央が大きく別れ、振り下ろされたバトル・マシンの右手が大きく別れた刃と刃の間に挟まり、刃物を出した右手は大剣の刃と刃の間にピタリと止まり、そして、剣は元の形に戻ろうと刃を中心に引き戻し、刃と刃の間に挟まった手をまるでハサミのように切断する。

「う、うわっ！！」

「これは……………！？」

またしても自分の魔装器まそうぎが新しい力と思える物を見せ、目の前の現象に眼を見開くカレン。しかしこの時、カレンは脳裏に謎の声言っていた言葉を思い浮かべる。

「（念じるんだ……………さすれば魔装器まそうぎはお前に応えてくれる。そして……………また新たな力を解放する！ お前の心の力次第で、魔装器まそうぎは更なる力を発揮する！ 今言った事は決して……………忘れるな）」

「（新たな力……………心の力で、更なる力を発揮する…………………………！）」

言葉の意味はまだ良く分からないが、今起こった魔装器まそうぎの変化は新たな力だと確信したカレンは、謎の声が残した言葉を心の中に強く刻み込み、そして今は眼の前に右手を失ったバトル・マシンを倒すためにもう一度、念じ始める。

「（念じれば……………魔装器まそうぎは、応えてくれる！）」

謎の声の言葉を信じ、カレンはまた新たに分かった力を使うために再度念じ、そして魔装器はそれに応えて、再び剣の刃が中央に別れ、刃と刃の間に大きな隙間を作り、カレンはその剣の隙間をバトル・マシンの胴体と思われる部分に勢い良く挟み込む。

「う、うそお！？？」

乗っている盗賊は奇声のような叫び声を出し、刃と刃の間に挟み込

まれた胴体はハサミのように隙間を閉じられ、いとも簡単に胴体を切断され、バトル・マシンの上半身は地面に倒れ落ち、下半身は地面に立ったままの状態を保ちながら、切断された所から火が発生し、バトル・マシン達はどう一体も戦闘不能に陥った。

「や、やられたー！ー！！」

切断された上半身の箇所からも火が燃え上がり、盗賊は慌ただしく『やられた』とわざわざ口に出しながら、コクピットから脱出した。

「！」

3機目のバトル・マシンを倒したカレンの剣は刃と刃の隙間を閉じて、元に戻した直後に、また大剣の剣格部分の碧い珠から文字が浮かび上がる。

「POWER・NIPPER………！！」

呼び上げた名前が新しい力の名前だとすぐ確信したカレンは、嬉しそうに小さな笑みを浮かべる。

「ぬわっ！ 何時の間に！！？」

眼を離れた隙に僅か数十秒足らずで、2体のバトル・マシンがカレンに破壊された事に気付いたスキンヘッドの盗賊は、やはりカレンこそ先に倒さなければいけない敵だと思い直し、再び標的をカレンに変える。

「全機！ やっぱりあのボウズを最優先で攻撃しろー！ー！！」

コロコロと標的を変えるスキンヘッドの盗賊に、従う仲間もやれやれと言いたそう顔もあれば不安や不満そうな顔でしぶと、乗っているバトル・マシンを方向転換させ、カレンに攻撃を再開する。

「た、助かった！」

「そうみたい」

残り5機になってしまったが、スキンヘッドの盗賊はそれでも諦めずにカレンへの攻撃を再度行い、それに続いて仲間の盗賊達も攻撃を集中させ、口は銃弾の雨が引いて、一安心して、アイシャは今

も顔色一つ変えずに相槌を打つ。

「！」

また自分の所に來た銃弾とミサイルの雨にカレンは念じて、大剣でも魔装器まそうしからエネルギー・フィールドを発生させ、攻撃から身を防ぐ。

「ちっ！ またあれか！！」

「ロロ！ アイシャ！ 今だ！！」

自分達の攻撃が効かないカレンのエネルギー・フィールドに舌打ちして厄介さを再び身に染みたスキンヘッドの盜賊をよそにカレンは、ロロとアイシャに何かの合図を出す。

「えっ？ 何が……………今何だ？」

「今の内に、攻撃しろって事だと思うよ」

合図の意味が理解できなかったロロに対してアイシャはしっかりと理解したようで、気付かなかったロロにアイシャはサラリとフォロ―するよう合図の意味を教える。

「そ、そうなのか？」

「今の状況を考えたら、これぐらいしか思い浮ばないけどね」

「そ、それもそうだな……………よし！ とっておきの一発をお見舞いしてやるか！」

「……………」

説得力がある意見にロロは素直に聞き入れ、カレンに応えようと目を閉じて、右手を握り拳の状態で自身の胸の真ん中に手を当てる。そしてアイシャも同じく目を閉じて、左手にナイフを持ったまま、左手を前に出して、二人は、口を揃えるように唱え出す。

「轟く鼓動を大地に注ぎ、地の底に眠る力を、今呼び覚ます！」

「死の後に、肌を冷やす氷よ、今我に仇名す、かの者を凍て尽くせ！」

二人は魔法の呪文の詠唱を始め、ロロの方は以前、カレンの傷を治した時とは違い、呪文言葉や周りに茶色の光が無数に現れる。

一方アイシャの方も、最初に見せた魔法の呪文を詠唱し始め、そし

て、二人は詠唱を言い終わり、最後に魔法の名前を口にする。

アイズ バルカン
「氷の砲弾!!!」

グランド フレス
「大地の唸り!!!」

魔法の名前を言った後、アイシャは前と同じ、左手を斜め下に振り下ろし、ロロは右手でパンチするように拳を前に出す。そして同時に二人の前にそれぞれの周りに現れた光と同じ色をした、何かの文字が描かれた円状の輪が出現して、その輪からアイシャの方は氷の刃が飛び出し、ロロの方は2メートル半もある一個の巨大な土の塊が転がって出て来た。

「???!」

弾丸のように撃ち出された複数の氷の刃は、残り5機の内2機に全て命中し、2機は体の至る所に氷の刃が当たり尽くし、言うまでも無く氷が当たった箇所全部から広がり出し、一瞬でバトル・マシンの全身が氷漬けの姿に早変わりしてしまった。

「!!!?」

そして、最後にロロが唱えた魔法によって出された、巨大な土の塊は怒涛の勢いで一機のバトル・マシンに向かって一直線に突進して、勢い付いた土の塊はバトル・マシンに正面衝突し、機体を轢きながら、前に乗せたような状態で前進を止める事は無かった。

「げっ! な、何だ!?!?!」

巨大な土の塊に仲間が乗っているバトル・マシンが轢かれて機体ごと持って行かれる姿を目の前で通り過ぎる所をこの目で目撃したスキンヘッドの盗賊は、口を大きく開け、間抜けに見える驚きの表情を顔に出す。

「!!!!!!」

バトル・マシンを前に乗せたような状態で、轢きながら前進していた土の塊はやがて奥にある宿屋の壁にめり込む程、機体ごと激突し、バトル・マシンはぺしゃんこに潰れるが、コクピットに居た盗賊の一人は機体の頑丈さの御かげでぺしゃんこに成らずに済んだ。

「へへーんだ! どうなもんだよ!」

「な……………何なんだよ、こいつ等は!??」

5機の内、2機は氷漬けにされ、1機は土の塊と一緒に壁に激突して潰され、どちらともスクラップ状態になり、残り2機になってしまったバトル・マシーンに搭乗しているスキンヘッドの盗賊は、当初の余裕に満ちた表情は何処かに消え失せ、代わりに逆に追い詰められた狼のように恐怖に顔を染められていた。

「ッ！」

「むっ！」

バトル・マシンの数が更に減り、攻撃の手が薄くなったので、カレンは相手の攻撃を見払って、エネルギー・フィールドを瞬時に解き、同時に力強く飛び上がり、一機のバトル・マシンの頭上まで飛び上がる。

「この……………!!」

「とおりあっ!!」

急いでバトル・マシンの腕を自分の上空から降って来るカレンに向けようとした盗であったが、カレンの方が一足早く、空中で頭から一回転し、勢い付けて頭の上に両手で構えていた大剣を力一杯振り下ろした。

「!?!」

振り下ろされた剣はバトル・マシンの頭から下まで、体の前半分の所を斬り裂き、コクピットに搭乗していた盗賊はすれすれで当たらずに済み、カレンは器用に機体の中に居る盗賊を斬らずにバトル・マシーンだけを斬り裂き、操縦機能だけを破壊にした。

「ば……………化け物か! お前は!?!」

また目の前で仲間のバトル・マシンを倒したカレンにスキンヘッドの盗賊は、とうとう化け物と呼び、今まで見せた事の無い半泣き顔になり、遂に最後の1機になってしまった自身のバトル・マシンの右腕をカレンに向け直す。

「カレンーーーー! 一気にやっちゃまーーーー!!」

「分かっているよっ!!」

今度はカレン達が勝利を確信し、ロロは一気に片を付けろとカレンに応援混じりの命令を出し、地面に着地してすかさず、次の狙いとしてスキンヘッドの盗賊が乗っているバトル・マシーンに突進したカレンはロロの言葉に頷く。

「く、来るな!!!」

接近して来るカレンに、スキンヘッドの盗賊は慌ててバトル・マシンの右手の『6mmバルカン』で応戦するが、カレンは大剣の横幅を利用して、剣背部分を前に出して盾代わりして身を隠しながら前進し、銃弾の雨を防ぐ。

「こ……………こうなったら!」

銃弾では駄目だと思ったスキンヘッドの盗賊は、左手の『ランチャ・ミサイル』で応戦しようと左腕を前に出そうとするが。

「させるかっ!!!」

撃たれる前にカレンは既にバトル・マシンの懐に入っていて、右手だけで大剣を横に打ち払い、相手の右手と左手を一遍に両断する。

「ひっ! ま……………待てっ!!!」

一度に両手を切断され、バトル・マシンの火器を失ってしまい、スキンヘッドの盗賊は今更ながら待ったを掛けるが、カレンの耳には届かず、止めを刺そうとカレンは空いた左を握り締める。

「!」

強く握りしめられたカレンの左手が突如、眩い光を放ち、カレンは躊躇なく左手をバトル・マシーンに乗っているスキンヘッドの盗賊に突きだす。

「シャインダスト光の鉄拳!!!!」

光輝く拳は、バトル・マシンのコクピットの扉でもある強化ガラスを突き破り、そのまま中に居るスキンヘッドの盗賊に直撃する。

「ぐっほお!!!!?」

自身の体にカレンの光輝く拳がめり込み、スキンヘッドの盗賊はアバラの骨と肋骨が何本も折られ、そして、追い打ちを掛けるようにパンチの威力の所為で機体が宙に浮き、奥に在る宿屋の壁まで吹き

飛び、壁に激突した。

逃亡

自分の何十倍の体重を持っている相手にカレンは光り輝く拳でバトル・マシンを吹き飛ばし、通常のパンチとは桁違いのパンチに殴り飛ばされたスキンヘッドの盗賊を乗せたバトル・マシンは着地点の宿屋の壁に衝突し、激突した衝撃で壁に深くめり込んだ。

「すげえ……………！」

自分の矢では貫けなかったコクピットの強化ガラスをいとも簡単に突き破り、更には中に居るスキンヘッドの盗賊ごとバトル・マシンを吹き飛ばしたカレンに口ロは歓声の声を出す。

「あ、アイツでもう終わりだよな？」

「見る限りでは、もう戦える相手は見当たらないよ」

最後のバトル・マシンがカレンによって破壊され、残った盗賊はもう居らず、盗賊全員が戦闘不能になった事をアイシャに聴いて、あえて確認する口ロ。

「これで……………片は付いたか……………」

「……………！」

辺りを見渡して敵がもう動けないと再確認するアイシャとスキンヘッドの盗賊を殴った光り輝いた左手を開いては閉じて見詰めるカレン。

「（また……………体が勝手に動いた！ しかも剣を使った技じゃなくて、今回は拳を使った技が出て来た！）」

また体が勝手に動いて新しい技を使った事に心の中で驚くカレンは、自身の力に謎めいた物を感じる。

「やったな、カレン！」

「……………！　口ロ！」

ポーーーーっと考えているせいで口ロの接近に気付かず、口ロに肩を軽く叩かれてカレンはやっと気付く。

「怪我は無いの？」

「それはこっちのセリフだ……………まあ見て通り、大した怪我は無いぜ!」

「……………そっか、僕もそれといって無いよ」

お互いに身の安全を確認し合ったカレンとロロは、お互い笑顔を浮かべて答える。そしてロロの後からアイシャが辺りを見渡しながら一人でカレンの方に歩いて来た。

「あ……………アイシャ! 君も何処か怪我は無い?」

「特に……………それらしい物は無いよ」

自分の所に近付いてきたアイシャにも怪我は無いかと尋ねるカレンに、アイシャは相変わらず顔色一つ変えぬまま、サラッと答える。

「それは良かった! 後、それと……………」

「?」

「助けてくれて、本当にありがとう!」

「……………」

何を言い出すかと思いきやカレンの真っ直ぐな眼差しで向けられた感謝の言葉に、アイシャは面を喰らったかのように自身のその鋭い眼差しが柔らくなる。

「これは私が、勝手にやったことだよ……………君が礼を言う必要は……………」

「でも、僕達を助けてくれた事には、変わりは無いよ」

「そうだぜ、お前がバトル・マシンの関節部分の事を教えてくれなかったら、お前の力が無かったら、俺達だけであいつ等を倒す事なんて出来なかったかもしれないんだ」

「だから、君が力を貸してくれた御かげで、僕とロロはこうやって無事でいられたんだ」

「その通りだ」

感謝の言葉は必要ないとアイシャは言うが、カレンはアイシャがどんな理由であれ、自分達を助けてくれた事は変わり無いと述べ、ロロもそれに賛同するよう自身も助けられたと語り、カレンとロロは二人揃って全面的にアイシャの行動を賛美する。

「私は、そんな立派な事はしていないよ。私は私の考えがあつて君達を……」

「それでも……ありがとう」

「ああ………ありがとうな」

「………」

こちらの言い分をお構い無しに感謝するカレンとロロにアイシヤは、少し戸惑ったように眼が泳ぎ、何て言えば良いのか分からない、そんなさっきまでの無表情な鋭い視線の顔とは大違いな、困った顔を見せる。

「ふう………わかった、そこまで言うなら、礼を受け取らないって言うのも失礼かもしれないね………どういたしまして」

うまい言葉が見つからないような困った表情は宿屋の部屋でアイシヤがカレンに見せた、少し笑って顔を和らげた、温かい微笑みに変わり、アイシヤは快くカレンとロロの感謝の言葉を受け取った。

「おーーい、ハーーーン！ 大丈夫かー！ー！？」

「「！」「」」

すると何処からかまた聞き覚えのある声が響き、それに伴って大人数の足音がカレン達の居る所に歩いて来る音が聞こえて来た。

「ああ！！ なんじゃこりゃ！！？」

宿屋の壁の影から、20人くらいの人影が現れ、その人影の中からさっき聞こえた声の主と思われる人物がカレン達に倒された盗賊達の倒れている光景に驚く。

「ま………まさか、これもあいつ等がやったのか！??」

その現れた複数の人影は前に宿屋の出入口越しに見た、旅人のマント来た盗賊達で、そして盗賊達の中には確かに聞き覚えのある声の主が居て、その声の人物はあのスキンヘッドの盗賊の仲間、ロン毛の盗賊の姿であった。

「あっ！ お前らは！？」

「「あっ」」

ロン毛の盗賊は目の前の光景の中にカレン達の存在に気付き、カレンとロロもロン毛の盗賊の声だったと姿を見てやっと分かった。

「ケビー！ 置いて行かないでよ~~~~~！！」

「あつ、あいつは確か……………」

「ラジリカだっけ？」

更に宿屋の壁の影から、また20人くらいの人影が現れ、その中から聞き覚えのある、なまった声とどう見ても仲間外れに見える2メートル以上は有る人影の姿を在った。

「ラジリカ、遅いんだよ！ お前！」

「は……………走るのはいくら、苦手だよ~~~~~！」

続いて現れた2メートル以上も有る人影は同じくスキンヘッドの盗賊の仲間の大男とその他の仲間の盗賊達であった。

「あれ！ 皆やられちゃったの！？」

「ああ……………やっぱりあのガキ共には勝てなかったみたいだな！」

「ええっ！！？」

「くそっ！ だから止めとけて、言ったんだ！！」

「……………」

心の何処かで予想が付いていたのかロン毛の盗賊は、畏怖の眼差しでカレン達に指を指して大男に目の前に倒れている仲間達の事を教え、それと警告を真に受けず氣を失って倒れている仲間に怒りを覚え。一方大男は教えられた事実には驚愕し、そしてカレン達に視線を移し、何処か申し訳なさそうな眼でカレン達を見詰めた。

「？」

何故、大男がそんな眼差しでこちらを見るのか分からないカレンであったが、答えに気付く前に突然、この『レイチム』都市全体に響く程の大きな音が鳴り響いた。

「「「「「！！」」」」」

何か危険が迫っているような、何かを警告するような、そんな事を伝えようとしているかのようなその音は、寝ている者なら、驚いて飛び上がってしまう程の音量であった。

「な、何、この音!?!」

「警報か!」

「!」

何の音だが分からないカレンに教えるように『警報』と呟くロロ。

「け、ケビー! この警報って!」

「くそ! 思ったよりも早いな!?!」

どうやら盗賊達はこの鳴り響く『警報』と言う物がどうゆう物か知っているようだった。

「ロロちゃん~~~~~!」

「?」

ロロ「!?!」

都市全体に鳴り響く音に混じって、何処からか奇声に近いような声がロロの名前を呼び、その声に心当たりがあるようなに反応したロロは、ギクツと体を震わした。

「あっ! あそこだ!」

「.....」

辺りを見渡して声の主を探したカレンは、非常階段に人影を見つけ、その非常階段に居る人物が声の主だと分かったカレンは指を指して周りに伝え、ロロは恐る恐るゆっくりと振り返って、指を指した方向に眼を向ける。

「ロロちゃん~~~~~! また会えて嬉しいわ~~~~~!」

「げげっ!! く、クレオさん.....!!!!!!」

やっぱりあんたかと言いたげ引きつった顔で、身も引くロロは、自分が逃げ込んだ宿屋の部屋で出会ったクレオが非常階段の4階辺りで自分に手を振って、再会を喜んでいる姿に必然的に拒絶反応が体の中を暴れ回るように駆け巡った。

「い、い、い、一体何の用ですか~~~~~!?!」

身の危険を感じさせた相手に理性を何とか保ちながら、震えた口調でロロは非常階段の4階辺りに居るクレオが自分に呼び掛けた理由を大声で尋ねる。

「あつ！　そうそう、忘れる所だったわ！　ロロちゃん、早く逃げた方が良いわよ！」

「えっ！？　何ですか！！？」

俺が早く逃げたいとしたら、俺は早くあんたから逃げたい！　っと心の中でそう叫びながらロロは、クレオに話を続けさせる。

「実はね……あなた達が盗賊達と戦っている所をこの宿屋の従業員が目撃して、『トロイカ』軍に通報しちゃったの……」

「えええ！！！？？」

あれだけ騒がしく派手に戦えば、例え宿屋の人気のない片隅の場所だとしても、いやでも誰かが気付いて目撃するのは明白であり、クレオもカレン達の戦いを目撃した一人のようで、同じくそれを目撃した従業員がこの軍用都市『レイチウム』に居る、『トロイカ』軍に通報したとクレオは語り、ロロはその情報に驚き、耳を疑う。

「じゃ、じゃあ、この警報ってまさか！？？」

「そのまさかなの……軍があともう少しで此処にやって来るから、早く逃げた方が良いわ……」って伝えに来たの……！」

「な、なんだって……！！？」

「！」

「？」

警報が鳴る訳を知ったロロは、顔が極限に戸惑っている顔付きになり、一方アイシャは再び顔付きが険しくなり、微笑んだ顔は何処かに消え、鋭く氷のように冷たい眼に戻り、そしてカレンは一人だけ状況が読めない感じであった。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

未だに鳴り響く警報に混じって、また新たな足音が聞こえて来、その足音はかなり大人数であり、自分達の所に近付いて来るとその場に居た全員が気付いた。

「け、ケビ……！！」

「どうやら……………お出ましのようだ！」

「もう来たのかよ!？」

「そうみたい」

「(軍って言う人達が来るってだけで、皆何でそんな緊迫した顔をするんだろう?)」

約一名だけ危機的状况を理解していないのをよそに宿屋の壁の影から足音の主達が、ゾロゾロと湧いて出て来るように姿を現した。

「動くな!! お前達を暴動兼器物破損及び殺人未遂の疑いによりお前達全員を確保する!!!!」

大勢の人数の中からリーダーらしき人物が大人数の先頭に出て、カレン達と盗賊達に向かって警告及び罪状と確保宣言を伝える。今度現れたこの人物達は『レイチム』に入る前に見掛けた警備兵と同じ全身緑に染まった服を来て、服の胸の辺りに盗賊達が乗っていたバトル・マシーンの体に付いていた『トロイカ』軍と示す同じマークが張り付いていた。

「誰？」

「『トロイカ』軍って言う兵士だよ」

「そして今私達に呼び掛けた兵士は大体予想は付くけど、指揮官だね」

いきなり大人数で登場しては、自分達に警告する人物達にカレンは誰なのか口口に小声で聴くと、口口は彼らを『トロイカ』軍の兵士だと答え、そこにアイシャは付け加えるように話しに加わり、先頭に出て、こちらに呼び掛けて来た一人の兵士は、指揮官だと教える。トロイカ軍指揮官兵「武器を捨てて、大人しく両膝を地面に着いて、両手を頭の後ろに置くんだ! そうすれば危害は加えない」

そう言う『トロイカ』軍の指揮官は後ろに居る。ザッと見ただけでも50人はくだらない程の大人数の仲間の兵士達に手で合図を出して、仲間が持っている銃と思われる武器をカレン達と盗賊達に向けて、構えさせた。

「!」

「……………」
大勢の兵士達に銃口を向けられて、身構えてしまうカレンとロロ。それに比べてアイシャは落ち着いた態度を取っていた。

「こんな所で捕まって堪るかよ!!」

「!!」

不意にロン毛の盗賊は懷から黒い球体を取り出し、『トロイカ』軍の兵士達に投げ付けた。

「「「「!!!!」」」」

黒い球体は『トロイカ』軍の兵士達の前で破裂し、中から黒い煙が大量に漏れ出し、『トロイカ』軍の兵士達を黒い煙が包み込んだ。

「今の内だ! 倒れている仲間を連れて、逃げるぞ!!」

「う、うん!」

「「「「「おう!!!」」」」」

黒い煙の御かげで『トロイカ』軍の兵士達が見えなくなり、その隙に気を失って倒れている仲間を担いで逃げるぞと大男と連れて来た仲間が指示を出したロン毛盗賊は自身も仲間を担ぎ、それに従って大男と仲間の盗賊達も急いで、動けない仲間を担ぎ出した。

「今の内に私達も逃げよう!」

予想外だが逃げるチャンスが出来たと思ったアイシャはカレン達に逃げようと言い、宿屋の片隅であるこの場から離れようと駆け出した。

「えっ、あつ! そ、そうだな、逃げよう!!」

前振りも無く、突然逃げようと言い出して駆け出したアイシャにロロは少し呆然としたが、自身もこれはチャンスだと思い、アイシャに付いて行くように駆け出した。

「ロロ、アイシャ!! 何で逃げるの!? あつ、持ってよ!!」

何故二人が逃げるのか分からないカレンであったが、このままでは自分だけが置き去りになると思い、急いで二人の後を追いかけた。

「ゴホッ、くそっ! 煙幕か!? ゴホッゴホッ!」

咽ながら黒い煙の正体が煙幕だとわかった『トロイカ』軍の指揮官

兵は、煙幕の所為で視界が遮られ、カレン達と盗賊達を目視する事も迂闊に動く事も出来ず、煙幕が消えるまで同じく咽る仲間の兵士達と一緒にその場を待機せざるに負えなかった。

「！」

やがて。煙幕が薄れて引いて行き、視界が元に戻って来ると、さっきまでそこに居たカレン達と盗賊達の姿は無く、しかも氣を失って倒れていた盗賊達までもが一人残らずその場から消えていた。

「くそッ！ 逃げたか！？ まだそんな遠くには逃げていないはずだ！ 探せ！！」

「「「「「はっ！！！！」」」」」

逃げたカレン達と盗賊達を探せと『トロイカ』軍の指揮官兵は仲間の兵士達に命令し、それに従って兵士達は追い掛ける為にそれぞれに人数を分けて搜索を開始し始めた。

「ロロちゃん……………大丈夫かしら……………？」

非常階段から下の出来事を眺めていたクレオは、ロロ達が逃げる所を見送った後、心配そうにロロの名前を呟いた……………



……………そして一方、『トロイカ』軍の兵士達から逃走しているカレン達は宿屋から離れて、都市のある人気の少ない狭い路地の中を走っていた。

「ねえってば、何で僕達も逃げなきゃいけないの？ 僕達何も悪い事はしていないはずなのに……………」

走りながらアイシャの後を追いかけているロロの後を追いかけているカレンは何故自分達も逃げないといけないのか、その訳を尋ねた。

「お前はこんな状況になっても、何も分からないのか！！？」

一人だけ状況を読めていないカレンにロロは溜息代わりに怒鳴りつけるように突っ込む。

「此処レイチムに入る前にも言ったと思うが、此処は規制が極めて厳しい所

なんだよ！」

「そして此処は秩序も乱すものは、例え軽い罪を犯した者であっても、重い刑罰が与えられる所なの！」

フォローするようにアイシャも話に加わる。

「もし此処で騒ぎや暴動を起こして捕まったら、例え被害者であっても最悪牢獄行きて事もあるんだ！」

「牢獄？」

「何週間も檻の中に閉じ込められるって事」

二人共走りながら後ろの位置に居るカレンに『レイチィム』の規制の厳しさと例え被害者であっても捕まる訳と牢獄の意味を簡易的に教える。

「ええっ？ そんなに長く待ってられないよ！」

ペンダントを目的の少女に届ける為に早く追いつかなければならぬカレンにとって、何週間も閉じ込められるというのはとても受け入れられない物であった。

「だろ！ しかも此処では、喧嘩や暴動がご法度だ！ どんな理由が有ったって此処では喧嘩両成敗でお互いに捕まっちゃう！」

例え相手が悪くても、此処レイチィムでは秩序を乱す者は被害者でも情け容赦ないと口口は大雑把と思えるような説明をカレンに淡々と語る。

「それに俺達がいくら正当防衛で戦った相手が無法者の盗賊だったとはいえ、俺達は最低限の規律を破ったんだ！ 捕まって事情を聞いてくれたとしても直ぐに釈放される訳が無い！！」

「だからこうやって捕まらない為に逃げているんだよ。……………君もこんな所で捕まって閉じ込められる程、そんな暇は無いんでしよう？」

狭い路地を अच्छা 曲がって進みながらカレンの目的を知っているアイシャは窘めるようにカレンに聞き返す。

「……………そうだね！ 僕も此処で大人しく捕まっている訳に

はいかないよ!」

事情を理解したカレンは、素直に逃げる事を受け入れ、捕まらないようにこのままロロ達に付いて行く事にした。

「げっ!?! 行き止まりだ!」

そうこう話しながら走っていると、曲がった道の先が路地の壁によって遮られた行き止まりに遭い、これ以上先には進む事ができなかった。

「どうすんだ? やっぱ引き返すか?」

道案内のように先頭を走っていたアイシャの後を付いて来たロロは、行き止まりに遭遇して、引き返すかとアイシャに問い掛ける。

「問題無いよ、此処で良いから」

そう言うときアイシャは行き止まりの壁に近付き、しゃがんで壁の手前に在る、地面に埋まっている丸い鉄板のような物を両手で引っかく抜いた。

「それって、マンホール……………成る程! 地下水道に逃げるのか!?!」

「地下水道?」

引っかく抜かれた丸い鉄板のような物の下には、その丸い鉄板と同じ形と大きさの穴が在り、ロロはその穴を見て、マンホールと呟き、続いて何か納得したかのように地下水道と音量を上げて呼び始め、カレンはロロの言う地下水道と言う言葉に首を傾げる。

「そう、この地下水道なら人目に付かずに『レイチム』から出る事が出来る」

「成る程……………だからこんな人目の無い所のマンホールを選んだ訳か!」

どうしてアイシャはこの狭くて人気の少ない路地に逃げ込んだ理由は、『トロイカ』軍から逃げるだけじゃなくて、地下水道から逃げる所を目撃されない為でもあった。

「そうゆう事! さっ、早く中に入ろう!」

マンホールという穴の中にアイシャはお先に体を入れて、昇り降り

を行なう為の手摺りに手と足を掛け、体が半分以上入った時にカレンが在る事を思い出す。

「あっ！ そうだ、僕此処でペンダントの女の子の情報を集めなきゃいけなかったんだ！！」

「！！」

盗賊達の事で、その事をすっかり忘れていたカレンは今になってやっと思い出して大声を出してしまい。急に喋りだしたカレンにピタリと穴の中に降るのを止めてしまうアイシャ。

そして、ロロもこのカレンの発言にある事を思い出した。

ロロ「ああ、そういえばお前の言うそのペンダントの女が何処に行ったか、俺聴いたぞ」

「えっ！ それ本当、ロロ！？」

今頃思い出して戸惑ったカレンに救いの手を差し伸べるようにロロは、ペンダントを落として行った金髪の少女の情報を聴いたとカレンに告げる。

「本当に本当！？ ロロ！」

「こんな時に嘘なんか言うかよ！ いいからさっさとお前も降りろ！ 後で話してやるから！」

「分かった！ 必ずだよロロ！！」

少女の情報を得られぬまま『レイチウム』を出してしまうのかと希望が削がれるような気持ちになろうとしたカレンは、ロロの意外な発言により、心に希望が咲き直し、嬉しさを満面なく顔に出し、ロロに感謝しながら期待を胸に、自分が降りられる番を待つカレン。

「……………」

何故か考え込むように眼を細めて黙り込んだアイシャは、ピタリと止まっていた体は降るのを再開して、無言のまま穴の下に潜っていた。

「お前の番だぞ」

「うん、お先に行っているよロロ！」

自分が入って降りても大丈夫な距離になったカレンは2番目として

穴の下に潜って行った。

「さて、ここで俺様の力の見せ所だな！」

得意げな顔で、周りに誰も居なくなった状況で謎の独り言を呟いた
口は、自身もマンホールという穴の中に入り、穴の横に置いて在
る、マンホールの蓋でもある丸い鉄板を自分の頭上に位置する穴の
上に寄せ、マンホールを閉じて、3人とも地上から消えて行った。

「……………よっと！」

マンホールの手摺りに従って降りて、数メートルも地上から離れた
地下に在る地下水道にそう時間は掛らず着いたカレンは手摺りから
手と足を離して地面に足を着いた。

「此処が地下水道……………？」

マンホールの手摺りに従って降っていた時は、周囲は暗くて狭く、
息苦しさも感じたが、降り終わると地下水道の中の空間は錆び臭い
が円状で意外と広かった。

「意外と広いな……………それに明るい」

空間の中央に水路が伸びており、その水路の中に円状の白い光を放
つ、大きな物体が幾つもある一定の距離を置きながら点々と在り、
空間内を照らしていた。

「降りて来たみたいだね」

「あっ、アイシャ！」

一番最初にマンホールを降って地下水道に辿り着いたアイシャはカ
レン達が着くのを持っていたらしく、次に降りて来たカレンに声を
掛ける。

「地下水道って、意外と広くて明るいんだね！」

「そうだね、3人で歩いて何も問題はなさそうだし」

実際今カレンとアイシャが立っている所は空間の中央に在る水路の
両端に人が歩く為の通路であり、3人で歩いても問題ない広いス
ペースだった。

「そういえば……………彼はまだなの？」

上を向いてマンホールの中を降っている筈の口口についてアイシャ

はカレンに聴いた。

「そういえばそうだね……………？　　ロロー！　　まだなのー
ー！？」

もう降り終えてもおかしくないのに、何故かまだ降りて来ないロロにカレンは不審に思い、未だにマンホールの中に居るロロを呼び掛けた。

「あー！ー！ーちよつと待ってくれ！　　あともう少しで終わるから！！」

「あともう少し？」

謎めいたロロの発言にカレンは首を傾げ、そしてそう経たない内にロロがマンホールの中から降りて来た。

「……………つと、遅くなってごめんな！」

手摺りから手と足を離して、地面に足を着いたロロはさかさずカレン達に遅れて来た事について軽く謝る。

カレン「何をしたの？」

降りて来たロロにカレンは早速、マンホールの中で何をしていたのか尋ねる。

「そうだな……………それは歩きながら話そうぜ！　　お前もそれで良いだろ……………えつと……………アイシャって言ったっけ？」

降りてそうそう尋ねて来たカレンにロロは、話は歩きながら済まそうと提案し、そしてカレンの後方に居るアイシャに眼を向け、提案の賛否を伺いながら名前も確認する。

ア「そういえば君には自己紹介をしてはいなかったね、私はアイシャ・フレイク。アイシャって呼んで良いよ」

自分にも話を振られて、それと名前の確認をされた為、アイシャはロロとはまだ名前を教えていなかったと気付き、自身から自己紹介を始めた。

「アイシャ・フレイクね……………わかった！　　俺様の名前はロロ・グライヴィー！　　『カムーシャ』村のバンチョーだ、よろしくな！

！」

「そう、よろしくね」

「……………」

自分の自己紹介をサラッと返された事にロロは、一人だけ空振った気持ちになった。

「それじゃあ、先に進もう」

お互い自己紹介が終わった所で、アイシヤは振り返って地下水道の先に進もうと足を運び出した。

「僕達も行こう！　ロロ」

「あ、ああ……………そうだな！」

何時までも立ち止まっている訳にはいかないので、カレンはロロに自分達も先に進もうと促すように声を掛けて、カレンとロロは何処まで行けば外に出られるか分からない錆びの匂いがする地下水道の通路に足を踏み込んで、一緒にアイシヤに付いて行った……………

留守を任された司令官

………錆び臭い地下水道に逃げ込んで、『レイチム』から離れる為に通路を歩いて数30分前後、カレン達は何処まで続くか分からない位、幾ら歩いても変わらない通路の風景をひたすら前に足を歩かせ続けていた。

「歩き続けても、風景が変わらねえな………この地下水道」

「ホントだよね………何か同じ所をグルグル回っているみたいだよね」

どんなに進んでも変わらない殺風景な通路に飽き飽きしてきたのか愚痴を零すロロにカレンは同意するように自身の感想を述べる。

「ねえアイシャ、後どれ位で外に出られるの？」

先頭を歩いているアイシャに声を掛けるカレン。

「ごめんね、私も此処（地下水道）を通るのは、初めてだから何処まで行けば外に出られるか分からないんだ」

どうやらアイシャも、この地下水道に来るのは初めてらしく、さきに謝って自分も分からない事を知らせる。

「まあ、地下水道なんてそもそも人が滅多に訪れない所っていうか、そもそも人が渡り通る所じゃないからな………」

考えてみたら自分達が今歩いている所は人が通る所じゃないとロロは、思った事をボロツと呟く。

「そうなの？」

「こんな所を好んで通る奴なんていないと思うぞ、普通」

一般の人間ならば地下水道という所を理由も無く通る訳が無いと常識的に考えれば分かるはずなのだが、カレンがそれを聞き返し、ロロはカレンが記憶喪失である事を知らないで、呆れ口調でさりげなく突っ込む。

「えっ………それじゃあ、どうやって行けば外に出られるかも分からないの？」

「あっ……………」

この指摘によって今やっと気付いたのか、口を開いてピタリと足を止める口口。

「そうだった……………此処に逃げ込んだのは良かったが、肝心な外に出る道がわからなねえ！」

『水底の洞窟』の時みたいにとだ前に進めば出られるという訳では無く、この地下水道は所々は分かれ道が複数もあり、どの道を歩けば外に続く道に出られるのかが口口達には皆目見当が付かなかった。「それなら大丈夫だよ」

このまま進み続けて大丈夫なのかと焦り出した口口を安心させるかのようにアイシャが振り向いて答える。

「大丈夫って、お前も道分らないじゃないのか？」

「確かに外に出られる道は分らないけど、これを使えばその道が分かる筈だよ」

怪訝そう表情でその大丈夫と言う根拠を口口はアイシャに尋ねると、アイシャはポケットから手の平より小さい箱のような物を取り出した。

「それって…………マッチか？ そんな物で道が分かるのかよ？」

何かと思えばアイシャが取り出したのは小さなマッチ箱であり、口口はマッチなので本当に外に続いている道が分かるのかと目を細くして問い掛けるとアイシャは、マッチの箱からマッチを一本取り出し、その一本を壁に擦って火を付ける。

「ほら見て、火が少し傾いているよね？」

火が付いたマッチをカレンと口口に見せるように手を前に出して、火が傾いている事を指摘するアイシャ。

「あっ、ホントだ！ 少し傾いている」

「そうだって……………これと外に続いている道が分かるのと一体何の関係があるんだよ！」

目の前に差し出された火が付いたマッチが少し傾いていると気付くカレンとそのマッチが何の意味があるのかまったく見当が付かない

ロ口は、突っ込むようにマッチの意味をアイシャに聴き出す。

「マッチの火が僅かに傾いているっという事は、微かに此処で風が吹いているって事を示しているんだよ」

「風が吹いている？」

「？　それが何だってんだ？」

マッチの火が傾いている原因は風が吹いているからだと言アイシャの説明にカレンとロ口は顔を斜めにする。

「この風が届かない地下水道に風が吹いているっという事は、何処かに風が吹いている所が在るという事を示している。つまり外からの風がこの地下水道に入り込んでいるって事」

今度は何故地下水道に風が吹いているのかその訳を解説したアイシャにロ口はハッと目を見開き、ある事に気付いた。

「そうか分かった！　何でこの地下水道に風が吹いているかは、この地下水道の何処かに外から吹いている風が入り込んでいるからであって、という事はその風が入り込んでいる場所が外に出られる道って事なんだな！」

謎が解明されたようにマッチの火が何を示すのかが理解したロ口は眼に希望が宿り、頭の上に在る猫の耳のような耳をピコピコと動かしながらアイシャが取り出したマッチの意味を今度は自分が解説し始める。

「つまりこのマッチ火を頼りに風が吹いている方向を辿れば、外に続いている道を見つけられるって訳か！」

「そうだよ。だからこのマッチを使って、外に出られる場所を探し出そう！」

風が吹く方向を辿って行けば、外に出られると確信したカレン達は早速マッチの火が伝える、風が吹いている方向を確認する。

「火は僕達の方に傾いているね」

マッチに火が自分達の方に傾いているとカレンが指摘する。

「ということは、まだこのまま真っ直ぐに通路を進むってことか……」

火が風で傾いているならその火が傾いている反対方向が風の吹いている方向であつて、口口はアイシャが手に持つてゐるマツチの火が自分達の方に向いてから、今自分達が歩いてゐる通路をまだ真つ直ぐに進む事を口にする。

「そういう事になるね」

振り向いて自身の後方に道が続いている通路に顔を向けるアイシヤ。

「よし……そうと分かれば、このまま進んで、早く外に続いている出口に見つけようぜ！」

「うん、そうしよう！」

「じゃあ、私がマツチを持つから、君達は火が示す風の吹く道を一緒に探して」

出口が何処にあるか分からない地下水道でカレン達は出口を探し出せる方法を見つけ、ロロは急いで出口を見つけようと二人に話し、カレンは相槌を打って頷き、アイシヤは自分がマツチを持つ伝え、カレンとロロに風が吹いて来る道と一緒に探そうとお願いする。

「任せておけ！ これでも俺様は探し物を探すのは得意だ！」

「それじゃあ、先に進もう！」

得意げに探すのは得意だと述べるロロに、カレンは頼り甲斐を感じながら先に進もうと促し、カレンとロロはそれぞれアイシヤの隣に並び、アイシヤが持っているマツチの火を頼りに三人は外の風が入り込んでいいると思われる場所（出口）に向かって、地下水道の中を微かに吹いている風を辿りながら足を前に運んで通路の先を進んで行った……………



.....一方その頃、地上の軍用都市『レイチィム』では未だに警報が都市内に鳴り響いており、『トロイカ』軍の兵士達が血相を変えて、カレン達や盗賊達を隈なく探し続けていた。そして、『トロイカ』軍の基地司令部のあるオフィスに兵の大半が

合同演習で出張して、主な将官達は演習の指揮の為に一緒に出掛けており、基地の留守番を任されたある司令官が居た。

「大佐殿!!」

オフィスの扉からノックもせず、この基地の伝達班である一人の若い兵士が勢い良く飛び込むように入って来た。

「何の騒ぎだ、これは？」

大佐と呼ばれた人物は、ノックせず入って来た事には気にも留めず、今都市中に鳴り響いている警報について報告して来たと察し、自身のオフィスに入って来た一人の若い兵士に警報の騒ぎについて尋ねる。

「ハアハア、これはその……………」

「状況報告は簡易的で良い、まずはその乱れた息を整えろ」

オフィスをから出ようとしていたのか、部屋の奥にある事務用の机から離れて、部屋の中央に居た大佐という人物は、外見からして如何にも渋い顔付きであり、40代前半か後半に見えるグリーンライト色の髪の男性で、冷静沈着と思える態度と厳つい表情が印象なその人物は、正面を向いて目の前に現れた自分と同じ服に『トロイカ』軍であることを示すマークが付いた兵士に指示を出す。

「はあはあ……………ハッ！ 実は……………」

急いで走って来たのか、息が乱れて呼吸を整えてからビシツと背筋を真っ直ぐにして敬礼を行なった後、報告を始める伝達兵士。

「第23兵器保管倉庫から最近配備された第二世代『バトル・マシンII』タイプ・?ヒューマン?」が十機程、何者か達から強奪されたとの報告がつい先ほど届いたのです！」

「何？ その警備を任せれていた兵士達はどうした？」

一見渋い顔付きに威厳さが滲み出て漂う大佐と呼ばれる人物は、若い兵士の報告に取り乱す事は無く、冷静な態度で強奪された経緯の確認を伺う。

「ハッ、どうやら話によれば警備を任されていた兵士達は、その何者か達から鈍器のような物で不意を突かれて背後から殴られて、気

絶えられた模様です」

「……………死者は出たのか？」

「いえ、そのような報告はありません！」

兵器が強奪された事よりも兵士の命の安否を先に確かめた大佐は、死者が出ていない事に聞いて、安心するのかと思いきやその厳つい眼差しや表情、厳然とした態度は変わる事はなかった。

「そうか……………しかし、よりにもよって合同演習で此処の兵士の大半が出張している所為で、警備が薄くなっているとはいえ、最近配備された『バトル・マシーン』を狙われるとはな……………」

上（自分より上の上官）からこの『レイチム』の留守番を任されている身である大佐は、今回の失態を上はどう報告したものかと、頭の中で考えながら小さい溜息を洩らす。

「で……………その強奪された『バトル・マシーン』はどうしたんだ？ まさかもうこの『レイチム』の外に持ち出されたか？」

そして大佐は強奪された『バトル・マシーン』について話を移した。

「ハッ、その事なのですが……………強奪した『バトル・マシーン』を使って、その何者か達は宿屋『カルテル』の片隅で戦闘を行なったようです」

「戦闘だと……………？」

強奪した理由はただの盗みかと思っていた大佐であったが、強奪した『バトル・マシーン』を使って、都市内で戦闘を行うなど予想外の答えが返って来て、大佐の表情がより一層険しくなる。

「ハッ、宿屋の従業員が騒ぎに気付いて、宿屋の片隅を覗いたら『バトル・マシーン』の戦闘中を目撃し、我が軍に報告したそうです」

「その強奪された『バトル・マシーン』は、誰と戦っていたんだ？ 戦闘を行なったならば、必ず相手が居ると分かった大佐はその相手について尋ねた。

「詳しい事は分かりませんが、『バトル・マシーン』と戦っていたのはたった3人との事です」

「何？」

これも予想外だったのか、大佐の表情がまた一層険しくなった。

「それで、戦闘の被害は？」

「ハイ、それが………一般人には何も被害は無く、周辺に在った器物や宿屋の壁が著しく破壊されただけで、誰も怪我人や死者は出ていません」

「戦闘の行方は？」

「それがどうも………強奪された『バトル・マシン』十機全てが破壊されており、全機戦闘不能に陥られていたと報告が………」

「十機全機がか………!？」

この報告に耳を疑ったか、大佐は目を見開く。

「まさか、その三人が『バトル・マシン』を破壊したのか？」

「ハイ、報告によればそうだと言っていました………」

「………」

驚くべき事実に一瞬呆然とした大佐であったが、すぐに今までと変わらない厳然な態度と威厳溢れる雰囲気に戻る。

「そうか………目の錯覚で無ければ、それは本当だろうな」

「………失礼しますが、大佐殿は、今のような報告を信じるのですか？」

今にも至って冷静な態度で、報告を了承している大佐に若い兵士は自分が伝えに來た報告に疑念を感じ、その疑念を大佐に打ち明けようと話を振る。

「自分は信じられません、例え『バトル・マシン』を操縦していたのが素人の無法者だとしても、相手がたったの三人に我が軍の最新鋭の機体を全て破壊させるなんて、自分にはとても………」

「世の中は広い、我々の常識を超えた力を持つ者はこの世界に幾らでも居るといukらい存在しているんだ」

若い兵士の心の中にある疑念を打ち払うように大佐は、常識が通用

しない程の力を持つ者が世の中に居ると語る。

「たった一人で戦況を覆す程の力を持つ者やたった一人で軍隊に匹敵する程の力を持つ者、この世界にはそういう力を持った者達が本当に居るのだから………」

「……………」

大佐の話に丸め込まれてしまった兵士は思わずある事を口にする。

「大佐殿も……………その中の一人なのですよね……………」

「……………」

この発言に大佐は少し沈黙の後、振り返って小さく鼻で笑う。

「フッ……………さあな、私はそこまで自分の力を過信してはいない」

後ろ姿で表情は確認できないが、鼻で笑った大佐の仕草は大佐の渋さをより濃くし、自身に纏っている威厳さを更に大きくさせたように見せた。

「ところで、『バトル・マシーン』を強奪した連中とその連中の戦闘相手だったと言う三人組は捕まえたのか？」

話が少しズレてしまったので大佐は軌道修正を行うためにさっきまで報告の話を振る。

「あっハイ！ それについては、宿屋の従業員の通達によって派遣された懲罰部隊の途中報告によると……………」

兵士は恐れ多くも上官である人物に馴れ馴れしい質問をしてしまったと思い、大佐の軌道修正の発言に我を取り戻し、報告を続ける。

「現地に到着して『バトル・マシーン』を強奪したと思われる集団とその三人組を取り囲んで、身柄を確保しようとしたところ、咄嗟に集団の一人が煙幕玉を使って、煙幕で懲罰部隊が怯んだ隙に、集団から3人組諸共その場から逃げだしたそうです」

「何い!？」

この報告を聴いた瞬間、大佐は顔を今まで以上に険しくし、目付きが一段と鋭くなり、兵士をギロっと睨む。

「馬鹿者っ!!」

「！」

突然怒鳴り出した大佐に兵士は、その大佐の厳然な態度から出る氣迫が混じった声に氣押しされてしまう。

「この都市内で戦闘を行なった非常識な連中が、都市内をまだ逃げ回っているのなら、何故まだ一般人に避難勧告を出していないんだ！ 今度こそ、その連中が民間人に被害が及ぼすと思ひ付かなかったのか！？」

『バトル・マシーン』を強奪した上にそれを使って、都市内で戦闘を行った無法者の連中とたった三人でその連中に勝った三人組という得体の知れない存在が、都市内を逃げ回っているなら、そいつらが民間人に危害を加えないとは限らないと考えた大佐はそこまで頭が回らない、避難勧告を出さないこの基地に勤める伝達班の配慮の浅さになっていないと厳格に叱り付ける。

「今すぐ通信塔に戻って、民間人に避難勧告を出せと他の伝達班に伝えろ！」

「は、ハッ！ 失礼しましたっ！！！」

迫力ある命令に兵士は慌てて敬礼し、急いで部屋の扉を開けて、通信塔にまた走って戻り部屋を後にした。

「失礼します、大佐殿」

今部屋から飛び出した伝達兵士と入れ替わるように空いた扉から今度はまた別な若い兵士がさっきまで居た兵士とは違い、礼儀正しく入って来た。

「君か、中尉」

「大佐、察するにさっき走って出て行った伝達兵士に、今回の警報の件についてはある程度、お聞きになっていますね？」

中尉と呼ばれた人物は淡々と話す口調からにしてどうやら大佐の知り合いのようで、二人の間には親近感が在った。

大佐と中尉

中尉が入ってきた事で大佐は一旦咳払いをして、怒鳴った所為で少しいきり立った気分を早急に鎮め、平常心を取り戻す。

「ああ、現地に向かった懲罰部隊がこの警報の原因の発端である目標達を取り逃がしてしまったところまでな」

より険しくなっていた顔を少し和らげて、大佐は先程の伝達兵士と同じぐらい若い中尉に自分が知った報告の内容を噛み砕いて話す。

「でしたらつい先程、現在都市内をまだ逃げている目標を追っている懲罰部隊からの追加報告を三つ程入手しました」

「ほう……………伝達班により早く情報を掴むとは、さすがに手早いな、中尉」

「恐れ入ります」

さすがと言った大佐は、中尉の能力が優秀であると認めているようで、そう言われた中尉は柔らかそうな物腰で恐縮の言葉で褒め言葉を受け取る。

「で、その追加報告と言うのは？」

「ハイ、我が軍の第23兵器保管倉庫から最新鋭の『バトル・マシン』を強奪した集団が最近この大陸で噂になっているあの盗賊団である事が判明しました」

「盗賊か……………やはりな」

今回一件『バトル・マシン』を強奪したのが、盗賊である事を読んでいたのか、大佐は溜息交じりに呟く。

「今年の初めからこの大陸に突如一角を盛大に露わして、次第に勢力を拡大しつつある盗賊団ですからね……………黒い噂も絶えないと聞きます」

「奴等が『バトル・マシン』を強奪したというのは何も不思議な事じゃない、実際に大・中・小問わず各大陸上基地が被害を受けていると度々耳に入るくらいだから……………」

腕を組んで盗賊団についての対処を淡々と話そうと大佐は、自分の意見を中尉に述べる。

「盗賊団の本拠地はもう分かっているのに、上層部は奴等のアジトに対しての鎮圧作戦の実行に対して、何故か許可を下ろそうとしない、一体何を躊躇しているのだ、上は？」

「盗賊団というのは例え壊滅状態に追い遣られても、バラバラになつて逃げて、何処かでまた新たなアジトを作つて、悪行を再開する懲りない連中ですからね……………上層部は相手にしてもキリが無いと考えてらっしゃるのでは無いでしょうか？」

同じ軍人が目の前に居るのに不満げに頭の堅い上層部の盗賊団の対処に対して愚痴を漏らす大佐に、中尉は窘めるように自分の意見を述べる。

「ああゆう輩は、野放しにしてはロクな事が無い！」

「……………おっしゃる通りです」

無法者の対処に甘い上層部に対して嘆かわしそうに呟く大佐に、慎重らしく中尉は同意する。

「あと大佐、懲罰部隊の追加報告で盗賊団と戦闘を繰り広げた三人組についても情報が届きました」

キリの良い所で、二つ目の追加報告の内容に移ろうとする中尉。

「『バトル・マシーン』をたつた三人で倒した例の三人組か？」

「ハイ、懲罰部隊の目撃情報によれば、三人組は少女少女だと言う事です」

「少女少女……………？ 子供か？ 確かなのか？」

これもまた予想外だったようで大佐は、『バトル・マシーン』に乗った盗賊団を倒したのは、年端もいかない少女少女だと言う事に耳を疑う。

「ハイ」

「特徴は？」

「一人は背の丈より大きい大剣を持ったカーキ色の髪の少年に銃とナイフを持った銀髪の少女と最後は弓矢を持ったグリーンライト色

の髪の三世の獣人の少年だそうです」

この特徴の情報に大佐の眉がピクッと反応したかのように小さく動いた。

「……………それは間違いないのか？」

「ハイ、間違いないとの事です」

「……………」

すると大佐は黙り込み、顎の下に手を当てて考え込むような仕草を見せた。

「大佐？」

中尉は急に黙り込んだ大佐を不自然と思い、声を掛ける。

「ん……………あっ、いや、気にしないでくれ中尉。話を続けてくれ自身の不自然と思われる行為によって、中尉に気を遣わせた悟った大佐は、話を再開されるように促す。

「……………では、続いて最後の追加報告について二つ程の内容を報告します」

気にしないでくれと言う大佐の言葉には裏腹に今さっき見せた大佐の考え込む素振りが心の何処かで引っ掛かる中尉であったが、それについて指摘しようとせず、指示通りに三つ目の追加報告に移る。

「部隊を分けて盗賊団の方を追い掛けていた懲罰部隊の報告によれば、連中を見つけて追い掛けていた途中、突如連中全員の姿が忽然と見えなくなり、見えなくなった辺り周辺を隈なく探してみたところ、複数のマンホールの蓋が開いていたそうです」

「マンホールか……………恐らく盗賊団の連中はバラバラに人数を分けて、マンホールを伝って地下水道に逃げ込んだに違いないな」

「その可能性は限りなく高いと思われます」

最後の追加報告の一つ目の内容は逃げた盗賊達を追い掛けている懲罰部隊からの追跡情報だった。

「それだけじゃない、地下水道に逃げ込んだと言う事は、奴等はこの都市の迷路のような地下水道の通路構造を完璧把握しているかもしれない」

「となると地下水道は『レイチム』を自由に行き来する為の出入り口にされている可能性も高いですね」

冷静に状況報告を把握し、盗賊達がマンホールを使って、地下水道に逃げ込んだと的確に推理し、同時にこの『レイチム』の地下水道が盗賊団の勝手の良い出入り口になっているかもしれないとより深く推測する大佐に中尉も同意見のように可能性を指摘する。

「そうすると、今後の事態の為に地下水道の警備システムを実地し、嚴重に警備しなければならないな……………」

「私もその提案に賛同します」

以後このような事態にならないように、盗賊団のような無法者達が地下水道を悪用させない為に地下水道にも警備の手を回そうと考案する大佐。

「最後になりますが、もう一つ内容は部隊を分けて盗賊団とは別のもう片方の目標を追い掛けていた懲罰部隊の報告です」

「少年少女の三人組の方か……………彼らの方は捕まえたのか？」

二つ目の内容はカレン達の追跡情報のようで、気のせいかもしれないが大佐はどうやら盗賊達よりカレン達の方が気掛かりのように見える。

「いえ、懲罰部隊の報告によると三人組を目撃した一般市民の目撃情報に従って、人気の少ない路地に向かったところ、その路地には少年少女達の姿はなかったそうです」

「ほかの場所も、隅々まで探したのか？」

「ハイ、都市内を隅々まで探したのですが、見つからなかったそうです」

「では、もうこの都市の外に……………」

盗賊達とは違い、カレン達は比較的に人数が少ない為、三手に別れば人目に付くのが少なくなる上に身も隠せ安いし、その気になれば実力行使で都市の門を見張っている警備兵を倒して、外部に出られると大佐は危惧するが。

「その可能性は低いと思われます」

中尉は大佐が危惧した可能性を断ち切るように割り込む。

「どういう意味だ、中尉？」

推測で生まれた大佐の不安を取り除くように中尉は話の続きを語る。

「懲罰部隊の一人が路地の行き止まりの手前に在ったマンホールの蓋にオレンジ色のスライム状の物体が張り付いていたのを発見したそうです」

「オレンジ色の………スライム？」

中尉が言うオレンジ色のスライムに反応する大佐。

「そのスライムは鼻が曲がると思える程の異臭を放ち、しかもそれには驚異的な接着力があり、部隊の兵士が5人掛かりで蓋を取ろうとしても取れなかったそうです」

「………それで、そのスライムがどうかしたのか中尉？」

話が少し読めない大佐は中尉が説明の中で出したスライムに何の意味があるのかを尋ねる。

「実は私が独自に入手した情報によると、そのスライムの同一物と思われる物が盗賊団と三人組が戦っていた宿屋の片隅に在ったようなのです」

「なんだと？」

カレン達が向かったと思われる人気の少ない路地の行き止まりの手前に在る、マンホールの蓋に張り付いているスライムの同一物と思われる物が盗賊達とカレン達が戦っていた宿屋の片隅に在るという情報を中尉は大佐に説明した。

「私が推測するにもし、このスライムが三人組の少年少女の内の誰かが使った物だとして、これを使って、自分達を追って来る懲罰部隊が追って来させないようにマンホールの蓋に貼り付けた。つまり………」

「彼らも地下水道に逃げ込んだという可能性が有る。そう言いたいのだな中尉？」

話の流れからにして、中尉の説明の意図を理解した大佐は結論を言

い当てる。

「ハイ、彼らが人目の少ない路地に逃げ込んで、盗賊団と同じくマンホールを伝って地下水道に入り込めば、姿が見当たらない訳や追手を来させない為にマンホールの蓋に細工をしたと考えれば、辻褄が合います」

「成る程……………そういう事ならば、その可能性は十分に有るな」

入手した情報を的確に解析して、懲罰部隊から届いた追加報告と照らし合わせ、推理したところある一つの可能性を導き出した中尉に感心した大佐は、その可能性は十分あると考え、再び顔が険しくなる。

「ふむ、三人組の方は、例え彼らが通ったと思われるマンホールが使えても、他のマンホールを使ったとしても今となっては追いつく可能性は低いな」

現在カレン達が逃げ出してかなりの時間が経っており、今頃になって地下水道に懲罰部隊を向かわせて追い掛けさせてもその頃カレン達は外に出て、追いつけなくなっていると判断した大佐は、その場に最善の策を思い付く。

「だが彼らが、盗賊団と何の関係が有るのかは分らんが、この都市の秩序を乱す者は誰であろうと、どんな理由があろうと許す訳にも逃す訳にもいかない……………中尉！」

「ハッ！」

呼ばれて中尉は、すかさず大佐に向かって流れるような敬礼を行い、キリッと声で返事をした。

「君は司令室に向かい、制御管理兵に『タイプTYPE・タイラントTYRANT』を2体起動させ、それぞれを地下水道に逃げ込んだと思われる盗賊団と少年少女の三人組を搜索させるように向かわせ、見つけ次第確保するように指示しろと伝えて来てくれたまえ！」

中尉に指示を出す大佐の姿は何処にでも居る平凡な上司とは違い、猛々しく誇り高い戦士に見えるような威厳さが体の周りに漂ってい

るように思えた。

「それと私もすぐそちらに向かうとな!」

「ハッ! 了解しました大佐殿! 失礼しました」

命令を了承した中尉は颯爽と指示通りに司令室に向かって部屋から出て、大佐の居るオフィスを後にし、大佐は中尉が司令室に向かったことを見送って、部屋の奥に在る外の風景が見える大きな窓の前に立った。

「……………」

窓から見える都市の風景を無言で眺めながら、大佐は中尉が報告したカレン達の特徴を思い浮かべた。

「ふっ……………まさかな……………」

言うまでも無く部屋の中には大佐以外は誰も居ない、今大佐が呟いたこの小さな独り言は誰にも聴かれる事はなかった……………



……………一方、外に出る為に地下水道を歩き続けているカレン達は、外に繋がっている道を探す方法である。マツチの火が示す風の吹く方向に従って、相変わらず姿が変わらない殺風景で錆び臭い通路を右左に曲がっては真っ直ぐに進んでいた。

「ねえ、ロロ」

「ん? どうしたんだ、また?」

横一列に並んで歩いているカレン達は、左から順番に言うところアイシヤ・カレンという並びになっており、カレンはアイシヤの隣に居るロロに話し掛け、ロロもカレンがまた質問の問い掛けに自分を選んだと心の片隅で予想しながら返事をする。

「僕らが今歩いているこの地下水道の中をずっと照らしていて、水の底にところどころに在るあの白い光を放っている丸い物はもしかして全部、浄化石なの?」

案の定またカレンの分からない事に対して質問であり、カレンの質

問の内容はカレンが指を指している方向に在った。

「お前さ……………そんな事を今更言うのか？」

カレンが指を指した方向にあるのはカレン達が今歩いている通路と
もう片方通路の間を流れている水路の底にところどころ在る、白い
光を放ちこの地下水道を照らしている丸い物体について今更尋ねて
来たカレンに口口は懲り無く呆れる。

「いや……………此処（地下水道）に入った時から、気になってい
ただけど、言うタイミングを逃しちゃって……………」

「まあ、確かにこれは浄化石だけどさ」

「あっ！ やっぱりそうなんだ！」

自分の読みが当たって嬉しいのか顔に笑みを浮かべるカレンと、や
れやれと言いたげに首を横に小さく振るう口口。

「で、それがどうかしたのか？」

「だって、『水底の洞窟』で見た物をこんな所でもまた見られるな
んて思ってもみなかったから、凄く意外なんだ」

「という事は、この『レイチウム』の水の収入源は運河の水脈だっ
て事も知らないねえな、さては？」

「え……………そうなの？」

「やっぱり、知らないのかよ」

質問の答えから次は説明といういつもの流れになってしまい、口口
はいつの間にかパターン化してしまったこのやりとりで心の中で溜
息を零しながら、カレンに説明を開始する。

「『水底の洞窟』で言ったと思うが、あそこの上を流れている運河
の水脈はあらゆる所に繋がっている事は覚えているよな？」

「うん、覚えてる」

「その水脈の一つがこの『レイチウム』の地下を通っていて、それ
を飲み水に使っている事だ！」

「じゃあ、この水は運河の水脈の水って事？」

「これは違うよ」

再び水路に指を指して、水路の水が運河の水脈の水なのかを聴いた

カレンにロロとカレンの間に位置するアイシャが突然話に加わって、ロロの代わりに答える。

「違うって、これは運河の水脈の水じゃないの、アイシャ？」

前触れも無く話に加わって来たアイシャにカレンは意外そうにも、驚きもせず、カレンはアイシャが言った違う訳を尋ねる。

「今私達が歩いているこの地下水道の水路の水は海から来ている水なんだよ」

「海から？」

海という予想外な規模のデカイ言葉が出て来てカレンは、どういう事なのか、イマイチ理解できていないようだった。

「ああ、そうだった……………説明が足りなかったな」

どうやらロロの説明には足りない部分があったらしく、それに気付いたロロは今度ちゃんと分かるようにカレンに説明を再開する。

「いいかカレン、この『レイチム』には二つの水の収入源が在る！ 一つはこの都市から西に位置する運河から流れる水脈の水。もう一つは東南に向かった所に在る海から流れる水。この二つがそれぞれの地下水道を伝って、都市の飲み水や排気水、後は補給物資用の水として利用されているんだ」

「…………じゃあ、今僕達の目の前に在るこの水は海から流れて来た水って事？」

水路に体を向けて、水の中を覗き込むように水面を眺めながら問い掛けるカレン。

「その通りだ」

「そっかあ、二つも水が流れているんだ……………」

ロロの追加説明によりイマイチ良く分からなかった疑問が解けて、カレンは頭の中のモヤが少し晴れたが、それも束の間、また新たな疑問が浮かび上がる。

「あれ？ でも何で二つも在るの？」

無知から来る絶える事の無い興味心なのか、カレンは何故この『レイチム』に二つも水の収入源が在るのかを尋ねる。

「それはもし二つの収入源の内、どれかが何かのトラブルがあつて、水が流れなくなった場合、もう片方の収入源で補うように保険という形でこの軍用都市『レイチィム』には二つの収入源が存在するんだよ」

「一つの手段に頼っていると、そこに何か問題が起こって、水が補給できなくなったら大変だからな、万が一を考えて作られた設計なんだ」

「備えあれば憂いなしって言うしね」

「まあ、理由はそれだけじゃないんだけな」

アイシャの説明もあつて、より具体的に『レイチィム』の地下水道の構造が分かったカレンは説明を元に頭の中を整理する。

「成程……………そう言う事なんだ」

二つの収入源が存在する理由が判明してカレンは、この都市の水が二つの収入源によって支えられていて、その二つの内どれか一つが壊れて使えなくなっても、壊れた方が直るまでもう一つの方で水を補給していると大体の事は理解した。

「……………って事は、今歩いている地下水道は海に続いている地下水道なんだよね？」

海から流れている水の地下水道ならこの地下水道は海に続いていると考えなくても分かる事だが、今カレンはその事によく気付いた。

「そう、そしてもう一方は今私達が居る地下水道の反対方向に在る、西側の地下水道は運河の水脈に続いている地下水道と言う事になるんだよ」

「つまり俺達は今、東南側の地下水道の中に居て、海に向かって歩いているって事にもなるんだ」

要約するに西側の地下水道なら運河の水脈に続いており、東南側の地下水道なら海に続いていると知ったカレンは、『レイチィム』周辺の地理が分かった気がした。

「あれ？ でも確か……………運河の水脈って地下に伸びている

んだよね？　じゃあ海の水も地下から流れているの？」

素朴な疑問だか地下水道だけにあるって、海の水も地下から来ているのではないかとカレンは即座に浮かび上がった疑問を口に出す。

「いや、東南側の地下水道は西側の地下水道のように地下に在る水脈を繋げて作った訳じゃなくて、陸の上に流れる海の川を地下に誘導するように掘って作った地下水道なんだ」

ロロが言うに海に続いている東南側の地下水道は大陸上に流れている海の川を地下に流し込んで、その川の水を使って地下水道を作ったとカレンに教える。

「で、その海の川の水が地下に流れ込む入口こそが風の入り込んでいる入口であり、そこが私達の目指している出口なんだよ」

説明に付け加えるように続いてアイシャが、自分達が今探している風の入り込んでいる場所こそが自分達が目指している出口である事を伝える。

「ふうん……………だから、こんな地下にも風が吹いているんだ」
地下水道に風が吹いている理由が分かったカレンは、アイシャの手が持っているマッチの火に視線を移す。

「あつ、二人とも見て！　マッチの火がさつきより大きく傾いているよ！」

カレンの声に釣られてロロとアイシャは一斉にマッチの火に視線を向ける。

「おっ！　ホントだ！」

「という事は、外に近付いて来ているって事だね」

マッチの火が大きく傾いているという事は風が強くなったという訳であり、つまり風の吹く発生源である外に近付いているという事になる。

「じゃあ、僕達はちゃんと出口に近付いているんだ！」

風の通りが弱い所が風の入り込んでいる出口から遠い事を示す訳であって、逆に風の通りが強い所が出口から近い事を示す訳だから、カレンは自分達が出口に近付いているのだと目を輝かせながら確信

を感じる。

「だったら、この調子でさっさと出口まで行こうぜ！」

「そうしよう」

外に続く出口を求めてカレン達はより一層マッチの火が示す風が吹く方向を注意して見極めながら足の手速を速め、マッチの火に従って地下水道の奥を更に進もうとした。

地下水道での雑談

アイシャが提案したマッチによる出口探しによって、到着予定の出口からちよつとでも近づいた観測が現れたので、微かな希望の光が見えたロロとカレンは早く外に出ようと、もっと速度を上げて奥へ進もうとした。

「！」

しかし、気合いを入れて先に進もうと張り切ろうとしたカレンであったが、アイシャの隣を歩いて居たロロが、何を思ったか急に歩く速度を緩めアイシャの後ろを回って、わざわざ反対方向に居るカレンの隣までやって来る。

「しかしカレン~~~~~~~~お前もスミに置けないねえ~~~~~」

自身の猫のような耳が小刻みに動きながらロロはニヤケ顔でカレンの首の後ろに手を回して、肩を組むように体を近付ける。

「？」

何がしたいのか分からないカレンを余所にロロは自分の顔をカレンの耳元に寄せ、意図的かは知らないがカレンにしか聞こえないように何故か小声で耳元に囁いた。

「スミって……………何？」

「またまた、惚けるなよ~~~~~」

記憶喪失のカレンはロロの言う？スミに置けない？という言葉の意味や意図さえも分からず、小声のロロとは対照的にいつも通りの音量で聞き返すが、ロロはカレンが惚けて誤魔化そうとしていると勘違いして、いつもとは違うチャライ声で尋ねて来た。

「あんな可愛い女の子と知り合いなんて、カレン……………お前って結構手が早いんだなあ！」

「手が早い？」

並びの順番が変わり、左から言うときアイシャ・ロロ・カレンという並びになり、チラッと密かに視線をアイシャに移したロロは、カレンが女の子に対しては手が早いと思い込み、アイシャとの関係を問い詰めようとしていた。

「お前ら、何処で知り合ったんだ？ 何処まで行ったんだ？」

「何処で知り合ったって……僕とアイシャは今日知り合ったばかりだよ」

「えっ？ そうなのか？」

カレンの発言に自分の予想が外れたとまるで顔に書いてあるかのようになり、キョトンとするロロだったか、またすぐにニヤケ顔に戻して、視線をアイシャに戻す。

「そうだとすると、かなりの上玉じゃないか……」

「上玉？」

上玉と言うロロの視線は何処かアイシャの身体全体を眺めるように泳いでいて、カレンもそれに釣られて、視線をアイシャに移す。

「ほらさ、例えば……あのキツチリとした細い身体と白い肌だろ……そんなでもってまるで人形のような上品な顔付けに、服の上からでも分かるあのふっくらとした大きい胸元とか、それ全部ひっくるめて上玉って言ってんだよ……！」

「……………」

ロロが解説するアイシャの魅力溢れる外見上を聴いてカレンは頭の片隅でアイシャとの出会いの出来事を思い出していた。

「？ 何？」

視線に気付いたアイシャはカレンとロロの方に顔を向けて、カレンと目と目が合う。

「！ あっ……いや！ 何でも無い！ 何でも無いよっ！」

アイシャとの出会いは、カレンにとっては邪な物であり、その時の出来事を思い出した直後にアイシャと目が合って、とても申し訳ない気持ちになって、ほんのり頬が染まり、何でも無いと言って、煩惱を払いつつ誤魔化すようにカレンは咄嗟に視線を逸らしまう。

「？」

当人のアイシヤはカレンが何故そのような反応をするのか分からないようだった。

「あれあれ……？ カレン君……何をそんなに慌てているのか……？」

カレンの思わぬ反応にロロのニヤケ顔が更に肥大化し、反応を楽しむかのようにロロはぐいぐいと肘でカレンの身体を押して、何を隠せているのかを聴き出そうとする。

「な、何でも無いよ……！」

こればかりはカレンもロロには言う事が出来ず、何とか誤魔化そうと考え込むとある事を思い出した。

「そ、そういうロロだって、あのクレオさんって言う人とは知り合いなのか？」

「ヴェっ！？」

クレオという単語を出ただけでロロの口から苦痛とも呼べるような声が返って来た。

「ば、馬鹿言えっ！！ あ、あ、あ、あんな人と俺が知り合いな訳無いだろ……！」

さっきまでのニヤケ顔がクレオと言う言葉が出て来ただけで何処かに消えてしまい、照れ隠しのような赤く染まった顔で無く、一番恐れていた事が起きたような真っ青な顔でクレオとの関係を大声で全力否定するロロ。

「え、でも何かロロの事を親しそうに呼んでいたよ？ ねえアイシヤ？」

「そうだね……確かにロロちゃん……って、ちゃん付けで呼んでいたよね？」

どうやらアイシヤはクレオと言う言葉が出て来た所から話を聞いていたようで、カレンに話を振られて、アイシヤも話に加わる形となった。

「い、いや、あれはあっちが勝手に馴れ馴れしく呼んでいるだけで、

別に俺はそう呼んで欲しい訳じゃないし、ましてや親しい関係じゃない!!」

「そうなの？」

「そうだよ!」

あくまでもクレオとはそんな仲では無いと言い張るロロは、何かを必死に隠そうとしているようにも見える。

「でも知り合いでも無いのに、何で君は相手の名前も知って、相手も何で君をちゃん付けで呼んでいるの？」

「ぐっ!!」

痛い所をアイシャの鋭い指摘に突かれて、口籠るロロは額に一滴の汗が落ちる。

「そういえば、そうだね……………どうなのロロ？」

「だ、だから、それは……………その……………」

青ざめた顔に引きつった表情が加わり、まるで今のロロは、追い詰められて戸惑っているネズミのようだった。

「あ、あの人とは今日初めて出会ったばかりで……………そ、その出会った時お互いに名前を教え合ったんだよ!」

一先ず冷静に事情を説明しようとロロは、落ち着いた態度でカレン達と話そうと試みる。

「へえ、そうなんだ……………それじゃあ僕とアイシャと同じだね」

「そうだ! だから別に知り合いって関係なんかじゃないんだ!」

そんなに知り合いと見られるのが嫌なのかロロは、知り合いを強く強調して知り合いでは無いと言い、自分とクレオの関係を示す。

「じゃあ、どういう関係なの？」

「そりゃあお前……………か、顔見知りだよ!」

「顔見知りって言うのはお互いに顔だけを覚えている関係の事だよ」

「えっ!? そ、そうなのか？」

使う言葉が間違っているとアイシャに指摘されて、ロロは顔をギョツとさせる。

「知らないなら言っておくけど、お互い顔も名前も覚えているなら一応知り合いつて事になるよ」

「ああ、じゃあ、やっぱり知り合いなんだね？」

「い、いやいや待て待て！　どうしてそこでまた知り合いつて事になる！？」

せっかくの知り合い疑惑を解こうと後一步手前まで来たのにアイシヤの発言により、逆戻りになってしまったロロは、また慌てふためく。

「何度も言わせるな！　俺とあの人は知り合いなんかじゃなーー！ー
ーい！！！」

「でも、顔見知りじゃないなら、知り合いつて事だよね？」

「一応ね」

必死に抗議するロロを余所に、カレンとアイシヤはお互い冷静なまま話し合う。

「それにしても、君は何でそこまであのクレオって言う人と知り合いなのを拒むの？」

「だ、だから、俺は……………」

またアイシヤの鋭い指摘に、ロロは顔を曇らせ、歯切れが悪くなる。

「……………もしかして、その人と何かあったの？」

「ギクっ！！」

「ぎく？」

今度は核心を突かれて、心の動揺をわざわざ分かりやすい擬音の声で表現したロロにカレンはロロが言った擬音の意味が分からず、首を傾げる。

「な、無い無い！　そんな事断じてない！！」

分かりやすい反応しておいて、必死に全力否定するロロの姿は説得力皆無であり、しかも全身汗だくになっていた。

「にしては、すごい慌てようだね？」

「ロロ、すごい汗だよ」

「こ、これは暑いだけだ！　何故か身体がすごく暑くなって汗を掻

いているだけだ!!」

無理がある言い訳するも、ロロの冷や汗は次第に量を増やしていき、顔色も青から紫に変わったように変化していた。

「と、とにかく! これ以上俺とあの人との話を言わないでくれ!」

「どうして?」

「ど、どうしてって、お前……………!?!?」

話の中断を申し込むロロだったが、意外にもカレンが理由を聞き返して来て、意表を突かれたロロは戸惑ってしまう。

「聞いちゃいけない事なの?」

「いや、だから……………」

「言えない事なの?」

「あの……………その……………」

さっきまでは自分が問い詰めていた側だったのに、いつの間にか自分が問い詰められている側になっている事にロロは、頭が混乱して目が上下左右に泳ぐ。

「ロロ、知り合いつて聞かれた時から何か調子が変わだよ?」

「クレオさんとは本当に何も無かったの?」

「……………」

さすがカレンもロロの不審な態度に違和感を覚え、アイシャと一緒に指摘するが、何も言い返せなくなったのかロロは、沈黙状態になり、口を閉ざして顔が下に俯く。

「ロロ?」

「……………大丈夫?」

精神的に追い詰めた事に気付いていないカレンはアイシャと共に顔を下に俯かせたロロを心配そうに見詰めると、ロロの重く閉じていた口が動き出した。

「わかった……………わかったから、俺とクレオさんは知り合いつて事で良いから、もうこの話は終わられてくれ!! もうこの話終わり!!!!」

腹の底から力を入れて、お願いだからもうやめたと両手を大きく上に伸ばしながら心の声を叫ぶロロ。

「……………」

思わぬ心の叫びに呆然とした二人は、無言でお互いの顔を見合わせる。

「（これ以上、もう何も言わない方が僕は良いと思うんだけど）」

「（うん、私も同意見）」

もうこの話には触れないでおこうとお互い目で語り、二人はアイコンタクトという形でお互いの意見を察する。

「……………まあ、そこまで言うならもう詮索するような発言は言わないよ」

「うん……………ロロがそう言うなら僕もこれ以上は何も言わない」

ロロの懸命な思いを二人は察したのか、カレンとアイシャは気を遣い、これ以上クレオの話に踏み込まないようにすると伝える。

「そっか、それなら良い……………」

二人の答えを聞いて安心したのかロロは、テンションはガクッと下がってしまったが、顔色が紫から通常に戻った。

「ふう……………」

「？」

「……………」

何とか難を逃れ、一安心の溜息を零すロロを見てカレンは、何故ロロはクレオの話をするのが嫌なのか分からない様子であり、それに対してアイシャは、理由は分からないがロロはクレオに対して並み成らぬトラウマを感じていると察していた。

「！」

そうこう話していると、カレンは自分の肌に何かを感じた。

「これは……………風？」

自身の髪の毛が左右に揺れ、肌に微かな風を感じたカレンは、通路の先を見詰める。

「アイシャ、これって？」

この地下水道に入って僅かでも肌に風を感じなかったが、此処に来て肌に感じるぐらいの風が髪を揺らした事にカレンはアイシャに尋ねようと顔を向けると。

「うん、どうやら出口まであともう少しってとこだね！」

手に持っているマツチの火が、前によりも更に大きく揺れているところを見詰めながらアイシャは、カレンの質問を予知したのか出口は近いと答える。

「え……………マジか？ それマジか!？」

出口が近いという言葉に反応したロロは、喰い付くように真偽を尋ねる。

「間違いは無いと思うよ」

根拠は無いが確信に近い物を感じたアイシャは、ハッキリと答える。

「はあ、これでやっと出られるぜ！」

ようやく外に出られる事に少し元気を取り戻したか、ロロの顔に生氣が戻る。

「ところでさ、ロロ」

「？ 何だ？」

用がなければ自分から話し掛けるタイプでは無いと思っていたアイシャが、いきなり自分のファーストネームを呼んで来てロロは、意外そうに返事をする。

「君、この地下水道に入る前にマンホールの中で何かしていたよね？ あれって一体何をしていたの？」

何かと思えばアイシャは、自分達が地下水道の中に逃げ込む為にマンホールを伝って入った時に最後に入って来たロロが途中、マンホールの中で何かをしていた事に尋ねて来た。

「ああ、あれか……………あれは追跡対策って奴だ！」

「追跡対策？」

何時言おうかと忘れていたロロはマンホールの中でしていた事を追跡対策と言い張り、相変わらず言葉の意味が分からないにカレンは

首を傾げる。

「その追跡対策って？」

カレンの分からない事を代わりに聞くようにロロの言う追跡対策を詳しく聞くアイシャ。

「それはな……………コイツをマンホールの蓋に貼り付けていたんだ！」

そう言うとロロは腰に掛けていた鞆から蓋が締まってあるオレンジ色のスライムのような物が入った瓶を取り出し、その瓶の蓋を取る。

「！！！」

それぞれロロの隣に居たカレンとアイシャは、瓶の蓋が開けられた瞬間、咄嗟に片手で自身の鼻を摘んだ。

「どうだあ！　すげえ……………匂いだろ！？」

瓶の中に在るオレンジ色のスライム状の物体から異様な悪臭が漂い、その悪臭が自分の鼻を襲い掛かっているのにも関わらず、自慢げに見せつけるロロ。

「ろ、ロロ、そ、それって何？」

あまりの匂いにロロの隣から離れるカレンは、自身の鼻を摘まんで少し鼻声になりながら瓶の中に在る異臭を放つ物体について問い掛けた。

「これはな、俺様が結構前に徹夜で作った自信作。ロロ特製スライム接着剤だ！」

顔がまた青くなる程の襲い掛る異臭を我慢しながら、ロロは懸命に瓶の中のスライムについて語る。

「こいつは名前通りに強力な接着力を持ち、張り付いたら大の大人が何人掛かりでも剥がせないスライム状の接着剤なんだ！」

「それについては、私も知っている」

盗賊達と戦っていた時にロロがこのスライムを使っていたところを間近で見ていたアイシャはその威力と臭さを知っていると鼻を摘みながら答える。

「ど、どうしてそんなに臭いの？」

何故、それはそんなに臭いのかと素朴な疑問を聞くカレン。

「それはな、こいつを作る時の主な原料が『ドリアロ』だからだ」
「『ドリアロ』？」

また聞き慣れない名前に首を傾げるカレンに口口は、スライムから放たれる異臭の所為で呆れる事も溜息も出せず、仕方なくそのまま気にせず、説明を続行させる。

「『ドリアロ』って言うのは、この大陸原産の果物で、コイツには果物でありながらとても強烈な匂いが在るんだが、それと同時に強い接着性と粘着性が在ってな、それを利用してその他モロモロの原料等と混ぜ合わせて、これが出来たんだ！」

持っている瓶の中に在るスライムに指を指して、口口は『ドリアロ』の正体とそれを使ってスライムを作ったと語る。

「いやゝゝコイツを作ろうとした時はホント苦労したぜ！ 何てたってコイツの作り方自体はそう難しくはないんだが、主な原料たる『ドリアロ』の匂いが知っての通り強烈でな、作る時に匂いが邪魔して、作業にとってもじゃないが集中できないんだよ！」

話に出ている、手元に在る匂いの元凶に耐えながら口口は、その元凶を作っていた時の過去について振り返るように話す。

「おまけにコイツを作っている時には、匂いが広範囲に行き渡るんだぜ！ 例え俺の部屋でこれを作っても、匂いが家の中全体や家の周辺にまで広がっちゃうんだ。御かげでイミナには叱られるわ、近所からは苦情が殺到するわでホント苦労した！」

「そ、そうなの……………」

鼻が曲がる程の匂いが身体の周りに充満しているのに過去の創作秘話を懐かしむように話す口口に、カレンは引きながら相槌を打つ。

「苦労して完成させたのは良かったんだが、これを作った件でイミナからしばらく避けられるし、村の皆からこれを作る時は村の中じやなくて、村から離れた所で作れ！ って注意されるし、散々だった……………」

「それは仕方無いと思うよ」

作った後の苦労話も話すロロだったが、アイシャのもっともな意見が飛ぶ。

「まあ、それはさて置き、コイツは接着力や粘着力がマジパネェかな！ 敵に張り付かせたら動きを封じる事が出来るし、おまけにこの鼻がおかしくなりそうな匂いは動物や魔物が極端に嫌う匂いだから、魔物の避けにもなるんだぜ！」

ロロはまた自慢げに自身の自信作の特徴を説明し始めたが、とうとう眼が匂いに刺激されたのか、眼から大粒の涙がボロボロと降り落ちていた。

「どうだ！ 凄いだろ！？」

「確かに世界で三番目に臭い食べ物である『ドリアロ』をこんな風に使うなんて、ある意味凄いなと思うよ」

「えっ！？ これより臭い食べ物はまだ二つも在るの！？」

大粒の涙を零しながら、自信作の評価を窺うロロにアイシャは色んな意味を含めてある意味と褒め答え、一方カレンはロロの問い掛けを余所にアイシャが言う、目の前に存在している異臭を放つスライムの主な原料であり異臭の元凶でもある『ドリアロ』より、臭い物が世の中にはまだ二つ上に在る事を知り、驚愕する。

「で、さっきも言ったがコイツをマンホールの蓋に貼り付けて、追手の兵士達を追ってこさせないように、細工したって事さ！」

「な、なるほど……………」

マンホールの中でロロが行っていた事情を理解したカレンは、ロロの顔色が紫に変わった事に気付き、その所為で返事の歯切れが悪くなった。

「それより、もういい加減、蓋閉めたら？」

何時までも開けているつもりなのと言いたげにアイシャは、ロロに蓋を閉めるように提言する。

「あ、ああ……………そうだな」

アイシャに言われて、ロロも自信作のスライムについて十分説明は伝えたと思い、素早い手付きで瓶の蓋を匂いが漏れないように力強

く
閉
め
た。
。

重大なミス

瓶の蓋が閉められ、瓶の中から漂っていた悪臭は消え去り、それを確認したらカレンは鼻から手を離し、一安心の溜息を吐いて胸を撫で下ろした。

「ロロ、平気なの？」

顔がまた紫に変色し、大粒の涙を今でも流し、鼻水も少し垂れているロロにカレンは心配して身体的や精神的の両方面について安否を尋ねる。

「モヒロン（もちろん）、ダイジョビイ（大丈夫）だ！」

「……………」

今度は鼻をやられたようで、完全な鼻声になっており、声が鈍りながら大丈夫だとこれもまた説得力が皆無なロロにカレンは啞然とし、アイシャは顔を下に俯かせて無言で呆れる。

「声が変わだよ、ロロ」

「シイパシスルマ（心配するな）！ スムナホル（直ぐ治る）！」
瓶の蓋を閉めても匂いはまだ消えておらず、カレンは未だに鼻を摘まみながら、ロロの声が鼻声になっている事をロロ自身に伝えるが、ロロは声が鈍ってよく分からないが心配するなど自信あり気に答える。

「……………」

「？ アイシャ？」

「ドジダンダヨ（どうしたんだよ）？」

言い出しっぺのアイシャがロロのマンホールの中で行っていた追跡対策とそれに使ったスライムの説明を詳しく聞き終わった後、急に考え込むように黙りだしたのでカレンとロロが声を掛ける。

「うん、君があの時マンホールの中でしていた事は大体分かった、でもそうと分かれば、急がなきゃイケないかも」

「ドウユウボトダモ（どうゆう事だよ）？」

説明を終えた後、ロロの事情を理解したアイシャが何故、急がなければならないと発言した事にロロは意図が読めず、その訳を尋ねる。「君がやった追跡対策は恐らく追手をこの地下水道に追って来させない或いは追手の追跡距離を大幅に空けさせたと思う……………」
「けど」

「けど？」

ロロが行った追跡対策がどのような効果が得られるか、アイシャは憶測でその効果を述べるが、最後に？けど？と呟き、カレンは同じ言葉で聞き返す。

「追って来させないように蓋に細工したという事は、私達が地下水道に逃げたという事を示している事にもなる」

「！」

蓋に細工して地下水道に入って来させないようにした事は、逆に言えば自分達が地下水道に入った事をわざわざ教えているとアイシャは述べ、ロロはそこまで頭が回らなかったのか、その推測にギクリと身体が反応した。

「それって、僕達がこの地下水道って言うのに逃げ込んだ事が、バレちゃうって事？」

状況が良く読めないカレンであったが、話の流れからにして核心を突いた答えを自分なりに考えて出した。

「そう、追手の軍人達が私達の逃走ルートを勘付いている可能性が高い！」

「じゃあ、追手の人達が来ない内に早く逃げた方がいいかな？」

「ううん、その心配なら要らないよ」

心配ないとアイシャは首を横に振って答える。

「どうして？」

「だって、今私達が此処に入って随分経つけど、現地点で外に繋がっている出口に近付いているのに追手が来ている気配は感じられない、これは多分あちらが今私達を追い掛けても追い付けないと判断

したからだと思うんだ」

追手がこの地下水道まで追って来ていないという事は、トロイカ軍が追跡を諦めたとアイシャは推測ではあるが、可能性が高い為カレンにそう教える。

「だったら、急ぐ事は無いんじゃない？……」

「でもロロが細工したマンホールの蓋が発見されていれば、私達が地下水道に逃げた事は恐らくあちらは気付いていると考えて良い、そうなる私の予測が当たっていれば追手はともかく、他の問題が出来てしまう」

嫌な予感がするのかアイシャは自分の予測が当たっているかとも思いい、目付きが鋭くなる。

「えっ、追手の人達が来ないのに、まだ問題が有るの？」

カレンはアイシャの言う他の問題が出来てしまうという発言の意図が分からないでいた。

「もし、あちらが追手……つまり人の手で追う事を止めて、それとは違う別な手で私達を捕える事にするのかもしれない！」

「別な手で？」

人の手では無く、何か別な手で自分達を捕まえに来るかもしれないとアイシャは推測し、

カレンはその別な手とは何なのか、見当は付かないが何となくまずい気がした。

「この軍用都市『レイチウム』に居る『トロイカ』軍がここ最近、大型のバトル・マシーンを配備したっていう情報を耳にした事が有るんだ」

「オオバタノ、バトル・マツーン（大型の、バトル・マシーン）？ちよつと鼻声が治ってきたようで、今までより発音が良くなったロロは、アイシャが耳にした情報が気になったのか、会話に再び参加するように入って来た。

「それがどうかしたの？」

「そのバトル・マシーンを使って、私達を捕まえようとするかもし

れないって事！」

「な、何だって!？」

アイシャの推測に口口はビックリして鼻声が治ったみたいで、発音が元に戻った。

「待てよ!　いくら何でもそんな物使ってまで、俺達を捕まえようとするのもどうかと思うぞ、さすがに!!」

「そうだね、いつも此処レイチウムの指揮を担当されている司令官である将官達ならそこまでやらないと思うけど、でも今日は、彼らは不在なんだ」

「不在？」

さすがにやり過ぎだとアイシャの推測に口口は反論するが、その推測の根拠はこの『レイチウム』に居る『トロイカ』軍を指揮している将官達が今日は、不在で有るとアイシャは冷静に話す。

「不在って、不在だからどうしたって言うんだよ!？」

「今週に当たって、此処レイチウムの『トロイカ』軍は合同演習で兵士の大半は出張に出っていて、その合同演習を指揮する為に今さっき言った将官達が一緒に出張しているんだ………で、今此処レイチウムの留守番つまり指揮を代わりに任されている人物が居る!」

淡々とアイシャは、将官達の不在の理由を説明し、そしてこの『レイチウム』の『トロイカ』軍基地の指揮を代わりに任されている人物について話し出す。

「その指揮を任された人物は、通称『魔弾まだんの巨兵』という異名で呼ばれている人物なんだ」

「？」

「!　魔弾の………巨兵!」

もちろんカレンはそのような事は知っておらず、頭の上に??のマークが浮ぶが、どうやら口口は知っているようで、その異名がアイシャの口から出て来たら、眉がピクッと反応した。

「話を聞けば、その人は豪傑で屈強の軍人であり、幾多の紛争で多大な功績を上げ、他の国々から『魔弾の巨兵』と名付けられ、恐れ

られている程の人物でもあるんだ」

「その人と今出口に急いで向かわなければならぬ事と一体何の関係が有るの？」

アイシャが説明するその人物の話の流れから意図が読めないカレンは、それが一体何故自分達が出口に急がなければならない事に繋がっているのか、相変わらず分からないという顔をして、首を傾げる。

「それは、噂によるとその人は、規律に対してはトコトン厳しい人物だと言う事だよ」

「えっ？」

今更であるが規律とは何なのか、意味を根本的に理解していない記憶喪失のカレンにとっては、アイシャの言っている言葉の意味を理解する事など出来ず、首を傾げ続けた。

「聞いた噂が正しければ、多分その人は、規律を乱した私達や盗賊達をどんな手を使ってでも捕まえようとする！ 私の推測が当たっている話だけだ」

「いや、お前の読みは多分当たっているよ」

と口口はアイシャの推測を勧める。

「合同演習の話が本当なら盗賊達がバトル・マシーンを盗めたのも納得がいく！」

アイシャがさっき話した合同演習で、兵士の大半が出張しているならば、此処の警備が薄くなつて、盗賊達が容易にバトル・マシーンを盗み出したと物事の経緯を自分なり推測したようだ。

「『魔弾の巨兵』が今此処の司令官なら、アイシャの言った通り、どんな手を使ってでも俺達を捕まえる筈だ、絶対に！」

力強くそう言い放った口口は、顔が険しくなり、態度も何処かいつもの飄々とした感じでは無く、奮然としたような雰囲気だった。

「そう分かればこんな所でチマチマ歩いている場合じゃない、急ごうぜ！ とつとつこの地下水道から出るんだ！」

「う、うん！」

「……………」

二人の意見を聞かずに強引に出口に向かおうと促したロロは歩く速度を上げ、通路の奥をガンガンと進み始め、急に態度が変わって歩くスピードを速くしたロロにカレンは不審に思いながら、返事をし、同じく速度を上げ、アイシヤは無言で頷き、ロロのスピードに合わせるように隣を維持しながら歩き続けた。

「……………」

カレンはロロの隣を歩きながら、ロロの顔を見詰め、何故ロロが急に雰囲気や態度が変わえて、出口に急こうと強引に促した事の原因を考えた。

「……………」

何処か落ち着きが無いと感じる強張った表情をして無言で歩くロロの姿は、何かに囚われているように見える。

「（もしかして……………!）」

するとカレンの頭の中である事が過ぎった。

「ねえ、ロロ」

「? 何だよ?」

出口に急こうと奮然な態度で、隣を歩いているロロにカレンは声を掛ける。

「もしかして、焦っているの?」

「!」

この一言にロロは動じたように目が見開いた。

「な、何なんだよ、いきなり!」

「だって、ロロいつもと何か感じが違うから、もしかしたら焦っているんじゃないかって思って……………」

「あ、焦っているって、お前、な、何にだよ!」

妙に鋭く自身の心情をカレンに突かれて、ロロはカレンの言った通り、焦った口調になっていた。

「ロロ、自分の所為で、僕達がこの地下水道に居るって事が追手の人達にバレちゃったかもしれない事に、責任を感じて、焦っているんじゃないの?」

「っ！」

「またもや核心を突かれたのか、再び目を見開くロロ。」

「もし、そうだとしたら、僕は気にしてなんかいないよ」

「えっ？」

「不覚にもカレンに意表を二度も突かれたロロであつたが、この一言に今度は言葉を失う。」

「だって、ロロは僕達の為に追手の人達を来させないようにあんな事をしたんでしょう？」

「い、いや、俺は……………」

「だったら、自分を責めなくても良いよ、ロロがやった事が僕達の為なら、僕は嬉しいし、それが例え逆効果になつたとしても、僕はロロの所為だとは思ってなんかいないよ」

「……………」

自身が行つたマンホールの蓋の細工の所為で自分達の居場所が追手の『トロイカ』軍が勘付いているかもしれない事にロロは責任を感じているのではないかと思つたカレンは、ロロに自分は気にしてはいないから、自身を責めないでと伝える。

「失敗は、誰にだつてあるさ……………問題はその失敗をどう未来に繋いでいくかが大切な事だと思うよ」

カレンに続いたつもりなのか、アイシャは自分も気にしてはいないと遠回しに伝え、そしてさりげなく、アドバイスも告げる。

「君が今、何かに囚われているかどうか分からないけど、今そんな状態じゃ、いざと言う時に冷静な判断は出来ないよ」

「だからさ、自分を責めて、焦るのは止めよう。今は落ち着いて出口に向かおう、ね？」

「……………」

カレンは純粹にロロの事を思い、アイシャは今後の事態の為、要するに二人は、自分達は本当に気にしてはいないから、焦らずに落ち着いて行動しようとロロに促すつもりで言つたようだ。

「悪い……………本当はお前達の言っている事とは、まったく」

別な事を考えていたんだけどよ……………」

気を遣わせてしまったと悟ったロロは、歩く速度を緩め、カレンとアイシャの両方に目を配り、二人もロロの歩く速度に合わせるように同じく速度を緩める。

「でも、焦っていた事は確かだな……………けど、お前達の御かげで気分が晴れたよ」

険しいなった表情は消え、今度は清々しい顔になったロロは、二人を見詰めて、ニヤツと笑顔を見せる。

「ありがとな、カレン！……………それとアイシャも！」

「うん！」

「感謝される程の事は言ったつもりはないけど……………でも気持ちには有り難く受け取って置くよ」

素直に礼を言うロロにカレンも素直に受け取るが、アイシャはそこまで求めて言った訳では無いらしく、これも遠回しで受け取る。

「「「！」「」」」

すると、話しながら歩いている三人に通路の一本の曲がり道が現れ、その通路の奥を覗いて見るとある物が目に入った。

「あれは……………！！」

カレンは目を見開いた、そこには曲がり道に道の通路の奥に更にまた曲がり道に光が差し込んでいた、その光は浄化石の光では無く、太陽の光だった。

「出口だ！」

曲がり道の更に奥の曲がり道に外からの日差しが差し込んでおり、それを見たロロは外に繋がる出口だと確信して、反射的に身体が前に出て、二人より一歩先に駆け出した。

「あっ！　ロロ、待ってよ！」

一人で駆け出したロロに追い掛けるようなカレンは、名前を呼び掛けて、同じく小走りで駆け出し、アイシャも続くように駆け出す。

「間違いねえ！　あれは地上の光だ！」

ロロはやっと地上に戻るのが嬉しいらしく、今日、『水底の洞窟』

を抜けた時と同じぐらいの嬉しさが込み上げ来たみたいだった。しかし………

「「!？」」

突然三人の耳に、不思議な音が入って来た。

「お、おい、この音は？」

シャーシャーっと、まるで車輪が高速回転で壁を磨り削っているかのような音が突如、前触れも無く地下水道内に響き渡る。

「アイシャ、一体これは………」

「しっ！ 静かに！」

地上の光が差し込む曲がり道まで後、数十メートルのところ、急に何処から響いて来た謎の音によって、三人は足を止めてしまい、カレンはこの音の正体をアイシャに尋ねようとしたが、その前にアイシャから静かにするように口止めされる。

「………」

神経を研ぎ澄ますように両目を瞑り、声や息も出さず、地下水道内に響く、謎の音が何処から聞こえて来るかをアイシャは探り当てようとしていた。

「この通路の奥から………!!」

ゆっくりと目を開けたアイシャは、光が差し込む曲がり道を通り過ぎた奥の通路に目を向けて、二人に聞こえるように言う。

「この奥に………!!？」

アイシャの視線に釣られて、カレンとロロは三人揃って、謎の音の発振先と思われる数十メートル先の出口である曲がり道を通り過ぎた更に奥の通路に目を向ける

「………!!？」

三人は眼を凝らして、通路の奥を見詰め続けると、ロロだけがある物を捉えた。

「何だ、あの光？」

「「え？」」

カレンとアイシャには見えていないようだが、ロロには微かではあ

るが、二人の目では見ない距離にそのある物を肉眼で捉えていた。

「何が見えるの!？」

自分の目では見ない物を見えている口口にアイシャは、それが一体何なのかを問い掛けた。

「浄化石とは違う……………違う光が幾つも見える」

口口の目には、この地下水道内を照らしている浄化石の光の中に違う光が幾つも混じっていると映っているようだ。

「赤い……………光？」

その幾つもの光は赤い色だと口口は小さく呟く。

「(……………気を付けろ! ………………大きい何かが来る!)」

「! !」

身体に電撃が走ったかのようにまたあの謎の音がカレンの頭の中に響いた。

「く、来るって、また何か来るの!？」

『水底の洞窟』の時と同じように謎の音が何かが来ると一方的に警告を知らせに来て、また不意を突かれたカレンは思わず、声を上げてしまう。

「! ………………カレン？」

誰かと話しているみたいに急に喋り出したカレンにアイシャは目を見開いて、どうしたのかと名前を呼んで、気は確かかと確かめようとした。

「! 光が……………近付いて来る!？」

二人を余所に口口は、その赤い幾つもの光が自分達の方へ近付いていると気付く。

「近付いて来る?」

異変に気付いた口口にアイシャは、さっきのカレンの言動は一先ず置いて、再び奥の通路に目を向ける。

「あれ? 音が大きくなって来る?」

釣られてカレンも奥の通路に目を向けると、今でも地下水道内で響

いている不可思議な音の音量が大きくなっていると気付く。

「そ………そういえば、そうだな！　あと、何か揺れも起きてないか？」

音が前によりも五月蠅いとカレンの御かげで気付いた口は次に地下水道内が揺れていないかと辺りを見渡して言う

「確かに………揺れている！」

しゃがんで地面に真っ直ぐ伸ばした人指し指を当てて、揺れを感知したアイシャ。

「あっ！　光だ！」

すると口口にしか捉えきれなかった赤い光が、カレンに捉えきれる程に近付いていた。

「（もしかしてさっきの言っていた、大きい何かって………：……あれの事か？）」

警告のように謎の声が知らせにきた内容を思い出したカレンは、やっと自分にも捉える事が出来た光が、内容の本命である？　大きな何か？　ではないかと思いつく。

「ま、まさか………あれって………！？」

「？」

二人が赤い光を肉眼で見える距離なった途端、二人よりずっと奥の方でも目が利く口口には何かが見えたのか、顔色が曇り、カレンは何を見てそんな反応をするのか、今口口の眼が捉えている物は一体何なのか、予想が付かなかった。

「アイシャはあれって………：………」

「多分、今口口が想像している物と一緒に物だと思うよ」

遠い通路の奥に光る赤い光の正体が分かったのか口口はアイシャの意見を聞こうと声を掛けると、言われる前に悟ったのかアイシャは気が利くように今、自分と想像している物と同じだと答える。

現れた巨大兵器

腰に掛けてあるホルダーから手と同じ大きさの銃を取り出し、銃を構えて遠くで光る赤い光を睨むアイシャ。そして、その赤い光は早いスピードで走っているみたいで、みるみるとカレン達の方に近付いて来た。

「間違いない！」

車輪が奏でる走る音を聞いてからアイシャの予測を大体形作っていたのか、次に見えてきた赤い光を見えた途端、確信づいたようだ。

「！」

最初は豆のように小さかった赤い光が、カレン達の方に近付いて行くにつれ、光はどんどん大きくなっていき、同時に地下水道の中で響く不可思議な音も音量が大きくなり、そして赤い光の後方にこれまた大きな影をカレンは捉えた。

「あれは……………！！！」

影は地下水道の空間内を上下左右に火花を走らせながら移動しているみたいで、その火花が走る音が謎の不可思議な音の原因ようで、カレンには影の形にしろ、大きさにしろ、とても人間には見えなかった。

「こいつが、大型の……………！！？」

「BAT^{バトル}TLE・MA^{マシン}CHINE！！」

その影の正体は、赤い光の正体であり、地下水道内を騒がしくした不可思議な音の正体であり、地面を揺らした正体でもあり、それはカレン達から数メートル離れたところで止まり、姿形がハッキリと見える距離になると、それを『BAT^{バトル}TLE・MA^{マシン}CHINE』だとアイシャは言った。

「これが！」

今まで見た見知らぬ物とはまた異質な外見にカレンは相手の全身に

目を通す。六角形の顔にさっきまで遠くで見ていた幾つもの赤い光を放つ目、ズッシリとした四角形の胴体、足元に車輪が付いた縦長で八本の足、鋭く尖った三角形の尻尾、そしてグレー色の鋼鉄の体を持ち、尚且つまるで生き物と思われるような姿をした、巨大なバトル・マシーンがカレン達の目の前に立ち塞がった。

「で、デケエ!!!」

空間内を埋め尽くす程の巨体に口は『水底の洞窟』で遭遇した巨大なハサミと身体そして硬いウロコを持った白い魔物と重ね合わせる。

「TYPE II TYRANT!」
タイプ
タイラント

現れた巨大なバトル・マシーンにアイシャは外見上だけで、種類を判別し、そのバトル・マシンの名称を呟く、するとバトル・マシンの顔と思われる六角形の顔の額部分からある小さな穴が浮び上がるように何故か光の反射で少し光って現れた。

「?」

「まずい!」

額部分から現れた小さな穴が一体何なのか、勿論カレンには分からないが、アイシャには分かる様で、素早く銃の標準を額部分の穴に合わせ、数発の銃声が空間内に響いた。

「(!!)」

放たれた複数の銃弾は額部分に出た小さな穴に全て当たり、当たった小さな穴はパリーンとガラスが割れた音が鳴った、どうやら穴にはガラスが張っていたようで、穴が現れた時の光の反射は、ガラスに因る反射だったようだ。

「い、一体どうしたんだよ! アイシャ!?!」

アイシャの突然の発砲に驚く口口。

「今、あのバトル・マシンの監視カメラを破壊したんだ!」

「監視カメラ!?!」

撃ち込こまれたバトル・マシンの額部分の穴を監視カメラと言われて、口口は穴に中を覗こうと目を凝らす。

「監視カメラって？」

「出た！ そのお決まりの質問！」

「……………監視カメラって言うのは、様々な目的で監視を行う為のビデオカメラの事で、映した映像の伝送・処理および表示機能を含む監視システムを指す物だよ」

最早パターン化してしまったカレンの質問に口はもう何となく予想が付いていたのか、お決まりだと突っ込みを入れ、アイシャは特に何も突っ込まずに説明を開始する。

「監視カメラは、主に防犯、防災、計測・記録の目的で使われている道具でもあるんだが、今逃げている俺達にとっちゃ、危険な物だ！」

「しかもあの監視カメラはリアルタイムで、映した映像を記録して、映像の伝送先に送る性能の高いカメラでも有るんだ！」

物を知らないカレンにとっては、此処に来てまでも知らない物ばかりであり、度々人に尋ねるところは記憶喪失であるから仕方がないかもしれないが、その事情を知らない上に説明する側は、一筋縄ではいかない程、大変だと口口やアイシャ達を見れば、分かる。

「今、此処で私達の顔を撮られたら例え……………この地下水道を出たとしても、カメラで撮って記録した、私達の顔が手配書を作られた時に写されてしまう！ そうなったら他の町や村に逃げても、結局お尋ね者になってしまんだ！」

「だから、あの監視カメラを破壊したんだよ！」

「……………え……………」

二人の説明を聞いても、頭で理解する事が出来ないカレンは、声を唸らせるだけだった。

「つ、つまり、顔を見られたら駄目だって事？」

常識や世間に疎いだけでは無く、知識についても欠落しているカレンであっても、これも自分なりに考えて、答えを出してみた。

「……………まあ、極端に言えば、そうだよ」

「何も分かつちやいないと思うが、無理に考え過ぎて混乱させるよ

りはマシか……………」

悩んだ末にカレンが出した結論に極端の一言で結論付けるアイシャとこの緊急事態に変に悩んで、戸惑わせるより、これから起こる次の事態に備え、支障を起こすようなマネは避ける為、とりあえず何でも良いから納得させるように突っ込むのをやめておく口口。

「ピピッ！ ガガッ！」

「「！？」」

突如、バトル・マシーンから耳鳴りと間違いそう音量の高い雑音が流れ、カレン達は一斉にバトル・マシーンに視線を戻す。

「聞こえるか！？ 容疑者の三人組！！」

バトル・マシーンから鳴る雑音の次はカレン達を呼び掛ける声が鳴った。

「喋った！？」

「違う違う！ あの声は多分、あいつを操っている『トロイカ』軍人の声だよ！」

バトル・マシーンが喋ったと勘違いしたカレンに、お約束の突っ込みを入れる口口。

「だが、監視カメラは壊したよな？ どうやって俺達を見ているんだ？」

「恐らく、赤外線カメラである、あの赤い眼で私達を目視しているんだよ！」

相手（『トロイカ』軍人）が三人組と言ったという事は、相手はカレン達の姿が見えている訳であり、監視カメラが壊れたのに何故自分達の姿を捉えているのか、口口は疑ったが、その疑問に対してアイシャは、自分達を見詰めているバトル・マシンの六角形の顔に付いている赤い眼は赤外線カメラで、それを使って、自分達を捉えていると説明する。

「それとあの『タイプⅡタイラント』は生体センサーも有る！ 私達を見つけたのも生体反応を辿って、見つけたんだと思う！」

「そ、そうなのか？」

おまけみたいにアイシャは、目の前に居る『タイプⅡタイラント』と呼ばれている大型のバトル・マシーンには生体センサーも有ると知らせ、ロロはアイシャが妙に詳しいと思いながら、返事を返す。

「君達は『レイチム』で暴動を起こした！ 例え君達が被害者であつても、暴動を引き起こした要因には変わらない、よって法則に従つて、君達を確保する！ 抵抗は諦め、大人しく降伏しなさい！」

セリフからにして規律に準じる『トロイカ』軍人のようであり、バトル・マシーン越しからカレン達に降伏しろと呼び掛けながらジリジリとバトル・マシーンがその巨大な体を前進させ、カレン達の方へ少しずつ近付いて来る。

「抵抗しなければ気害は加えない、降伏を受け入れるなら武器を捨て、両手を上げて、膝を地面に付け！ そしてそのままじっとしているんだ、そうすれば数十分で懲罰部隊がこちらに来て、君達を確保する！」

そしてバトル・マシーンは、地下水道の出口である、通路の曲がり道の前にピタリと止まり、曲がり道への道を塞ぎ込んだ。

「もしこちらに反抗する事があれば、手荒だが、力で君達を捻じ伏せた後から、確保する！ そんな事にならないよう馬鹿な真似だけはしない事を薦める」

軍人は恐らくカレン達をこの地下水道から逃さない為に、自身が操っている巨大なバトル・マシーンの体を利用して、外へ繋がっている曲がり道を塞いで通せんぼし、脱出を断念させ、大人しく降伏させるを試みらしい。

「警告は以上だ！ そちらの答えは行動で示して貰おう！」

バトル・マシーン越しから『トロイカ』軍人はカレン達に警告を伝え終えると、カレン達の返答を待った。

「どうする、アイシャ、ロロ？」

自分は勿論、捕まって牢獄に入れられ程余裕は無いので、大人しく捕まる気は無いが、カレンは二人の意見を聞かずに行動するのは駄

目だと思い、まずは二人の真意を確かめる。

「ここで大人しく捕まれば、この地下水道から出てお尋ね者になるよりは、数日間だけの牢獄生活の方が良いのかもしれない……………」
「……………」けど私には成し遂げなければならない仕事がある！」
まるで自分に言い聞かすように、自分の答えをカレンに話すアイシヤ。

「だから、私はこんな所で捕まる訳にはいかない、これが私の答え」
「……………」わかった」

アイシヤの真意を確かめたカレンは、次にロロの真意を確かめようと視線をロロに向ける。

「……………」カレン、俺はお前やアイシヤみたいに目的が有る訳じゃない、ハッキリ言って、普段俺だったら、ここで大人しく降伏して捕まるのを選んでいた……………」だが、どうしても捕まりたくない理由が出来ちゃった!!」

何かに抗う様にロロの眼は獣のように強くて鋭い物になり、自分の答えを語るロロ。

「だから、俺も捕まりたくねえ！　どんな事があっても、逃げだしてやる!!　これが俺の答えだ!」

「うん……………」僕もそうだよ!」

最後にロロの真意を確かめたカレンは、自分も同じだと小さく頷き、背中に在る魔装器まそうきでもある、大剣に手を伸ばす。

「じゃあ、二人とも……………」行くよ!」

ゆっくりと大剣を抜き取ったカレンは、ロロとアイシヤに目を配り、戦闘の合図を言う。

「うん!」

「ああ、飛ばして行こう……………」ぜっ!!」

合図に乗ってロロは、先制攻撃として腰に掛けてあった鞆から素早く『ロロ特製お手軽爆弾』をバトル・マシンの顔に向けて放つ。

「(!!!!)」

放たれた爆弾は巨大なバトル・マシンの六角形の顔にコンッと当

たり、当たった直後に爆弾は爆発し、耳鳴りを引き起こす程の爆音が地下水道内に響き渡る。

「抵抗する気か!? ならば警告通り、実力を持って確保する!!」
爆風が収まった後、爆発した所から広がる爆煙の中から、少し焦げただけのバトル・マシーンが飛び出し、カレン達に向かって、一直線に猛スピードで突進して来た。

「「!!」」

八本の脚の足元に在る車輪をそれぞれ上下左右の壁を伝って、火花を走らせながらカレン達に急接近したバトル・マシンは、一本の脚を走って来た勢いで大きく上に振り上げ、そのまま力一杯振り下ろした。

「うおっおっ!?!」

「っ!」

「!」

リーチが長い縦長の脚がカレン達の頭上に振り掛り、ロロは慌てて、バトル・マシンの懐に入り込むように飛び込み、カレンはバックステップで大きく後ろに下がって避け、アイシャは向こう岸の通路に飛び移り、攻撃から身をかわし、振り下ろされた一本の脚はコンクリートの地面を叩き碎いた。

「加減無しかよ!!」

攻撃を避けて、バトル・マシンの真下に逃げ込んだロロは確保するって言うっておきながら、その前に殺す気かとバトル・マシンの矛盾紛いの攻撃に突っ込みを入れる。

「(?!)」

「?」

振り下ろした脚を引き戻し、バトル・マシンは六角形の顔、口部分と思われる場所から電気を帯びた2本の黒い棒のような物が生えるように現れ、正面に居るカレンにはそれが一体どういう物なのか、理解出来なかった。

「! 『プラズマ砲』!!」

向こう岸に移ったアイシヤは、バトル・マシンの顔から出て来た黒い棒状の物を『プラズマ砲』と言う物と一目見ただけで判別し、そしてその『プラズマ砲』の標準がカレンに向けられている事も一目で分かった。

「カレン！ 避けて！！」

避けるようにアイシヤは叫んで促そうとするが、時は既に遅し、バトル・マシンの顔から現れた『プラズマ砲』から、高出力の電撃がカレンに向けて放たれた。

「！！！！」

目でハッキリ見える程の高出力の電撃が、自分に向かって一直線且つ広範囲に音速並みの速さで走って来て、カレンは咄嗟に大剣を前に出して、強く念じた。

「ENERGY・FIELD！！」

電撃がこちらに到着する前にカレンの念じに答えた大剣でもある魔^ま装器^{そうぎ}は、山吹色の光を放出させ、光は円状の形と成ってカレンの周りを包み込み、声と共に『ENERGY・FIELD』^{エネルギーフィールド}を展開させ、電撃を弾き返す。

「くう！！」

継続的に放出されている高出力の電撃に、カレンは地上で戦った盗賊達が操っていたバトル・マシンの攻撃力とは桁違いだと、今電撃を弾き返し続けている『エネルギー・フィールド』越しに感じ取るが、同時にそう経たない内に電撃がみるみると弱まり、バトル・マシンは電撃の放出を止める。

「……………」

難なく電撃を防いだカレンは『エネルギー・フィールド』を解き、バトル・マシンの顔に在る黒い棒状である『プラズマ砲』に目を向ける。

「放出時間には限界が有る！ 次のリチャージが終える前に攻撃して！」

どうやら電撃を放出する時間は限られているようで、アイシヤはカ

レンに次の電撃を出す電気を充電する前に、攻撃しろと説明して促す。

「分かった！」

アイシャの説明を直感的に理解したカレンは、次の電撃が放たれる前に大剣の剣先をバトル・マシーンに向け、剣の取っ手部分に在るトリガーを押す。

「BEAM・CANNON!!」

声と共にトリガーを押すと、刃の中央が左右に別れ、刃と刃の隙間からライトピンク色の光の矢が飛び出す。

「!？」

ここでカレンはある異変に気付く、それは自身の大剣から出たビームの出力が上がっている事であった。

「(?!)」

飛んで来た光の矢にバトル・マシンは、脚の一本を使って防ごうとしたが、光の矢は当たった箇所の高い鋼鉄の装甲を色濃く焦がし、脚の装甲を半分溶かし尽くした。

「(威力が上がっている!?)」

以前この技使った時には、これ程の威力は誇ってはおらず、カレンは何故突然この技は威力が上昇したのか疑問を抱く。

「(……………そういえば、今までこの状態でこの技は使った事がなかったっけ?)」

思い返して見ると、今の太剣の姿で殆どの技を使った事が無いとカレンは思い出す。

「(……………! ………………!)」

と、考えている内にバトル・マシンは反撃に移そうと、態勢を立て直し、攻撃の準備に取り掛ろうとしていた。

「(考えている場合じゃないか……………今は戦わないと!)」

今は考えている暇は無く、戦いに集中しなければと頭を切り替えたカレンは、再び太剣の剣先をバトル・マシーンに向け、カレンはトリガーを連続で三回も押す。

進して行った。

「!?!」

「(?!?!)」

音速のスピードで前進して行った衝撃波はバトル・マシンの顔の右目部分に直撃し、この攻撃により前の攻撃で破損していた右目部分は、右目部分から上は吹き飛んでしまい、その衝撃で発射寸前の『プラズマ砲』の標準が大きくズレ、高出力の電撃は見当違いの方向に発射され、天上に直撃してカレンにはカスリも当たらなかったが、カレンは剛魔を放った時にまた新たな異変を発見する。

「(この技も威力が上がっている! やっぱりこの状態の所為なのか?)」

以前出した『剛魔』とは威力も大きさも違っていると、今出した技も威力が上昇していると気付いたカレンは、やはり今の太刀の姿が関係しているのかと思い始める。

「(……………!)」

これ程ダメージを喰らうとは思ってもみなかったのか、一旦距離を置こうとバトル・マシンは後ずさるように機体を後退させようとした……………しかし。

「(?!?!)」

脚が一本壊れて、今は脚が七本になってしまったバトル・マシンは後退しようと機体を動かそうとしたら、七本の内2本が地面にくっ付いているのか、その場から動かそうにも動いてくれず、後退が出来ない状態になっていた。

「?」

何故バトル・マシンの動けなくなったのか、カレンは見当が付かなかったが、その疑問を打ち消すようにバトル・マシンの真下に居るロロの姿が視界に入った。

「ロロ?」

「おーい! カレン、今コイツの動きを封じている内に止めを刺せ!」

バトル・マシンの動けない2本の足の近くにロロの姿が在り、良く見ると動けない2本の脚の足元にロロ特製スライム接着剤がくっ付いており、これによって2本の脚は地面に張り付いて動けないとカレンはトリックの仕掛けが分かり、心の中で納得する。

「コイツの力の前じゃ、スライム接着剤でも長くは持たない！ スライムの効力が切れる前に早くコイツをぶっ壊せ！！」

「うん！ 分かった！」

ロロのナイスアシストの御かげで絶好の攻撃のチャンスが出来上がり、ロロの頑張りに答えるようにカレンは剣を持ち直し、一気にカタを付けようと脚を一步出そうとした。

「ちよっと、待って！！」

「！？」

バトル・マシンの懷までカレンが踏み込もうとした時、突然アイシャが呼び止める。

「あ、アイシャ？」

「何で止めるんだよ！？」

攻撃を中断させられ、カレンはポカンと呆然とした顔でと向こう岸に居るアイシャに視線を移し、ロロは何故攻撃を止めさせたのかを問い掛けた。

突然の退化

攻撃の絶好のチャンスを止めさせたアイシャは若干、焦りを感じているような表情になっていた。

「あのバトル・マシーンを爆破させるような破壊の仕方だけはいけません！」

「えっ？」

「ど、どういう意味だよ？」

返って来た質問の答えの意味が理解できないカレンとロロは、二人揃って首を傾げる。

「あのバトル・マシーンには『ニビル・ブランジ』が詰め込まれているんだ!!」

「に、に・び・る？」

「ぶ、ぶら………何だって？」

「『ニビル・ブランジ』！ 複合科学燃料の『ニビル・ブランジ』の事だよ！」

首を揃えて分からないと反応する二人にアイシャは、焦ったのかそれとも呆れたのか、珍しく声に感情を乗せて説明した。

「大型の無人機であるバトル・マシーンには大抵、複合科学燃料『ニビル・ブランジ』が使われているんだ！」

「それが………どうしたんだよ？」

説明の意図が読めないロロはもっと詳しく分かるように聞き返す。

「もし、『ニビル・ブランジ』を積んでいるあのバトル・マシーンが爆破された時に火が『ニビル・ブランジ』に引火したら、大爆発が起こるんだよ!!」

「ええっ!？」

「何だって!？」

アイシャの説明の最後ら辺に出て来た大爆発と言う言葉に二人は耳を疑うように驚く。

「『ニビル・ブランジ』は大型バトル・マシンを動かす為だけじゃない、敵地に入り込んで自爆し、敵に大ダメージを与える為にも使われている燃料なんだ!」

「ま、マジかよ!?!」

「だから、無闇にあのバトル・マシンを爆破して、『ニビル・ブランジ』が引火して大爆発が起ったら、私達は確実に命が無い! あの手・マシンはそれだけヤバイ代物を積んでいるだ!」
今戦っているバトル・マシンを爆破して、『ニビル・ブランジ』に火が付いたら、大爆発が起こり、例え勝ってもタダでは済まない
とアイシャはカレンとロロに言い聞かせる。

「じゃあ、どう倒せって言うだよ!?!」

ロロのもっともな意見にアイシャは今スライム接着剤によってもがいているバトル・マシンの胴体部分に指を指した。

「資料によれば、あの『タイプ・タイラント』は胴体の中の中心部分に在る、動力源だけを破壊すれば、爆破せずに機能を停止させる事が出来る筈だよ!」

「胴体の中の動力源って、おまえ……………そこだけを破壊する事なんて出来るのかよ?」

もし胴体の中を破壊して、例の『ニビル・ブランジ』に火が付いたら命が無いのに動力源だけを破壊するなんていう芸当が本当に出来るのかロロは不安げに尋ねた。

「もし、失敗なんてしたら……………」

「……………でも、それしか方法は無いんだよね?」

失敗したら命が危ないと心配そうに尋ねるロロを遮るようにカレンは言った。

「だったら、やるしかない! 力を合わせて、そうでしょ?」

これから前に進む為には、この方法しかないならカレンはやるべきだとロロとアイシャに目を配って、述べる。

「そうだよ、力を合わせた上でこの方法でしか今の状況を打開する術は無い!」

「い、いや、だけだよ……………」

アイシャはもうとつくに覚悟を決めているのに、一人だけ怖気づいて、戸惑っているロロは歯切れが悪くなっていた。

「大丈夫だよロロ、僕達が力を合わせれば、きっと出来るよ!」

「カレン……………」

この緊迫した状況で、勇気付けるかのようにニコツと笑って、力を合わせようと、成功出来る確信が無いのにも関わらず、思い込みや強がりも無く言うカレンにロロは意表を突かれ、少し呆然となる。

「……………わかったよ、やってやろうじゃねえか!!」

カレンから勇気を分けて貰ったのか、ロロも覚悟を決め、力を合わせてバトル・マシンの動力源を破壊する事に賛同する。

「じゃあ、全員一致って事で、いいね?」

「ああ!」

「うん!」

意見がまとまり、カレン達は一致団結になって、バトル・マシンの動力源破壊に挑む事になった。

「(狙いは……………胴体の中心!)」

動力源がこういう物かカレンにはさっぱり分からないが、それを破壊すれば、バトル・マシンを倒す事が出来るとアイシャの説明で分かったので、最優先でその動力源を破壊しようと胴体の中心に狙いを定めた。

「(?!)」

するとバトル・マシンの胴体の上部分から円に沿って穴が幾つも空いている車輪のような物が上部分の左右にそれぞれ一つずつポツと出て来て、片方はカレンの方を向いており、もう片方はアイシャの方を向いていた。

「「!」」

次の瞬間、バトル・マシンの胴体の左右にポツと出て来た、二つの車輪のような物から銃弾の雨が発射され、銃弾の矛先は言うまでも無く、カレンとアイシャそれぞれであり、二人は突然降り注いで

来た銃弾の雨に目を見開いた。

「『10mmバルカン』!!」

「っ！」

バトル・マシーンから新たに登場した車輪のような物を『10mmバルカン』だと判別したと同時にアイシャは、こちらも懐から新たな銃を瞬速の速さで取り出し、両手にそれぞれ銃を持ち、飛んで来る銃弾の雨に向かって二つの銃口を構える。

「（間に合わない! ……………なら!!）」

時を同じくしてカレンは、自分の方にも降り注いで来る大量の銃弾に今のタイミングでは『エネルギー・フィールド』は間に合わない
と判断し、違う対処法で凌ごうとした。

「しゅうていざん周体斬!!」

「SONIC・BEST!!」
ソニック ブレスト

脚に力のような物を流し込み、右脚を軸にして大剣を片手で持ちながら、カレンは竜巻のように高速回転を行い、飛んで来た銃弾の雨を全て回転によって振り回っている大剣で叩き落とし、向こうでアイシャは二つの銃で放った複数の銃弾が小さなソニック・ブームを起こし、銃弾が風の塊と成って、自分より大きい銃弾を次々と弾きながら前進して行き、カレンとアイシャは見事に襲い掛かって来た銃弾の脅威を文字通り打ち払った。

「（これも、威力が上がっている!）」

『水底の洞窟』で使った時よりも回転スピードとパワーが何倍もハネ上がっており、またしても技の力が上昇している事にカレンは確信に近い物を感じた。

「（やっぱり、この状態で技を使うと力が上がるんだ!）」

三度目の正直のようにカレンは、今の姿で自分の用いる技を使えば、技の威力が大幅に増すという結論が出来上がりそうになっていた。

「?」

技の威力がどうこう考えているとカレンは、自分の大剣（まほうき魔装器）をチラッと視線と向けたら、大剣にある変化が起こっている事に気

付く。

「あれ？ 色が薄くなっている？」

大剣の剣格部分に在る、水晶のような美しく輝いていた碧い珠の色が薄暗くなっており、今までのような、輝く碧さが何処かに消えていたのだった。

「（！）」

カレンが大剣に気を取られている内に、バトル・マシンは『プラズマ砲』リチャージが完了して、カレンに連続で3回目を発射する。
「カレン！」

「！！」

よそ見をしているカレンにアイシャは呼び掛け、カレンはアイシャの呼ぶ掛けの御かげで、自分に接近して来る高出力の電撃の存在に気付き、すかさず大剣を前に出し、強く念じる。

「エネルギー・フィールド！！」

声と共に『エネルギー・フィールド』がカレンの周りに展開し、急接近して来た高出力の電撃を難なくフィールドで弾き返す。

「（そうだ、考えている場合じゃなかった！！）」

また戦闘中に考え事をしてしまい、アイシャの呼び掛けが無かったら、今頃自分はあの電撃を喰らっていたと我に戻ったカレンは『エネルギー・フィールド』を解いたと同時に肝を冷やした。

「（考えるのは後で良い！ 今は……………戦わなきゃ！！）」

先程の事を反省し、今やるべき事をするべきだと気持ちを瞬時に切り替えて、相手の動力源を破壊の為にカレンは脚を前に踏み込み、バトル・マシーンに突進するように駆け出した……………だが、この時カレンは気付いていなかった、自身の魔装器まそうきでもある大剣の剣格部分に在る水晶が更に薄暗くなっている事を。

「（！）」

自分の所にやって来るカレンを返り討ちする為にバトル・マシンは、現在脚が7本の内一本を使って、脚を出来るだけ伸ばしてリーチを最大限に利用して接近するカレンに脚を水平に薙ぎ払った。

「ふ、伏せろ！ カレン！」

「！」

バトル・マシンの真下から戦いの様子を窺っていた口は、カレンの横から迫り来る巨大な脚を見て、つい？伏せろ？と叫んでしまったが、そう言われてもカレンは走っているので伏せる事が出来ず、自身の真横から怒涛の勢いで急接近している脚に対してカレンは、走りながら力一杯自分の脚に力を入れて上へジャンプした。

「（！！）」

薙ぎ払われた巨大な脚は誰にも当たらずに行き止まりの壁に激突して壁を砕き、カレンは真横から襲い掛かって来た脚を当たる前にジャンプして、バトル・マシンの脚より少し上空まで飛び上がった御かげで、当たらずに済み、オマケの上に避けたのが幸いだったか、偶然にもカレンは自分を攻撃して来た脚の上に着地したのであった。
「うおおおおおおお！！！」

幸運にもバトル・マシンの脚に着地したカレンは、それを利用して脚を胴体へ渡る為の架け橋として渡り走り、脚の根元の部分まで近付くと再び高くジャンプして、一気に胴体の中心まで行って動力源を破壊しようと剣を両手で逆さに持ち、突き刺そうとした。

「（！！！）」

「ぬっ！」

しかし、カレンの大剣が胴体の中心に到達する前にバトル・マシンはもう一本脚を使って、上からやって来る大剣を受け止め、カレンの剣は胴体には刺さらず、代わりに脚の方に深く刺さり込んだ。
「くっ！！！」

胴体への攻撃を阻止されたカレンは、諦めずもう一回胴体への攻撃を再開しようとしたが、大剣が脚に深く刺さった所為か、剣が抜けなくなってしまう、何度やってもどんなに力を入れても取れないと焦ったカレンは、刃の内側に力を溜め込み、その力を爆発させるように一気に刃の外側に解き放つ。

「裂閃衝！！！」
れっせんしょう

まるで爆発したかのように分厚い鉄で出来た脚に刺さった大剣の刃先から耳鳴りが起こる程のとても強力な衝撃波が炸裂し、衝撃波によって脚は爆破して粉々に砕け、バトル・マシーンは動力源を守った代わりにもう一本の脚を失う事になった。

「うわっ！」

だが、バトル・マシーンの脚が爆破した時に生まれた爆風により、カレンは勢い良く吹き飛ばされてしまい、動力源から離されてしまう。

「ッ！」

このまま遠くまで飛ばされてたまるかとカレンは、吹き飛ばされて間もない瞬間に大剣を、手を伸ばせば届くぐらいの距離に在った壁に突き刺し、体にブレーキを掛け、両手で大剣にぶら下がった状態でバトル・マシーンの次の行動を見逃さないように視線を戻す。

「（！）」

三人の中で一番厄介なのは、カレンだと判断したのかカレンに集中攻撃しようとバトル・マシーンは胴体の左右に在る、『10mmバルカン』二門をカレンに向け、大量の銃弾を撃ち出した。

「よっと！」

二門の『10mmバルカン』から発射された、銃弾の雨から逃げる為にカレンは、大剣が刺さっている壁を思いっ切り蹴り、蹴った衝撃で大剣を引っこ抜き、同時にアイシャの居る向こう岸の通路まで飛び移った。

「！！ アイシャ！ 僕の後ろに！」

飛び移って直ぐにカレンは、バトル・マシーンの攻撃がもう一度来ると予測したと同時にある事を思い付き、後方に居たアイシャに自分の後ろに来るよう呼び掛けた。

「分かった！」

瞬時に意図が読めたアイシャは、すぐさま言われた通りにカレンに近付き、隠れるように後ろに付いた。

「（！）」

アイシャの居る所に飛び移ったカレンを懲りずに『10mmバルカン』二門を向け直し、同じ所に居るアイシャごと攻撃しようと銃弾を乱射した。

「エネルギー・フィールド!!」

一緒の所に居れば、二人とも狙われるとカレンは予測していたので慌てる事も無く『エネルギー・フィールド』を展開し、後ろに居るアイシャも含めて山吹色の光がカレンの周りを包み込み、降り注ぐ銃弾の雨を光の球体で全て無効化していった。

「交差する、冷たい悪意が、寒気呼び起こし、今汝に、凍える吹雪を降り注がん!」

今の状態なら問題は無いと思ったアイシャは『エネルギー・フィールド』の中で守られながら詠唱を唱え始め、それに答えるようにアイシャの周りから銀色の光が無数に現れ、そしてアイシャは最後に魔法の名前を口にする

「氷の雨^{アイスシャワー}!!」

バトル・マシーンが『10mmバルカン』を乱射している中、カレンの『エネルギー・フィールド』の中でアイシャは魔法の名前を唱え、その瞬間、バトル・マシンの上空に何かの文字が描かれた銀色の円状の輪が現れ、その輪から氷の刃が雨のように広範囲に降り注いだ。

「(!!!!!!)」

降り注いだ氷の刃達の殆どがバトル・マシンの体中に突き刺さり、突き刺さった所から氷が浸食するようにみると広がり、そう経たない内にバトル・マシンの体は氷漬けになった。

「ぬおっ! な、何だ!？」

未だにバトル・マシンの真下に居た口口は、突然バトル・マシーンが氷漬けになった事に驚いた。

「氷漬けになった……………アイシャ! お前の魔法か?」
こんな事が出来るのは、氷の魔法を唱えられるアイシャだけだと思
い付いた口口は、タイミング良く、カレンが『エネルギー・フィー

ルド』を解いて出て来たアイシャを確認の為に問い掛ける。

「うん、カレンが守ってくれなかったら、出来なかったんだけどね」

『エネルギー・フィールド』で自分の事を守ってくれると同時に自分が安全に魔法を唱える環境や時間も確保する為にカレンは自身の後ろに來いと自分を呼び掛けたとアイシャはカレンの考えを的確に読み取り、そしてご覧の通りにバトル・マシーンを氷漬けに出来たとロロに省いて話す。

「でも、アイシャは凄いよ！ 僕の考えていた通りに動いてくれたところか、あんな凄い攻撃が出来るなんて！」

自身の考えを完璧に読んで、それによって想像以上の成果を出したアイシャにカレンは大いに賛美する。

「これだったら、もう動力源なんて破壊しないで済むんじゃないか？」

氷漬けになり、動けなくなったバトル・マシーンの真下から出て来たロロは、こんな状態ではもう動力源を破壊する必要は無いと安心仕切った顔で凍り付いた脚をパンパンと軽く叩きながら二人に尋ねる。

「油断しない方が良い……………戦いではいつも不測事態がおこ……………」

気が緩んでいるロロにアイシャは気を引き締まるように忠告しようとした時、氷漬けになっているバトル・マシーンの氷に大きなヒビが入った。

「「「!!!!!!」」」

突如岩の壁にヒビが入った時と同じような不吉な音が鳴り、カレン達はその音にピクツと身体が反応し、視線をバトル・マシーンに向け直す。

「ま、まさか……………」

氷漬けになって動けなくなっていたバトル・マシーンの体が、地震が起こったかのようにブルブルと震え始め、そしてその振動によって今さっき氷に出来た大きなヒビと同じ大きなヒビが幾つも発生し、

次第にヒビは氷全体に広がっていき、ロロは目の前の光景に顔が青くなる。

「どうやら……………そううまくはいかないみたいだね」

ロロに忠告しようとした事が見事に的中して、アイシャは小さな溜息を零す。

「(!!!)」

案の定次の瞬間、大きな氷の塊がバラバラに吹き飛び、氷の中から何ともなかったかのように平然とした姿でバトル・マシーンが現れた。

「だぁ！？　こ、氷が！！」

バラバラになって吹き飛んだ氷の欠片は、大小問わず小石のようにバトル・マシンの周りに飛び散り、ロロは飛んで来る氷の大きな欠片を器用に避ける。

「！！」

そして飛び散った氷の欠片はカレンとアイシャの所まで飛んで行き、カレンはすぐさま大剣を持ち直し、刃先に力のような物を溜め込む。

「剛魔！！」

大剣を水平に振り上げ、振り上げられた剣はとても大きな風の波を作り、巨大な衝撃波となって、飛んで来る氷の欠片を向かい撃つように飛んで行って直撃し、氷の欠片を余すことなく粉々に粉碎した。

「あの攻撃で……………まだ動けるのか！！？」

氷の欠片の脅威を取り除いた後、アイシャの魔法で氷漬けになっておきながら、しぶとく動き出したバトル・マシーンにカレンは目を見開いて驚愕する。

「やはり、動力源を破壊するしか無いみたいだね……………！！」

甘く見ていた訳では無いが、結局あのバトル・マシンを止める為に動力源を破壊して倒すしか道は無いとアイシャは述べる。

「なら……………今の内に倒さなきゃ！！」

体から氷を剥がしても、まだロロが仕掛けたスライム接着剤が脚にくっついて満足に動けないバトル・マシーンと見たカレンは、早く

仕留めた方が良くと考え、全力疾走で駆け出し、もう一度、動力源を破壊しようと胴体の中心まで大きくジャンプした。

「(?!)」

再度、動力源狙いで胴体へ飛び移ろうとジャンプして来たカレンを通せんぼしようとまた脚を出して妨害するバトル・マシーンにカレンはまず、その脚をぶった切って、胴体へそのまま移ろうと大剣を大きく振り上げ、垂直に振り下ろそうとした………その時。

『リターン・PバUパ』

RリGリEリ!』

今まで聞いた事が無い言葉が突然、大剣でもある魔装器まそうぎから発し、そして声と共に大剣が最初に現れる姿、切れ味が無い鈍器みたいな姿に戻ってしまった。

「!?」

切れ味抜群の大剣から切れ味皆無の大剣に急退化した事にカレンは突然の出来事なので何が何だか分からず目を疑い、大剣は姿が戻った状態で垂直に振り下ろされるが、元の姿では相手を斬るのではなく、叩く事しか出来ない為、大剣はバトル・マシンの脚に鈍い音を出して激突したが、脚には傷一つ与える事が出来なかった。

「(?!)」

「!」

どうゆう訳かは知らないが、カレンの攻撃が急に弱くなったので、バトル・マシンは大剣を受け止めた脚を振り払い、脚の乗った大剣ごとカレンを振り払った。

「ぐっ!!!!」

振り払われ吹き飛ばされたカレンは壁に激突し、受身を止めないままそのまま重力に従ってゆっくりとコンクリートの地面に叩き付けられる。

「なっ! どうしたんだよ、カレン!?!」

「カレン!」

アイシャが居る通路に落ちたカレンに反対側の通路に居る口口は何

故、カレンの攻撃が急に弱くなり、そしてカレンの武器でもある魔^ま装器^{そうぎ}の姿が前触れも無く元に戻った事にカレンの身を心配しながら問い掛け、一方アイシャは自分の通路側の壁に激突して落ちて来たカレンの元へ駆け寄った。

「大丈夫？」

「う、うん、何とか………まだ戦えるよ」

カレンに肩を貸して、起き上がらせようとしたアイシャは身の状態も尋ねると、カレンは頑丈に出来ているのか或いはそれ程ダメージを喰らってはいないのか、大丈夫だと答え、まだ戦うだけの力と動く力は残っているようだった。

「……………」

自分の手を借りて立ち上がったカレンをアイシャはカレンの手に持っている大剣をチラッと眺めた。

「もしかして、『マナ』を使い果たしたの？ カレン？」

「えっ？」

『マナ』を使い果たした、アイシャの言うその言葉の意味が何を示しているか、この時のカレンにとってはさっぱり意味が分からなかった。

「（！）」

「！」

追い打ちを掛けるようにバトル・マシンは『プラズマ砲』のリチャージが終了したようで、カレンとアイシャと一緒に攻撃しよう標準を二人に合わせ、そしてその事にアイシャは他の二人よりも一足先に気付いた。

「お、おい！ 二人とも！ 危ねえぞ！！」

「！！」

二人の危険を察知したロロは、バトル・マシンの『プラズマ砲』が二人に向けられていると大声で叫び、その叫びによって気付いたカレンはバトル・マシンの『プラズマ砲』に顔を向けて、自分達に向けられていると確認する。

「ま、まずい！」

「あっ！」

あれをまともに喰らえばタダでは済まない自分達の身の危険を感じたカレンは、アイシャの手から離れ、アイシャを守る為に身を前に乗り出して、大剣の剣背部分が前になるように両手で構え、強く念じる。

「（！！）」

そして間もなくバトル・マシンの『プラズマ砲』の電撃が発射され、一直線に伸びる高出力の電撃がカレン達に向かって空中を走って行った。

「エネルギー・フィールド！！」

『エネルギー・フィールド』を展開させ、後ろに居るアイシャと共に光の球体がカレン達を瞬時に包み込み、襲い掛かる電撃から守ろうとした……………が。

「！！？」

しかし、展開された『エネルギー・フィールド』は最初に弾いた電撃の時とは違い、光の壁が電撃によってグリグリと押し進むように削られていき、次第に電撃は光の壁を押し退け、カレンにどんどん近付いていき、カレンは『エネルギー・フィールド』が弱くなっている目を見開いて気付く。

「があ！！」

「「！！ カレン！！」」

やがて、電撃は相殺するような形で『エネルギー・フィールド』を打ち破り、『エネルギー・フィールド』を破られたて生まれた衝撃により、カレンは後ろに倒れるように軽く吹き飛ばされるが、すぐ後ろに居たアイシャに身体を受け止められ、向こう側の通路で一部始終を見ていた口はアイシャと一緒に声を上げて呼び掛ける。

期待を背負って

数回も走る電撃『プラズマ砲』を防いだ強固な守り『エネルギー・フィールド』が打ち破られ、その衝撃で吹き飛ばされそうになったカレンにある異変が生じた。

「ううっ！」

「おい！ 大丈夫かよ！？」

「カレン、どうしたの！？」

プルプルと身体が痙攣したかのように震えて苦しそうに悶えるカレンにアイシャは、カレンを後ろから抱きかかえたまま、ロロと同じように身体の具合を尋ねる。

「か、身体に、力が……………入らない！」

「！ それって……………！？」

声も震えているカレンは身体に力が入らないと訴えるとアイシャは、考えられる一つの可能性が頭の中に浮かんた。

「さっきの電撃で、身体が痺れたの！？」

何故か弱くなっていた『エネルギー・フィールド』は、相殺されたかのように『プラズマ砲』の電撃によって打ち破られたが、同時に電撃も撃ち尽くし、カレンには傷一つ付いてはいなかったので、何のダメージも喰らってはいないと思っただが、実はそうでは無かった。「（恐らく、『エネルギー・フィールド』と電撃がお互いに相殺した時に起こった衝撃で、空気中に残った余波の電撃が四方八方に飛び散って、カレンに当たってしまったんだ！）」

カレンの身体が痺れた原因を推測したアイシャは、とにかくこの場から離れようと両手に持った銃をしまい、カレンをしっかりと抱きかかえ、身体を振り返らせて移動しようとした。

「（！）」

「！！」

更に追い打ちを掛けようと、バトル・マシンはカレンとカレンを抱きかかえているアイシャ、この二人を二門の『10mmバルカン』で狙いを定め、それを感知したアイシャは顔を振り向かせた。

「なっ！ 二人とも早く逃げろー！！」

ロロはまたバトル・マシンが二人を狙っていると悟り、早く逃げろと血相変えて、大声で伝えるが、ロロの伝える前にその事に気付いていたアイシャは、特に慌てる様子も無く、足を止めて、空いた手をバトル・マシンの方に向けた。

「天に祭る、銀色の鏡から、一粒の施しを！！」

もうじきバトル・マシンの『10mmバルカン』が発射されるのにも関わらず、アイシャは至って冷静な表情で、詠唱を行ない、アイシャの周りから前と同じ、銀色の光が無数に現れ、そしてまた最後に魔法の名前を口にする。

「氷の壁！！」
アイスウォール

魔法の名前を唱えたと同時に前に出した手を斜め下に振り下ろし、そして次の瞬間、アイシャの前にまた何らかの文字が描かれた銀色の円状の輪が出現し、その輪から2メートルくらい巨大で分厚い透明な氷の塊が出て来た。

「（！！）」

そして間も無く発射された二門『10mmバルカン』の銃弾であったが、突如にして現れた氷の塊に阻まれ、銃弾は氷の中で急停止してカレンとアイシャには届かないが。

「長くは………持たないか！」

銃弾の雨はみるみる氷の塊を削って行き、その光景を見てアイシャは長くは持たないようだと思って呟く。

「こなくそー！！！！」

さすがにロロもタダこのまま見てはいられず、カレンとアイシャを助けようと、鞆から弓と矢を取り出し、矢を弓にセットし、狙いを定め、そして矢の刃に『マナ』を流し込み、『マナ』は赤いオーラと成って刃に宿った。

「彗星^{すいせい}!!!」

赤いオーラを宿した矢を口はバトル・マシンの二門の『10mmバルカン』の一つに放ち、矢は通常の三倍のスピードで赤い線を描いて飛んで行き、胴体の右側部分に在る『10mmバルカン』に小さく突き刺さった。

「(!!!)」

『10mmバルカン』に突き刺さった矢は、刺さった直後、忽ち赤いオーラが膨れ上がるように眩い赤い光を放ち、するとまるで連鎖反応を起こしたかのように矢は赤い光を放って爆発し、更に『10mmバルカン』の中の弾薬にも引火して、『10mmバルカン』は跡方も無く吹き飛んだ。

「もう一丁!!!」

すかさず口は素早く矢を補充し、続いて二本の赤いオーラを宿して矢をもう片方の『10mmバルカン』に放ち、矢は真っ直ぐと赤い線を作りながら走り、胴体の左側部分に在る『10mmバルカン』に突き刺さった。

「(!!!)」

突き刺さった赤いオーラを宿した矢は、先程同様、眩い赤い光を放った後、赤い光を放って爆発し、中の弾薬に引火して、もう一つの『10mmバルカン』はお陀仏になった。

「ざまあ見やがれてんだ!!!」

「地上に降り立つ、異形の楔よ、今罪深き者に、天の裁きを与えん!!!」

攻撃の要の一つだったバトル・マシンの武器を破壊して、やり返してやったぞと相手にダメージを与えたのが嬉しくて声を出す口を余所に、透明な氷の塊越しにアイシャは詠唱を行っていた。

「？」

しかし、この時アイシャに抱きかかえられているカレンは有る事に気付いた、それは氷の魔法とは時とは違い、アイシャの周りには黒い光が無数に現れていたのであった、そして最後にお約束の魔法の

名前を口に出そうとした。

グラビティ
「重力の重り《ブレス》!!!」

これも氷の魔法の時とは違い、飛んでいる虫を叩き落とすように手を垂直に振り下ろし、直後にバトル・マシンの真上に何らかの文字が描かれた黒い円状の輪が出現し、輪から黒いオーラのような物が出て来て、黒いオーラはバトル・マシンの全身を包み込んだ。

「(!!!!!!)」

するとバトル・マシーンが黒いオーラに包み込まれた途端、何かに押しつけられているように、突然地べたに這いつくばり、顔と胴体が地下水道内の中央を走っている水路の中に半分入り込み、6本の脚は胴体が水路に入ってしまった為、斜め上に向いてしまい、バトル・マシンの身体はまるでVの字のような態勢になっていた。

「(!!!!!!!!!!!!!!)」

「あれは闇の魔法! ……………アイシャか!？」

バトル・マシンのは何とか起き上がろうとするが、黒いオーラが邪魔をしているのか、どんなに踏ん張っても起き上がれない様子で、その原因と思われる黒いオーラの正体は闇の魔法だとロロは判別し、こんな魔法を使ったのはアイシャだと思い付いたロロは、向こう側の通路に居る二人に顔を向ける。

「……………」

アイシャは無言でバトル・マシーンが動けなくなったのを見届けるように確認した後、抱きかかえていたカレンをゆっくり地面に寝かせて、自身も地面にしゃがみ込み、両手を前に出して、カレンの身体の中央に手の平を広げて翳した。

「果てしなき、付き纏う、涙と叫び、犠牲の末に、悪魔は笑う!」

「うう……………?」

今度は身体が痺れて、身体が言う事を聞かなくて満足に動けないカレンに向かって、アイシャは詠唱を行ない、カレンは何故自分に向けて詠唱するのか、さっぱり分からなかった。

「……………」

だがカレンは、アイシャには何か考え有ると思い、特に指摘しようとせず、そのまま続けさせ、そしてさっきと同じ様にアイシャと近くに居るカレンの周りに黒い光が無数に現れ、アイシャは締め魔法の名前を口に出す。

コンデイション・チェンジ
「容態交換！」

そうアイシャが言うと、アイシャの両手とカレンの身体の上との間にまた何らかの文字が描かれた黒い円状の輪が現れ、その直後、カレンとアイシャの身体からそれぞれ謎の半透明な幽体のような物が出て来て、それは黒い円状の輪を通して、入れ替わるように二人の身体の中に入って行った。

「!？」

自分の身体から出て来た謎の半透明な幽体とアイシャの身体から出て来た同じ謎の半透明な幽体がお互い、入れ替わるように自分達の身体に入って来た瞬間、カレンは自分の身体にある変化が起こった事に気付く。

「か、身体が……………動く！」

驚いた事に悶え苦しむような身体の痺れが何処へ、消えてしまい、カレンはさっきまで痺れてロクに動かせなかった手を何回も握り締めて、次は身体に痺れが残っていないか確かめようと立ち上がろうとした。

「身体が動く！ アイシャ！」

立ち上がる事が出来て、カレンは完全に身体から痺れが無くなったと確信し、この成果はアイシャが唱えた魔法の御かげだと思ったカレンは、お礼を言おうと今もしゃがみ込んでいるアイシャに顔を見下ろした。

「……………」

「? …………… アイシャ？」

声を掛けても返事が無く、動く様子も無く、不審に思ったカレンはアイシャと顔が同じ高さになるようにしゃがみ込んで、どうしたのかと顔を覗いてみると、その前にアイシャの上半身が地面にゆつく

りと倒れ込んだ。

「あ、アイシャ!？」

「……………うっ!」

急に倒れ込んだアイシャにカレンは抱きかかえると、アイシャは身体が痙攣しているかのようにプルプルと震え、苦悶の表情を浮かべており、まるでその姿はさっきまで、身体が痺れて悶え苦しんでいたカレンのようだった。

「アイシャ、しっかりして! 何が起こったの!？」

「さ、さっきの魔法で、君の身体の痺れを私に移し替えたただだよ……………」

「ええっ!？」

自分の身体の痺れが治った理由とアイシャが倒れ込んだ原因の両方を聞いたカレンは、その思いも寄らない方法に驚いて声を上げてしまう。

「……………正確に言えば、君と私に掛けた魔法は、お互いの容態を交換し合う魔法なの、つ、つまり、さっきまでの痺れて動けない君の身体の状態と何の異常もない私の身体の状態を入れ替えて、身体の状態を移し変えるという効果を持った魔法なんだ……………」

「そんな……………どうしてそんな事を!？」

説明を聞いて、カレンは魔法の効果はちゃんと理解はしたが、それより何故、アイシャはそこまでして、自分の痺れを自身に移してまで、自分を助けたのか、そこが分からないカレンはその理由を尋ねた。

「わ、私達の中で、あのバトル・マシンの動力源を……………破壊できるのは、君しか居ないと判断……………したからだよ」

「僕しか……………」

自分が使用した魔法でカレンの痺れを自分に移して、その痺れに苦しみに耐えながらもアイシャは淡々と説明を続ける。

「私には……………こんな場所で動力源だけを破壊する事は出来ない、口ロでも多分……………無理だと思う」

「アイシャ……………」

「だから……………君しか、動力源を破壊する人が他に居ないんだ！」

「……………!」

要約すると、自分に痺れを移してまで、カレンを助けたのは、自分達の中でバトル・マシンの動力源を破壊出来るのはカレンだけだと判断したとアイシャは語り、心打たれたカレンはその答えに使命感のような物を感じた。

「……………分かったよ、動力源は僕が必ず破壊する!!」

自身の力が必要とされていると心の中で、そう思ったカレンは、堂々とアイシャに動力源の破壊宣言を伝え、雄々しく立ち上がり、黒いオーラの所為で地べたに這いつくばっているバトル・マシンに身体を向け直した。

「い、今は、私の掛けた魔法で……………バトル・マシンには今、? 重力の重り? が押し掛かっている。その御かげで、相手は完全に身動きが出来ない! でも……………魔法の効力はそんなに長くは持たない、だから……………今の内に!」

身体が痺れて指一本動かすのでも苦痛なのに、目の前に在る透明な水の塊越しに映っているバトル・マシンに指を指して、やるなら今だとカレンに教えるアイシャ。

「うん……………ありがとう、アイシャ! それと、そこでジツとして待ってて」

自分の身を省みず身体の痺れを取ってくれた事と、動力源を破壊する為の絶好のチャンスを作ってくれた事の両方を含めて、お礼を言ったカレンは、もう一つアイシャにそこから動かないで居てと伝える。

「……………うん」

アイシャは小さく頷いて、了承した。

「おい、カレン! 何が有ったんだ!? 今度は何でアイシャが倒れたんだ!?」

「！」

壁のように立ちはだかる氷の塊をカレンは飛び越えようとした時、向こう側の通路で見ていた為、カレンとアイシャの身に何が起こったか分からないロロは事情を説明して貰おうとカレンを呼び止め、踏み止まったカレンは向こう側に居るロロに顔を向ける。

「ロロ、今は話している時間が無いんだ！　今はアイシャの魔法がまだ効いている内に、早く動力源って言う物を破壊しないといけないんだ！！」

「は、破壊ってお前、武器がそんな状態で一体どうやって壊す気だよ！？」

時間が無いから、話は後にしてくれと説明するカレンにロロは、カレンの武器である大剣が切れ味皆無の状態に戻ってしまったと言うのに、そんな状態で、一体どうやって戦う気だと問い掛けた。

「それは……………この拳で何とかする！！」

「はぁ！？」

拳一つであの頑丈な装甲で守られているバトル・マシンの動力源を破壊すると言い出したカレンにロロは耳を疑った。

「あ、アホか！　そんな事出来る訳無いだろ！！」

「まだそれが分かった訳じゃないんだ……………やってみなくちゃ、分からないよ！」

「……………か、考えてみるよ！　無理に決まっているだろ！？」

無謀だと思える行動をやるうとしているカレンに動じながらも止めるようにロロは、説得しようとしたが。

「それでもやるんだ！　僕はアイシャに任されたんだ！！　これは僕でしか出来ない事なんだ！！」

「……………カレン」

最後の言葉が決め手になったのか、ロロはそんな事は無理だと言い切るが、カレンは真っ向こうからやると言い張り、ロロは何を言っても退かないカレンの強固な意思と姿勢に、屈服するように心打たれる。

「はあ……………お前がこんなに頑固だとは思わなかったなあ」

急に態度落ち着いた変わったロロは、溜息を吐いて、カレンの頑固さによく気付く。

「でも、不思議とお前なら本当に動力源を破壊出来るかもなっと思えちまうのは、何故だろうな？」

そして同時にロロは未知数の力を秘めているカレンのなら本当に動力源を破壊出来るかもしれないと心の何処かでそう思い、小さく苦笑いを浮かべる。

「まあ、しょうがねえな……………お前がそこまで言うなら、キツチリとあのデカブツを仕留めろよ！　あと……………」

「？」

諦めたかのようにカレンに動力源の破壊を任せる事にしたロロは、鞆からある物を出し、向こう側の通路に居るカレンにポイッと投げて、渡した。

「これは……………！！」

「知っているだろ？　俺様特製のお手軽爆弾だ！」

ロロがカレンに渡したのは、ロロがいつも使用している爆弾であった。

「拳一つじゃ、心寂しいだろ？　そいつを持って行けよ……………：使い方は上に付いている蓋を取れば、ちゃんと爆発するぜ！」

「……………ロロ」

自分なりに気遣ってくれるロロにカレンはアイシャの時と同じく、その気持ちに応えなければならぬと思い、気をより引き締め、覚悟を更に強め、そして強くて真っ直ぐな眼差しをロロとアイシャに送った。

「それじゃあ二人とも、行って来るよ！」

「……………任せたよ」

「ああ、行けえ！　カレン！！」

二人の声を背に受けて、カレンは氷の塊を飛び越え、着地した後、速攻でバトル・マシーンに駆け出し、十分に近付いたら、三度目の

正直のように動力源が在る胴体の中心部分の上空に飛び込んだ。

「（！！）」

だがしかし、カレンが胴体へジャンプして間もなく、アイシャが唱えた魔法は、時間が経って弱くなったのか、黒いオーラが脚の一本から消えて無くなってしまい、その脚は自由を取り戻し、バトル・マシーンはさっそく飛び込んだできたカレンを弾き飛ばそうとその脚を使って、上空に居るカレンに向かって脚を大きく振り上げた。

「せいっ！」

体当たりのように突進して来る巨大な脚にカレンは、大剣を思いっ切り投げ飛ばした。

「（！）」

振り上げられた巨大な脚は、カレンに当たる前にカレンが投げ付けた大剣に衝突し、その衝突の御かげで、脚の軌道が大きくズレ、脚はカレンの髪の毛をカスツた程度で通り過ぎてしまい、結果、攻撃は文字通り空振りに終わり、そして何よりカレンに胴体の中心部分の到着を許してしまった。

「よっと！ 後は……………！！！」

到着してすぐカレンは、胴体の中心の一点だけを見詰め、力を右手だけに注ぎ、手を握り締め、拳に眩い光を宿らせ、腕を大きく振るかぶった。

シャインダスト

「光の鉄拳！！」

分厚い装甲の底で眠っている動力源に向かって、突きだしたカレンの光り輝く拳は、鋼鉄の装甲をほんの少し凹ませた。

「っおおおおおおおおおお！！！！」

1発だけじゃなく、2発、3発、4発、5発と何十回も拳を突きだして、装甲を剥ぎ取ろうとしたカレンは、手に走る痛さなどお構い無しに、その後も連続で拳を繰り出した。

「（攻撃を止めるな！ 痛さなど気にするな！ チャンスはもうこれしか無い！！）」

鋼鉄の装甲を殴り続ける拳は、殴る回数を増やしていくと共に少し

「「？」」

顔が半分になって左部分だけが残った赤い眼は色を失って暗くなり、まるでバトル・マシーンは力が抜けたかのように身体がガクリと地面に崩れていき、『プラズマ砲』も発射される事も無く、電撃は次第に薄くなって消えてしまい、バトル・マシーンは何もかも全てが止まってしまったかの様であり、この時、それを見てカレンとロロは一体何がどうなったのか分からずにいた。

「も、もしかして、動力源を破壊出来たのか？」

恐る恐る口は、覗き見るように地面に崩れ倒れたバトル・マシーンの胴体の中心部分にカレンが作った、今も中身が焦げて煙が出ている小さな穴を遠くから見調べながら、ロロは動力源が壊れたんじゃないかとそう思っただけだった。

「それしか………考えられないよ」

「！ アイシャ！」

カレンは声に釣られて、アイシャの方を見ると痺れて身体が動けなくて、地面に倒れ込んでいても戦いを一部始終ちゃんと見ていたアイシャは、バトル・マシーンの現状を見て、動力源は破壊されていると述べた。

「ほ、本当か、それ？」

「言ったでしょ？ ……それしか考えられないって」
間違い無いのかと心の中で不安と期待の両方に挟まれながら、確認を取ろうとするロロにアイシャは諭すように言った。

「た、助かった………」

「よ、よかった………」

その言葉が聞こえて、ロロは心の不安が一気に消え去って、肩に力を抜けさせ、一方カレンは一安心し、崩れるように地面にしゃがみ込んだ。

「あつ………そうだ！ アイシャ、お前急にどうしたんだ？」

災難から何とか切り抜けて、安心したロロはアイシャの様子がおかしい事について思い出し、すぐさま向こう側の通路に飛び移り、ア

イシャの傍に駆け寄った。

「実は……………カレンの身体の痺れを私の身体に移し替えたんだ」

「何い？ お前もそんな無茶な真似をしたのかよ？」

カレンと同じく無茶をやらかしたアイシャに呆れて、ロロは顔に手を被せる。

「……………待ってろ！ 今、治してやるから！」

そう言ってロロはしゃがみ込み、横になっているアイシャの身体の上空に両手を前に出し、手の平を広げて翳した。

「祝福の母よ、慈愛を満たし、安らぎを今此処に！」

詠唱を始めたロロの周りに無数の白い光が現れ、横になっているアイシャの身体とロロの両手との間に白い光の輪が出現して、そして締めである魔法の名前を口にする。

「リカバリー！」

白い円状の輪から、太陽の光のような光がアイシャを照らし、そして光は少し間だけアイシャを照らした後、白い輪と無数の白い光と共に瞬く間に消えて無くなった。

「！」

光が消えた直後、アイシャは目が覚めたかのように横になっていた身体をゆっくりと起き上がらせ、自身の身体に移らせた痺れが治っている事を確認した。

「光の回復魔法！ ロロって、大地の魔法だけじゃなかったんだね！」

意外そうにアイシャは、ロロが回復魔法を使える事に感心しながら、奥に進もうと脚を運び出した。

「へへーん、どうだ！ これも俺様の自慢の一つだぜ！」

ロロは得意げに鼻の下を擦って、増長しているかのように自慢して、歩きだしたアイシャに合わせるように付いて行った。

「あっ、アイシャ！ もう動いて大丈夫なの？」

「うん、ロロの御かげでね」

アイシヤは身体が動けるようになったのでロロと一緒に氷の塊を飛び越え、カレンの元へ駆け寄り、カレンはアイシヤが元気に動いている姿を見て、嬉しさと安心が込み上がった。

「そっか、よかった………痛っ!!?」

二人が近寄って来たので、そろそろ出口に向かうのかと思ったカレンは立ち上がった時に、両手に激痛が走った。

「! カレン、その手………」

「血だらけじゃねえか!」

ロロとアイシヤの眼には、カレンの右手は痛々しい程、皮膚が青く膨れ上がっており、その青く膨れ上がった皮膚から血がドロドロと流れていて、そして、左手は至る所の皮膚が捲られており、捲られた所から大量の血が零れているのが映った。

「その怪我ってやっぱり、動力源を破壊する時に?」

「……………うん」

右手は何回も分厚い装甲を殴り続けて出来た物、左手は力技で空けた小さな穴に無理矢理手を突っ込んだ時に出来た物、この痛烈な怪我にカレンは今頃、ロロとアイシヤの指摘で気付いた。

「お前って本当に無茶ばかりだよ……………ほら、治してやるから手を出せよ!」

「う、うん」

このまま手の状態じゃ、まともに手は使えないとカレンも分かっているようで、その怪我をロロが治してやると言うので、カレンは是非とも言われた通りに自分の両手は差し出すようにロロの前に出した。

「慈悲たる心に、天の癒しを、今ここに汝に与えん!」

自分の前に差し出された両手にロロは自分の両手を相手の手に被さるように手の平を開いて翳し、詠唱を行ない、カレンの両手とロロの両手との間に白い円状の輪が出現し、二人の周りに無数の白いが現れ、そして最後にお約束の魔法の名前を口にする。

「ヒール!」

白い輪から眩しくて、尚且つ優しく温かい光がカレンの両手を包み込み、そして光は瞬く間に白い輪と無数の白い光達と共に消えていった。

「ほれっ！ 治ったぞ！」

「！ わぁ すごいや！」

以前とは天と地の差が有ると思える程の酷い怪我を一瞬で治った事に、以前よりも驚きと感動を強く感じたカレンであった。

「ほんじゃあ、カレンの怪我也治った事だし、さっさと此処（地下水道）から出ようぜ！」

「確かにバトル・マシーンを破壊出来たけど、此処（地下水道）に長居するのは得策では無いからね」

他にもバトル・マシーン以外の面倒事が起こるかもしれないと考えた二人は、また厄介事に巻き込まれない為にも、一刻も早くこの地下水道内から出る事を勧めるロロとそれに賛成するアイシヤは、機能が停止して鉄屑になってしまったバトル・マシーンの奥に在る出口に続いている曲がり道に視線を移した。

「バトル・マシーンが破壊された事で、『トロイカ』軍の司令官は地下水道の地上トンネルの緊急閉鎖を行なうかもしれないしね」

「ちょ、ちょ、ちょっと待て！？ どうしてそれをもっと早く言わないんだよ！？」

「焦る事は無いよ、これはただの……………」

「こうしちゃあ、居られねえ！ 出口へ走るぞ！！」

「あっ！ ロロ！！」

「あれ？ 二人とも何処に行くの！？ あっ、ちょっと、待ってよ！！」

アイシヤの不吉とも思える予測にロロは出口が塞がれると早まってしまい、一人で出口に向かって直行し、アイシヤは勝手に走り出したロロの後を追ひ、二人が走り出して事に気付いたカレンは、このままだと自分は置いて行かれると思い、急いで道端に落ちていた自身の魔装器まそうぎを拾い上げ、二人の後を追って行った……………

⋮

確保失敗

………カレン達が『BATTLE・MACHINE
TYPE? TYRANT?』を退け、地下水道の水路、つまり出口から外へ脱出しようとしていたその頃、軍用都市『レイチウム』の基地の指揮を代わりに任せれ、カレン達と盗賊達を捕まえようとバトル・マシーンを起動させ、確保するように指示した『トロイカ』軍の『魔弾の巨兵』と言う異名で呼ばれている大佐は、『レイチウム』都市内に在る基地内の司令室の中に自身のオフィスに訪れた中尉と共に居た。

「『?タイラント?』完全に機能停止しました……………」
ザザザザと音を立てながら、白黒な波を映している四角い画面が付いている機械仕掛けの机の前に座っている制御管理兵は、画面の様子を見た後、椅子に座りながら、くると身体を90度に振り向かせ、後ろに居る大佐にバトル・マシーンの機能が停止したと呟くように報告する。

「……………そうか」
同じ白黒な波を映している機械仕掛けの机の画面とは大きな桁が違う、司令室の中央に垂れ下がっているように取り付けられている巨大画面の様子と、今、制御管理兵が言った報告に大佐は威厳溢れる態度を崩さぬまま、顔を少し俯かせた。

「大佐殿! 今すぐに地下水道の入水門の緊急閉鎖を!!」
同じ機械仕掛けの机の前に座って、制御管理兵の隣に居る、バトル・マシーンを操縦していた操縦兵が持ち場から飛び出すように立ち上がった、大佐に今カレン達が外に出る事を防ぐ為、地下水道の出口を塞ぐ、指示を仰いだ。

「無駄だ、入水門の緊急閉鎖は門が完全に閉まるまで、最低5分は掛る。今、彼らが外へ逃げる為に走って入水門まで行けば、2分も掛らない! もう手遅れだ……………」

「……………」

大佐の冷静な判断に操縦兵は悔しそうに無言で静かに自分の席に座った。

「しかし、本当にとんでもない奴等でしたね！ 最新鋭の『バトル・マシンⅡタイプ？ HUMAN？』^{ヒューマン}が全機やられたって言う報告を受けた時は、何かの冗談かと思いましたが、まさか……………」

『？タイラント？』がやられてしまうなんて」

「だが『？タイラント？』は、本来は敵機撃退及び殲滅用の大型『バトル・マシン』なんだぞ！ それを容疑者捕獲の為に火器の使用制限やパワーのセーブとかした御かげで、実力を三分の一まで低下してしまっただ！」

負けたのが認められないのか、操縦兵は『タイプⅡ？タイラント？』を捕獲用に使ってから、元来の力が三分の一に下がってしまったと隣に座っている管理制御兵に反論するように抗議し出した。

「確かにそうだが、あともう少しで倒せたかもしれないじゃないか」「その前にこっちが倒されたら意味が無いだろ！ 動力源を破壊されたら『バトル・マシン』なんて、只の鉄屑だ！」

「相手が『？タイラント？』の動力源の位置を知っていたとわな……………」

制御管理兵は容疑者であるカレン達か『タイプⅡ？タイラント？』の弱点を知っていた事に感心したように小さく驚いた。

「大体場所も悪かった！ 本来捕獲用で無い物を使って、あんなデタラメな三人組を相手にしてら、勝てる訳が無い！」

操縦兵は『バトル・マシン』の操縦に自信があったようで、『タイプⅡ？タイラント？』の本来の実力を発揮できない状態と場所では、捕獲には向いていないのに使って、脅威の実力を持っていたカレン達を捕獲しようとも、無理だと吐き捨てるように言い放つ。

「その通りだな……………」

と、大佐は二人の会話に混ざるように呟いた。

「も、申し訳ありません、大佐殿！ 決して自分は、あなたの事を

.....」

「いや、貴官の言いたい事は良く分かる」

大佐の立てた作戦にケチを言ってしまった思った操縦兵は慌てて謝罪し、自分の言い分を弁明しようとするが、それに対して大佐は操縦兵が何を言いたかったかを悟ったのか、相手が言う前に言い止める。

「確かに性能は良いが、捕獲用では無い大型の『バトル・マシン』、『?タイラント?』を容疑達確保の為に追わせたのは不適切だった」

操縦兵の言いたかった事を代弁するかのようになり、淡々と大佐は自身の不適切な判断を指摘しながら語り始めた。

「『?タイラント?』の装甲は『?ヒューマン?』の装甲よりも4倍近い硬度を持つてはいるが、そこに過信して容疑者を確保する為に使用武器の制限とパワーを半減させたのも、誤った判断だった」

「大佐殿、それは.....」

「入水門の緊急閉鎖は一時的とはいえ、『レイチウム』全体に混乱を招くので、最後の手段だと決めていたが、甘い決断だった」

自分自身が立てた作戦にミスが在った箇所を自ら指摘しながら、説明を続ける大佐の姿に制御管理兵は止めようと自分の意見を言おうとするが、それよりも早く大佐の言葉が飛ぶ。

「そして何より一番の誤りは『バトル・マシンIIタイプ?ヒューマン?』10機全てを破壊する程の未知数な力を持った、盗賊団よりもイレギュラーな存在であった例の三人組の力を甘く見ていた事だ」

大佐はカレン達の力を見誤っていた事が、自身の一番の判断ミスだと潔く、痛々しい感じなど微塵も見せないで堂々と告げる。

「どれもこれも、私の誤った判断の所為だ。御かげで『?タイラント?』一機を失うどころか、容疑者の三人組にまんまと逃げられるハメになってしまった.....」

自身の不甲斐無さに呆れているのか、大佐は両腕を組んで、両目を

閉じながら、小さな溜息を零した。

「フウ……………指揮官失格だな、私は……………」

この失態の大きな原因は自分であると考えた大佐は、自分はまさに『指揮官失格』という考えに至った。

「そんな！ 大佐、今回の件はハッキリ言って、我が『トロイカ』軍にとっては前代未聞です！ このようなあまりにも不可思議で不測な事態が、大佐に全ての責任が在るとは到底思えません！」

まるで所詮自分なんかでは、指揮官など勤まらなないと自身を卑下する物言いで呟いた大佐を弁護するように隣に居た中尉は自身の意見を唱えた。

「お言葉ですが、大型の『バトル・マシーン』、『タイプⅡ？ タイラント？』の一機の損失や、南西方面の入水門の緊急閉鎖の判断、そして『タイプⅡ？ タイラント？』を倒す程の力を持った少年少女の三組の逃亡にしろ、どれも大佐の配慮が行き届かない部分が在ってもおかしくは無いと思います！」

「軍でそんな言い訳が通じると思っているのか？ 中尉」

今回の全ての責任は大佐には無い筈だと懸命に庇う中尉は大佐は、それを一蹴するように言い放つ。

「ですが……………！」

「私は臨時とは言え、今週一杯はこの軍用都市『レイチム』の指揮を任された身だ。つまりこの都市内で振り掛る、如何なる不祥事や襲撃に対して柔軟に対応し、解決しなければならぬ、それが指揮官たる者の務めだ」

軍と言う特殊な役柄、そして上司たる者の立場、そういう環境に立つ人間には言い訳など何の意味も成さないと大佐は中尉やこの司令室内に居る兵士全員に聞こえるように語る。

「この件の失態に関しては、私が不適切な処置を施して、招いた結果だ。当然ながら私は責任を取らなければならない……………分かるな、中尉？」

「……………はい」

大佐が語る正論に何も言い返せなくなった中尉は、まるで自分の事のように歯痒い表情で返事をした。

「だが中尉、君が私の為に意見を唱えてくれたのは嬉しく思っている。その気持ちは有り難く受け取って置く」

自分の為に弁護してくれた中尉に、感謝の意を含めて気持ちを受け取ったと威厳溢れる態度まま大佐は自身の気持ちを素直に述べ。その言葉によって室内に漂っていた重苦しい空気が少し和らげ、中尉の歯痒い表情も和らいだ。

「大佐殿、まだ諦めるのは早いですよ！」

待っていたかのように、大佐と中尉との会話が終わって、やっと話せるタイミングが来たので、先程の操縦兵が大佐に話し掛けて来た。「三人組には逃げられましたけど、強奪事件と暴動の主犯である盗賊団にはまだ逃げられていません！」

まだチャンスは有ると言いたげに、操縦兵は室内に居る全員に聞こえるように張りのある声で、盗賊達がまだ地下水道から外に逃げてはいないと思ひ出させるように話す。

「確か、三人組と戦闘の途中で、もう一方の『？タイラント？』が盗賊団らしき複数の生体反応を発見したと言う報告がありましたよね！？」

「おお、そうだった！　おい！　盗賊団はもう見つかったか？」

どうやらカレン達と戦っている途中で、盗賊団の方を追い掛けているたもう片方の『タイプⅡ？タイラント？』が、持ち前の生体センサーで盗賊達らしき反応を見つけたようで、それについて操縦兵に言われて、思い出した隣に居る制御管理兵は、席二つ分先に居る、同じ機械仕掛けの机に座っている制御管理兵にその事を尋ねた。

「そ、それが……………その……………」

「ん？　どうした？」

歯切れの悪いもう片方の『タイプⅡ？タイラント？』をシステム管理、ダメージコントロール、センサーでの索敵、それらを行ない、『バトル・マシーン』を操っている操縦兵のサポートを任せている

制御管理兵に大佐は不審に思い、訳を尋ねる。

「じ、実は盗賊団らしき複数の反応を見つけて、反応している地点に向かっていたのですが、途中、その複数の反応が忽然と消えまして……………」

「何？」

「ど、どうゆう事だ、それは！？」

『反応が消えた』と言う盗賊達の方を追っていた制御管理兵の返事に、大佐は眉を吊り上げ、カレン達と戦っていた方の制御管理兵は訳が分からないようだった。

「分かりません……………突然50以上在った生体反応が反応地点に向かっている途中に、一斉に消えてしまったのです」

制御管理兵は自分でも信じられないような顔をして、起こった事実をありのまま大佐及び室内に居る全員に伝える。

「センサーの故障ではないのか？」

反応が忽然消えたのは、センサーが故障したのではないのかと疑問に思った中尉は、その可能性を指摘した。

「せ、センサーは正常です！ 今でもこちらの西側地下水道内では？人間？の反応は一つありませんが、？虫？の反応ならそこら中に居ます！」

機械仕掛けの机に付いている四角い画面に映る映像を人間限定から虫限定に切り替えて、生体センサーに故障は生じてはいないと制御管理兵は問い掛けて来た中尉に証明する。

「そうか……………では、反応地点にはもう着いているのか？」

「それでしたら、例の三人組によってあちら側の『？タイラント？』が破壊された時に、ちょうど着いていました」

中尉の質問にカレン達が『タイプⅡ？タイラント？』を倒した時にタイミング良く、こちらの『？タイラント？』は反応していた地点に着いていたと制御管理兵は答える。

「着いた時には、盗賊団の姿は？」

「ありません」

「本当に誰も居なかったのか？」

「はい、反応が消えたので、急いで地点に向かい、そしてあちらの三人組の戦闘が終わった後に、やっと反応地点に着くと、反応通り、誰も居ませんでした」

「よく探したのか？」

「はい、人影どころか、猫の子一匹居ませんでした」

「……………そうか」

生体反応が消えても、反応地点に誰か居れば、センサーの故障か何かとその可能性を考えて問い掛けてみた中尉であったが、予想が外れていた制御管理兵の語る事実に対して中尉は気の所為か、落ち込んだように声のトーンがやや低くなった返事を返した。

「しかし、一体何で複数の生体反応が消えたんだ？ 盗賊団の奴等、幽霊にでもなって消えたか？」

センサーの故障で無ければ、何故複数の生体反応が消えたのか、それが分からない操縦兵は冗談交じりで呟いた。

「……………恐らく奴等は、地下水道に隠し通路を作っていたのだろう」

「か、隠し通路ですか？」

地下水道と言う限られた空間で、生体反応の消失、50人以上居る筈の盗賊達の姿が何処に居ない、この二つの謎に大佐はある可能性が頭に浮かんだ。それが隠し通路であり、制御管理兵は聞き返すように言った。

「大佐殿、地下水道内に盗賊団の隠し通路が在ると言うのですか！？」

「考えられない事ではない、奴等が警備の行き届いていない地下水道から『レイチム』に自由に出入りしているなら、地上から地下水道に続いている隠し通路を作ってもおかしくは無い」

「た、確かに……………」

「それに、西側地下水道は南東側とは違い、入水門が運河の水脈に直接繋がっている為、入水門からの脱出は不可能、つまり西側は？」

出口？が無い訳だ」

大佐の考えを聞いて操縦兵達や制御管理兵達は感応されたのか、盗賊達の逃走方法が頭の中で描かれるかのように浮んだ。

「そもそも連中は三人組とは違い、大人数では狭い空間でも有るのにも関わらず短時間で地下水道内の奥まで進んでいた、これは盗賊団が地下水道の通路構造を完璧に把握していると判断して間違いは無い。しかも奴等はその目的の何かが在るかのようにわざわざ地下水道の中に入って行った」

「い、言われてみれば……………」

盗賊達の手際の良さと行動を分析して、大佐は兵士達に自身が推測した答えを導き出そうとしていた。

「そして、何より決定的なのが、生体反応の消滅だ！ 生体反応の索敵は『？タイラント？』の生体センサーが地下水道内の至る所に設置してある同じ生体センサーと連携して空間内全体の生体反応を拾い上げる。だがつい先程、あった筈の生体反応が突如として消え、及び現在西側地下水道内に人間の生体反応が無い！ ……………という事は」

「「と言う事は……………」？」

操縦兵達と制御管理兵は口と耳を揃えて、説明の続きを聞く。

「盗賊団は生体センサーの索敵範囲が行き届かい場所に移動した……………センサーが索敵できない場所、つまり連中が隠し通路に逃げ込んだなら辻褄が合う！」

「！」

生体センサーは地下水道内なら生体反応を拾い上げる事は出来るが、逆に言えばそれは地下水道以外の場所ではその反応を拾う事は出来ない、生体反応の消滅、つまりそれは盗賊達が地下水道の外に出た事を意味しており、大佐の解説により室内の兵士全員は頭に電撃が走ったように気付かされる。

「大佐！ でしたらもう奴等は……………」

「ああ、三人組と同じ、もう地上に出ているのだろくな」

生体反応の消滅と盗賊達の姿が見当たらない、この二つのトリックが分かった時点で大佐を始め、中尉と室内に居る兵士全員が盗賊達の地上への逃亡を悟った。

「これで、盗賊団にも逃げられたか……………」

「……………」

三人組に続いて盗賊達に逃げられた事実には大佐は恥じる事無く呟き、兵士全員は掛ける言葉が見つからず、室内は暫しの間、沈黙が支配した。

「だが、まだこれで、終わった訳じゃない！」

静まり返った周囲に喝を入れるように大佐は、声を上げる。

「君！ 逃亡した三人組を目撃した住民から目撃情報を元に似顔絵付きの手配書を作成し、出来次第、『レイチム』及び各周辺の村町に配布させよと情報管理部の報道兵達に伝えてくれ！」

「あつ、はっはい！ 了解しました！」

「それと君！ 懲罰部隊に盗賊団が逃げ込んだ西側地下水道で、奴等の生体反応が在った反応地点に向かわせ、奴等が使ったと思われる隠し通路を見つけ出せと連絡してくれ！」

「は、はっ！ 分かりました！」

大佐は追跡をまだ諦めた訳では無く、二人の通信兵にカレン達と盗賊達の両方に追跡の施しを伝える。

「中尉！ 今から君は私と共に兵舎に向かい、地上に逃亡したと思われる盗賊団及び、三人組に対しての追跡部隊と調査部隊の編成を行なう！ 付いて来てくれ！」

「ハッ！」

追跡部隊と調査部隊の派遣の為に大佐は中尉に兵舎の同行を命じ、中尉は凛々しく敬礼して命令を了承し、二人は司令室を後にしようとした。

「そういえば中尉、？例の客人？はどうした？」

すると大佐はドアの前で、ある人物の事を思い出し、その人物が今、どうしているのか中尉に尋ねた。

「客人でしたら、随分前にこの都市からお帰りになられました」

「何時頃だ？」

「宿屋『カルテル』の片隅で、三人組と盗賊達が懲罰部隊から逃げだした直後です」

「そうか……………見苦しい所を見られずに済んだと言う事か」
余程その客人は、身分が高い人物なのか、或いは国のお偉いさんなのか、どちらにしてもこんな時にその人物が自分達の失態を知られなくて良かったと大佐は溜息と一緒に呟いた。

「諸君、都市内の住民に対する避難勧告を一時解除するように通信塔に居る兵士達に伝えてといってくれ！ 私達は兵舎に向かう、何か変化があったら知らしてくれ！」

「「ハッ！」」

室内に兵士全員は一斉に立ち上がり、一斉に敬礼を行ない、大佐の命令を了承し、そして大佐と中尉は敬礼を見届けた後、司令室を後にした。

「……………」

司令室に出て直ぐ、二人は兵舎に続いている廊下を歩き始めたが、何処か二人にはカレン達や盗賊達の事が頭の中で引っ掛かっているようで、お互い無言の状態で肩を並べて歩いていた。

「しかし、本当にとんでもない連中でしたね？ 大佐」

「……………あの少年少女の三人組の事か？」

この気まずい空気をどうにかしようと思ったのか、兵舎に向かう為の廊下で中尉は大佐にカレン達の話を持ち掛けた。

「ええ、監視カメラが壊わされて素顔を撮る事や拝見するも出来ず、赤外線カメラで姿形を捉える事しか出来ませんでした、それでも彼らの戦闘力は十分に拝見出来ましたね」

「ああ、私から見て三人の内、二人はかなりの手馴れと見た」

「でしょうね、『？ヒューマン？』の4倍近くの硬度を持つ、『？タイラント？』の装甲を貫くなんて、思いもしませんでした」

大佐と中尉は『タイプⅡ？タイラント？』の赤外線カメラを通して、

カレン達の戦いぶりと実力を見極めていたようで、大佐はカレン達三人の内、誰かは分からないが二人は相当な強者だと語る。

「それにしても若かったなあ、あの三人組は」

「分かるのですか、大佐？」

「カメラ越しに若さを感じた……………三人組は、十代後半と見て良いだろう」

ついでに大佐は、自分が戦っていた訳でも無いのに、直感的な勘で的確にカレン達の年齢を言い当てた。

「それは……………長年の経験で分かる物なのですか？」

「この歳になるまで戦っていれば、自然に身に着く物さ」

中尉がまだ得ていない物は、追い追年を取れば、気付かない内に身に着いていると大佐は、自身の経験談を述べた。

「だったら、私がそうなるには、まだまだ先の話ですね」

「いや、中尉の実力なら、私よりもモット早く身に着くかもしれないな」

「まさか、私が大佐よりも早くそれを身に着けるなんて、とてもそうは思えませんよ」

大佐と中尉はお互いに苦笑いを浮かべながら、自分が思った感想を言い合う。

「まあ、この話はまた今度にして、今はこれから追跡部隊と調査部隊に派遣させる為のメンバー選びと構築を兵舎に向かいながら話す事にしよう、中尉」

「……………了解しました！」

二人はお互い話している内にさっきまでのカレン達や盗賊達に対する失態で出来た心の中の憂いが少し晴れたようで、大佐は追跡部隊と調査部隊の人選選びと構造の配慮を持ち掛け、中尉は快さそうに了承した。

「私が推薦するに—————」

中尉が早速話を進める中、大佐は話を聞きながら頭の中の片隅で、ある事を考えていた。

「(三人組の内のあの一人の………あの構え、あの技、あの戦い方………そして中尉に報告で聞いた人物の特徴を照らし合わせても、間違い無い!)」

大佐はカレン達が『タイプⅡ? タイラント?』と戦っている中で、自分が知っている人物がカレン達、三人の中に一人居ると赤外線カメラを通して確信していた。

「(………あいつは、一体何をしているんだ………?)」

誰にも聞こえない心の中でそう呟きながら、大佐は中尉と意見を交わしながら、共に兵舎へと向かって行った………

お尋ね者確定!



.....一方その頃、カレン達は外へ続いて
いる坂道の通路を渡りきり、まだ日差しが残っている地上に舞い戻
っていた。

「はぁ.....まさか、一日二回も地上の太陽が懐かしく思
うなんて」

『水底の洞窟』に続いて、日差しが差し込まない地下水道から出て、
もう夕暮れになっている地上の景色に口口は、二度目の感動を体感
していた。

「やっぱり、地上が一番だね」

「ああ、ホントそう思うぜ」

どうやらカレンも同じよう感想を抱いているようで、暗い所で二回
もヒドイ目にあった二人だからこそ、二人はまたもや共感し合う。

「感動に浸るのは良いけど、まずは今の状況を打開する事も考えた
方が良いよ」

「.....」

共感し合う二人に水を差すようにアイシヤは今現在の状況について
言い、指摘された二人は口を閉じて、辺りを見渡した。

「考えろって、言われてもな.....」

「どうすれば.....良いだろう?」

地上に舞い戻った三人に待ち受けていた物は、遙か彼方から地下水
道の中まで伸びている川に檻のような網状のフェンスが川を囲って
おり、今カレン達はその檻のようなフェンスの中に閉じ込められて
いる状況だった。

「はぁ.....地上に出られたと思ったら、次は?これ(フェンス)」

「?だもんなあ」

「東南側地下水道の水は海から陸に流れる川を使っているから、地下水道内に敵や不審者が入り込めないように?こうゆう?防御を備えていて、当然だと思うよ」

果てしなく続いている川と同様、川を囲んでいるフェンスも果てしなく続いており、ロロはそこに居ると思うと、地上に戻れた感動は何処かに行っちゃい、代わりに溜息と愚痴が零れ、そしてアイシャは『トロイカ』軍が?このような物?を作っていて当然だと説明混じりに忠告する。

「?そんな事?ぐらい知っているよ、一応俺様はこの大陸の出身者なんだぜ? ちよつと言ってみただけだよ……………ま
あ、こいつは多分、?この事?は知らないと思うけどな」
「?」

「……………どうやら、そうみたいだね」

自分としては常識だったのか、アイシャに指摘されて、言い返したロロは、同時にカレンは?この事?については知らない筈だと視線を向けながら述べ、一方カレンは一体何の話なのか分からない様子であり、アイシャはカレンの反応を見て悟り、常識の無さを認識した。

「さてと、こいつをどう潜り抜けようか?」

アイシャの言う通り、今度はこのフェンスに囲まれた川からの脱出方法を真剣に考えようと切り出したロロは、気持ちを切り替えて、網状のフェンスに向き合った。

「そうだね、まずは……………」

「じゃあ、壊して通ろう!」

一先ず自身の意見を言おうとしたアイシャに横入りするようにカレンが、フェンスの破壊を提案し、背中に背負っている魔装器まそうぎでもある大剣に手を伸ばした。

「まてまて! ちよい待てカレン!!」

のっけから破壊という物騒な提案したカレンを制止するロロ。

「どうして？　これが邪魔なら、壊して進んだ方が……………」

「これは壊しちゃ駄目なんだ！　軍の物なんだぞ！」

「軍の？」

『軍の物』というキーワードにカレンは首を傾げ、口はまたいつもの説明パターンに入る事を承知でカレンに分かる様、話を続ける。
「いいか、俺達のような部外者、つまり一般人である人間が、軍の所有物を勝手に使ったり、壊したりすると重い刑罰が与えられるんだ！」

「刑罰が？」

「そうだ！　今日の前に在るフェンスは『トロイカ』軍の所有物だ。と言う事はこのフェンスをもし、壊してしまったら、俺達にまた新たな罪状が付けられる！」

記憶喪失のカレンは刑罰の意味がどうゆう物なのかはまだ良く分からないが、アイシャが教えてくれた牢獄の意味は分かっているのも、それと何らかの形で繋がっている事は何となく分かっていた。

「しかも、このフェンスは『レイチム』の地下水道の水路を守る為に？　国？が作った、防衛システムだ！　？軍？だけの物とは違って、国が作った物を壊せば、国内で済む普通の犯罪じゃ済まないんだよ！」

「？国？が作った？」

「兵器は？軍？だけの所有物だけど、？国？が作った軍の所有物と言う事のは、言わば国の所有物でも有るんだ。そして今此処でこのフェンスを破壊したら、私達は国家破壊工作と言う重い罪を着せられる事になって、同時に国際指名犯にさせてしまうんだ！」

『レイチム』の地下水道まで伸びている水路を守る為に作られたと説明する口口に続いて、軍の物でもあり、国の物でも有るフェンスを破壊すればどんな結果を招くか、アイシャはカレンに警告を伝えると同時に破壊してしまった時の罪状についても教える。

「少なくとも私達は此処に来るまで、法を破って、罪を犯してしまった。恐らく私達はもうお尋ね者になってしまったと思う……………」

「…………だから、これ以上罪を重くする事は避けた方が良いんだ！」
「そうそうアイシャの言う通りだカレン、つまり俺達は今着せられている罪状以上にイタズラに罪を重ねるマネは極力しない方が身の為なんだ！」

これから先の為、無駄に罪を重ねる事は避けるようにとアイシャとロロに説明混じりで注意させるカレン。

「ともかく、フェンスを破壊しないで通り抜ける方法を考えよう」

「分かったな、カレン？」

「……………うん、分かった」

ロロとアイシャの共同説明のお陰で、フェンスの破壊厳禁の事情を大筋理解したカレンは素直に了解し、大剣から手を離れた。

「まあ俺達の罪と言っても、まだ軽い方だ。軍が躍起になって探す程のレベルじゃねえ！ 例えお尋ね者になったとしても一カ月間ぐらい捕まらなきゃ、自然と俺達の事なんて存在と罪状と一緒に忘れられちゃうだろうな！」

「確かに私達は、大きな罪を犯した訳じゃないから、例え手配書を作られても多分『レイチィム』の近辺に在る、町村に配布されるだけだと思うから、『レイチィム』から遠く離れた場所に身を隠せば、問題無いと思うよ」

今、自分達が着せられている罪のレベルでは、頭を抱えて心配するような大きな物では無いとカレンを安心させるかのように話し合うロロとアイシャ。

「手配書か……………あの『バトル・マシーン』の監視カメラが壊れたから、どうせ似顔絵の手配書を作るんだろうなあ」

「でも、そっちの方が助かるよ。監視カメラが写した記録より、似顔絵の方が信憑性はかなり低いからね……………けど、やっぱり用心して、『レイチィム』近辺の町村には入らない方が良いと思うよ」

「分かってるって！ 正体がバレて、また追っかけられるようじゃ敵わないからな！」

そして、この何気ない会話を聞いて、カレンはフとある事に気が付いた。

「ねえ」

「ん？」

「今、思い出したんだけど、さっき地下水道で戦ったあの『バトル・マシーン』って言う物は、あれも軍の物だったんじゃないの？」

「あっ……………」

ついさっき戦って倒した相手を忘れた訳では無いが、カレンが地下水道で戦った『バトル・マシーンⅡタイプ？タイラント？』は軍の物ではないのかと言う指摘にロロはその事を思い出したように口を開いた。

「そ、そ、そうだった……………！ や、や、や、や、やべえぞ！ お、お、お、俺達、罪が重くなる事確定……………」

「それなら、心配はいらないよ」

「えっ？」

軍の物である兵器『バトル・マシーンⅡタイプ？タイラント？』を破壊してしまった事について自分達の罪が今より重くなってしまおうと思い、焦り出したロロを鎮めるかのようにアイシャは『心配無い』と言った。

「ど、どうして、そんな事が分かるんだよ？」

「私達は『レイチム』都市内で戦闘を起こした容疑者とは言え、軍は民間人でも有る私達に対して戦闘用大型の『バトル・マシーン』を使用し、挙句、その『バトル・マシーン』を破壊され、逃げられたと言う？負い目？が有る」

「？負い目？？」

「……………人が人に触れて欲しく無い不都合な事って意味さ」

怪訝そうにロロは、『心配無い』と言い張るアイシャにその訳を問いい、アイシャは淡々と自分達の罪が重くならない根拠を説明し始め、そして開始直後にいつも分かりやすい反応を示すカレンに？負い目

？の意味も一緒に説明した。

「成る程……………で、その？負い目？が何なの？」

「そんな軍の威信や評判に影響する？不名誉？な事を表沙汰にして、私達の罪を重くする事は誇り高い『トロイカ』軍と言っても、自分達の威信と評判を下げない為にこの事は世間には公表しない、つまり……………」

「その？不名誉？な事を隠す為に、俺達の罪も重くしない……………
…って訳か？」

「まあ、可能性の話だけど、十分にあり得る事だよ」

「……………いや、確かにその線は限りなく高いな」

推測ではあるがアイシャの軍が自身達の不利益に成り得る事実を表沙汰して、自分達の罪を重くする事は無いと言う現実感溢れる話にロロは何処か神妙そうな顔付きで納得した。

「う……………んと……………つまり、どうゆう事？」

一人だけ話しに付いて来れないカレンが居た。

「つまり、地下水道で戦って倒したあの『バトル・マシーン』について、俺達の罪が重くなる事は恐らく無いって話だ」

「これも気にする事は無いって事だよ、カレン」

いちいち説明するのが面倒臭くなったのか、簡単に言えば、特に気に悩む程では無いと二人はカレンに省いて教えた。

「ほんじゃあま、気を取り直して、此処から脱け出す方法を探そうか」

話が長引いたので、そろそろ真面目に自分達を取り囲っているフェンスから脱け出す方法を考えながら探そうとロロはとりあえず、足を前に運んだ。

「「「！」「」」」

すると、フェンスの近辺に在る大きく伸びている草むらが、ガサガサと音を立てながら揺れ始め、ロロは足を止め、三人は一斉に草むらに視線を移した。

「ルル！　ルルル！」

「！　ルモン！」

草むらの中から一匹の4本脚の生物が出て来て、ロロはその生物を知っているようで、名前を口にした。

「ルモン？」

「あの魔物の名前だよ」

「えっ……………魔物？」

出て来た生物が魔物だとアイシャに教えられたカレンは、少し信じられないと言いたいそう顔になった。何故なら『水底の洞窟』に居た魔物達とは違い、目の前に現れた魔物はこちらに襲い掛かる様子も無ければ、警戒する事や殺気を出していない事、そして何処か大人しそうな雰囲気を持っており、その全身紫色の身体の所々に黒い点が在る生物にカレンは身の危険を微塵も感じられないからだった。
「なんか……………魔物には、見えないね」

「そりゃあ無理はねえよ、何たってルモンは、性格は臆病で大人しい魔物だからな！　人対しては友好的で襲い掛かったりはしない、優しくて懐き易い魔物なんだよ」

「へえ……………、そうなんだ」

ロロの説明で魔物にも色々な魔物が居るんだとカレンは、川にゆっくりと歩いて近付いているルモンを興味深そうに観察しながらそう思った。

「ルル！」

「あっ！　川に中に入った！」

川の水辺まで近付いたルモンは、突如川の中へダイブし、淵の所に入ったのか姿を水の中に消してしまい、カレンはルモンの行動に疑問を抱いた。

「普段ルモンは、山に住んで居るんだが、たまに餌を求めて山から降りて、近くの川まで来て、今みたい川で餌を取る為に水の中へ入る事が有るんだ」

ルモンの行動にカレンが疑問を抱いた事を察したロロは、タイミング良くルモンの生活リズムの一部を説明した。

「ふうん……………ロロって、何でも知っているんだね！」

「へっ、常識だっつうの！」

「……………」

物知りだと褒め称えるように言うカレンにロロは『常識』だと言い返すも、顔は嬉しそうに微笑んでいた。そんな二人を余所にアイシヤは一人で歩いて、ルモンが先程潜んでいた草むらに近付いた。

「？ アイシヤ、どうかしたの？」

アイシヤが自分達を置いて、歩きだしたのでカレンは声を掛けた。

「……………二人とも、何故ルモンが此処まで来れたか、分かる？」

「あ？ どうゆう意味だよ？」

しゃがみ込んで草むらの中を掻き分けながら、意味深な発言をしたアイシヤにロロはその意図が分からず、尋ね返す。

「どうして山に住んでいるルモンが、このフェンスの檻の中に入ってきた事について、疑問は感じないの？」

「「！」」

何故ルモンは、壊す事以外で入る事も出る事も不可能と思えるフェンスの中に入れたのか、アイシヤに指摘されて、カレンとロロは『あっ』と呟いて、その事に気が付く。

「そ、そっういやそっうだな」

「……………穴でも、掘ったのかな？」

どうやってルモンはフェンスを越えて来たのか、ロロは考え始め、一方カレンは何となく思い付いた事を発言した。

「ある意味、正解だよカレン」

「ふえ、本当？」

ある意味だけれど、アイシヤに正解を貰った当人のカレンは予想外だったので、素っ頓狂な声を上げた。

「ロロ、ルモンの普段の食事はどうしているか、知っているよね？」

「え？ あ、ああ……………普段の食事は地面を掘って、土の

中に居る、虫を食っているんだよな、確か？」

唐突にルモンの普段の食事はどうしているのかとアイシャに話を振られたロロは不意を取られて、戸惑いながらも答えた。

「だったら、どうゆう方法でルモンがこの中に入れたか、大体想像付かない？」

まるで試すように意地悪そうに小さく微笑むアイシャは首だけを振り向かせて、掻き分けていた草むらを大きく広げ、カレンとロロに見えるようにした。

「！」

「そいつは！」

アイシャによって大きく広げられた草むらの奥には、フェンスの下の地面が掻き掘られた光景があり、その地面はフェンスの外側と中に入りする為に作られたかのように掘られており、視界に入ってきた光景にカレンとロロは目を見開いて、颯爽とアイシャが掻き分けている草むらに駆け寄った。

「多分ルモン達を作った、川への通り道なんだよ」

「そうか！ ルモンは地面を掘って、フェンスを通り抜けたのか！」
ルモンがフェンスの下の地面を掘って、川へ行き来する抜け道を作ったとアイシャは推測して述べ、ロロは悩み考えていたルモンのフェンス越えのトリックが判明した事に歓喜を覚える。

「これで、ようやく外に出られるね！」

もう既に太陽の灯が当たる地上に戻っては居るのだが、カレン達は自分達を取り囲んでいるフェンスを脱け出さない限り、本当の意味で地上に出られた事にはならない。だからカレンの言った事はあながち間違っていない。

「ちょうど、一人がギリギリに通れるぐらい………か」

人間より小さいルモン達を作った割には、掘られた道は差ほど小さくは無いが、自分達の身体の大きさを考えれば、ギリギリで通れる広さと深さだと、ロロは観測する。

「で、誰が先に通る？」

まずは、抜け道を一番目に通るのは誰にするか、アイシャは二人の意見を聞く。

「アイシャが先に見つけたんだから、アイシャが先で良いよ」

「レディファーストって奴だな」

抜け道を見つけたのはアイシャなのだから、手柄を取った人間が先に出るのは当然みたいな感じでカレンはアイシャに一番目を譲り、ロロも文句は無い様で、『レディファースト』と言う形で譲った。

「じゃあ、お言葉に甘えて……………」

二人に一番最初を譲られ、アイシャはそこにご厚意を特に嫌がる様子も無く受け取り、早速地面に全身を乗せ、ホフク前進で抜け道を進み、フェンスを下から通り抜け、フェンスの外へ出て行った。

行き先確認

女性でも有るからか、三人の中で一番背が低くて、身体もスツキリと細いアイシヤは何の苦労もなく、余裕でヘエンスの下の穴を潜り抜けた。

「……………よいしょっと！」

「よし、次は俺だ！ 良いよな、カレン？」

「うん、構わないよ」

アイシヤが無事にフェンスを通り抜け、身体を立ち上がらせた所を見計って、ロロは早く此処から出たいのか、次は自分達の番が来たから、『次は自分が出るから』とカレンにお願いするように聞き、カレンは自分が最後にしろ、どうせ出られる事は確かなのだから、特に断る理由は無いと思い、二番目を快く譲った。

「いやゝゝゝすまん、カレン！」

謝罪の言葉を送った後、ロロはカレンに感謝しつつ、地面に全身を乗せ、アイシヤと同じ様にホフク前進でフェンスの下を通り抜け、フェンスの外側へ辿り着いた。

「おおし！ 出られた！」

「後は、僕だけか」

ロロが抜け道を出て、身体を立ち上がらせた所までを見届け、カレンは最後に自分の番が来たので、二人の後を追いつけるように素早く身体を地面に乗せ、ホフク前進で抜け道を通ろうとした……………が。

「！？」

「「？」」

頭がフェンスを通り抜けようとした時、背中に背負っていた魔装器まそうぎもとい大剣が頭上のフェンスに引っ掛かって、カレンは前に進むと思っても進む事が出来ず、それを見て訳を知らずに何故カレンはフ

エンスを越えようとしなのか、アイシャとロロはどうしたのかと不審そうに思った。

「そこで何をしているの、カレン？」

「……………剣が引っ掛かって、通れないんだ」

アイシャの問い掛けにカレンは一旦後ろに下がって、もう一度前進し、フェンスを越えようとした……………だがまたしても大剣が引っ掛かり、カレンは原因を見せ付けるように答えた。

「もう一度……………」

そしてカレンは諦めずにもう一度試みようとして後退した、そんな姿を見てロロは。

「おいおい、だったらその剣をしまい込めば良い話だろ？」

「あ……………そ、そうだね」

何度も前に進もうとやり直しても、大剣が必ずフェンスに引っ掛かってしまうので、どうしてもフェンスを越える事が出来ずにいたが、抜け道を通りきれない一番の原因である大剣を？しまい込めば？済む話について、持ち主であるカレン自身が気付いていない事にロロは、呆れて頭を掻きながら大剣について指摘し、カレンは言われて初めてその事を思い付き、急いで背中中に在る大剣に手を伸ばそうとした。

「待って、カレン！」

「！ 何？」

突然アイシャに呼び止められ、カレンはピタッと手を止めた。

「フェンスの網には高圧電流が流れているんだ。もし網に触れたら、高圧電流が身体に流れて、前にみたいに身体が痺れしまうかもしれないから、気を付けて」

「う！ わ、分かった」

フェンスの網に触れれば、高圧電流が身体に流れて、痺れてしまうかもしれないというアイシャの知らせについてカレンは、何も知らないまま、？しまい込む？時に何かの弾みで網に触れていたかも知れないと肝を冷やした。

「よ……………つと」

カレンはアイシャの言う通り、地下水道での戦いの時みたいに身体が痺れるのは御免だと思い、慎重に核^{コア}でもあるストライクを大剣の剣格から取り外した。

『REGI・^{レジ}

^{アウト}OUT』

声と共に剣格の上から刀身までが消えて無くなり、ストライクはカレンの手から飛び離れ、残った『ガジェット』を腰に掛けて、カレンはそのままホフク前進してフェンスを通り抜け、やっと抜け道の近くに居るロロとアイシャの元へ辿り着いた。

「よし！ 全員フェンスを超えたところで、ここからはこれからお互いの行動或いは目的地について話合うぞ！」

三人全員がフェンスを無事に越えた事を確認したロロは、お互いのこれからの行動や目的地についての話を持ち掛けた。

「急にどうしたの、ロロ？」

抜け道から出て、立ち上がったカレンはフェンスを越えて早々にこれからの話を振り出した事について、ロロを尋ねた。

「俺達は三人もとめて『トロイカ』軍に追われているから一応共犯者って事になるんだぞ！ 『レイチム』には戻れないし、アイシャの言う通り『レイチム』の近辺にある町村に俺達の手配書が配布されているかもしれないだ。迂闊にこの辺りの町村にも行けないもつと『レイチム』から離れた所に行かなきゃならない！」

急に話題を持ち掛けた訳をカレンに分かるように説明を開始するロロ。

「おまけに魔物もここ等辺には沢山居るんだ！ 夜にでもなれば更に危険を増すし、だからこれから自分は何処へ行きたいのか、お互い話合って、もし目的地が一緒ならば、その目的地まで一緒に行動した方がより良いだろ？」

「成る程……………一理あるね」

お互いが行きたいと思っている、目的地が一致するならそこに着く

まで共に行動した方がより安全だというロロの意見に納得したのか、アイシャは頷いた。

「そういえば、カレンは探している人が居たんだよね？」

「えっ……………あ！ そうだった、ロロ！ 『レイチィム』で僕が探している女の子を見掛けた話を聴いたって言っていたよね！」

「あ、ああ、その話か」

まずはカレンの話を聞きたかったのか、アイシャはカレンが探している人物についての話を振り、色々な事があって、すっかり忘れていたカレンはアイシャに言われて思い出したようで、ロロが？ 聴いた？ と言う、自分が探しているペンダントを落とした金髪の少女の情報を早速、聴いた本人の口口に尋ねた。

「くれ……………あっいや、親切な？ 偶然出会ったある人物？ の話によると、その女は『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に向かったそうだぜ」

「『ホワイト・マウンテン白霧山脈』？ それは何処に在るの？」

行き先を教えてくれた人物の名を伏せたロロは、カレンに金髪の少女が『ホワイト・マウンテン白霧山脈』と言う所に向かったと伝え、もちろんそれが何処に在るのか分からないカレンは、場所の在り処も尋ねた。

「えっと……………確か……………」

「ちょうど、此処から東に行った所だよ」

尋ねられ、どの方向に向かえば目的地に着くかを考えるロロの代わりにアイシャが考える素振りも無く、東に指を指してあっさりと答える。

「此処から東か……………」

「なあカレン、お前は知らないとは思うが、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に行く気なら、止めといた方が良いぞ」

「……………どうして？」

目的地の在り処が分かった所で、ロロはカレンに『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に行かない方が良くと、警告する。

「あそこは『ホワイト・マウンテン白霧山脈』はこの『バムボア』大陸で、？ 3番目？ に

有名で危険な場所なんだ！」

「三番目？」

ホワイト・マウンテン

「『白霧山脈』はその名の通り、白い霧が架かった山脈なんだ。一旦山の奥に行けば、忽ち白き濃い霧が周りを包み込み、周辺一体を白い霧が視界を遮ってしまつて、そこに入つて迷い込んで一生、山から降りられなくなった人や、目の前が見えなくて、誤つて崖から落ちて命を落としてしまう人達が過去に多く居るんだよ」

ホワイト・マウンテン

何も知らないカレンにロロは『白霧山脈』が『バムボア』大陸で？三番目？に有名で危険な場所である事を教え、そして何故、危険と呼ばれているのかの主な理由をアイシャと一緒に説明するように挙げた。

「それだけじゃない！ 霧に隠れて、人に襲い掛かる魔物も居て、襲われて亡くなった人達も沢山居るんだ！」

ホワイト・マウンテン

「主にこれらが『白霧山脈』が人々から？三番目？に有名で恐れられている、理由なんだ」

「……………そうなんだ」

「だから……………止めといた方が良いぞ、本当に」

「……………それなら、あの子はそんな所に行って、大丈夫なんだろうか？」

ホワイト・マウンテン

付け加えられたロロの説明とアイシャが述べる『白霧山脈』が危険で恐れられている理由が分かったカレンは、ロロの忠告を余所に金髪の少女の身の危険を心の中で心配した。

「でも……………彼女は何で、そんな危険な場所に行ったんだろ？」

「んな事、知る訳が—————」

「恐らく考えられるのは、その子は首都『リア・カンス』への近道として、『白霧山脈』に向かったんだと思うよ」

ホワイト・マウンテン

「首都『リア・カンス』？」

ホワイト・マウンテン

何故金髪の少女はわざわざ危険な『白霧山脈』に向かったのか、不思議に思ったカレンは、ロロとアイシャに聴いてみると、ロロはまったく見当が付かないようだったが、アイシャは金髪の少女が首都

『リア・カンス』へ向かう為に近道として向かったと自身の推測を述べた。

「ちょ、ちょっと待てよ、アイシャ！ まさか、その女……………」
……首都への近道として『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に向かったって言うのか!？」
「考えられない事かな？」

「ま……………まあ、確かに地理的に考えれば、真っ直ぐ『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越えれば、首都『リア・カンス』に直ぐ着くけど……………!」
アイシャが淡々と語る推測は確かに一理あるが、どうやら口口にとっては納得できない部分が在らしい。

「危険を冒さなくても、首都には行けるだろうに」

「私もそう思うけど、でも考えられる事と言えば、これしか無いよ」
少女の危険を冒してまでの行動に口口は理解不能らしく、それには同感だがアイシャは考えられる可能性はさっきも言った通り、首都へ向かう為だと語る。

「僕、ホワイト・マウンテン『白霧山脈』に行くよ!」

「なっ!？ か、カレン!？」

いきなり堂々と自身の意思表示を言い出したカレンに口口は驚く。

「話を聞いていなかったのか? ホワイト・マウンテン『白霧山脈』は危険—————」

「危険な場所なのは分かったよ! でも、彼女がそこに行ったのなら、僕もそこに行けば、運良く会えるかもしれないし。彼女が危険な目に合っていれば、助けなきやいけないし。彼女が無事に『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越えたのなら、僕も早く追いつく為に『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越えて、超えた先に居る彼女にペンダントを渡さなきや、もう追いつけないかもしれないんだ! だからこそ僕は『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を通らなきやいけないんだ!」

同じ道を辿れば、幸運にも金髪の少女に会えるかもしれない。少女に危険が及んでいるなら助けなければならぬ。もし別な道を選べば、少女に追いつけなくなってしまうと考えたカレンは、頑なに『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を通ると主張する。

「そりゃあ……………そうだけだよ……………」

一理あるカレンの雄々しい言い分に、氣押しされたのかロロは齒切れが悪くなる。

「……………本気なのか？」

「本気も何も、僕は最初から行く氣だったよ」

「『水底の洞窟』の時とは違うんだぞ」

「分かってる……………此処からは僕だけの問題で、僕一人だけで行く事だから、ロロとアイシャに迷惑を掛けるつまりは無いよ」

「カレン……………」

迷惑を掛けさせまいとカレンは、自分一人で『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に向かう事を伝え、ロロは心配そうにカレンの名前を呟いた。

「なら……………私も一緒に行くよ」

「えっ？」

「はっ!？」

湿っぽい雰囲気をぶち壊すように、アイシャがカレンに『一緒に行く』と乗り出し、耳を疑ったカレンとロロは揃って、アイシャに視線を移した。

「あ、あ、あ、アイシャさん？ ど、どうして、あなたまでも？」

「私も、首都『リア・カンス』に用が有るからだよ」

突如の申し出にロロは何故か酷く動揺し、その所為か、声が震えつつ丁寧な口調になりながらもロロは、予想外にカレンと共に『ホワイト・マウンテン白霧山脈』への同行を申し出たアイシャに同行の理由を問い掛けると、自身も首都『リア・カンス』に用事が有るとアイシャは説明を開始する。

「用事って？」

「二日後に人と会う約束なんだけど、今の状況を分析して考えると、会う筈の日に間に合わなくなるんだ」

「間に合わない？ どうして？」

カレンも同じく意表を突かれるが、ロロとは対照的に動揺はせず、落ち着いた態度で『リア・カンス』での用事が何なのかを聴くと、

アイシャはある人物と会う約束がある事、そしてこのままでは、その人物と会う約束日に遅れてしまうと話し。何故間に合わないのか、カレンは詳しい事情を要求した。

「本来なら、二日程度で済む通常の地上ルートで『リア・カンス』に行くつもりだったんだけど、今日から『トロイカ』軍に追われる身になって、首都に向かう途中で泊まる筈の『レイチィム』近辺の町村には訪れる事が出来なくなってしまったから、『レイチィム』からもっと離れた町村に泊まらなきゃいけなくなったけど、でも此処からそのもっと離れた町村に行くととなると、歩いて最低でも一日は掛るんだ」

「一日……………か」

一日という単位にカレンは、『レイチィム』からもっと離れた町村という所は、それ程遠い距離に在ると悟った。

「もし、通常ルートでの訪れる筈だった町村じゃない方を選んで、首都『リア・カンス』に向かうとすれば、分析すると最低三日は費やしてしまう、それじゃあ約束の日には、当然間に合わないんだ！」

「じゃ……………じゃあ『白霧山脈』ホワイ・マウンテンを越えれば、ちゃんと間に合うって言うのかよ？」

本来使う筈だったルートが使えない以上、約束の日には間に合わないといアイシャの解説を聞いたロロは、先程カレンに『一緒に行く』ホワイ・マウンテンと言い出した口ぶりから、『白霧山脈』ホワイ・マウンテンを越えたら、本当に間に合うのかと思い、半信半疑で言ってみた。

「通常ルートなら『リア・カンス』への道のりは最低二日掛る、けど『白霧山脈』ホワイ・マウンテンを真っ直ぐ超える事が出来れば、たった半日で到着出来るんだ」

「半日で？ 本当かそれ？」

さすがのロロもこの事は知らなかったようで、アイシャの言う『たった半日で着く』という情報が本当なのかどうか、真偽を確かめるべく尋ねた。

「これは数少ない、『白霧山脈』ホワイ・マウンテンを通り超えた人の証言だから、間

違い無いよ」

ホワイト・マウンテン

『白霧山脈』を越えたという本人から聴いたのか、アイシャは嘘を付いている様子も無く、キチンと説明した。

ホワイト・マウンテン

「とにかく、『白霧山脈』は確かに危険な場所だけど、超える事出来れば、より早く首都『リア・カンス』に着く事が出来る筈だよ」要約すると、約束事で首都『リア・カンス』に向かう途中、訪れるつもりだった『レイチィム』近辺の町村については自身が軍に追われる身になってしまったから泊まる事は断念せざる終えず、更にはもっと離れた町村に向かうとなると、最低一日は費やす事になる。しかし、危険ではあるが『白霧山脈』ホワイト・マウンテンを真っ直ぐに越えれば、たった半日で首都に着けるとアイシャは自身の予定に在った事項と現在自身が置かれている現状と遠い町村に向かう場合の掛る時間、そして、『白霧山脈』ホワイト・マウンテンを越えた時のアドバンテージも語った。

旅は道ずれ

王都『リア・カンス』へ向かうアイシャの事情は理解したが、それでもロロは納得できなかった。

「……………成る程、理由は分かった……………だが、何もお前までも、ホワイト・マウンテン『白霧山脈』に向かわなくても……………」

「君が言いたい事は分かる。けど私は、約束事はちゃんと守りたいし、それに山脈の向こう側に在る『リア・カンス』なら手配書は行き渡っていない筈だから、軍に追われる心配は無いと思うし、何よりもう日が暮れているから、早く何処かで寢床を確保する方が最優先と判断したしね」

ホワイト・マウンテン『白霧山脈』を超える理由は分かったけれど、危険な場所なのは変わりない為、ロロはカレンの時と同じように止めといた方が良いと促そうとするが、アイシャはロロが自分に対して伝えたい事を察しながらも、約束を守る事や首都に逃げれば手配書が行き届いていないメリット、そして、寢床の確保が何より大事だとロロの言葉を押し退けるようにアイシャは自身の至った考えを話した。

「と言う訳でカレン、一緒に^{ホワイト・マウンテン}『白霧山脈』への同行をお願いしても良いかな？」

そしてアイシャは自身の答えを伝えた後、改めてカレンに同行を申し込んだ。

「もちろん良いよ！ アイシャと一緒に来てくれるなら大歓迎だよ！」

「ありがとう、そう言ってくれると嬉しいよ」
ホワイト・マウンテンお互いの目的自体は違うが、危険な道のである『白霧山脈』に入るのと同じなので利害が一致し、お互い同行すれば、一人の時よりも身の危険が少なくなるから、喜んだ顔でカレンはアイシャの同行を快く受け入れ、アイシャは上品な笑みで感謝の言葉を述べた。

「でも助かった~~~~~本当のところ、一人でちゃんと『白霧山脈』マウンテンにも行けるかどうか心配だったんだよね~~~~」

アイシャの同行が嬉しいようで、カレンはつい本音を零してしまう。

「アイシャと二人なら、迷わずに目的地に着けるから、安心だよ」

「私も、カレンと一緒に心強いよ」

このお互いの発言にはお互いに深い意味は無く、ただ単純にカレンは道案内としてアイシャの同行を喜んでいただけで、対してアイシャもカレンの実力なら申し分ないという意味で言っただけであって、単純に言う二人共お互いに送った言葉は期待に対する発言に過ぎないのであった。

「最後になるけど、ロロはこの後どうするの？」

「！ お、俺か？」

カレンはアイシャとの同行の話が着いたので、最後に残ったロロに自分自身のこれからの行動について、話を振った。

「えっと……………俺は、その……………」

今度は自分に番が回って来た事にロロは、まるで準備していなかったか或いは予定が狂わされたかのように、何故か戸惑っていて、歯切れが悪く自身の話を出そうとしなかった。

「……………」

「ロロ？」

そして一言も喋らず、黙り込んだロロにさすがのカレンも不審に思い、声を掛けるが、その声が届く事はなかった、何故なら……………

「（何故だ……………何故こうなった？ 本当ならこの二人をうまく

事丸め込めて、遠くて良いから身を隠せて、泊まれる町村と一緒に同行させようとしたのに……………何でこの二人は困りによって、

『白霧山脈』ホワイト・マウンテンなんかに行くんだ！？）」

何故ならロロは、このような不純な考えをしていたので、予想外にカレンとアイシャが自分を置いて二人一緒に『白霧山脈』ホワイト・マウンテンに行く事になって、自分の計画が脆くも崩れ去った事に頭が一杯になって悩

んでいた為、カレンの声が耳に届いていなかったのはこれが原因のようだ。

「ロロ、聞いている？　ロロ？」

「（やばいぞ！　本当にやばいぞ！！　もしこのまま俺一人だけ、遠い町村に行くとなると身に危険は十分にやばい！！　魔物は道中に必ずと言っていい程現れるし、夜になれば更に危険だ！！　………：………：………：俺、どうするんだ？）」

カレンの呼び掛けを余所にロロは不純な考えが仇になって、自分はこれから一体どうするのか、今更考えるように悩みまくっていた。

「（どうするんだよ、俺！？　どうすんの！？！？）」

「ロロ！！！」

「はっ！」

悩みに悩んで周りの声が聞こえなくなっていたロロに、いくら声を掛けても返事が無いので痺れを切らしたカレンは怒鳴るような大声で叫び呼び、この大声でロロはようやく我を取り戻した。

「返事ぐらいしてよ、ロロ！」

「あ、ああ、いや……………すまん」

自分の世界に入り込んでいた所をカレンの大声で現実世界に舞い戻ったロロは、ややムスツとした表情のカレンに『返事をしてくれ』と注意されて、何処か怒られた気分になって、腰を低くして謝った。

「ロロ、もう一度聞くんけど、ロロはこれからどうするの？」

「俺は……………」

もう一度聞き返される同じ質問に、ロロは目を閉じて、これからの事を考え、決断する為に少し間を空けた。

「（仕方ねえ……………背に腹は代えられないか！）」

残る道はこれしか無いと判断し、考えを終え、目を開いて、ロロは自分の決意を口にする。

「俺も行く！」

「え？」

意図が読めなかったカレンは、首を傾げた。

「だから、首都『リア・カンス』に向かう為に、俺も『白霧山脈』ホワイト・マウンテンへ一緒に行くって言ってんだよ！」

二度同じ事を言うのが恥ずかしいのか、声を荒げてロロは自分も『白霧山脈』への移動に同行すると言い放った。

「君も？」

「あれ？ ロロも一緒に来てくれるの？」

ロロも『白霧山脈』ホワイト・マウンテンに行くと言い出した事にカレンとアイシャは、少し意外そうに聞き返した。

「何だよ、悪いか？」

「悪いとは言って無いけど、でも君は私と違って、首都『リア・カンス』に用事や約束がある訳じゃ無いんだよね？」

自身とは異なり、ロロは『リア・カンス』については何も用事が無いと思っていたアイシャは、『リア・カンス』への向こう動機を尋ねた。

「もちろん、用はねえよ。だが、俺だけで辿り着くには一日も掛る町村の魔物が飛び交う道中を一人で行く、そんな死に行くようなマネはしたくない！」

『リア・カンス』自体には用事は無いが、ロロは一日も費やし、魔物が度々出現する遠い町村の道のりを自分一人では行きたくないと力強く二人に宣言する。

「おまけに今頃『トロイカ』軍は、盗賊達や俺達を探す為に搜索部隊を派遣していると思うし、後、夜になったら『レイチム』周辺にパトロール部隊も出動させると思うから、それでもし、俺がノコノコと一人で町村へ歩いている途中に、そいつらに見つかったりしたら、逃げ切れるのは到底、無理だと俺は推測するね！」

ついでに言えば、『トロイカ』軍は自分達や盗賊達を捕まえる為に、搜索部隊とパトロール部隊を派遣して来ると考え、その部隊達に見つかれば、確実に捕まってしまうとロロは自身の頭をフルに稼働させて導き出した、可能性を指摘する。

「以上の二点から俺一人じゃ、魔物達によって町村に着く前に襲わ

れてくたばるか、もしくは軍に捕まる可能性が大きい！　そういう訳だから、俺は――――」

「つまり、君は一人で遠い町村に行くという危険な道を選ばずに、私達と一緒に『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越え抜けて、首都『リア・カンス』に行った方が安全だと考えたんだね？」

自分達と一緒に『リア・カンス』に行けば、一人で他の町村に行くよりは幾らか安全だと、話の筋から、ロロの考えをアイシャは推測して述べた。

「ピンポーン！　その通り！」

核心を突いたアイシャの指摘に、ロロはお茶目に肯定した。

「山脈を越えるのに半日掛るとして、今の時間を考えて計算すると、首都に着く頃はもう深夜だろうが、一日も掛る町村の道のりと比べたら、大分マシな方だと思うし。アイシャの言う通り『リア・カンス』なら手配書の心配は無いについては俺も同感だし、それに危険な道中になるから味方は多い方が、俺としてもお前達にしても助かるだろう？」

「……………賢明な判断だね」

呆れたのかそれとも、感心したのか、アイシャはロロの考えを？　賢明な判断？　だと苦笑いを浮かべながら賛美した。

「と言う訳でカレン、俺の話はもう分かっただろう？　俺も一緒に

ホワイト・マウンテン『白霧山脈』へ行ってやるから、感謝しろよ！」

「ロロ……………ありがとう！　またよろしく頼むよ！」

理由はともかく、またロロと一緒に行動出来るのが嬉しいのか、カレンは笑顔で『ホワイト・マウンテン白霧山脈』への申し出を感謝と共に受け入れた。

「それじゃあ話した結果、意見同一で三人全員『ホワイト・マウンテン白霧山脈』へ向かうって事で、良いかな？」

「ああ」

「うん」

これにて三人全員の話が終わって、三人それぞれ目的は違うが、目的の地が一致した事で、行動を共にする事にした、カレン、ロロ、ア

イシヤは最終確認で、自分の意思に変更は無いと首を縦に振って頷いた。

「ロロ、アイシヤ、行こう！」

出発の先陣を切ったカレンは、今自分達の位置から東に位置する『ホワイト・マウンテン白霧山脈』への道を一歩先に踏み出し、アイシヤとロロは先頭を取ったカレンが行きすぎて離れないようにちゃんと隣を付き歩き、三人は『ホワイト・マウンテン白霧山脈』まで足を運んで行った……………

説明会？



.....その後、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』へ歩き続けて数十分、カレン達一行は日が更に落ちて、景色が暗くった道中の先を眺めながら、足を止めずに前へ進んでいた。

「う〜〜〜〜ん、分からないな.....どうしてあの時、僕の魔装器まそうぎは突然姿を変えちゃったんだろ？」

歩いている最中、カレンは手に握っている『ガジェット』を見詰めながら、地下水道で『バトル・マシーン』と戦っていた最中に突然起こったアクシデントの事について思い出し、何故あんな事が起きたのだろうか、理由が分からず嘆いていた。

「カレン、魔装器まそうぎ使いなのに、魔装器について何も知らないの？」

「ああ、こいつは本当に何も知らないと思うぞ。何てったってカレンは田舎者の中の田舎者だからな」

顔には出していないが、アイシャは魔装器まそうぎを持っているくせに、魔装器に関しての知識が皆無と思えるようなカレンの言動に困惑するが、ロロはカレンの知識の無さは彼が田舎者であるからと、こじ付けるように教えた。

「カレン、魔装器には『メイン・マナ』と『サブ・マナ』という二種類の動力源が在るって事は、知ってる？」

「へ？ 何それ？」

「.....本当に何も知らないんだね」

田舎者かどうかは分からないが、カレンは本当に何も知らない事はちゃんとその眼と耳で再確認したアイシャは、込み上げてくる呆れと喉の所まで昇って来た溜息を一先ず抑えて、自分が知り得る魔装器まそうぎに関しての知識を一から教える事にした。

「まずは『核』を『ガジェッター』に差し込んで、魔装器としての姿を形成させる事を『REGIST・INSTALL』、略して『REGI・IN』って言うの」

「『REGIST・INSTALL』？」

自分の魔装器が姿形を形成する時に、良く耳にすると同時に魔装器自身が必ず発する『REGI・IN』という言葉が、『REGIST・INSTALL』という言葉の省略だと知り、そしてそれはどのような意味なのかカレンはもっと詳しく内容を知ろうと説明を聞き続ける。

「『REGIST』は？古代語？で、『形成』と言う意味で、残りの『INSTALL』の『姿形を映し出す』を合わせて、世間は『REGIST・INSTALL』の意味を『形を形成して、姿を映し出す』と風に解釈しているの」

「それが、『REGI・IN』の意味？」

「あくまで世間ではそう解釈されているだけだよ、今の世代になっても、この言葉の意味はまだ完璧に解明された訳じゃないんだ」

「へえ〜〜〜」

今まで、度々耳にしても理解していなかった『REGI・IN』の意味を仮にもようやく知ったカレンは、頭の中で抱え続けている無数の疑問の一つが解消されて、歓喜の声を零した。

「で、次に移るけど、魔装器を『REGI・IN』して、姿形を形成した時、最初に現れる姿を『SAFETY・MODE』と言い、そして『PURGE・ON』させた時に現れる、次の異なる姿を『DETROIT・MODE』って言うんだけど、これは知ってる？」

「……………これも、知らないみたいだね」

一度に意味が分からないもしくは知らない単語が二つも出て、カレンは首を左右に三回傾げるというリアクションを無意識に取ってしまいが、これが幸いしたのか、自分が混乱している事を分かりやすく周り（二人しか居ないが）に伝えた為、説明役であるアイシャに

はちゃんとそのリアクションの意味が伝わった。

「いいカレン？　まず、『SAFETY・モード』は魔装器を『REGI・IN』した時に武器としては殺傷能力が極めて低い状態で現れる姿を指すんだ」

「（……………？あの姿？の事か）」

アイシャの言う、『SAFETY・モード』《モード》が自分の魔装器が姿形を形成もとい『REGI・IN』した時に現れる、切れ味皆無の鈍器みたいな姿をした大剣がそれである事をカレンは記憶の中で思い付く。

「『SAFETY・モード』時で殺傷能力が低いのは、魔装器としての力をセーブした状態でもあるからなんだ」

「力をセーブしている？　どうゆう風に？」

殺傷能力が低いのは、魔装器としての力がセーブされている事に関係していると聞いたカレンは、その事に疑問を思い、どうゆう風に関係しているのかを問い掛けた。

「剣で例えてみると、『SAFETY・モード』は剣に？鞘？を付けたままの状態……………つまり、『SAFETY・モード』時には魔装器の力を『抑えた《セーブ》』する役割を持つ？鞘？ような部分が存在するんだよ」

「？鞘？の部分？」

「魔装器を『PURGE・ON』した時に、外れる部分の所の事だよ」

『PURGE・ON』と言う言葉は『取り外しを行なう』と言う意味であり、カレンはこの言葉の意味だけは、初めて聞いた時から分かっていた。

「！　じゃあ……………？あれ？が？鞘？だったんだ！」

魔装器を『REGI・IN』した時、最初に形成される、鈍器のように鋭さを持たない大剣の刃の部分から剣背部分までが、魔装器の力をセーブする？鞘？の部分でも有る事にカレンはアイシャの説明のお陰で気付く事が出来た。

「? 鞘? の付いた状態では、武器としての本来の力を発揮できない上に魔装器としての力もセーブされているんだよ」

「成る程……………」

例えで言うと、斬る為の剣に鞘を付けたままでは、相手や物を斬る事が出来ず、本来の力を発揮できないとアイシャの分かりやすい解説にカレンは、魔装器の『SAFETY・MODE』時はその類いだと悟る。

「そして、最後に『DETROIT・MODE』と言うのは、『PURGE・ON』で? 鞘? の役割を果たしていた部分が外れて、『SAFETY・MODE』時が解除された後、姿形が変わって、殺傷能力が極めて高くなり、魔装器としての力を完全に解放した状態の姿を指すんだ」

「……………それって、僕の魔装器が最初の姿から切れ味抜群の刃になった姿の事を言っているの?」

説明を理解していく内に何となく、アイシャが語る『DETROIT・MODE』が自身の持つ、大剣の形をした魔装器が、鈍器のよ
うな刃から鋭い刃に大変身した姿の事を指しているのでは無いかと、カレンは察して尋ねた。

「正解……………カレンの言う通り、『DETROIT・MODE』はカレンの魔装器で言うと、剣として、在るべき鋭さを持った姿の事を指しているんだよ」

「それじゃあ、『DETROIT・MODE』が魔装器としての力を完全に解放した状態って、具体的には一体何なの?」

予想が当たっていたので、カレンは次に『DETROIT・MODE』での姿では殺傷能力が高くなるのは分かるが、魔装器としての力が完全に解放された状態というのが一体どうゆう物か、具体的に聞いてみた。

「『DETROIT・MODE』時では、武器としての殺傷能力向上だけじゃなく、『SAFETY・MODE』時と比べて、魔装器自体の技の威力が三倍以上に跳ね上がるんだ」

「（威力が上がる？ ……もしかして）」

確かに地下水道での戦いの時、『バトル・マシーン』に向かって魔装器自身が放つ『BEAM《ビーム・CANONをお見舞いしたら、SAFETY・MODE』時とは違って、威力が数倍上がっていた事をカレンは心当たりが在る様に思い浮かべる。

「更に聞いた話に因ると、『DETROIT・MODE』時の魔装器には持ち主が繰り出す、その魔装器を使つての技の威力も三倍以上上がるという能力が搭載されているってらしいよ」

「！ やっぱりそうなんだ！」

この話で、『DETROIT・MODE』時の魔装器は魔装器自体の技の威力だけでは無く、持ち主本人が繰り出す技の威力も上昇する事にカレンは、地下水道での戦いで、大剣を使つての全ての技の威力が上がつていた原因は『DETROIT・MODE』状態になつていた自身の魔装器である事については、薄々気が付いていたがアイシャの付け加えの説明によって、謎が解けたかのように確信した。

「『DETROIT・MODE』時になった魔装器は一般的な武器では太刀打ち出来ない程、強力な物だけど……………制限が在るの」

「制限……………と言うと？」

「その制限は、最初の方で言った『メイン・マナ』と関係しているの」

「『メイン・マナ』って、確か……………魔装器の動力源って言う物の一つだったっけ？ それと『DETROIT・MODE』の制限とどんな関係が？」

遂にここで、『メイン・マナ』に関する話が来て、カレンはまず、アイシャの言う『DETROIT・MODE』の制限が、その『メイン・マナ』とどうゆう風に関係を示しているのかを尋ねた。

「さっき話した通り、魔装器は『メイン・マナ』と『サブ・マナ』という動力源、つまり各それぞれの動力源に在る『マナ』で動いているんだ」

「魔装器が『マナ』で動いている？」

魔装器が『マナ』によって動いている事実にかレンは、目を見開いて怪訝そうに聞き返す。

「そう、全ての命の源であり、万物の象徴でもある『マナ』によってね」

「万物の象徴？」

「あ~~~~~『水底の洞窟』での時の説明が、少し足りなかったか~~~~」

『マナ』を万物の象徴と言われて、もちろん意味が分からず、再度首を傾げるリアクションを取ったかレンに口口は、『水底の洞窟』で自身が説明した『マナ』について、『説明不足』だったと、頭をボリボリと掻きながら話に加わって来た。

「いいかかレン？ 『マナ』はこの世界や俺達生物達を生み出し、全て命の源として身体の中に在る存在だけじゃなく、地上には『自然のマナ』と言う普段、目には見えないが確かに俺達の周りや世界中に浮いているように存在していて、環境に命を与え、自然を豊かにする力を持っている存在の『マナ』も在るんだ」

「『自然のマナ』？」

「体内に在る、『マナ』とは違って、自然界にだけに存在する『マナ』の事だ」

魔装器に対して、大きく関わりのある『マナ』に関しての知識を自分も一から教えようと質問責め覚悟で、口口は乗り出した。

「自然の中で、生まれた『マナ』って事？」

「まあ、？ある意味？ではそうだ」

「それじゃあ、命を与えるって？」

案の定、質問の連続を予感させるかレンの問い掛けに口口は怯む素振りを見せる事は無いまま、説明を続行する。

「昔、世界で有名などある『自然のマナ』の哲学者が唱えた仮説に因ると、『自然のマナ』がそこに在れば、何も無い所でも植物という命を誕生して、そしてその植物は次々と仲間と子供を増やして、

やがて森という自然を作り上げるって話だ」

「それが……………『マナ』の力……………」

話を簡単にすると、『自然のマナ』はそこに存在するだけで、自然が無い所でも自然を作り出す事が出来ると語る、ロロの解説にカレンは『マナ』の偉大さを改めて知った。

「しかし、『自然のマナ』の力はこれだけじゃない！『マナ』が万物の象徴と呼ばれている理由は、もう一つ在る」

「もう……………一つ？」

「『自然のマナ』は火、水、風、光、他モロモロの『エネルギー』に変換できる。万能な『エネルギー体』でも有るんだぜ」

「『自然のマナ』が『エネルギー』に？」

自然を作り上げるとは別に『自然のマナ』を万能な『エネルギー体』と呼ぶロロは、『自然のマナ』の隠されたもう一つの力の話に移る。

「俺やアイシャが魔法を使う所をお前も見ているだろう？俺達は魔法を使う時、体内の『力のマナ』を消費（変換）させて、傷の治療や氷を出したりする所を……………それと『自然のマナ』を『エネルギー』に変換させるのと一緒なんだよ」

「魔法と一緒？じゃあ、僕達の周りに在るって言う『自然のマナ』を消費（変換）すれば、魔法みたいに火や水を出す事が出来るって事？」

「そうそう、大分『自然のマナ』の事が分かって来たな」

『水底の洞窟』で説明不足だったが、魔法と『マナ』についての関係性を教えられたカレンは、『自然のマナ』も消費（変換）させれば、魔法みたいに何かを生み出す事が出来ると考え付き、ロロは説明の内容を大方理解したカレンに感心する。

「世界中の何処に行っても、目に見えない空気と同じ、地上に必ず存在している『自然のマナ』を変換させれば、火を起こしたり、水を生み出したり、電気を発生させたり等、世間で一般的に使用されている幾つ物の『エネルギー』に変えられる幅広い変換能力と場所を選ばずに存在している事が、『自然のマナ』の一番の特徴なんだ」

「その地上に存在している『自然のマナ』を取り込んで、『エネルギー』として稼働するのが魔装器、この世界で唯一『自然のマナ』で動いている代物なの」

ロロがカレンに『マナ』に関する知識を十分に伝え、話が終わりそうになる見切りの良い所で、さりげなく魔装器の話に移し変え、説明役に戻って来たアイシャ。

「話を魔装器に戻すけど、魔装器は機内に『マナ』を貯存している『メイン・マナ』と『サブ・マナ』という動力源を使い分けて、稼働しているの」

「使い分けているって？」

「まずは、『SAFE^{セフティ}TY・MODE^{モード}』時の魔装器は『サブ・マナ』に貯存している『マナ』を使って、稼働しているんだ」

魔装器は『自然のマナ』を取り込んで、『エネルギー』にして稼働していると話をさりげなく移し変えた時に語ったアイシャは、早速本題の一つでもある魔装器の動力源『メイン・マナ』と『サブ・マナ』についての説明に戻った。

「『サブ・マナ』は『メイン・マナ』と比べて、貯存している『マナ』の量はかなり劣るけど、代わりに常時『自然のマナ』を補充する速度がとても速くて、尚且つ『SAFE^{セフティ}TY・MODE^{モード}』時の魔装器は、魔装器自体の技を使っても、消費する『マナ』の量は低コスト並びに調整しやすいようになっているから『マナ』の消費は限りなく少なくし、おまけに例えどれだけ『マナ』を消費しても、『サブ・マナ』は瞬時に『自然のマナ』を大量に取り込んでしまうから『エネルギー切れ』言い換えると、『マナ切れ』を起こす心配は殆ど無いんだよ」

「そうなんだ……………」

簡易的に言くと、『サブ・マナ』は『マナ』の量は少ないが、それを補う様に『マナ』を補充する速度が極めて早く、更に『SAFE^{セフ}TY・MODE^{モード}』時の魔装器自体の技に消費する『マナ』の量は限りなく少ない為、『マナ切れ』が発生する事は無いに等しいらしく、

アイシャの説明にカレンは関心そうに眩く。

「次に『DETROIT・MODE』時の魔装器は『メイン・マナ』に貯存している『マナ』で、稼働しているんだけど、此処は『サブ・マナ』と違って、大分異なる部分が在るんだ」

「異なる部分………それって、もしかして制限と関係が有る物なの？」

「うん、正解」

『メイン・マナ』と『サブ・マナ』の異なる部分には『DETROIT・MODE』に在る、制限に何らかの繋がりが在るのではないかと悟ったカレンにアイシャは肯定の言葉を口にした。

「『メイン・マナ』は『サブ・マナ』と比べて、貯存している『マナ』の量は20倍近い量を誇っているけど、『DETROIT・MODE』時では魔装器自体の攻撃力と出力が格段に上がるから、それに比例して消費する『マナ』の量も何倍にも増えるし、持ち主が放つ魔装器を使つての技の威力が上昇する能力にも『マナ』を使ってしまうから、『DETROIT・MODE』時は非常に『マナ』の消耗が激しいんだ」

「強い力だもんね………何だか分かる気がする」

『DETROIT・MODE』時での『マナ』の著しい消費を聞いて、大きな力には必ず代償が付き物だと、心の何処で浮かび上がるようにそう思ったカレンは、感傷に浸るような表情で眩いて、一人納得していた。

「しかも、『SAFETY・MODE』時とは違って、『DETROIT・MODE』時での『メイン・マナ』は常時の『自然のマナ』の補充が出来なくなってしまう上に、？その状態？を維持するだけでも『マナ』を消費してしまうの」

「（異なる部分って、この事か！）」

「そして、『DETROIT・MODE』時で、『メイン・マナ』の『マナ』を使い切ってしまうと、魔装器が自動的に『RETURN・PURGE』して、強制的に『SAFETY・MODE』に戻

つてしまうの」

『RETURN・PURGE』とは『取り付ける』という意味で、カレンはこの言葉の意味も、初めて聞いた時から分かっていた。

「！まさか、あの時……………」

『SAFETY・MODE』と『DETROIT・MODE』の異なる部分が判明した直後に、『メイン・マナ』の『マナ切れ』で起こる現象を聞いたカレンは、『バトル・マシーン』戦の戦いの途中で、何故自身の魔装器が勝手に状態（姿）を変えたのか、その理由は『メイン・マナ』の『マナ』が切れて、アイシャの言う通り強制的に『SAFETY・MODE』に戻されたからだと確信した。

「成る程……………」と言う事は、今話した内容が『DETROIT・MODE』時の制限なんだね？」

「うん、さっき話した通り、『メイン・マナ』は『DETROIT・MODE』時を維持するだけでも『マナ』を消費してしまうから、『マナ切れ』を少なくする為にも、『REGI・IN』中での戦闘時以外はなるべく『SAFETY・MODE』を維持した方が良いでしょう」

カレンが知りたかった魔装器の勝手な変貌の理由と制限を教えたアイシャは助言として、戦闘の時以外は『SAFETY・MODE』を保つ様にと促す。

「僕の魔装器、あの時（地下水道）の戦いで一度『マナ切れ』して、『SAFETY・MODE』に戻っちゃったけど、また『DETROIT・MODE』に出来るかな？」

「大丈夫、『REGI・IN』していなくても、『ガジェット』が常時『自然のマナ』を取り込んで、『メイン・マナ』の『マナ』を自動的に補充してくれているから、ある程度『マナ』を補充したら、また『DETROIT・MODE』に移行する事が可能だから、心配はいらないよ」

『メイン・マナ』の『マナ』を使い果たして、『DETROIT・MODE』が解除されたので、もう一度なれるかどうか心配そう尋

ねるカレンにアイシャは、魔装器は『DETROIT・MODE』
以外の状態の時なら、自動的に『メイン・マナ』の『マナ』を補充
する上に、『マナ』を一定量回復出来れば、もう一度、形態変化は
可能だと教える。

「そっか、分かった……あれ？ でも『メイン・マナ』
の『マナ』が『SAFETY・MODE』から『DETROIT・
MODE』に移せる位の量が溜まっているかどうかは、どうやった
ら分かるんだろう？」

ここでカレンにある疑問が浮んだ。それは『DETROIT・MO
DE』に移行する為に必要な『メイン・マナ』の『マナ』がどれ位
貯存されているかを、どうすれば調べる事が出来るのかであった。

「それなら、どの魔装器の『ガジェット』に付いている、丸い？
水晶？のような物を見れば良いんだよ」

「水晶？」

水晶のような物と言えば、剣の取っ手のような形をしている『ガジ
ェッター』の剣格部分に在る、宝石のような輝きを持つ綺麗な碧い
結晶しかないと思ったカレンは、手に持っている『ガジェット』
の剣格部分に視線を向ける。

「『ガジェット』に付いている水晶のような物は、『メイン・マ
ナ』の『マナ』を貯存している量が分かる、『ランプ』と呼ばれる
計測器なんだ。その『ランプ』の色の輝きが『マナ』の量を指して
いて、『ランプ』の色の輝きが、輝けば輝く程『マナ』の量の多さ
を示して、それとは逆に『ランプ』の色の輝きが、暗ければ暗い程
『マナ』の量の少なさを示しているんだよ」

「あっ！ 少し輝きが戻っている！」

自身の『ガジェット』に付いている水晶もとい『ランプ』をじっ
くりと眺めながら『ランプ』の秘密を知った直後に、カレンは『ラ
ンプ』の色である綺麗な碧い色が少し輝きを取り戻している事に気
付いた。

「『ランプ』の色の輝きが完全に失うと『メイン・マナ』が『マナ

切れ』した事を意味するから、『DETROIT・MODE』時では『ランプ』の事にも気を配って」

「うん、分かった。そうするよ!」

「付け加えてと言うけど、『マナ』という『エネルギー』によって稼働している魔装器は、何時でも無尽蔵に近い『自然のマナ』を取り込み続けているから、壊れる事以外、機能停止する事はほぼ不可能なんだ」

「へえ~~~~~、そうなんだ~~~~~アイシャもロロと同じ、何でも知っているんだね!」

魔装器について大体の知識を伝えたアイシャは、そろそろ説明が終わるので付け加える形でアドバイスを送り、カレンは何でも色々教えてくれるアイシャに、ロロと同じ物知りだと感心して、褒め称える。

「これぐらいの知識と情報なんて大した事ないよ。何てったって魔装器に関しての情報は今となっては世間で一般的に公開されているぐらいだからね」

「~~~~~知らなかった」

「~~~~~カレンって、魔装器を持っているのに本当に魔装器の事なんて全然、何も知らないんだね?　もしかして、その魔装器は最近手に入れたばかりなの?」

魔装器使いなのに魔装器の知識に関しては皆無のカレンにアイシャは不思議に思っ、その魔装器は最近になって手に入ったばかりの物ではないかと、詮索するように尋ねた。

「あ~~~~うん、そうなるね」

「~~~~~なら、仕方ないか」

『最近に手に入れた?』という質問にカレンは詳しい事情を話さずに肯定してしまい、アイシャは魔装器を手に入れたのが最近なら知識も情報も乏しいと推測し、カレンの常識知らずも兼ねて仕方のない事だと判断する。

「話は終わったか、二人共?」

長い説明が終盤を終えたところで、長い間一人外野に取り残されたロロは痺れを切らしたように二人に話の終わりを問い掛けた。

「うん、大体の事は伝え終えたよ」

「アイシャ、色々教えてくれてありがとう！」

「どういたしまして」

大方、魔装器に關しての情報と知識を伝えられ、知りたかった事のついでに魔装器の事も学んだカレンは、教えてくれたアイシャに感謝を述べ、それに対してアイシャは、慎ましく感謝の言葉を受け取った。

「一応、俺も途中で『マナ』について、教えてあげたんだがな」

「ああ、そうだったね！じゃあ、ロロもありがとう！」

「(……………ついで、扱いかよ！)」

自分にも感謝の言葉を貰おうと促そうとしたロロであったが、カレンの自覚の無い、おまけ扱いの感謝の言葉に、心の中で静かに突っ込みを入れた。

「そういえばさ、ロロ」

「ん？　なんだよ？」

不意に話し掛けて来たアイシャにロロは以前と同じく、意外そうな顔で聞き返す。

誤解と勘違い

説明会が終わって間もなく、何の用かアイシャが自らロロに話を振ってきた。

「カレンが『レイチィム』に来た理由は本人から聞いて分かったけど、君は何のために『レイチィム』に訪れて、何故カレンと一緒に行動を共にしていたの？」

「ああ、そいつはな————」

「ロロは、ストーカーなんだよ！」

「ブふっ!!？」

「……………」

事情を話す前にカレンがロロに氣遣って、自分も事情の説明を手伝おうと思って会話に割り込むが、単語の本当の意味を知らないまま、とんでもない事を口走り、ロロはその発言に吹き出し、アイシャは眉間にシワを寄せた。

「ちよっ！ おま、お前なっ！！ 何イキナリ誤解を招くような事を言い出すんだ!!？」

「だって、ロロ『水底の洞窟』で言っていたよね？ ストーカーって言葉」

「た、確かに言ったが、俺自身がストーカーだなんて一言も言っていないだろ!? だから俺はストーカーじゃねーし、もしストーカーだとしたら、むしろお前の方だろ!!」

突如として勘違いしているカレンに自身の事を『ストーカー』と説明されたロロは、思わぬ事態になって慌てながらも、擦り付けられた不名誉極まりない称号を返上しよう兼第三者のアイシャに誤解されぬようと必死に抗議し始め、言い出しっぺのカレンに『ストーカー』はお前だと言い放つ。

「だったら、僕ら二人共ストーカーって、事で……………」

「何だよ!!? 嫌だよ! 俺は絶対に嫌だよ!!」

現在、金髪の少女を追いかけている自分と少し前まで、自分を追いかけて来たロロとは『人を追う』という共通点があるので、自分達二人は『ストーリーカー』仲間だとカレンは評するが、もちろんロロは断固拒否する。

「でもストーリーカーって、人を追いかける人の事を言うだよね? だったら、ロロもストーリーカーになるんだよね?」

「だ、だから、それは俺の勘違いだって言っただろ!? 大体『ストーリーカー』って言うのは、陰湿な奴がやる事なんだよ!!」

「えっ? ロロって陰湿なの?」

「ちげーよ!! 俺はどっちゃかって言うとも明朗な方だよ!」

ロロの性格が陰湿な方が明朗な方かはともかく、カレンの誤認や天然ボケにロロは反論や突っ込みが絶える事は無く、このグダグダした会話は何だかんだで『ストーリーカー』という汚名の返上は一向に進まずにいた。

「いいか? ストーリーカーって言うのはな……………つまり……………

……………その……………」

カレンの根本的に間違った認識を解消しようとロロは『ストーリーカー』の本当の意味を伝えようとするが、自分自身も『ストーリーカー』という意味はどうゆう物なのかは大方理解しているつもりなのだが、その理解している部分が何処か漠然としていて、うまく口では説明できない感じであり、言葉が次第に詰まって行った。

「……………ストーリーカーって言うのは、自身の自己中心的な考えや被害妄想、或いは勘違いに因る好意に突き動かされて、特定の人物に対してしつこく付き纏い、相手に不快感や不安を与える等という、迷惑行為を自覚在り無しで行なう、世間から忌み嫌われる人物の事を指すんだよ」

「そ、そう、それだよアイシャ! 俺が言いたかったのは!!」

『ストーリーカー』の説明で詰まっているロロを見て、見ていられなくなったのか、アイシャはフォローする形で、代わりに説明を行い。

ロロは予想外の援護に助けられる。

「それが、ストーカーの本当の意味？」

「ああそうだ！ 今のアイシャの説明でストーカーの意味が分かっただろ？ 俺は確かにお前を追いかけたが、それは男として決着を付けなければならぬ勝負の行方をハッキリさせる為に追った訳で、別にやましい気持ちや負けたのが悔しいからリベンジしようとか、そういう事を思ってお前を追った訳じゃない！」

拳を握り締めて、豪語するみたいにカレンを追いかけた理由は男同士の勝負の決着の為だとロロは述べるが、本当はカレンに負けたのが相当悔しかったのが本音らしい。

「すなわち、俺の行為はストーカーには分類されないし、お前も特に不快や不安を感じてはいないんだろ？」

「うん、確かに僕はロロが追って来た事については、特に迷惑なんて感じてはいないし、それどころかロロには色々助けられたから、むしろ感謝しているよ」

「だろ？ 俺はストーカーなんかじゃねえ！」

人を追いかけたのは確かだが、カレンに嫌な思いをさせていないし、成り行きだけでも感謝されているから自分はセーフだと言い切るロロは、何処か顔に安堵の色を見せる。

「でも、まああ……………お前を追いかけた俺様の運の尽きだったな、お前を狙っていた盗賊達に仲間だと勘違いされて、追われる羽目になって、『レイチム』に逃げ込めば、盗賊達に捕まっては戦った拳句、今度は軍に追われる身になっちゃったし、『水底の洞窟』からお前と一緒に行動する事になってから、今日一日散々だ……………」

「つまり、偶然そこに居合わせた君はカレンを狙って来た盗賊達に仲間か何かだと誤解され、一緒に追われる羽目になって、仕方なくカレンと共に行動していたという訳なんだね？」

「その通りだ」

今日、自分に振り掛った出来事を愚痴っぽく呟いたロロにアイシャ

は的確にカレンとの経緯を推測し、ロロは顔の表情が安堵の色から疲労の色に変わりながら、肯定する。

「これで、分かっただろ？ 俺の事情も俺がストーカーじゃないって事も？」

「了解、事情は分かったよ………ストーカーじゃないことは………とりあえず、信じておくよ」

と言いつつアイシャは、自然的な動きでロロから遠ざかって行く。

「っておい！ さりげなく引いてんじゃねえよ！！」

「良かったねロロ、ストーカーじゃなくって」

「やかましいわ！！」

さりげなく自分から引くアイシャと悪い気無しだが慰めの言葉掛けるカレンの両方にロロは突っ込みを入れながら、一行は足を止めず前へ進み続け、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』へ着々と近付いて行った………



………そして、更にひたすら東に向かって歩き続けて、約30分以上が経ち、長い長い道のりを越えてようやくカレン達一行は、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』の手前付近に辿り着いた。

「うわ~~~~、高いね~~~~！」

「話では聞いていたが、まさかここまでとはなあ」

山脈と呼ばれることもあって、雲によって頂上が見えない程の高さと巨大な壁と思わせる形状を持ち、そして山脈の由来通り、薄い白い霧が山脈全体を包み込むように覆い尽くしており、その眼の前に広がる山々の光景にカレンとロロは二人揃って圧倒される。

「見るのは初めてなの、ロロ？」

「ああ、ここ等辺に来るのは実際初めてだからな」

カレンに『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を見るのは初めてなのかと聞かれ、このバムボア大陸の出身者であるロロはどうやらこの辺りを見るのも来るの

も初めてらしい。

「それを言うなら、登山道だ」

「在った！ あそこだ！」

二人の視線が止まった先には、山脈の前に古びた木製の看板が立っていて、看板には目の前の山脈の名前、『ホワイト・マウンテン白霧山脈』と書かれ、ロ口は此処が最初の目的地だと確信し、しかも看板には更に山道へ続いている登山道までご親切に矢印で指し示して書かれていた。

「さああ二人共、登山道が見つかった事だし、早くこの『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越えて、首都『リア・カンス』へ向かおう」

そうやってアイシャは、一足先に登山道の方に歩き出した。

「そうだね、口口、早く行こう！」

多く死者を出している危険で有名な『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に入り込む心の準備がまだ出来ていない口口は、待ったを掛けるが、生憎二人の耳には届かず、カレンもアイシヤ同様、先に登山道の方へ行ってしまう、このままでは一人取り残されると思った口口は急いで二人の後を追った……………



……置いて行かれそうになった口は、すぐに二人の後に追い付き、予定通り三人で山脈越えを行なうが、結局口は心の準備を満足に整える事が出来ぬまま、『白霧山脈』ホワイト・マウンテンへ乗り込む事になり、抑え込んでいた心の中の不安が一気に込み上

げ来て、ロロは表情に不安の色を覗かせていた。

「はぁ……………半日で『リア・カンス』に着けるのは俺にとっても魅力的だが、逆に半日も掛けて此処に居なきゃいけないのは、俺としては不安で仕方ねえ」

「……………怖気付いたのなら、引き返した方がいいじゃないの？」

三人が山脈の山道に続いている思われる、視界を遮る程では無い微かな白い霧が広がる登山道を登って間もなく、ロロは心の中で積もる不安を呟き、それを聞いたアイシャは辛辣な言葉を投げ掛けた。

「だ、誰も怖いだなんて言ってるねえだろ！」

「嘘だね。さっきから君の身体、微かだけど震えているよ」

不安と同時に恐怖を感じている心情を見抜かれて、ロロは凶星を突かれながらも強情に否定するが、それも否定するようにアイシャは身体の震えを指摘する。

「うっ！　だ、だったら、お前はこんな危険な場所に来て、不安も何も感じないのかよ？」

「私だって不安だよ。でも、何事も何かを得ようとすれば、必ずリスクが伴い、それを覚悟して挑まなければ、手に入られるものは少ない筈だよ」

「……………会った時から思っただけど、お前って結構、肝が据わっているよな？　いつも此処と同じ危険場所にちよくちよく行っていたりするのか？」

最初に会った時から外見とは裏腹にとっても一般人の女性とは思えない程の強さと『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に來ても、本人は不安だと言っているが表情からにして不安や恐怖を微塵も感じさせない度胸を持っているアイシャにロロは、彼女にいつも危険な所に行ったり来たりしているのかと問い掛ける。

「危険な所か……………時と場合に因るけど、此処より危険な場所に行った事は何度も経験しているよ」

「此処より危険な所を何度も……………お前、一体何者なんだ？」

『白霧山脈』より危険な所に何度も行った経験があると打ち明けるアイシャにロロは、彼女を不審に思い、何者なのかと尋ねた。

「私は……………」

「はっ！ 分かったぞ、お前の正体！」

「！」

アイシャが自分の事について告白する直前にロロは閃いたのか、アイシャの正体が分かったと声を上げ、突如の行動にアイシャは珍しく目を見開いて、驚く。

「お前の正体は……………」

「……………」

「幼い頃からとある国で特別な訓練をしてきた、特殊部隊の兵士だな！」

「……………え？」

自分の正体が分かったと言っておきながら、見当外れのアンポンタな答えを自信満々に発言したロロに、アイシャは呆気を取られる。「昔、聞いた事が有るんだよ！ とある国で世界中から優秀な素質を持つ子供を集めて、とても強い兵士にさせる為に特別な訓練をさせて、やがてそいつらを特殊部隊の兵士に配属させ、世界中を飛び回る程の危険な任務を与えているって話をな！」

「……………」

誰に聞いたかは分からないが、まるで漫画のような話をどうやら信じ込んでいるロロは、アイシャがその話に出て来る特殊部隊の兵士だと思い込んでいるようで、それに対して見当外れ過ぎるロロの勘違いにさすがのアイシャも目をあらぬ方向に向け、無表情だった顔が呆れ顔に変わってしまう。

「お前の強さや肝が据わっている所はお前がそのとある国の特殊部隊の兵士だからに違いない！ ……………そこに気が付くとは、いや…………俺様って冴えてるな…………！」

「……………まあ、そうゆう事にしといてあげるよ……………」

アイシャが呆れているのにも気付かず、まだ肯定すらしていないのに相手の正体を見破ったと一方的に決め付けたロロは、誇らしげに自身を賛美し、一方アイシャは、自分の本当の正体を説明するのが、アホらしくなるぐらい呆れてしまったようで、ロロには聞こえない小さい声で適当に話を終わらせた。

「ヒール！……………あれ？ 出ない……………」

「……………何やってんだ、お前？」

二人の話が終わった矢先に一人余所で光の回復魔法『ヒール』の名前を叫び出したカレンにロロは、怪訝そうに一体何をしているのかを問い掛けた。

「僕もロロやアイシャみたいに魔法を出したかったんだけど、うまくいかないんだ」

「お前なあ……………今、みたいので魔法が出る訳無いだろ！」

「……………えっと、一応聞いておくけどカレン、魔法がどうゆう原理で発動できるか、分かってる？」

「ううん、全然分からない」

「やっぱり」

「分かるぞ、お前の気持ち」

魔法を出したかったカレンにアイシャは、魔法がどのような仕組みで発動するのかを尋ねると案の定の如く、分からないと素直に答えるカレンにアイシャは顔には出さないが、態度からにしては呆れているみたいで、そんなアイシャにロロは何時ぞやの自分を見ているような気持ちになってしまい、同情する。

「カレン、魔法は私達生物体内に在る、大きく分けた『マナ』の？三つ？の内一つである、『力のマナ』を消費して、発動している事は知っているよね？」

「？三つ？ 『力のマナ』以外にまだ他に何か在るの？」

『力のマナ』については以前、『水底の洞窟』でロロに教えて貰ったが、『力のマナ』の他にも別の『マナ』が在るのと言うのは、初耳だった。

「体内の『マナ』についても、一から説明しなきゃいけないようだね……………良く聞いてカレン、体内には――――」

「待った待った！ ごめんなアイシャ、魔法についても俺の説明不足だった。魔法についての説明は俺に任せろ！ なっ？」

「……………別に構わないけど」

自分が『水底の洞窟』でちゃんと説明しなかった所為でアイシャに負担を掛けるのは気が引けたのか口口は、魔法についての説明役を代わりに引き受けた。

説明会？

今回はロロが説明役を引き受け、カレンに魔法についての初歩的な知識を教え込むことになった。

「カレン、ここからは俺様が説明するから良く聞けよ！　まずはアイシャがさっき言った通り、俺達の体内には大きく分けて三つの『マナ』が在る。一つ目は前にも教えた体力や精神力、そして気力を司る『力のマナ』、二つ目は生命力や寿命等を司る『命のマナ』、そして最後の三つ目が消費した『力のマナ』の再構築や傷を負った箇所を再生させたり、身体の成長や発達等を司る『創造のマナ』、この三つが存在するんだ」

「『命のマナ』と『創造のマナ』……………」

知らされなかった体内にまだ二つも在った『マナ』の存在を今になって知ったカレンは、二つの『マナ』の名前を覚え、それぞれの特徴を何となくだが理解する。

「次は魔法の発動条件についてだ。自分が出したい魔法を出す為にはその魔法に必要な『力のマナ』を集中して？　練らなきゃならない？！」

「？　？　練る？　って？」

「？　練る？　って言うのは、魔法を発動させる為、瞑想するように集中して、体内に在る『力のマナ』を必要な量だけ、取り出すっていう感覚作業の事さ」

魔法で『力のマナ』を？　練る？　と言うのは、魔法に必要不可欠な『力のマナ』を必要な分だけ、集中して練り出すという感覚作業の事らしい。

「そんなもって、『力のマナ』を必要な量だけ練ったら、次はその練った『力のマナ』を魔法に変換させる為に『力のマナ』を？　コントロール？　する必要があるんだ！」

「……………？　コントロール？　って前にも聞いたけど、それは具体

的にはどうやるの？」

『水底の洞窟』でロロから『力のマナ』を？コントロール？しなければ、魔法は使えないと説明されたが、どのように？コントロール？するかまでは、教えて貰ってはいないので、カレンはもっと具体的な説明を要求した。

「？コントロール？は？練る？と同じく瞑想するように集中して行う感覚作業なんだが、？練る？とは大きく違って、とても難しい精密的な感覚作業でな。初めて魔法を使おうとする奴なら『力のマナ』を練る事は出来ても、？コントロール？だけは全然うまく出来ず、当然不発となって、その後何日何カ月掛けて練習しても、？コントロール？の感覚のコツを掴めずにいる事が多いんだ」

「じゃあ、『力のマナ』をうまくコントロール出来なかったら、僕がロロやアイシャみたいに魔法を出せる事なんて無理なのかな？」

『力のマナ』の？コントロール？は非常に難しい感覚作業らしく、例えば『力のマナ』をうまく？練った？としても、次に『力のマナ』をうまく？コントロール？出来なければ、魔法が使えない事にカレンは残念そうに顔を少し下に俯いた。

「心配すんなって！魔法をもっと使い易くする為に『力のマナ』のコントロールを簡単に出来るのが在るんだ！」

「えっ？ そんなのが在るの？」

「在るんだぜ、？呪文？ってやつがな！」

「？呪文？？」

魔法を発動させる為に必要な『力のマナ』のコントロールを簡単にする物が在ると、付け加えて話すロロにカレンは一筋の希望が見えたかのように顔を上げて、そんな物が在るのかと聞けば、？呪文？と言う言葉が返って来て、カレンは首を傾げて聞き返す。

「お前も何度も見た事や聞いた事が有るだろう？俺様とアイシャがいつも魔法の名前を言って発動させる前に唱えている、あの御呪いみたいな奴の事だよ！」

「御呪いって……………もしかして、？あのセリフ？の事？」

「呪文？とは魔法の名前を言って発動させる前に唱えている御呪いだ」と答えられ、カレンは二人がいつも魔法を放つ寸前に語り掛けるように喋っている？あのセリフ？なのではないかと思ひ当たる光景を頭の中で思い浮かべた。

「その？呪文？で本当に魔法が使い易くなるの？」

「まあ、お前みたいな素人にはそう思われるかもしれないが、魔法の？呪文？には？言霊？ことだま？っていう不思議な力が宿っているんだ」

「？言霊？？」

「古代に伝わる、言葉に宿っている神秘的な力って言われている物らしいぜ」

本当に？呪文？なんかで魔法が使い易くなるのか半信半疑で、問い掛けるカレンに口口は？呪文？には？言霊？ことだま？という神秘的な力が宿っていると述べる。

「俺も詳しい事は分からないが、？呪文？に宿っている？言霊？ことだま？には『力のマナ』の？コントロール？を補助してくれる力が有るみたいなんだ」

「？コントロール？を補助？」

「簡単に言っちゃえば、扱いが難しい『力のマナ』の？コントロール？も？呪文？さえすれば、容易に？コントロール？が出来やすくなるって話だ！」

どうやら？呪文？に宿っている？言霊？ことだま？には魔法を繰り出す際に前に必ず行うとても難しい『力のマナ』の？コントロール？を？コントロールしやすくしてくれる？力が有ると口口は語る。

「実際、俺やアイシャは、その？呪文？に宿っている？言霊？ことだま？の力を借りて、『力のマナ』をうまく？コントロール？し、魔法を発動させているんだ」

「そうだったんだ……………あつ！それじゃあ、僕も？呪文？を唱えさえすれば、魔法が使えるようになるかな？」

「そんなにうまくいかねえよ、？呪文？は確かに『力のマナ』の？コントロール？を補助してくれるが、あくまで？コントロールしや

すくしてくれる？だけだ！ 例え？呪文？を唱えて魔法を発動させようとしても、うまく『力のマナ』を？コントロール？し、魔法をちゃんと発動出来るようになるのは、どんな奴でも最低一週間か二週間ぐらいは掛る！ 今日一日やちよつと使える程、甘くは無いだよ」

「……………残念」

ロロもアイシャも？呪文？の力を借り、魔法を発動させている事を聞いて、カレンは自分も？呪文？さえ唱えれば魔法が使えるようになるのか尋ねると、ロロは甘い考えだと評して、？呪文？を唱えて魔法が発動出来るようになるにも週単位で時間が掛ると述べ、その返事にカレンはやっぱり物事はそんなにうまく運ばないと思い、『残念』と呟いて苦笑いを浮かべた。

「それに自分が出したい魔法を出す為には、その魔法の？属性？と生まれながら持っている自分の？属性？が合ってなきゃ、発動出来ないんだよ！」

「へっ？ ?属性？？」

魔法に関する単語が新たに出て来て、カレンは言わずとも？属性？という単語を知らないようであり、またもや素っ頓狂な声を上げて聞き返し、ロロは呆れ顔になって溜息を零しながらも説明を続行する。

「？属性？は人で言うところ？素質？であり、魔法で言うところ？種類？だ」「え〜〜と、それってどうゆう意味？」

「俺様が二回もお前の手の怪我を治したのは光の魔法で、俺様がその光の魔法が使えたのは俺様に光属性の素質が有るからなんだ」

「光の魔法……………光属性の素質……………種類……………」

！ も、もしかして、人も魔法にもいくつか？属性？が存在して、自分が持っている？属性？と使いたい魔法の？属性？が一致しなきゃ、魔法は使えないって事？」

「……………大正解！ 驚いたなあ、お前の言う通りだ。

俺様が生まれながら光属性の素質を持っているから怪我を治せる光

の魔法が使えるように、アイシャも生まれながら氷属性の素質を持つているから氷を放つ氷の魔法が使える訳なんだ」

人で言うところの属性？は？素質？であり、魔法で言うところの属性？は？種類？であり、そしてカレンの手の怪我は光属性の素質を持っている。ロロが光の魔法で治したと聞いて、カレンはブツブツ呟いて、これらが何を意味しているかを考え込むとすぐさま、閃いたかの如く人と魔法の？属性？関係が分かり、ロロは二つのヒントだけで無知のカレンが自力で導き出した、核心突いた答えに大層驚き、思わず感心の声を零しながらも肯定した。

「もっと詳しく説明すると、人が生まれながら持っている？属性？の数は人それぞれだが、誰でも最低一つは必ず？属性を持っている！そして現代で解明されている人と魔法の両方の？属性？は『炎・水・大地・風・気・雷・氷・音・金・霊・光・闇・時空』と、13種類程も在るんだ！」

「13？結構多いんだね！」

「ああ、だが？属性？達には上位関係が在って、その上位関係を大きく分けると、たった4グループ程度に分けられる。まずは区別無く世界中の誰もが持っている？属性？『炎・水・大地・風・気』この五つの？五大属性？と呼ばれる物と、人が稀に生れ持つて来る『雷・氷・音・金・霊』と同じく五つの、？希少属性？とも呼ばれる物と、これら二グループよりも優れ、力関係として上の位置に立つ存在『光・闇』の？上位属性？と呼ばれる物、そして最後にその？上位属性？すら凌ぐ、更に上の次元に立つのが『時空』であり、現代でも詳しくはまだ解明されていない？特位属性？と言われている物。この4グループが13種類も在る、？属性？の上位関係だ」人が持っている？属性？の数は個人差が有るが、この世で？属性？を一つも持っていない人間は居ないらしく、更に言えば？属性？は現代で分かっている数は13種類も在るようで、上位関係的に分けると？属性？の中で？五体属性？と呼ばれる『炎・水・大地・風・気』が平均的に多くの人達が持つており、逆に？属性？の中で？希

少属性？と呼ばれる『雷・氷・音・金・霊』が平均的に持っている人は少ない模様、そして力は？五大属性？と？希少属性？を凌ぎ、この二つの上に値する？上位属性？と呼ばれる『光・闇』、そして更にその？上位属性？すら越えて、詳しい事はまだ解明されてはならず、世間から？特位属性？と呼ばれている『時空』。以上が13種類の？属性？達の上位関係だとロロは語る。

「人々がそれぞれ持っている？属性？を確率的に言えば、？五大属性？はさっき言った通り、100%の確率で誰もが持っている。続いて？希少属性？は100人の内、たった一人が持っている程度の確率で、？上位属性？は100人の十倍、つまり1000人の内、これも一人だけが持っている確率で、最後に残った？特位属性？は一億人に一人と言われるぐらいの確率って話だ」

「……………一億人に一人か」
「？五大属性？はともかく、？上位属性？は？希少属性？より持っている人の確率は相当低いが、？特位属性？を持っている人の確率の異常なぐらいなまでの低さにカレンは驚きを通り超えて、逆に落ち着いた態度で話の内容を受け入れる。

「ちなみにどの？属性？にも、その？属性？独自の色が存在して、魔法を発動させる際に現れる光の色で？属性？を判別出来るんだ。

まず『炎』は赤、『水』は青、『大地』は茶色、『風』は緑、『気』は水色、『雷』は金色、『氷』は銀色、『金』は鼠色、『音』はオレンジ、『霊』は半透明、『光』は白、『闇』は黒、『時空』は紫ってところだ」

更に追加説明によると、各？属性？にはそれぞれ独自の色を持っており、魔法の呪文を唱えている時、出現する光の色で魔法の？属性？が判別できるとロロは役立つ情報を伝える。

「ふむ……………今までの説明をまとめると、魔法は体内に在る『力のマナ』を魔法に必要な量だけ練って、次はその練った『力のマナ』を魔法に変換させるようにうまくコントロールする事。それ

ともう一つ、自分が使いたい魔法を使うにはその魔法の？属性？と自分が持っている？属性？が一致しなければならない事。この二つの条件が揃えて、初めて魔法が発動出来るって事で良いんだよね、ロロ？」

「そうそう、それで良い！ お前が今言った二つの条件をクリアして、最後に魔法の名前さえ言っちゃえば、？魔法陣？から魔法が飛び出すって訳だ！」

「えっ？ ？魔法陣？？」

今までのロロの説明を要約して魔法の原理と発動条件を述べてカレンは、一から魔法に関しての説明してくれたロロから『OK』を貰うが、最後に？魔法陣？という言葉がロロの口から出て来て、カレンは思わず聞き返した。

「あっ！ これについては言って無かったな……………まあ、心配すんな！ ？魔法陣？についてはお前も見ただ事があるだろう？俺達が魔法を発動させた時に必ず出現する、？古代語？が書かれたあの円状の？輪？の事だよ！」

「ああ、あれか！」

？魔法陣？と言うのは、自分とアイシャが魔法を発動させた時にいつも現れる円状の形をした？輪？だとロロは答え、カレンは記憶の中でロロ自身が魔法で何度も見せてくれた、何らかの文字が描かれたあの？輪？が？魔法陣？だと瞬時に思い浮かんだ。

「どうやら見当がついたようだな？ ここで言い忘れていた？魔法陣？について簡単に説明すると？魔法陣？は魔法を召喚する扉みたいな物で、？魔法陣？が現れたって事は、魔法の発動が成功したという事を意味してっから、これもよく覚えておけよ！」

「魔法陣か……………うん、忘れないよ！」

心当たりがあると悟ったロロは、言い忘れていた？魔法陣？の事を簡易的に説明し、カレンはこの説明で、？魔法陣？の出現は成功の証だと強く認識した。

「お前は魔法については大方理解した様だし、俺も魔法に関しての

基本的な知識は全て教えたが、何か質問とか在るか？」

「う〜〜〜〜んとな〜……………僕は口ロみたいにな、あのピカッと光って怪我を治してくれる魔法が使えるようになりたいんだけど、僕にはその魔法の？属性？に合った肝心な？属性？を持っているのかな？」

「お前自身の持っている？属性？を知るには、お前が光の魔法の試行発動を行うか、適合検査を受けるか、どっちかな」

「そんな事をしなくても、カレンには光属性の素質を持っているよ」魔法の基本的な知識を全て教え、後は何か質問が在るかどうか尋ねる口ロにカレンは自分に光の魔法を使える素質が在るのかを知りたいと返し、口ロはこの質問に対して、光の魔法の発動練習をするか、適合検査を受けるかどちらかだとカレンに答えるが、さっきと今まで魔法の説明を口ロに任せて一言も口を挟まなかったアイシヤが、不意を突く突然の乱入者のように二人の会話に入って来た。

「持っているって、アイシヤ……………お前、コイツが光属性の素質を持っている事が分かるのか？」

「もちろん、初めて会った時から分かっていた訳じゃないよ。カレンが光属性の素質を持っているのを知ったのは、此処に来るまで彼が使っていた魔術を見たから、彼が持っている？属性？が判明したんだ」

「魔術？ 何それ？」

まるで知っていたかのような口ぶりに口ロは、何故その事を知っているのかを問い質すと、アイシヤはカレンの魔術を見て判明したと答え、一方また聞き慣れない単語を聞いたカレンは、いつもの流れで尋ね返した。

「何言ってるんだ？ 魔術なら、お前も使ってるだろ？」

「僕も……………使ってる？」

「分からないか？ お前が良く剣で繰り出している？技？の事だよ！」

「！……………僕の……………あの？技？が魔術！？」

またもや新たに飛び出して来た謎のキーワード、『魔術』とは一体何なのかと思っていたカレンであったが、ロロの話に因ると実は魔術とは自分が今まで良く使用していた？技？である事に、カレンは意外だと言わんばかりに驚いた。

「そうだ！ 前（水底の洞窟）にも言ったが、体内に在る『力のマナ』を消費して放つ、俺の弓矢とお前の剣で繰り出していた？技？は分類的に言えと、魔術と言われる、魔法と同じ？属性？を持った？特別な技？なんだ！」

「？属性？！ ………………という事は、僕の『剛魔』は風属性って事になるのか」

魔術にも？属性？が在ると聞いたカレンは、すぐさま自分の？技？もとい？魔術？の一つ、『剛魔』が風属性の魔術だと気付く。

「一応、魔術の発動原理を聞いても良いかな、ロロ？」

「まったく仕方ねえな。魔術の発動原理は体内の『力のマナ』を？練り？、次は武器か身体の何処かに？練った？『力のマナ』を流し込み、最後の仕上げに『力のマナ』をうまく？コントロール？して、13種類の内どれか一つの？属性？を持たせた、特殊攻撃を繰り出せるのが、魔術だ！」

「ああ、やっぱりそんな感じなんだ」

魔術の説明を要求され、ロロは舌打ちを零すも自身やカレンが扱っていた『彗星』や『剛魔』等の？技？は魔術と言われる、魔法と同じく？属性？を持った？特別な技？で、魔術の発動原理は魔法のとは少し異なるが、13種類も？属性？が在るといふ部分は一緒だと解説し。カレンは魔術の事は知らなかったとはいえ、記憶喪失ではあるがこれまで何度も魔術を使っていた為か、ロロが語る魔術の発動原理の解説を耳にして、カレンは思っていた通りのような反応を見せる。

「習得には相当な修行とかなりの時間が必要するんだが……………」
「……………ん？ 待てよ」

ついでに補足も話していた途中、何かに気付いたロロは、ハッと目

を細めた。

「アイシャ、コイツ（カレン）が使っていたあの光る拳みたいなのが、もしかするとだが光属性の魔術だったりするのかな？」

「もしかするとじゃなくて、本当に光属性の魔術だよ、ロロ。カレンが使用していたあの光る拳の魔術は、光属性特有の輝きと破壊力を秘めていたから、まず間違いは無いよ」

軍用都市『レイチム』まで追い掛けて来た盗賊達と地下水道で運悪く遭遇した『バトル・マシン』と戦った際にカレンが使用した『光の鉄拳』^{シャイニングファスト}は、もしかして光属性の魔術なのではとロロは半信半疑でアイシャに問い掛けたら、アイシャはその問いを返り討ちにするかの如く、カレンが光属性の素質の持ち主である事の根拠を述べ、ハッキリと断言した。

「マジかよ？ あ~~~~~あ、俺様の自慢が一つ減った気分だわ！」

「と言う事はアイシャ、一応、僕も光属性の魔法が使えるんだね！」
「そうだけど、ちゃんと使えるようになりたいなら、じっくりと発動練習に時間を掛けて？コントロール？のコツを覚えないと、魔法は使えないよ、カレン」

カレンも光属性の素質を持っている事実にロロは自慢の一つが減ったと嘆き、一方カレンは自分も光属性の魔法が使える事が発覚して、念のために熟練者のアイシャに可能か否か確認を取ると、魔法は急がずにじっくりと時間を掛けて、習得すべきだとアイシャは肯定と共にささやかなアドバイスを送る。

「って言うかお前、魔術が使えるくせに魔術の事を知らなかったのか？」

「……………そうゆう事になるかな？」

「そうゆう事になるって、お前……………はあ、今更過ぎるけどお前って、本当に変な奴だなっ！」

魔術を扱えるのに魔術の事を知らないカレンにロロは人の事は言えないが、改めてカレンを変人呼ばりする。

「それ程でも」

「褒めてねえよ！」

「……………」

変人呼ばわりされたのに照れ臭そうな顔で恐縮するカレンに、猫のような耳がピンっと立ち上がって、素早い突っ込みを入れるロロ。一方その二人のコント紛いを無言で見詰めながら、アイシヤは真紅の瞳とさっきまで無表情だった顔が呆れと笑みの色を見せた。

「「「！」」」

そして、一行が時間を忘れてワイワイと話しながら登山道を登っていると、一行はいつの間にか山脈の中に在る山道に辿り着いていた。

震える山脈

三人一行が白い霧の所為で下が見えない山脈の登山道を登り切るとその先に在ったのは山脈の中へ続く、山道の入り口だった。

「どうやら、山脈の中に辿り着いたようだね」

「だな、二人共気を付けろ！ 此処からは霧が濃くなって……………
……………っうお！ い、言った傍から！」

山脈の中の山道に登り着いたとアイシャは辺りを見渡して呟き、ロロも周りに目を配って、二人に山脈の中に入ったら霧が濃くなるから注意するよう、促そうとするが、言う前に白い霧は急に濃くなり、数メートル先までしか見えない程に、辺りは白い霧に包まれた。

「ああくそ！ と、とにかく二人共、この『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に生息する魔物に気を付けるんだ！ 此処の魔物は山脈特有の白い霧に隠れて、不意に襲い掛るのでゆう……………」

すると、注意事項を述べているロロのすぐ背後に白い霧とは別の白い影と宙に浮かぶ二つの緋色の珠が音も無しにゆらりと現れ、そしてその白い影から鋭い刃のような物が伸びていて、それは背後の存在に気付いていないロロの頭上に迫っていた。

「ロロッ！！ 後ろ！！！」

「ッ！？」

ロロの背後に近付く存在に気付いたカレンはすぐさまロロを呼び掛け、ロロは呼び掛けられて自前の素早い反応で瞬時に振り向くが、頭上に迫っていた鋭い刃のような物は、もうロロの目と鼻の先くらいに近付いていた……………。

「！！！！」

「「！？？」」

そしてこの瞬間、カレンとロロの二人は、今何が起こったか、分からなかった。一瞬の出来事だった。ロロが振り向いて自分の顔か

ら数cm先に在る鋭い刃のような物が、視界に入った直後、突然、乾いた一発の銃声が山脈中に響き渡り、それと同時にロロの眼に映った刃のような物がピタッと動きを止めた。

「……………」

銃声が止んだ後、白い影はぐらりと傾き、そのまま垂直にドサッと地面に倒れ伏せた。

「……………」

あまりにも唐突な出来事にロロは、言葉を失い、顔が引きつり、痙攣したようにピクピクと身体を震わせて、呆然と立ち尽くし。そんな情けないロロとは正反対にカレンは、一切呆ける事無く銃声が鳴った方向にいち早く顔を振り向けた。

「ふう……………大丈夫かい、ロロ？」

そこには、発砲し終えた銃を構え、ロロの身体の安否を確かめるアイシャが立って居た。

「アイシャ！」

銃を片手だけで構えたアイシャを見て、カレンは察した。山脈中に響いた銃声の発生源は、アイシャが腰のホルダーに閉っていた銃を瞬速の速さで、取り出して発砲したからの様で、放たれた銃弾は銃口が向けられている方向から推測するにロロの背後に立って居た白い影に撃ち込まれたらしい。

「こ、こいつは……………」

身体の震えが止まり、声が出るようになったロロは目の前で倒れて、今も地面に伏せている白い影に視線を移すと、そこには人間のような細い胴体と背中に翼を生やし、狼の顔に近い面をした鋭い牙を持った、全身白に染まった緋色の目の生物が横たわっていた。

「……………ガーゴイル、だね！」

銃をホルダーに戻して、アイシャはロロの前に倒れている生物の名前を明かす。

「ガーゴイル？ まさか魔物なの、アイシャ？」

「そう、ガーゴイルは主に此処みたいな山脈等に生息する魔物で、

他の魔物のように集団行動は好まないけど、頭は賢く、しかも偽装が得意で、今みたいに自分の全身真っ白な身体を利用して、此処の白い霧と一体化し、不意を突いて獲物を噛み殺すので知られている厄介な魔物なんだ」

外見上、動物にはとても見えないし、魔物としか見えなかったカレンはその生物の名前を明かしたアイシャに正体を聞くと、やはり魔物だった。

「……………死んでるの？」

「眉間に銃弾を撃ち込んだんだ。即死だよ」

地面に倒れてからピクリとも動かない魔物もといガーゴイルにカレンは死んだのかと様子を窺うと、アイシャが言うにはガーゴイルの眉間に銃弾を撃ち込んだらしく、言われて見るとガーゴイルの眉間と思われる箇所銃弾がめり込んでおり、そこから真っ赤な血が流れていて、更には白い霧の中でもハッキリと見えていた緋色の眼も光を失い、ガーゴイルは文字通り、絶命していた。

「あ、アイシャ！ ま、マジで助かったぜ！ お前が助けてくれなかったら、俺は今頃、コイツの腹の中だったぜ！」

「どういたしまして。それより怪我は何処にも無いの、ロロ？」
アイシャの的確な助けが一瞬でも遅れていたら、自分は確実にガーゴイルの鋭い牙の餌食になっていたと思い、ロロは助けてくれた事を心から感謝し、慎ましくお礼を受け取ったアイシャは先程確認出来なかった、ロロの身体の安否を再度確かめた。

「見ての通りだ、お陰さまでなっ！」

「はあ……………良かったあ」

元気な姿を見て、怪我は一切無い所をアイシャに証明するロロ。そしてその姿を確認してカレンはロロが無事な事に安堵し、ホッとして胸を撫で下ろした。

「「「!?」」」

安心したのが束の間。突如、天地を揺るがすような地震が山脈全体に発生し、足が正常に立って居られぬ程の揺れが三人に襲い掛かっ

た。

「う、うわっ！」

「っ！」

「こ、今度は地震かよ!？」

前触れも無く起こった大きな地震に一行は、驚きながらも倒れないよう必死に姿勢を保ち、地震が収まるまでその場に留まり続け、やがて揺れは次第に弱まり、そう経たない内に山脈全体を揺るがす揺れは完全に停止した。

「……………収まったね」

「ち、チクショウ! 何なんだ、さつきから!？」

揺れが一旦収まって、一安心するカレンとは別に、心臓に悪いアクシデントが立て続けに起こって、寿命が縮んだような気分になったロロは、怒りに火が付いたのか、声を荒げる。

「落ち着いて、ロロ! 今は嘆くより、早く此処から先へ進まない
と!」

「早くって……………何か遭ったの、アイシャ?」

ロロを落ち着かせようとするアイシャは同時に先へ進むことを促し、何故急に急かすのかカレンは疑問に思い、訳を尋ねた。

「地震が起これば、大抵の動物や魔物は気が動転して、暴走してしまうんだ。けどそれは今の私達にとっては逆にチャンスになる!」

「チャンス?」

地震のお陰で、今の私達にチャンスが訪れたと話すアイシャにカレンはそのチャンスとは何なのか、尋ね返した。

「今の地震の所為で、この山道に潜んでいる多くの魔物はパニック
って、山道から離れる可能性が高いんだ! だから今の内に山道を
急いで駆け抜けければ、魔物の遭遇が少なく、この『ホワイ・マウンテン白霧山脈』を越
える事が出来ると思うんだ!」

「なぬ!? それは確かなのか!？」

今の地震で起こり得る、魔物達のパニックがこれからの自分達の山脈越えを有利に運ぶかもしれないとアイシャが指摘する可能性を聞

いて、ロロはほんのちよつと前まで在った、怒りの興奮が何処かに行ってしまった、別の興奮が芽生え、その話に喰い付く。

「保証は出来ないけど、少なくともこの白い霧の中で魔物に不意を取られる事は最低限に避けられる筈だよ!」

「そうか! それだけでも十分なくらいだ!」

心に希望が宿ったのか、ロロの眼はキラキラと輝いた。

「カレン、話は聞いていたか!」

「うん、『アイシャが今話してくれたチャンス(好機)に乗じて、一気にこの山脈を越えるぞ!』って言いたいんでしょ、ロロ?」

「ハッ! 分かったてんじゃねえか! それじゃあ二人共、先に進むぞ!」

カレンとアイシャはロロの前進の掛け声に頷き、三人は白い霧の奥に続いている山道を足元に注意しながら、颯爽と進んで行った……

……………



……………一行が、全方向が白い霧に包まれた山道を歩いて、一時間近く経っており。アイシャの言う通り地震が発生したお陰か、一行が山道の奥に進んでからは魔物一匹も遭遇せずに、難なく先に歩み続けていた。

「進んでも、進んでも、白しかないな……………この山道は」

「上を向いても、空は真っ白だよね……………!」

「今の時間帯を考えれば、山脈の外は夜なのに、此处に居たら外は昼なのか、夜なのか分からなくなっちゃうね」

外から光が差さない、時間を忘れれば今は夜なのか、昼なのかも分からない、白の世界で三人はお互いの感想を述べていた。

「所でよ、アイシャ」

「ん、何?」

一時間近くも経って、何も起こらない事は良いのだが、どうも暇で

仕方のない口ロは何か話題が欲しくなってしまう、ついアイシャに話を持ち掛けてしまった様だ。

「聞いた時から気になっていたんだが………お前、王都『リア・カンス』で人と会う約束が有るって、言っていたよな？ それって一体誰なんだ？」

元々興味が在ったのかは知らないが、無神経に口ロは女の子であるアイシャの約束で会う人物の事を図々しく、聞いてみた。

「……………ごめん、私の仕事上、依頼主についての情報は喋っちゃ駄目なんだ」

「仕事？ お前仕事に就いてのか？ 何の仕事をしているんだよ？」
依頼主という発言より、仕事に喰い付いた口ロは、アイシャのような齡頃（外見上）で仕事をしている事が意外だったのか、またまた図々しく何の職業に就いているのか、聴いた。

「私、傭兵なんだ」

「へへへよ……………って、よ、傭兵！？」

「その傭兵って、何、アイシャ？」

自身の職業は傭兵だと打ち明けるアイシャに口ロは驚愕し、カレンはいつものようにいつもの言葉を垂れ流した。

「傭兵と言うのは、お金を貰って、あらゆる仕事を請けよう人の事だよ」

「あらゆる仕事！」

具体的にはどうゆう仕事なのかは分からないが、時によっては規模のデカイ仕事だという事は何となくだがカレンは理解した。

「傭兵か……………あ……………成る程！ だからあんなに戦い慣れていたのか！」

少し前までは、アイシャを幼い頃からとある国の特殊部隊の兵士だと、勝手に思い込んでいた口ロだったが、アイシャが自身の職業は傭兵だと打ち明け、言うまでも無く口ロの予想は外れていたが、傭兵ならば別に戦い慣れていておかしくはないと自分の予想が外れていた事は一切気にも止めず、また一人で納得していた。

「ん？　ちよつと待てよ？」

「！」

「？」

アイシャが傭兵だと承知したロロだったが、頭の中で何かが引つ掛かったのか、突然止まり出し、アイシャはすぐ反応して足に急ブレーキを掛け、ロロから見えて斜め前に止まり、気付くのが遅かったカレンはロロ達から数メートル離れた所で止まって、振り向いた。

「急に止まって、どうしたのロロ？」

ロロ達から見て数メートル先に居るカレンは、急に何故止まったのか、ロロ本人に問う。

「アイシャ、俺達目当てで『レイチィム』まで追い掛けて、襲い掛かって来た盗賊達から傭兵のお前が何で俺達を助けてくれたんだ？

金にもならないのに？」

カレンの問い掛けは耳に入らなかったのか、ロロは何故、金を貰ってでしか働かない傭兵（ロロの偏見）であるアイシャが、盗賊達から助けても金が貰える訳ではないのに、どうして自分とカレンを助けたのか疑問に思い、直接アイシャに、問い掛けた。

「それは……………」

ロロの偏見交じりとはいえ、もっともな意見を投げ掛けられたアイシャは、その問いに答ようとした瞬間……………」

「「！！？」」」

突如として、再び天地がひっくり返るような地震が発生し、三人は再度、足が正常に立てぬ程の揺れに襲われる。

「く、くそ！　また地震かよ！？」

三人はデジャヴを感じながらも、前と同じ倒れぬよう必死に姿勢を保ち続けた。

「！　二人共、この場から急いで離れて！！」

「「えっ？」」

何かを感じ取ったのかアイシャはロロとカレンにこの場から離れると叫び掛けるが、二人がその声に反応しても、時は既に遅かった。

「「!??」」

地震に因る辺りが揺れる音と混じって、地面から嫌な地響きが鳴り響き、三人はそれを聞き取った直後、三人が立って居た地面が崩れ落ちた。

「うわあああああああああああ!?!」

「のわあああああああああああ!?!」

「あああああああああああああ!?!」

三人は地面が崩れ落ちて出来た大きな穴の中に落ちてしまい、三人の叫び声は虚無のように暗い穴の中へ飲み込まれ、そして三人の姿は深い穴の中へ沈んで行った……………

夢の世界で

.....山脈全体を襲った、大きな地震。

その地震によって引き起こされ、地割れに巻き込まれたカレン、ロロ、アイシャの三人一行は、立って居た地面が崩落してしまい。

崩れ落ちた地面に深く暗い大きな穴が出来上がり、三人はその穴の中へ、重力に従って落下し、暗黒の世界へ飲み込まれて行った。

.....そして一行が、穴の中へ落ちてから、数分の時が経とうとしていた。

「.....何時まで、寝ているつもりだ？」

「！」

耳元か頭の中か、どちらか分からないが、聞き覚えのある声を聞こえ。

仰向けで倒れているカレンは、ハッと眼を覚ます。

「ここは.....?」

上半身だけを起き上がらせ、自分の周りが視界に入るとカレンは眼を疑った。

何故なら視界にはとてもこの世の物とは思えない程の不可解な景色が自分の周りに広がっていたからだった。

そこには奥が何処まで続いているか分からない程の広い空間と雲のような闇がカレンの足元から、空間全体に埋まっており、そして空というより天上には海のような光が空間全体を覆い尽くしていた。

「ロロ！ アイシャ！」

立ち上がってカレンは何故、自分がこんな所に居るのかは置いといて、まずは姿が見当たらないロロとアイシャが、此処に居るかどうか確かめるべく。

大声で名前を呼んで、辺りを見渡すが.....返事は一切無く、見晴らしの良いこの不可思議な空間で、自分以外は誰も見つける事は無かった。

「此処には、あの男と女は居ない……………此処にはお前と私しか居ない」

「……………その声は！」

目覚める前に聞こえた聞き覚えの在る声が何処からか聞こえ、カレンはもう一度、辺りを見渡すと、自分の眼の前で空間が歪み始め、その歪みの中から光と闇が融合したような、謎の球体が現れた。

「君……………は……………？」

「こうして？面と向かい合って？会うのは初めてだな。……………」

……………魔装器『ゼオラル』に選ばれし人間よ」

摩訶不思議な空間に続いて、今度は空間の歪みから現れた摩訶不思議な謎の球体に戸惑うカレンを気にせず、謎の球体は淡々とカレンに問い掛けた。

「ゼオ……………ラル？何それ？」

何処かで聴いた事が在るような言葉だが、生憎カレンは思い出せなかったので聞き返した。

「お前の魔装器の名前に決まっているだろう？魔装器にはそれぞれに名前が付けられている。……………知らないのか？」

外見的にはとても人間に見えない相手が、喋っている事についてカレンは不思議と気色悪そうな様子は無く、謎の球体が言う『ゼオラル』が何なのか、分からずに首を傾げると、謎の球体は、カレンの持っている魔装器の名前だと語る。

「魔装器が『PURGE・ON』を行ない、『DETROIT・MODE』になった瞬間にお前の魔装器が『コード・ゼオラル』と言っているだろう？どの魔装器もそうだが、『コード』の後に付いて来る言葉が魔装器自身の名前を示しているのだ……………まさか、この事も知らないのか？」

頼んでもいないのに会ったばかりなのに魔装器の名前の事を親切に教えた謎の球体は再度、今の知識の事について知っているのかをカレンに尋ねた。

「う、うん、そうなるね……………」

「……………まあいい、それよりお前、名前は？」

人間の形をしていないので表情が読めない謎の球体だったが、無知なカレンに多少呆れたのか、声が若干緩む。

一方カレンは謎の球体のお陰で、魔装器にはそれぞれ名前があり、『コード』の後に付いて来る言葉がその魔装器の名前であるから、自身の魔装器の名前は『ゼオラル』だと知る。

そして、次に何処か冷めた態度になったような謎の球体は、カレンの名前を尋ねた。

「僕の名前は、カレン！ カレンって言うんだ！」

「カレン？ ……………変わった名前だな？」

「そう……………なのかな？」

ロロに名前を紹介した時は、『女っぽい名前』だと評され、今度はこの謎の球体に『変』だと言われて、カレンは自身の名前が本当に自分の名前なのか、ほんの少し疑った。

「本当に今の名は、お前の名前なのか？」

「えっ？」

歯切れの悪い事を見抜かれたのか、謎の球体は『カレン』と言う名前は本当の名なのか、深く追求し出し、カレンは再び戸惑った。

「分からない……………このブレスレットに刻まれた名前を見て、強くそう思ったから、本当の所、この名前が本当に自分の名前なのか、正直よく分かっていないんだ」

「自分の名前が分からない？ お前……………もしや……………」

左腕に付いているブレスレットを眺めながら、正直に自分の名前の事を話すカレンに謎の球体は考えられるある一つの事情を察する。

「お前は、記憶喪失か？」

「……………うん。僕は自分についての事や常識、地名、知り合いやあらゆる事さえも全然思い出せないんだ。これっぽっちも」
記憶喪失の事を初めて見抜かれたカレンは素直にそれを認め、見抜いてくれた謎の球体にあらゆる記憶を無くしたと打ち明ける。

「そうか……………しかし、記憶喪失とはな」

「? どうしたの?」

「ふっ、いや」

「?」

事情を理解した謎の球体にカレンは気のせいかその時、表情が分からない謎の球体が笑みを浮かべたように見えた。

「もしかして、君は僕の事を知っているの?」

「知っている訳が無いだろう。私とお前は? 今日初めて会ったばかり?なのだからな」

「……………やっぱり、そうか」

相手の様子を見て、可能性は低いがもしかしたら目の前の謎の球体は、自分の事を知っているではと思ったカレンは、一応聞いてみようと思ねるが、やはりお互い初対面らしく、謎の球体の返答にカレンの淡い期待は脆くもへし折れた。

「所で、君の一体誰?」

「ん? 私か?」

この理解不能な空間に来てから相手に質問ばかりさせられているので、こっちも質問しようとカレンは、とりあえず謎の球体に何者なのか尋ねた。

「そうだな、私の名は……………『レクサス』だ」

「『レクサス』か、で君は……………魔物なの?」

「断じて違う! 今、訳有って私は本当の姿を見せる事は出来ない。お前が見ている今の私の姿は私の魂を具現化した姿だ」

「魂を具現化?」

謎の球体は自身の名は『レクサス』と答え、まず、第一に謎の球体の名を知ったカレンは次に失礼極まりない質問を振ってしまい、どうやらカレンは会った時から相手が魔物なのではと疑っていた様であった。

謎の球体はそれをキツパリと否定し、事情が在って、本来の姿を見せる事が出来ないようであり、今の姿は自身の魂を具現化した姿だと述べる。

「よく分からないけど、とにかく君は魔物じゃないんだよね？」

「ああ、人間でもないがな」

「え……………?」

魂の具現化という難しい説明を聞いてカレンは、少し話に付いて行けなくなり、謎の球体もといレクサスの正体が魔物かどうかという要点だけでも確認すると、レクサスは魔物ではなかったが、人間でも無い事にカレンは困惑した。

「魔物でも人間でも無いって事は、もしかして君は『虫』なの!？」

「……………意外と失礼な奴だな、お前は」

「あ、いや、その……………ご、ごめんなさい」

魂を具現化した姿と言うが、生物とは思えない外見と本人は人間でも魔物ですら無いという証言にカレンは、レクサスの正体は『虫』と考え着いたが、やはり不正解だったようで、レクサスの声に若干、怒りが混じっている事を察したカレンは素直に謝った。

「と、ところで『水底の洞窟』に居た時と『レイチム』に居た時、僕に魔装器の事を色々、教えてくれたのは君……………いや、レクサスなんだよね？」

「如何にも」

会って間も無い癖に、レクサスの素性について深く追求しては、いけないと悟ったカレンは次に『水底の洞窟』の時から、自身に色々な助言を与えてくれた声の主はレクサスじゃないのかと尋ねると、彼は潔く肯定した。

「やっぱり! 此処で会った時から聞き覚えの有る声だと思ったんだ! ……………でも、何で君は、見ず知らずの僕なんかを助けてくれたの？」

今、此処で直接会うまで、何故顔も知らない相手でもある自分を戦いでピンチになった時に二度も状況を打開する為のアドバイスをくれた事についてカレンは理由を聞き求めた。

「お前には、死んで貰っては困る。ただそれだけだ」

「……………」

ただ『死んで貰っては困る』という理由だけを述べて、それ以上は何も喋らず。

しかも、言いたい事を言った後に『これ以上は何も言わない』と語り掛けているような、眼に見えないオーラみたいな物を滲み出し、見ず知らずの他人にでも十分、それを伝わらせるレクサスの凜然とした態度にカレンは深く突っ込む事が出来なかった。

「えっと……じゃ、じゃあ、レクサス！ 此処は一体何処なの？」

理由を深く追求するのは止めようと珍しく空気を読んだカレンは話を変えようと思い。

今、自分達が居るこの別世界のような空間は一体何なのかを問い掛けた。

「此処は、お前の精神と私の精神を繋ぐ空間の中だ」

「？ ？？ そ、それは………どうゆう意味なのかな？」

「簡単に言えば、此処はお前と私の夢の中の世界だ」

「夢の中の世界？」

一言では言い表せないこの現実離れしている、目の前に漠然と広がる世界が『夢』だと聞いてカレン、少し黙って、頭の中で言葉の意味を冷静に考え、やがて。

シンプルな答え導き出した。

「夢の中って事は、今の僕は寝ているって事？」

確かに現実離れしていて、夢だと言われても差ほど不思議とは思わないが、だがカレンは此処で眼を覚ました時から、夢とは思えない程の現実感溢れる肌の感触を感じており。

心の中では此処は現実世界か或いは夢なのか、区別が着かないと思いつつ、誰でも分かる単純な答えを返す。

「そうだ。 正確に言えば、お前は気絶したのだから」

「気絶した？」

寝ているのでは無く、気絶していると返されてカレンはこの時、何故自分は気絶したのか。見当が思い浮かばなかった。

「あの時の事も忘れてしまったのか？ お前達は山道を突き進んでいる途中、大地震に襲われて、その影響で足場が崩れ去り、全員山脈の中へ落ちて行っただろう？」

「……………！！　そ、そうだった！！」

つい先程の記憶までも喪失したのか、疑って声質に呆れの色が混じるもレクススは、

調子を乱さず崩さず、カレン達が山道を歩いている途中、三人の身に襲い掛かった、

突然の出来事の経緯を代わりに説明し、その話を聞いてカレンは長い様で短い沈黙の後、ハッと眼を見開いて、思い出す。

「ロロ！！　アイシャ！！」

「無駄だ。此処はお前と私の夢の中の世界だ、あの二人が此処に居る訳が無い」

二人の事も思い出したカレンは、上空に浮かぶ光の海と地面に埋まっている闇の雲が限りなく続いている空間の中で、二人の名前を呼び叫ぶ。

……………が、レクススが最初に説明した通り、カレンが今居る場所はカレンとレクス、この二人の夢の中であって、すなわち此処にはこの二人以外誰も居ないのであり、夢の中に居るカレンの呼び声は当然、ロロとアイシャは届かず。

虚しくも呼び声は限りなく続いている空間の奥へ、消えて行っただ。

「ロロ、アイシャ……………無事かな？」

「あの二人なら無事だ。お前と同じく気絶しているが、特に大した怪我はしていない」

「えっ？　それ本当！？」

ロロとアイシャの無事を祈るカレンに二人は無事だと良く報を伝えるレクスは、

「嘘は言わない。だが、あの二人はお前が居る空間から少し離れた別の空間に居る様だ」

「別の空間？　どうゆう事？」

二人の無事を知ったが、同時に二人が自分が居る空間とは別の空間に居ると知ったカレンはレクサスの説明に混乱する。

「お前に私の名前を教えた時に分かった事だが……………」
お前達が落ちた山脈の中は偶然にも洞窟となっており、お前は洞窟の中のある空間に落ちり、それとは別にあの二人は別の空間に落ちて行ったんだ」

揺れ動く光と闇が合体したような球体が外見のレクサスの話に因ると。

実はこの『ホワイト・マウンテン白霧山脈』の中は洞窟になっていて、カレンはその洞窟の中のある空間に落ちこち、ロロとアイシャはカレンとは別の空間に落ちこちたそうだと。

「地割れが起こる前、あの時、お前はあの二人から少し離れた所に居ただろう？　それが災いとなって、お前達はそれぞれ異なる空間へ別々に別れてしまった訳だ」

「そんな……………」

二人と離ればなれになってしまったという事実はカレンの頭に重く押し掛かった。

「他にも悪い知らせが在る。この山脈の中の洞窟はとても広い！　自然で出来たか、魔物達を作ったどうかは分からないが、出口を見つけるのは困難を極めるぞ。おまけに此処の洞窟の魔物は『水底の洞窟』の魔物より強い魔物がウヨウヨ居る！　気を付けるのだな」

「う、うん、分かった……………あれ？」

嫌な親切とも呼べる。悪い報告を知らせるレクサスにカレンは戸惑いながらも了承した時、ここである事の矛盾に気が付く。

「レクサス」

「ん？」

浮遊しながらユラユラと左右に動いていた球体のレクサスは、呼ばれて動きを止める。

「君は何で、ホワイト・マウンテン『白霧山脈』の洞窟の事やアイシャとロロの居場所が分かるの？　君は僕と同じ？　寝ている？　んだよね？」

カレンが気付いた矛盾。それはレクサスの話が本当なら今、自分達は夢の中で、何故自分と同じ？寝ている？相手が、一体どうやってら洞窟の存在や二人の居場所が分かるのだと、カレンはこの矛盾を指摘する。

「何を言うのかと思えば、そんな事『五大属性』の一つ？気？属性の？極意？を極めれば、場所の把握や人物の位置など容易に分かる」突き付けられた矛盾を物ともせず、しなやかに『五大属性』の内の一つ？気？属性を極めれば、朝飯前だとレクサスはさらっと答える。「それに私はお前と違って？寝ている？訳じゃない、今の私はある？特殊な環境？に居る。そこに居る所為で私は？直接？誰かに会う事や話すさえ出来ない！だから私がお前と話するには、以前の^{サイコ・テレパシー}ように念力交信をするか、現在ようにお前の夢の中へ介入するしか、方法が無いのだ」

「？特殊な………環境？？ 君は一体………一体何処に居るの？」

こちらとの会話方法よりも、レクサスが現在、留まっている？特殊な環境？が気になったカレンは彼の居場所を聞き出そうとした。

「私の居場所か？ ふむ………難しいな、口で説明するのは………だが、例えて言うなら、私から見てもお前から見ても、私は限りなく近いと共に果てしなく遠い場所に居る………」

「？？？」

例えなのに常人ましてや記憶喪失のカレンに理解し難い例えを述べられてカレンは、レクサスに対しての謎を更に深めてしまう。すると直後に空間全体が突然、眩しくなった。

「！」

「む、時間か………」

前触れもなく現れた眼に鋭く刺さる様な眩しさにカレンは目蓋を半開できる程度に堪えるが、一方でレクサスは外見上通り、眼が無い為か、けろっとしていた。

そして、どうやら彼はこの夢の世界で、今起こっている現象について知っているようだ。

「カレン！ 私とお前と話せる時間はもう残り僅かしか無い！ だから最後に、これだけはよく耳に入れておけ！」

「ええっ！？ な、何っ！？」

時間が過ぎて行くにつれ、空間全体の眩しさは更に強くなり。

同時にレクサスの声が遠くなり。

カレンは手で眼を覆い隠して、眩い光を防ぎながらも聞き返した。

「？絶対に死ぬな？！！ 私とお前が――――！！」

「――！！」

耳に『絶対に死ぬな』という言葉が辛うじて聞こえた瞬間、眩い光が空間全体を完全に包み込み。光によって、レクサスの言葉は途中で掻き消され、カレンとソルランスは空間と一緒に光に飲み込まれ、そのまま光の中へ、姿を消して行った……………

間にシワを寄せた瞬間。

誰かのある言葉の部分が脳裏を過ぎった。

「(……………全員山脈の中へ落ちて行っただろう?)」

「(山脈の中は偶然にも洞窟となっており……………)」

「(……………お前達はそれぞれ異なる空間に別々に別れてしまった訳だ)」

つい先程まで居た、正確には気絶して見ていた。

夢の中の世界で、会ったレクサスの話の一部を思い出したカレンは眼を見開いた。

「そうだ……………僕は、山脈の中に落ちて来たんだ!」

夢の中の出来事を思い出したお陰で、大地震に襲われて足場が崩れ去り、大きな穴の中へ落ちてしまった事をようやく思い出したカレンは、纏わりついていた寝惚けが吹き飛び。

もう一度、空間内を隈なく見渡した。

(ロロ、アイシャはやっぱり居ない! 夢で会った……………レクサスの言う通り、この洞窟の何処に居るのか?)

空間内にロロとアイシャの姿が無いと確認したカレンは、光と闇が混ざり合ったような球体の姿をしたレクサスの話が正しければ、二人は自分も落ちた山脈の中に在る。

洞窟の何処かに居るのだと思います。

「(だったら、早く二人と合流しないと! 此処には強い魔物が居るんだ!)」

親切? に教えてくれたレクサスの話に因ると、この洞窟の中にも魔物が生息しており、しかも『水底の洞窟』で遭遇した魔物達より強い魔物が居るらしく。

二人の身の安否を心配したカレンは、一刻も早く二人と合流しようと空間内に出口が在るかどうか、もう一度、空間内を隈なく見渡した。

「(! 在った!)」

焦らずゆっくりと空間全体を見渡していると、先程は見えなかった

が、眼が暗闇に慣れたお陰で、壁に深く掘られたような穴を見つけ、それは空間内で唯一の出口を発見だった。



ロロとアイシャを探す事で頭が一杯だったカレンの頭にある人物？
が浮ぶ。

大の大人二人が並んで走っていきけるぐらいの広さを持つ、洞窟の通路を走りながらカレンは夢で会った、外見は一見不気味なようだけれど神秘的な球体の姿をしたレクサスは一体何者なのか、ふと考えた。

あの宙に浮かぶ、日食が起きている太陽のような球体は自身の魂を具現化した姿だとレクサス本人は語ったが、外見が生物では無い、自分の正体を明かさなかったともなれば、余計怪しさ爆発となり、カレンはレクサスへの疑惑の念を持ってしまう。

聞いた限りではレクサスの声の低さは男性の分類に当たると、カレンは割り当てた。

しかし、理由はともかく『水底の洞窟』、軍用都市『レイチウム』、そして、地下水道での戦いでカレンに色々助かるアドバイスを送っていた事は確かであるから。

カレンはレクサスに対して、決して悪い人ではなかったと囁いた。

「って……………人じゃなかったんだっけ？」

自分の発言に間違いが在ったと、小さく苦笑いを浮かべて自分自身に突っ込んだ。

「……………考えるのは後にしよう。今は早く二人に会わなきゃ！」

顔を左右に振って雑念を払い、余計な事を考えるのは止めるように気を取り直して、一秒でも早く二人の元に辿り着こうと、カレンは速度をもっと上げようとした。

「！」

だがその時、暗闇が続く通路の先に、キラッと光る何かが視界に入った。

「（光った？）」

カレンは速度を急激に落とし、歩いて光った何かの元へ近付いた。

「うわぁ……………すっごい綺麗！」

そして、光った何かの元まで近付き、それを拾い上げ、首の下辺りまで持って来ると、

暗闇の中でもハッキリと分かる程の輝きを放つ、美しいネックレスが眼に映り。

一瞬、カレンは男性にも関わらず、そのネックレスの美しさに思わず、見惚れてしまう。

「！」

如何にも高級そうな光輝くネックレスに目を奪われていると、暗闇で先が見えない通路の奥から物音が聞こえ、カレンは瞬時に我に戻った。

「なんだ？」

耳を傾ければ、ガタツ、ゴトツと何かが動いているような物音が立て続けに起こり続け、カレンはその物音が何なのかを確かめるべく、手にネックレスを持ったまま、物音の元へ近付いて行った。

「（……………もしかして、口口達かな？ それとも……………
…）」

物音の発生源がロロとアイシャかもしれないと同時に魔物かもしれないと考えたカレンは、神経を研ぎ澄ませ、身の周りに注意しながら、ゆっくりと足音を発てずに闇の中でまだ鳴り響く、物音の近くまで歩き着く。

「これは……………?」

物音を辿って着いた先はカレンが落ちた空間とは別のだが、似たような空間の中であり、そして、その空間の天上にもポツカリと穴が空いていた。

だが、少し違う所が在った。

それは、天上の穴の真下に小さい物から大きい土の塊が山のように積み重なっており、自然に出来た物では無く、まるで人工的に作られたかのような物だった。

「(ッ! 誰だ!?)」

土の山の影から物音が聞こえたと一緒に何かの影が見え、カレンは土の山の影に隠れているその影の正体を確かめようと、慎重に迂回した後、目を凝らして、自分より先にこの空間の中に居た、存在の姿を捉えた。

「!? ひ、人だ!」

驚くべく事に土の山の影に隠れていた影の正体は、カレンと同じ人であり。

その人物は地面に無数に転がっている土の塊を拾っては土の山に次々と重ねていた。

「何処だ……………何処に在るんだ?」

「(どうして、こんな所に人が……………?)」

見て判別したが、物音の発生源はこの人物が土の塊を動かしていた音が原因みたいで。

後ろ姿で顔は見えないが、ブツブツと呟きながら、地面に転がっている土の塊を大きさ関係無く、懸命そうに拾い上げた後に塊の下を丹念に見渡し、そして最後に土の山へ器用に積み重ねるなど、その人物はまるで何かを探しているようだ。

一方カレンは、まさか自分達以外にもこの洞窟の中に人が居るとは思いも因らず。

何故、このような場所に居るのか、不思議で仕方無かった。

「あの……………何をしているのですか？」

此処に居る訳は知らないが、ともかく声を掛けようとカレンはその人物の背後に近付いて、恐る恐る声を掛けてみた。

「む……………何だ、こっちは忙しいだ！ 話なら後にしてくれ！」

此処（『白霧山脈』ホワイト・マウンテン）に自分以外の人が居るのにも関わらず。

その人物は声を掛けられても、カレンの事などは眼中に入らないのか、或いはどうでもいいのか、手を止めなければ、振り向きもせず『後にくれ』と言って、一蹴する。

「いや、でも……………その、何が忙しいんですか？」

跳ね返されてもカレンは挫けず、もう一度声を掛けてみる。

「見て分からないのか？ 探し物をしているんだ！ 邪魔しないでくれ！」

「探し物？ 探し物って一体何ですか？」

再び声を掛けてみても、その人物は一向に振り向かず、せっせと土の塊を拾っては、積み重ねる作業を止めはしなかったが、？何かを探している？という事を聞き出せたカレンは、探し物は一体何なのかを尋ねた。

「ネックレスだ！！ 姉上から貰った大切な……………」

「ネックレス？」

相手がまだ話している途中、目当ての物は、『ネックレス』と聞いたカレンは、視線をすぐ自分の手に向けた。何故なら思い当たる物は既に持っていたから。

「……………そのネックレスって、これの事？」

この空間に来る前に見つけた美しいネックレスをカレンは、見せ付けるような感じでその人物に差出した。

「何？」

カレンの言葉を聞いて、やっと振り返ったその人物は、自身の前に差し出されたネックレスを怪訝そうにじつくりと眼を細めて見詰める。

やがて、その眼は丸くなり、身体も小さく震えだした。

「……………お、おお!! これは!!!!」

「!?!」

震えた声から急に声を大きく上げて、その人物はカレンの手ごとネックレスをがっしりと両手で握り締めて、急接近し始め。

カレンは相手の突然の行動に思わず、ビクッと驚く。

「これは正しく、正しく姉上のネックレスだ!!」

案の定、先程カレンが見つけて拾ったネックレスが、この人物は探し物だったようで、

大層嬉しそうに満面な笑顔を浮かべながら、その人物は暗闇の中でも輝くネックレスに負けないくらい眼をキラキラと輝かせ、カレンからネックレスを受け取る。

「そ、そう……………良かったね」

若干、戸惑いながらもネックレスを渡したカレンであったが。

相手の大袈裟に見える反応は置いといて、その人の大切な物を見つけて良かったとカレンは、自然と嬉しさが込み上がり、自身も笑顔を浮かべる。

「おお、そうだ! 是非、お礼を言わせてくれ!」

早速、ネックレスを首に下げて、その人物はネックレスを見つけてくれたカレンにお礼を言いたいと胸に手を当てて、申し上げる。

「俺の名は、『ミツルギ・神楽^{かぐら}・ルーレイ』! ミツルギと呼んでくれ!」

「ミツルギか……………」

ミツルギと名乗ったその人物は、外見的に齡はカレン達と同じぐらいの少年。

しかも、高級そうな金色の縦線が入った鮮やかな灰色のズボンと上着を身に纏い。

その服に合った、街中を歩けば、百人中百人の女性が振り向くような端整、尚且つ美形の顔立ちを持ち。

さわやかなブロンズ色の髪と蒼く透き通った瞳、そして、首に下げた美しいネックレスと両手の薬指にそれぞれ、色も刻印も違う綺麗な指輪を付けているのが特徴の所謂、美少年だった。

相手の外見図を掴んだ後、ミツルギが名乗ったので、こちらも自分の名前を教えないと不公平だと考えたカレンは自身も名乗る事にする。

「僕は……………僕は、カレン！ カレンって言うんだ！」
夢の中で会ったソルランスとの会話で、今まで信じ込んでいた自分の名前が本当に自分の名前なのか……………自信までも喪失したカレンは、少し躊躇するもすぐ調子を立て直して、名を名乗る。

「カレンと言うのか……………良い名前だ！」

「えっ？ ああ……………そ、そう？」

今日、出会った人物達に自身の名前を名乗って、その中の約二名から『変』だと評価されたが、ミツルギからは『良い』と正面切って褒め立てられ、カレンは照れ臭そうに後頭部を掻いて、頬を少し赤く染める。

「謙遜する事はない！ 花の世界では『ラン・カレン』と言う、場所を選ばず世界中の何処にも咲いていると言われている美しい花が在って、その花は花の世界でも珍しく、二つの花言葉は付けられていて、『ラン・カレン』の『カレン』は？ 紡ぐ？ と意味付けられた、縁のある花なんだ。 だから、さっきも言ったように君の名前は実に良い名前だ」

改めて褒められたカレンだったが、ミツルギが今言った、あるキーワードを聞いて、身体が固まったかのようにピタッと動きが止まる。
「素敵な名だ！ その名前を付けてくれた君の両親はさぞかし、立派な方に違いない！」

「……………『ラン・カレン』？ ………………？ 紡

ぐ?？」

『ラン・カレン』の『カレン』と同じ名前を持つ、カレンの名前は実に良いとわざわざ説明してまで語り、ついには両親まで褒め称えるミツルギを余所にカレンは、ミツルギの話の中に出て来た『ラン・カレン』と? 紡ぐ? この二つキーワードを聞いた瞬間、心の中がその二つに支配されたような感覚に陥った。

「(何だろう? ……この感じ? ミツルギの口から出て来た、この二つの言葉を聞いた瞬間? ……まるで? ……懐かしいような? ……暖かい感じがする!)」

ブレスレットに刻まれていた名前を見た時に感じた、確信付いた感覚とは違い、もっと違う懐かしさを感じたカレンは、心の中が不思議と暖かくなった。

「カレン? ……この度は貴君に助けて貰い、大変感謝している。このミツルギ・神楽・ルーレイは、『ルーレイ』家及び『神楽』家、両当主としてでは無く、俺個人としてお礼を改めて言わせてくれ? ……本当にありがとう!」

カレンの様子の変化には気にも止めず、マイペースに話を進めるミツルギは、感謝の言葉を述べた後に深々と頭を下げる。

「え、えっ? あっ? ……ああ、いや、そんな、べ、別に? ……僕は大了した事はしていないよ。うん!」

うわの空状態になっていたカレンは、ミツルギからの感謝に我を取り戻し、反応が遅れて取り乱しながらも、謙遜的な返事で対応する。

「とんでもない! 君は、俺の一番の宝物を見つけてくれたお人だ! この大恩を受けた身として、感謝さずにはいけない!!」

「? ……じゃ、じゃあ、遠慮無くその気持ちを受け取っておくよ? ……」

感謝の気持ちが抑えられないと言った感じで、迫るように語り掛けるミツルギ。

相手の気持ちを受け取らなければ、素直に引いてはくれないと察したカレンは、観念したかのようにミツルギの気持ちを貰い受ける。

「おお！　そうか、それでこそ我がSEOUL・FRIENDだ！」
ソウル フレンド

「SEOUL………FRIEND？」

言葉の意味が分からず、カレンはいつものように首を傾げる。

「心の友、と言う意味さ！」

「心の友………友達？」

恥じる事なくミツルギは言葉の意味を教え。

それはつまり友達の事かとカレンは解釈して聞き返す。

「その通りだ！　今日から俺達は友達だ！！」

一方的に自分達はもう友達だと話を飛躍的に進めたミツルギは友情の証として、汚れの無い可憐な手を差し伸べる。

「（………友達か）」

差し伸べられた手をジッと見詰めながら、友達という言葉に何故か不思議と心に嬉しさが湧き上がり、カレンは唇を緩めて微笑みを浮かべる。

「うん！」

自分の心の中で自然に溢れる嬉しさと共にミツルギの気持ちに応えたいとカレンも同様に手を差し伸べ、二人はお互いに相手の手を握り締め、握手を交わした二人はミツルギの言う通り、今この瞬間から友達という関係に成り立った。

「………ん？」

「？」

ところが握手を交わしている途中、ミツルギは何か気付いたのか突然、カレンの身体全体を眺めるように注視し始め、その行動にカレンはどうしたんだろうと首を傾げる。

「僕の身体に変な物でも、付いてる？」

「………いや、気にしないでくれ。ほんの些細な事だ」

いきなり全身をジッと見詰められて、カレンは自分の身体の何処かに何かが付いているのかと思い、自身も身体全体を見渡すがミツルギは何でもなかったと事を終わらせた。

「ところで、カレンは此処で一体何をしていたんだ？」

「え？ …………… あっ！」

お互いの手と手を離し合い、友情の握手を交わし終えた後、気を取り直してミツルギはカレンに此処で何をしていたのかを尋ねると。カレンは数秒の間を空けて、ロロ、アイシャ達の事を思い出す。

「い、いけない！ 早く、ロロとアイシャを探さない！」

「む、それは…………… 連れの話か？」

ミツルギとの出会いで、自分の目的が頭から離れていたカレンは、皮肉にもミツルギの発言でその事を思い出し、ロロとアイシャを一瞬も早く見つけようと、一先ず、この空間に入って来た道とは別の道は無いかと、空間内全体を隈なく探そうとした時。

焦り出して誰かの名前を叫んだカレンを見て、ミツルギはカレンが叫んだその姿の見えない二人はカレンの連れなのかと、察して問い掛ける。

「う、うん。 此処（洞窟）に来た時に離ればなれになっちゃんだ！」

「このような場所に来たという事はもしや、カレン達も地震の所為でこの洞窟の中に落ちてしまったのか？」

「？ 僕達も？ って事は…………… もしかしてミツルギも！？」

言葉の意図からカレンは、ミツルギもまた自分達と同じ、地震によってこの洞窟の中に迷い込んだ一人と推測した。

「ああ、あの通りだ」

自分から丁度、真上に在るポツカリと空いた大きな穴に指を指すミツルギ。

どうやら彼も、カレン達同様、地震で起きた地割れによって、地面と一緒にこの山脈の中の洞窟に崩れ落ちたようだった。

「此処（洞窟）に落ちた事自体は大した問題じゃなかったんだが、此処に落ちた時の衝撃で大切なネックレスが外れて何処かに行ってしまう、だから、先程のようにこの土の塊を退けつつ、必死にネックレス探していたんだ」

「成る程、そうだったんだ」

ネックレスを見つけたカレンがこの空間に入った時に見たミツルギの行動は、地震の所為で、此処（洞窟）に落ちた時にネックレスが取れて行方が分からなくなり、ネックレスを探す為に邪魔な土の塊を取り除き。

尚且つ、取り除いた土の塊がその後も邪魔にならないよう、器用に積み重ねながら、あれ程懸命にネックレスを探していたとカレンは大体想像が着き。

この空間に来る途中、通路にネックレスが落ちていた訳も納得する。

「よし！ 俺もカレンの連れを探すのを手伝おう！」

「へっ？ いいの、ミツルギ？」

予想もしなかったミツルギの救済の申し出にカレンは思わず、聞き返してしまう。

「当たり前だ！ 友が困っている時、助けるのが友の役目、そうだろう？」

またしてもくさいセリフを恥じる事も無く言って、更には自分に向かって親指を立てて、片目を閉じてポーズを取るミツルギの姿は美少年だからこそ、とても絵になっていた。

「……………ありがとう！ ミツルギ！」

猫の手も借りたいような、一刻も争う現状で、会ったばかりのミツルギが協力してくれる事にカレンは、心の底から感謝の気持ちが溢れた。

「感謝されるまでも無い！ それよりもカレン、急ぐのだろうか？」

ならば、君が来た通路とは別の通路があそこに在る！」

ミツルギが指を指す方向には、カレンがこの空間に入って来た穴とは反対方向に別の穴が在り、それも来た穴と同様、洞窟の中の奥へ続いていた。

「ホントだ！ よおし、そうと分かれば……………行こう！」

ミツルギ！！」

「もちろんだ！」

息ピッタリに走り出した二人は、共に『ホワイト・マウンテン白霧山脈』の中に在る、洞

窟の更に奥へ続いていると思われる通路を恐れも無しに入り込み、
二人並んで列を乱さず、慎重に駆け足で暗闇の奥へと進んで行った
.....

？気？属性の極意



……………今日一日で、暗い所を別々に三回も訪れる羽目になったカレンは、離ればなれになった口口とアイシャを探す為、協力を申し出てくれたミツルギと共に出口の見えない迷宮の洞窟の中を休むことなく、数分間、走り続けていた。

「そういえば、ミツルギはどうして、こんな所に来たの？」

何故、ミツルギは『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に居るのか？

最初に会った時から、抱いていた疑問を丁度良いから、今ここで解明しようと思ったのか、カレンは不意打ちのように尋ね始める。

「軍用都市『レイチィム』に大事な用事が在ってな、それが終わって、次の大事な用事が在る『イルクク』大陸に向かおうと、この国で数少ない？空港？が存在する王都『リア・カンス』への？近道？として此処（ホワイト・マウンテン白霧山脈）に来たんだ」

走っている中、突拍子に尋ねて来たカレンにミツルギは、警戒及び怪訝する素振りも無く、至って普通というかマイペースな感じで、微笑んだ表情を崩さずに平然と質問に答える。

「ミツルギも『レイチィム』に居たんだ！……………でも、『リア・カンス』への近道だからって、何もこんな危険な場所に来る必要は無かったじゃないかな？ 遠回りしても王都『リア・カンス』には行けるんだよね？」

偶然にもミツルギはカレン達と同じく、軍用都市『レイチィム』に居たらしく。

大事な用が終わり、次に『イルクク』とかいう大陸に向かう為にこれまたカレン達と同様。

王都『リア・カンス』に行く為の？近道？として『ホワイト・マウンテン白霧山脈』に来

たらしい。

しかし、カレンは解せなかった。人の事は言えないが遠回りしても王都『リア・カンス』へ行ける筈なのに、どうして話に因ればとても危険な『白霧山脈』ホワイト・マウンテンをたった『リア・カンス』へ行く為だけに危険を省みず、単身で来たのか。

ミツルギの行動にカレンは心の中で、自分が現在追いかけている。

ペンダントを置いて忘れて行ったあの金髪の少女を重ね見てしまう。確かにアイシャの話に因れば、『白霧山脈』ホワイト・マウンテンを真っ直ぐ越えられれば、

たった半日で王都『リア・カンス』に着けるらしいので、恐らく

だが金髪の少女は『リア・カンス』に早く着きたいが為に此処、ホワイト・マウンテン

『白霧山脈』に訪れたと推測するが、だが何故、彼女^{ミツルギもそうだが}はわざわざ危険を冒してまで、

『リア・カンス』へ急ぐのか、カレンは皆目見当も着かなかった。

そんな事を思いつつのカレンの質問にミツルギはまるで、嘲笑うかのようにフツと鼻を鳴らして、小さく笑う。

「では逆に、此処ホワイト・マウンテン（白霧山脈）を？越えられる實力？を持っているのに、何故、遠回りしなきゃいけない理由が在るんだい、カレン？」

「え？」

質問の答えを質問で返され、今度はカレンが逆に自分が不意打ちのように問い掛けられ、しかも、質問の内容が内容で、どう答えて良いか対応に困ってしまう。

だが、ミツルギはまだ言い足りなかったのか、自分の主張を更に言うと言を続ける。

「俺の實力なら、この『白霧山脈』ホワイト・マウンテンを？越えられる自信？が在った、だからこそ、俺は遠回りなど時間の掛る事をしないで、？近道？として此処を越えて、王都『リア・カンス』に？着くつもりだった？んだ」

話を解釈すると、ミツルギは自身の實力なら単独でも『白霧山脈』ホワイト・マウンテンを越えられると自負しており、そして時間を無駄にしたくない為、遠回りはせず、越えればたった半日で、王都『リア・カンス』に着

くので、山脈越えに挑戦したらしい。

ちなみに？着くつもりだった？というのは恐らく、地震の所為で『ホワイト・マウンテン白霧山脈』の中の洞窟に落ちてしまったから、予定が狂ったと推測する。

「カレンも、自信が在ったからこそ、此処（ホワイト・マウンテン）を越えにや
って来たのであろう？」

「や、僕はそんな……………」

自分達はミツルギとは違い、目的はそれぞれ異なるが利害が一致した上で、協力し合って『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越える事にしたので、決して自身の実力に自信が在ったから此処に來た訳では無いから、カレンは否定しようとした。

「謙遜する事は無い！ カレンの実力なら十分、一人でも『ホワイト・マウンテン白霧山脈』を越えられるだろう！」

カレンが否定する前にミツルギは、言葉を掻き消すようにカレンなら自分と同じく、単独で山脈越えを果たしていただろうと決定付けるように豪語する。

「……………分かるの、そんな事？」

見てもいないのに、ミツルギはまるで自分が記憶喪失で忘れた、？自分でも良く分からない実力？を完全に見抜いていると、半信半疑に感じ取ったカレンは、しかめた面でそんな事が分かるのかと試しに尋ねた。

「もちろんだ！ ……戦わなくても俺には分かる。カレンは俺に勝るとも劣らない程の実力を秘めている。 ……流石は我が友だ！！」

「そう……………なのかな？」

？流石？と賛美してくれるミツルギ本人の実力はどれ程の物かは分からないし、未だに隠された自身の力もどれ程の物かは分からないが、褒めてくれているのは変わらないので、しかめ面だったカレンは無条件に照れ顔になり、人指し指で頬を軽く掻いてしまう。

「ところで、カレンの連れは二人だけなのか？」

「へ？ ……ああ、うん、そうだけど」

まだ話は付いていないのにミツルギはお構いなしにカレンの連れ（アイシャ、ロロ）についての話題に勝手に変更し、カレンは突然、話題を変えられ、呆気を取られるもすぐ気持ちを切り替えて、答える。

「そうか……………ふむ」

聞きたかったのはそれだけだったのか、カレンの連れが二人だけだと確認したミツルギは直後に微笑んでいた表情が真剣な表情にガラリと変わり、今から瞑想するかのように眼をしなやかに閉じて、すこしの間、何も言わなくなった。

「ん。やはり、近くに人の気配は感じない……………まだ遠くに居るようだな！」

そして、ずっと緩やかに眼を開いて、再び、微笑んだ表情でミツルギは近くに人の気配は感じない、まだ遠くに居ると、まるで全てを見通したかのようにカレンに伝える。

「そんな事も分かるの、ミツルギ？」

戦わずとも相手の力量を見定めるだけでなく、人の気配を感じ取る能力まで備わっているのかと、そう思わせるようなミツルギの発言に、カレンは眼を見開いて驚く。

「もちろん分かるとも！ 『五大属性』の一つ、？気？属性の？極意？を極めれば、人の気配を掴む事など朝飯前だ！」

「？気？属性の？極意？？」

夢の世界で、ソルランスが同じ事を言っていた事をカレンは思い浮かべるが、詳しい事は聞かなかったので、ミツルギも言う、？気？属性の？極意？がどうゆう物かは分からず、毎度お馴染に小首を傾げる。

「カレンも知らないか……………まあ、無理もないか。？気？属性の？極意？は現代ではもう、知っている者も精通している者も数少ないのだから……………」

決して、カレンも知らなかった事がショックだった訳では無く。

どうやら現代では？気？属性の？極意？とやらは、知っている者も精通している者も少ない様で、その事にミツルギはまるで？気？属性の？極意？が人々から記憶から忘れさられる伝統のように少し切なげな表情でしみじみと納得する。

「で、その？気？属性の？極意？って一体どうゆう物なの？」

いきなり切なそうな表情をされて、場の空気が重くなったような感じがしたカレンは空気を正常に戻させようと？気？属性の？極意？の内容を伺う。

「よくぞ、聞いてくれた我が友、カレン！　？気？属性の？極意？とは、『生物に宿る力』とも呼ばれている？気？属性の？心体術？の事だ！」

心の友カレンの言葉によって？気？属性の？極意？Ⅱ？心体術？だと活き活きした表情に早変わりして回答したミツルギは、元気よく説明を開始する。

ちなみに？心体術？とは神経・身体・精神を鍛えて、発揮する精神武芸の事である。

「？極意？には？心体術？の『心・体・術』と三つの種類が在って、その中の生物の神経を司る『心』の？極意？を極まれば、人間や魔物の気配を感じ取れる事が出来るようになり、更に極めれば、その気配が人間の物か魔物の物か、判別出来るようになるんだ」

搔い摘んで言うと、？極意？には『心』『体』『術』この三つの種類が存在しており、その中で神経を司る『心』の？極意？を極めると人間や動物、魔物等の気配を正確に区別して感じ取る事が出来るミツルギは語る。

「他にも気配の位置と数、相手の強さや心情が気配を通じて分かるようになったり、俺達のような生物だけじゃなく、無機質な物までの位置もイメージのように感じ取る事が可能になる等、さまざまな事が分かるようになるんだ」

「へえ！　凄いな、それ！」

まだ分からない部分も有るが、『心』の？極意？を極めれば得られ

る、気配を感じ取る力にカレンは『凄い』と感心の声を漏らす。

「『心』を極めても、今の俺では、最大約400メートルの範囲までしか、気配を掴む事しか出来ないが、だが『心』をもっと極めれば、もっと遠くまで気配を探れるようになる。だからこれから鍛錬を積み重ね続けられれば、いつしか地上の隅々までのあらゆる物の気配を感じ取れるようになるかもしれない！」

「はぁ……………そんな事が出来るなんて、？気？属性の？極意？って凄いんだね！」

『心』を極み続けられれば、地上全域のあらゆる物を探れる事が可能かもしれないと豪語するミツルギに溜息を漏らす程、話を真に受けたカレンは？気？属性の？極意？Ⅱ？心体術？に感動と壮観を覚えてしまう。

そして、この？気？属性の？極意？の話を聞いて、カレンは現実世界に戻る前に出会ったある人物？ について思い出す。

「……………と言う事は、？彼？もミツルギのようにロロとアイシヤの気配を感じ取ったという事か」

通りで夢の世界で遭遇したレクスサスは何故、洞窟の中に居るロロとアイシヤの居場所がどうやって分かったのか、その訳はミツルギと同じように『心』の？極意？で、二人の気配を掴んだからだ、カレンは納得して、ボソツと呟いた。

「ん？ 何か言ったか、カレン？」

「ああ、いやいや、何でもないよっ！」

呟きがミツルギに聴かれてしまい、夢の中で起こった出来事など、さすがに信じては貰えないと思ったカレンは、適当に誤魔化して、その場をやり過ごした。

「！」

走りながらそうこう話している内に二人は、さっきまで自分達が居た空間よりも何十倍を広い空間の中に入り着いていた。

「広い所に来たね」

「ん、スポーツをやるには、問題無い広さだな」

こんな所でどんなスポーツもやる訳がないが、ミツルギの言う通り、ミツルギ達の居る空間は何をやるうとしても申し分ない位、とても広い空間であり、その空間の中をカレンは眼を大きくして全体を見渡す。

「奥に大きな穴が在るね」

カレンが見詰める光の無い空間の奥には、カレン達が通って来た穴とは比ではない、巨大なトンネルのような穴が広々とドンっと存在していた。

「あの巨大な穴も奥に続いているようだな……………むっ！」
空間内はとても広い為、巨大な穴はミツルギ達からかなりの距離が在る筈なのだが、カレン達の位置でも巨大に映るその穴は、相当な広さを示しており、そして、どうやらその穴も今までのと、同じように洞窟内の奥に続いているようだった。

すると、ミツルギは何かを感じ取ったのか、眉間にシワを寄せて、眼を鋭くさせる。

「どうしたの、ミツルギ？」

険しくなったミツルギの表情の変化に気付いたカレンは、どうしたのかと尋ねる。

「あの方角から、何かが来る！」

振り返って、真っ直ぐ指を指した方向にはミツルギ達が生きて来た穴から少し離れた所に同じ大きさの穴が在り、そこから何かがこちらに近付いているとミツルギは答え返す。

「何かって、何？」

「まあ、待て……………ふむ、この気配はどうやら人のようだ」

「人？」

自分達が生きて来たのとは違う、別の穴から人が来るとミツルギは詳しく状況を説明し、カレンは『人』という単語を聞いて、脳裏にある二人の顔が浮かび上がる。

「人数は……………二人しか居ないようだな。そろそろ此処（空間

の中」に入って来るぞ」

「二人……………まさか！」

別の穴の奥から人の走る足音が聞こえ始め、その足音は段々とカレン達の所に近付いて行き、そして次にミツルギはこちらに近付いている人物は二人だと言い当て、その脳裏に浮かび上がった物を確定付けるかのような発言にカレンは心の内の期待が大いに高まって、『まさか』と声を上げる。

やがて、足音はもうすぐ傍まで近付き、同時に穴の奥から二つの人影が見え、そして二つ人影はカレン達が居るとも広い空間の中に飛び込み、その姿を露わした。

「「カレン！」」

穴の中から飛び出した二つの人影の正体は、洞窟の中へ落ちた時に離ればなれとなったしまったロロとアイシャであり、空間の中に入って早々カレンを発見した二人は一斉に足を止める。

「ロロ！ アイシャ！」

魔物に襲われて手遅れにならないよう、合流する為に探していた人物が自分の方から来てくれて、ようやく二人を見つけたカレンは喜びが表情に映り、二人の方へ歩み寄る。

「無事だったんだね！ 怪我とかは無い？」

「こっちのセリフだぜ！ また怪我なんてしてないよな？」

「私もロロも、運よくかすり傷程度で済んだから、大丈夫。カレンの方は無事だったの？」

「うん！ 僕もそれといった怪我は特にしてないよ！」

「そうか！ みんな大事に至らなくて良かったな！」

お互いに無事を確かめ合った三人は、お互いの無事に安堵の表情を浮かべる。

ミツルギもそうだが

ちなみ三人とも、かなり高さから落ちたのにも関わらず、奇跡的にかすり傷を負ったか負わなかった程度で済んでおり、アイシャが言う『運良く』で済むのか疑わしい限りだが、だがこうして実際三人揃って無事である事実には変わらないで、三人はお互いに相手の元

気な姿を見て、必然的に笑みも零れる。

「良かったな、カレン。連れが見つかった」

無事に合流した三人に今度はミツルギが歩み寄り、カレンが探していた二人が見つかって良かったなど祝福する。

「うん！　ありがとう、ミツルギ！」

「お？　……………カレン、誰だそいつ？」

祝福されて、お礼を述べるカレンとは別にロロは見慣れない人物ミツルギの存在に気付いて、知り合いたい話したカレンにミツルギについて尋ねた。

「そうだった！　紹介するよ、二人共。　彼は……………」

「っ！　待て、カレン！　……………それについては、次の機会だ」

二人にとってはまだ初対面だということをロロの指摘で気付いたカレンは、ミツルギの事を紹介しようと、喋り出した時。

ミツルギはまた何かを感じ取った様で、カレンに待ったを掛ける。

「今度はあそこから、何かが来る！　しかも……………大量に、だ！」

また反対方向に振り返って、指を指した先には、ミツルギ達が今居るとしても広い空間の中で、一番目立つトンネルのような巨大な穴から、何かが大量に近付いて来るとミツルギは再び、眉間にシワを寄せて警告する。

「また！？　今度は一体何なの！？」

「おいおいおいおい、お前ら何の話をしているんだよ？」

今度は別の何かの気配を掴んだミツルギと今度は何の気配なのかを尋ねるカレンにロロは全く話に付いて来れず、何の話をしているのか、詳しく詳細を聞こうと呼び掛ける。

「この気配……………間違いない！　魔物だ！」

ロロの呼び掛けなど微塵も耳に入らなかったミツルギは、大量に感じ取った気配は魔物の物だと断定し、それにカレンとアイシャは：

……………

「『魔物！？』」

驚いて、合わせたかのように声も言葉も被り。そして、ロロの方も
.....

「魔物だぁ!？」

猫のような耳をピンっと垂直に立ち上がらせ、前の二人と同じように聞き返す。

「「「!」「」」」

三人が聞き返した、直後に巨大な穴の方から微かではあるが、尋常じゃない程の無数の足音が鳴り響き、全員は視線を遠く離れた巨大な穴の奥に向ける。

127匹 VS 4人

魔物の気配を感じたとミツルギの発言が的中するように空間内で一番大きな穴の奥から数えきれない程の足音が四人の耳に拾われた。

「こ、この足音は……………」

「魔物の物だね……………恐らく」

「どんどん、こっちに近付いて来る！」

ドドドドドつと地震を連想させる、無数の地面を蹴る音にロロは『この音の正体は？』と誰かに尋ねるように呟き、それをゴ丁寧にアイシャが魔物の足音だと答え、時間が過ぎいくにつれ、次第に足音が大きくなって、足音の発生元の魔物達自分達の方に迫っているとカレンは皆に知らせる。

「っ！ あ、あれは！？」

全員が魔物の足音が聞こえる巨大な穴の奥を睨めっこするように見詰める中、ロロが穴の奥に何かを捉えた。

「ま、魔物だ！！」

「「「！？」」」」

ロロが捉えたのは自分達が居る空間の方へ走って来る魔物達の姿のようで、ロロの発言に反応して、視線をロロに移し変えたカレン達にはどんなに眼を凝らしても魔物達の姿を全く捉える事が出来ずにおり、ロロ一人だけが肉眼で遙か先に居る、暗黒に染まった闇の向こう側の魔物達の存在をいち早く、捉えていた。

「ロロ、見えるの？」

「あ、ああ、何とかな……………」

「数は分かる？」

「ちよつと待てよ……………えつと、ひい・ふう・みい……………
……っ！ おい、マジかよ！？ 100はくだらねえぞ、あの数は
……！！」

三人を除いて、一人だけ魔物達の姿を何とか捉えているロロにアイ

シヤは魔物達の数を調べるように問い掛けると、なんと魔物達の数
は100以上のようなのだ。

「ふむ。正確に言えば、127匹だな！」

訂正するようにミツルギは、感じる気配の数を数えて、魔物達の総
体数を断定する。

「127匹か……………！」

「どちらにせよ、数が多いって事だけは確かだね！」

正確な数を聞いた、カレンとアイシヤは遠く離れた人間よりも何十
倍もでかいトンネルの中の先を見詰め直し、こちらとの距離を縮め
つつある魔物達に対して、気を引き締めた。

「見えて来たぞ」

トンネルの方に視線を一直線に向けたまま、視線を崩さずにミツル
ギは呟いた。

そう、遂にミツルギ達がやっと肉眼で捉える距離まで、トンネルの
奥から魔物達がその姿を現わしたのだった。

「数字通り、凄く多いね」

「だろ？ でも……………ちょっと気になる事が有るんだ。最
初に見た時から思ったんだが……………気の所為か、何かあいつ等
……………妙に物々しいって言うか、何かいきり立っているって
いうか……………そんな、感じに見えないか？」

とうとう暗闇の世界から現れた情報通りの魔物達の量に、やっとこ
の眼で姿形を捉える事が出来たカレンはその数の多さを、身を持っ
て知り、戦ったら一筋縄では行かないという意味で『凄く多い』と
呟く。

すると、カレンの言葉に同意したと同時に口口は見た時から気にな
っていたという、魔物達の様子が何処かおかしいという事をカレン
達に伝える。

「……………ホントだ！ どうしたんだろ？」

確かに口口の言う通り、トンネル内を駆け抜けている魔物達は姿形、
種類や種族もバラバラだが、どの魔物も何故か、落ち着きを失くし、

怒気の相を浮かべていた。

「きっと、地震の影響で興奮しているんだよ」

「だろうな。今のあいっ等は興奮し過ぎて、冷静さを失っている」
魔物達の不自然な様子の原因は、地震の影響の所為だとアイシャは推測し、その推測を確定するようにミツルギが、魔物達の気配を通じて魔物達の心情を察する。

「に、逃げないか？」

「無理だな。人間の足では、魔物の足には勝てない。すぐ追い付かれる」

「気を付けて！ ああなった魔物は見境なしに襲ってくる！」

「ちっ！ 結局、戦うしかねえっていうのかよ！？」

逃げる事を提案するロロだったが、ミツルギに無理だとあっさり一蹴され。

興奮状態の魔物は見境なしに人を襲うとアイシャは、全員に用心するよう声を掛けて気を配り、腰に掛けている銃のホルダーから銃を取り出して戦闘態勢に構え。

どの道、戦うしか選択肢は無いという現状にロロは舌打ちをして、
鞆から弓矢を荒っぽく取り出す。

「カレン！ ロロ！ 先制攻撃で数を減らす！ 私に続いて！！」

「おう！！」

「うん！ ストライク！！」

戦いになる事は眼に見えているので、戦いが有利になる様にアイシャは先手必勝の事、先制攻撃で魔物達の数を少しでも減らそうとカレンとロロに自分に続いてと呼び掛け。

興奮しきった魔物達は興奮混じりに殺気も滲み出し、その無数に放たれた殺気を肌に感じたカレンは避けられない戦いだと悟り、ロロと一緒に先制攻撃を了承する。

自分も戦闘態勢になろうとカレンは腰に掛けていたツールの『ガジェット』を取り出し、同時に『核』である『ストライク』を呼び出す。

そして、何も無い所から出現して、自分の方に飛んで来る『ストライク』を難なく掴み取り、『ガジェット』の剣格部分に差し込む。
『RE GI・IN^{イン}』

『形を形成して、姿を映し出す』の意を持つ（世間では一般的にそう解釈されているだけ）『RESIST・INSTAL^{インストール}』の略を発したと共に、剣格部分の上から刀身が形成され、力を抑えた？最初の状態？『SAFETY・MODE^{セフティモード}』の魔装器^{まそうぎ}が現れる。

「死の後に、肌を冷やす氷よ！　今、我に仇名す、かの者を凍て尽くせ！！」

体内に在る『力のマナ』を瞬時に練り合わせ、次に『力のマナ』のコントロールを補助してくれる魔法の呪文を唱えて『マナ』をうまく制御し、手本通りの魔法の発動条件を順に従って行っているアイシャに応じるように、周りから銀色の光が無数に溢れ出す。

一方では、魔物の大群を向かい撃つ為、ロロの方も弓に引いた一本の矢を魔物達の一角に狙いを定め、その矢の一本に『力のマナ』を流し込んで、？魔術？を出す使う為のコントロールを施し、『力のマナ』を流し込まれた矢は刃の部分に赤いオーラが宿った。

もう一方では、大剣の形をした『セフティ・モード』の魔装器を魔物の大群に狙いを付けて、刃先部分で標準を定めたカレンはアイシャの攻撃の合図を待ち……………そして、その合図は間も無く、挙げられた。

「氷の砲撃！！」
^{アイスバルカン}

「彗星！！」
^{すいせい}

「BEAM・CANNON！！」
^{ビームカノン}

最後の発動条件である魔法の名前を唱え、左手を前に翳して後に、斜め下に振り下ろしたアイシャの前に銀色の魔法陣が出現し、そこから複数の氷の刃が発射され、続いてロロもカレンもそれぞれの攻撃を放つ。

弓から放したロロの赤いオーラを宿した矢は、通常の3倍の速度で空中に赤い線を描きながら突き進み、一方カレンの方は『ガジェッ

ター』の取っ手部分に在るトリガーを五回連続で押し、大剣の刃の部分が中心から左右に別れ、刃と刃の間に出来た隙間から5本の光の矢が連続で放射され、三人の攻撃は一斉に魔物の大軍へ飛んで行った。

「「「「「!!!!」」」」」」

先頭を走っていた魔物達の一角にアイシャ達の攻撃が直撃し、氷の魔法を喰らった魔物は氷漬けになり、光の矢を喰らった魔物は身体を射抜かれ、そして、赤いオーラの宿した矢は一体の魔物に突き刺さり、矢を通じて体内に入った赤いオーラは膨張するように眩い光を放ち、その所為で魔物の身体が赤く光った直後に、たちまち魔物の身体から赤い閃光の爆発が起こり、周辺に居た魔物達は赤い爆発に巻き込まれる。

「「「!」」」」

広い空間内に爆音が響く渡り、攻撃はまず成功したと思ったロロ達であったが、爆発で巻き起こった粉塵の中から、運良くロロ達の攻撃から免れ、無事生き残った一体の魔物が猛スピードで駆けあがり、後ろに居る仲間の魔物達を引き離し、自分一体だけでトンネルを抜け、ロロ達の所までぐんぐんと迫って行った。

「来るよ!」

敵は一体だけだが、油断しないようにアイシャは全員に注意を掛けて気を配り、カレン、ロロ、アイシャは身構えるが、そんな三人を余所にミツルギだけが、無防備に前に出る。

「ミツルギ、危ないよ!」

「まさか、我が友カレンが魔装器使いだったとはな!」

一人だけ前に出たら危ないとミツルギに促すカレンだったが、当の本人は全く聞いていないのか、魔物が近付いているのも関わらず、顔だけを振り向かせた状態で話を持ち掛けた。

「お前、丸腰じゃねえか! 危ないからさっさと下がれ!!」

「しかし、奇遇だ! ? カレンも? 魔装器使いだというのは!」

すぐ傍まで魔物が迫って来る中、外見上、武器のような物は一切見

当たらないのに、無謀にも前に出たミツルギにロロは、当然危険だ
と思い、すぐに下がれと警告するが、またしても当の本人は人の話
など全く聞いていないのか、まだ話を続けていた。

「だ・か・ら！ 下がれって、言って……………っ！」

緊迫したこの現状で、人の話を聞いていないミツルギに腹を立てた
ロロは、怒り混じりにもう一回、下がれと警告しようとしたその時、
ロロの眼に猛スピードで走っていた4本足の獣系の魔物が飛び上が
り、ミツルギの後頭部目掛けて、噛み付こうと大きく口を開けて、
鋭い牙を覗かせているのが映った。

「ミツルギ、危なーーーーーい!!!!」

獣系の魔物は一直線にミツルギの頭を狙って、空中から急接近し、
その危機をカレンは呼び叫んで知らせるが、何故かミツルギは背後
から魔物の鋭い牙が迫っているのに、一向に引こうともせず、それ
どころか、余裕綽々と言ったような小さな笑みを浮かべた。

「!?!?」

刹那、獣系の魔物の牙がミツルギの頭部まで、到着まであと数cm
の所で、魔物の横から小さい謎の物体が魔物にタックルを喰らわせ、
タックルによって吹き飛ばされ、噛み付きを阻止された魔物は受身
を取れずに地面へ叩き付けられ、あっけなく気を失ってしまった。

「あれは？」

魔物を吹き飛ばした小さい謎の物体をアイシャは眼を凝らして、確
認しようとした。

「ふっ、心配するなカレン！ ?俺にも?これが在る! ……………」

「ソード!!!」

『心配しなくていい』とやっと顔を前に向き直して言った、ミツル
ギは直ぐに上着の内側から何かを取り出し、続いて、何かの名前を
呼び叫んだ。

「!」

ミツルギに呼ばれて、反応したのは今さっき魔物にタックルをお見
舞いした、小さい謎の物体で、『ソード』と呼ばれた謎の物体はミ

ツルギの手元まで、大きく飛び跳ねた。

「ミツルギ……………それって、まさか？」

難なくミツルギの右手に掴み取られた謎の物体を良く見てみると、両手と尻尾から銀色の剣が生えた灰色のサソリのような物体で、更にミツルギの左手が服の内側から出した物は、カレンの剣の取っ手のような形をした白く染まった『ガジェット』とは少し違う、青色に染まった剣の取っ手のような物であり、カレンはその二つを見て、ある言葉が頭の中に浮んだ。

「REGI・IN^{イン}！」

カレンが頭の中で浮んだ言葉を言う前にミツルギは魔装器の起動開始の略を呟き、颯爽と右手に持っているサソリに似た物体を左手も持っている取っ手の剣格部分と思われる所に差し込んだ。

『REGI・IN^{イン}』

続いて今度はミツルギの声では無く、青色の取っ手達の方から聞こえ、そして、その声と共に青色の取っ手の剣格部分の上から昇るようにみるみると形が形成されていき、やがて灰色の細長い剣のような形となった。

「魔装器！」

「あいつも魔装器使いだったか！？」

あの細長い剣のような物は魔装器だとアイシャは一目で見抜き、初対面でミツルギの名前すら知らない口口は彼も魔装器使いだという事に眼を丸くして驚く。

「ミツルギ、君も……………」

「カレン、話は後だ。今は目の前に敵に集中するぞ！」

遮るようにカレンの話を言い止めたミツルギは、カレンの魔装器同様、剣としての鋭い刃が無い細長い剣の形をした魔装器を華麗に振るい、これから起こる魔物の大軍への戦いに集中すべきだとカレンの気持ちを切り替えるように促した。

「……………そうだね！」

話なら後で幾らでも出来るとミツルギに発言のお陰で、思い直した

カレンは今、余計な事を考えないで、もうすぐトンネルを抜けて、こちらの空間内にやってくる魔物の大群に集中しようと大剣を構え直し、向かい撃つ準備を整えた。

「入って来たぞ！」

そして、ロロの声の通り、とうとう魔物の大群がトンネルを抜け、大きな波となって空間内に入り込み、4人の方へ怒涛の勢いで様々な魔物達が押し寄せて行った。

「しゅくちほう縮地法」

誰にも聞き取れない声で呟いたミツルギは、次の瞬間、その場から姿を消し、前進する魔物達の目の前に瞬間移動したかのように現れた。

「「「「「！」「」」「」」」」」

突然、目の前に人間が現れて、魔物達は眼を疑った。

「「「「「！！！！！」「」」「」」」」」

瞬間移動のような方法で魔物達の懷に飛び込んだミツルギは、細長い剣の魔装器を水平に振るい、数体の魔物をいとも簡単に薙ぎ払った。

「！ あ、あいつ、何時の間にあんなところに！？」

さっきまで、そこに居たミツルギが一瞬に消えたと思えば、空間内に入ってきたとはいえ、まだ約百メートル以上も距離が有った魔物の群れの中へ、一瞬にして移動した事にロロを含めて、カレンとアイシャも驚いた。

「つて、あいつ！ あんな所に行ったから、魔物達に囲まれてるぞ！！」

「おまけに今、攻撃なんてしたら彼を巻き込んでしまう」

思いもしない敵の出現と相手の度肝を抜かす程の不意打ちを喰らわせたお陰で、猛突進していた魔物達は足を止めたが、結果的に魔物の群れの中に一人だけ、入り込んでしまったミツルギは、誰から見ても魔物達に囲まれてしまい。

しかも、魔物の群れの中に居て貰ったら、こちらの攻撃の巻き添え

になってしまいかもしれないから、アイシャ達は迂闊に攻撃できなくなってしまうた。

「「「ガウガウ!!」」」

魔物の群れの中で孤立してしまったミツルギに八体の獣系の魔物が四方八方から飛び掛り、食い千切ろうとそれぞれの牙を向けた。

「……………」

逃げ場無しの危機的状況にミツルギは慌てる様子もなく、それどころか、上半身は動かして、下半身は微動だにせず、自身の頭上に円を描くように細長い剣を振るった。

「「「!!!!」」」

牙が標的に届く前にミツルギが振るった一本の剣が四方八方から襲い掛かってきた8体の獣系の魔物をたった一太刀で打ち払った。

「三日月!!」
みかつぎ

攻撃の手を休まず、ミツルギは前方に居る魔物に向かって、刀を振ってまたもや線を描き、その宙で作った線を三日月のような形に描いた。

「「「「!!!!!!」」」」

次の瞬間、ミツルギが宙に作った三日月形の線が三日月形の斬撃と成って、前方にいた魔物達を地面ごと吹き飛ばし、斬撃によって吹き飛んだ岩の地面はしっかりと三日月状の形に抉られていた。

「パロパロ!!」

「ドルドル!!」

「ガウガウ!!」

「ペペイ! ペペイ!!」

敵は一人だと油断して、舐めて掛って返り討ちされた仲間を見て、種族は違えど、同胞が何十体もやられて、頭に來たそれぞれの魔物達は独特の鳴き声を叫んだ瞬間に吹き飛んだ前方の方は除いて、ミツルギの後方と左右から数を掛けて、一斉に襲い掛かった。

「縮地!!」
しゅくち

こうなることを予想していたのか、ついさっきの三日月形の斬撃は、

相手への攻撃だけではなく、自身の逃げ道の確保の為に放ったように、そこに居た魔物達が吹き飛んで事で前方が空いた所をミツルギはまた瞬間移動みたいな方法で移動して、左右後方から同時に押し寄せてきた魔物達から距離を取って、造作も無くかわした。

「気巧波きこうは!!」

相手の側の攻撃を凌いだミツルギは、即座に指を曲げて手の平を伸ばした右手を正拳突きのように襲い掛かって来た魔物達の方へ突きだした。

「「「!!!!!!」」」

突き出された右手から薄い水色の気の大きな塊が飛び出し、ミツルギへの攻撃を空振った所為で、避ける余裕がない魔物達を飲み込むように吹き飛ばした。

「さあ、来るならもっと来い!　まとめて相手になってやろう!」
敵を吹き飛ばした後、すかさず雄々しく剣を突き立てて、まだ残っている魔物達を挑発し、ミツルギは全魔物の注意を自分に向けさせようとした。

「グルルルルル……………」

人間の挑発を理解したのか、魔物の半数は挑発を真に受けて、怒りと殺気を強め、殺意を籠めた眼差しをミツルギに隠す事無く、向けていたが……………」

「ガウガウ!」

「パロパロ!」

「ぬっ!」

殺意の眼差しをミツルギに向けている魔物達とは別に、物量はこちらの方が圧倒的に上の筈なのだが、そんな事など全く関係無いようにたった一人で多くの同胞を倒してしまったミツルギにこのまま戦ったとしても、どうせやられるだけだと悟った別の魔物達は狙いを変えて、反対方向に居るカレン達の方へ、疾走した。

「カレン!　そっちに行った魔物を頼む!」

「あっ……………うん!」

ほんの少しだけだがミツルギの戦いぶりを見て、心の中で彼一人だけでも任せても大丈夫なんじゃないかと、そのような事を思いつつ呆けていたカレン達はこちらに向かって来る魔物達の相手をミツルギに頼まれて、我に戻ったカレン達はすぐさま、武器を構え直して、戦闘態勢に戻った。

「数は40ってどこか？ 空を飛ぶ奴と獣みたい奴！」

まだ距離に余裕があるので、ロロはこちらに来る魔物の数と種類を観察しながら、後ろに手を伸ばして鞆から矢を取り出し、弓に矢をセットする。

「足の速い標的には、これだ！」

弓に矢をセットしたロロは、矢の刃の部分に『マナ』を流し込み、今度は赤いオーラでは無く、白いオーラが刃に宿り、鋭く尖った矢先を小さな群れを成してこっちにかなりの速度で突進してくる魔物達に向けると思いきや、何故かロロは矢先を上空に向けた。

「流星^{りゅうせい}！！！」

白いオーラを纏った矢を上空へ放すと、空高く舞い上がった矢は自らの分身を何十本も作り上げ、数十本になった白いオーラを纏った矢達は方向転換を行ない、ロロ達の方へ突っ走っている魔物達を上空から降り注いだ。

「「「「！！！！！！」」」」

空から舞い堕ちる流星群のように白いオーラを纏った矢達は、走行中の空を飛ぶ翼の生えた黒い三角形の魔物と4本足の獣系の魔物をそれぞれ数体ずつ、真上から射抜いた。

しかし、全部を倒して訳ではないので同胞や仲間がやられても決して挫けず、それどころか残りの30以上の魔物達は弔い合戦のつもりなのだろうか、身体から発する殺気を更に強め、走るのを止めようとはしなかった。

「（っ！ まずい！）」

魔物達から放たれる眼に見えない殺気を肌で敏感に感じ取ったカレンは直感的に危険だと悟り、対抗しようとロロとアイシャの二人か

ら離れるように大きく前に出る。

「ちよい待て！ 前に出過ぎだぞ、カレン！」

「これで良いんだ！ あの数で囲まれて僕ら三人だけで戦うのは危険だ！ だから、僕が全力で彼らを引き付けるから、その間に援護と強力な一撃を！」

武器を持った普通の人間より厄介で、尚且つ数では圧倒的に相手が勝っている魔物達に対して、もしも囲まれてしまつて、接近戦向きではないロロとアイシャを、自分と共に正面切つて戦わせるのは、危険だと考えたカレンは二人に自分一人が囧になっている間に援護と相手の一氣に仕留められる程の強力な一撃をお見舞いする事を要請した。

「……………了解、任して」

「なっ！？ アイシャ！？」

迷う素振りも無く、アイシャはカレンの要請をキツパリと承認し、ロロは自分よりも先に答えた、その返事に驚愕する。

「一人で、囧なんて危険過ぎるだろ！ 此処は皆で戦つた方が……

……………」

「ロロの言いたい事は分かるよ。 けど、あの数で囲まれて、私達三人だけで各個撃破はとても難しいし、何よりリスクが高い！ だから、此処はカレンの言つた通りの戦法の方が背負うリスクは低くなるし、効率的にも良いんだ」

囧という危険な役目を背負わず、皆で力を合わせて戦おうと反論しようとしたロロに対して、アイシャは手で待つたを掛けて反論を制止し、魔物相手に三人のみで戦えば自分達の背負うリスクは高いが、一人が囧になってくれれば、逆に背負うリスクが低いと述べる。

「アイツの言つた戦法で、うまくいくのか？」

「100%は保障出来ない……………けど、このまま普通に戦えば最悪、全滅つて事に成り得るかもしれない。でも、誰か一人が囧という危険な役目を背負ってくれば、その起こり得る最悪の事態を回避出来るかもしれない。そう考えたからこそ、カレンは例え自分が

犠牲

なろうとも、覚悟の上で自らその役目を引き受けたと思うんだ」

自分達が背負うリスクはともかく、カレンの言った通りの戦法で果たしてうまく事が運べるのかと注意深く尋ねるロロに最悪の事態を想定して、カレンはそれを回避する為に自ら危険な役目を背負ったと本人の気持ちを推測して、アイシャは述べた。

「……………本当にそうなら、アイツの行為を無碍には出来ねえな」

あくまでアイシャの推測上の話だが、言われてみればカレンの性格上、有り得そうだと察したロロはカレンのお人好しの越えの自己犠牲的な行為に呆れを超越して、男気に近い物を感じ、その気持ちも覚悟を無駄させない為にも自身も覚悟を決め、囂反対の気持ちを虚無の彼方へ投げ捨て、表情と眼が真剣な物になった。

「カレン、危なくなったら逃げろよ！俺も全力でお前を援護してやる、感謝しろよな！！」

「ありがとう、ロロ！」

優しい笑顔を浮かべて、ロロは自分が援護してやるとカレンの背中に語り掛け、それを励ましと受け取ったカレンは顔を90度振り向かせ、感謝の言葉を笑顔と一緒に送った。

「アイシャ、お前は強力な一撃の方を頼むぞ！」

「OK」

それぞれの役割を決め合ったところで、カレンは自身が考えた戦法通り一人前線に立って、強烈な殺意を持って近付く、残り30匹以上は居る魔物達を待ち構え。

ロロとアイシャはカレンを援護しやすいよう斜め左右後方に立ち、三人は陣形を築いた。

「差別も隔たりも存在せず、在るのは冥界へ誘う黒き門……………」

目を閉じて、呪文を唱え始めたアイシャの周りに無数の黒い光が溢れ出し、戦法上強力な一撃を任されたアイシャは周囲の黒い光から

察するに？闇？属性の魔法を使う気であった。そして、囿役を背負ったカレンは敵と接触する前に少しでも敵の数を減らそうと空間内に押し寄せて来た魔物の群れの中で、一番小さくてしかも空を飛んでいる三角形の黒い魔物達に剣先を合わせ、大剣の取っ手部分に在るトリガーを数回押した。

「CANNON^{カノン}!!」

トリガーが押された回数だけ、大剣の刃と刃の間から数本の光の矢が放射され、鉛の弾丸よりも早く真っ直ぐに直進する光の矢はそのまま、標的の空を飛ぶ三角形の魔物に当たる。と思われたが………

………

「!？」

光の速さで駆け抜けた光の矢は空を飛ぶ魔物達に一矢も当たるところか、かすりもせず、ただ魔物達の間と間を綺麗に通り返けただけで、虚しくも攻撃は失敗に終わり、カレンはその光景を目の当たりにして愕然とした。

「か、CANNON^{カノン}!!」

ビーム攻撃が全部外れた事で少々動揺してしまっただが、めげずにカレンはもう一回、大剣から幾つもの光の矢を放射させ、また光の速度で光の矢もといビームは空を飛ぶ魔物達の懐まで飛んで行った。
が………

ロック・ブートン

今度こそはと撃ったビームは目標に命中すると……………思いきや。

「っ!??」

運が悪いのか或いは撃った本人の腕が悪いのか、それとも両方重なったのか、鋼鉄をも溶かす幾多のビームは二度も翼が生えた三角形の魔物達の間と間を僅かな壁の隙を通り抜けるように外れてしまい、同じ光景を二回も見たカレンはさすがに強く動揺してしまった。

「パロツパロツ!」

自分達に向かってビームを二度も放ったカレンを見ながら、『避けるまでも無い』と言いたげそうなニヤリ顔でカレンを馬鹿にして笑う様に鳴いた、翼を生やした三角形の魔物達は、あと数メートル進めば、カレンのところに辿り着くまでの距離に近付いていた。

更には速度を早め、同列に居た獣系の魔物達を追い越して先頭に乗り出し、次にはカレン達と同じように空を飛ぶ魔物達は陣形を広く展開し、小さな身体を重ね合って空を飛ぶ壁のような陣形を作り出した。

「(び、^{ビーム}BEAM・^{カノン}CANNONじゃ、あの小さい魔物には当たらない!)」

何故こちらの攻撃が当たらなかった訳は、現在狙った標的が今まで攻撃して来た標的よりも小さ過ぎる為、『^{ビーム}BEAM・^{カノン}CANNON』では極限に当て難いとカレンは今になって気付いた。

「パロパロツ!!」

ほんの少し前までは遙か遠くに居た魔物の大群の一部が、今は突進を行なう宙に浮かぶ壁のようにカレンを間近に追い詰め、獣系の魔物達より一足先にもう眼と鼻の先の距離まで来た空を飛ぶ三角形の魔物達は、小さな口を開いて見た目に因らずかなり大きさを誇った鋭い牙を露わにして、その牙で一斉にカレンを喰い付こうとした。

「くっ!!!」

自分の身体よりもデカイ大剣を側面にして盾にするような感じで前に翳し、空を飛ぶ三角形の魔物全匹の牙を漏れなく受け止めたが、相手の攻撃の衝撃で足を後方に引きずられた。

「てえい!!!」

「パロロっ!？」

負けじとカレンは、次はこちらが押し返すぞと腕に力一杯入れて、大剣に喰い付いた魔物全匹を追い払う様に薙ぎ払った。

「ガウガウッ!」

「っ!？」

薙ぎ払った直後、タイミングを計ったかのように今度は獣系の魔物達の5匹程が飛び掛り、牙は使わず、手に生えた鋭い爪を使って、カレンを引き裂こうとした。

「くう!　ぬう!　があっ!!」

連携染みた魔物達の時間差攻撃に何とか反応しきれたカレンは大剣を素早く引き戻して、再び盾にして攻撃を防ごうとしたが獣系5匹の突進で勢い付いた、重くて鋭い爪の引き裂き攻撃が予想以上に強く、一発ずつ喰らう毎に全身が後方へ押し出され、そして、最後の一撃に耐えきれず、カレンは大剣ごと吹き飛ばされる。

「ついいいっ!」

後方にはアイシャ達が居るので、魔物を引き付ける囹役がこれ以上後ろへ下がったら彼女達に危害や妨害を与えさせてしまうかもしれないと吹き飛ばされた瞬間、脳裏にその事が過ぎって、カレンは大剣を地面に突き刺して身体にブレーキを掛けて、意地で後進を無理矢理止めさせ、瞬時に地面に跪いても着地し、急いで態勢を立て直そうとしたが。

「ガウ!　ガウガウ!!」

「なっ!　まだ、来る!？」

顔を上げれば、次に待っていたのは第二波目の攻撃を仕掛けて来た、五匹の魔物達よりも少し遅れて来た獣系の三匹の襲撃であり、カレ

ンは迫り来る第三波に対処しようとしたが、無理な着地が原因で身体が意識とは裏腹に直ぐには付いて来れず、飛び上がって空中から猛襲する魔物達をカレンは地面に跪いたまま、ただ見上げる事しか出来なかった。

「「「!!!!!!?」」」

「!」

獣系三匹の牙と爪がカレンに届く寸前、逆方向から10本の矢が急遽乱入し、獣系三匹は空中に居たのが仇と成って避けらず、真正面から飛んで来た10本の矢に各急所を射抜かれ絶命し、カレンに傷一つ付けられぬまま、カレンの頭上を通り過ぎ、地面に滑り込んだ。
「カレン、逃げ回れ! 少しでも相手との距離を取って、時間を稼ぐんだ!」

「わ、分かった!」

獣系三匹をまとめて倒した、10本の矢を発射させたのは四人の中で唯一の弓の使い手のロロであり、宣言通りちゃんと援護したロロは突っ立って居ては危険なので、戦って魔物を引き付けて時間を稼ぐ事より逃げて時間を稼いだ方が良いとカレンに指示を出す。

戦闘中なので振り向けないが、耳の後ろから聞こえたロロの発言から推測するにアイシャの強力な一撃はあともう少しだとカレンは悟り、跪いた身体を立ち上がらせ、大剣を持ち直し、続いて大剣の矛先を今度は全匹一丸となってハイスピードで、突っ込んで来る空を飛ぶ魔物達と獣系の魔物達に向けて、取っ手の凸型トリガーを連打する。

「「!!!!!!」」

しかし、当てる気がないのか、カレンは魔物達の頭上や真下、左右にビームを乱射する、それに対して自分達にはカスリも当たらなかったが無茶苦茶な方向に走り抜けるビーム攻撃に驚いた魔物達はつい足を止めてしまい、進行を停止してしまう。

「こっちだ! こっちに来い!!!」

ビームを乱射させながら魔物達を自分の所だけに誘い込むように言

葉で手招きしてロロ達から今よりもっと離れるカレン。

この行動と当てる気がなかったと思われるビーム攻撃から察するにカレンの狙いは魔物達の進路変更だったようで、ビーム攻撃は牽制として、魔物達の足を一時的に止めさせる布石で、そして、相手の注目を一層に強めて、相手の標的を自分一人だけ絞らせ、自分の方に誘き出させようとするのが狙いらしい。

「パロパロ!!」

「ガウガウ!!」

「(よし、来た!)」

狙い通り魔物達は目標をカレンだけに絞り、ロロ達の事など眼中には入れず、二人から遠く離れた所へ逃げながらビームを発射し続けるカレンの背中を追った。

「(さて、この後どうするか? あの数ではいくらロロの援護だけでは足りない……とは言っても僕一人ではあの程の数を一遍に相手仕切れない……どうする?)」

二人から十分に離れた場所に來たカレンは足を止め、逃げるのを中止し、振り向いてもう一度、接近しつつある合計約30近くの魔物達に眼と大剣の矛先を向けて、これからどう対抗するか、状況を見極め、冷静に作戦を練り出そうとした。

「(トリガーを二回連続押した後、押しっ放しにしろ!)」

「(っ! こ、この声は、レクサス!?)」

考えながら意識を目の前に事に最大限に集中した一片の油断も許さない緊迫した状況の中、それを崩すようにまた頭の中で不意を突く謎の声もといレクサスの声が響き、その所為でカレンは頭の中で考えていた色々な作戦が全て吹き飛んだ。

「えっと……トリガーが二回押した後、押しっ放しにする?」

考え込んだ作戦や戦闘への集中力、雰囲気全てを台無しにされてもカレンは現在と今まで似たような状況でいつも助言を話してくれるレクサスの言う事を無条件に信じて、大剣の取っ手に在る、凸状のトリガーを二回押して、そのまま押し続けた。

「！」
カレンはレクサスの言われた通りに実行してみると、大剣の刃が中央から左右に大幅に別れ、空いた広い隙間から小さい光の弾が無数に広範囲に飛び散った。

「「「「「!!!!!!」」」」」

無数に飛び散った光の弾は獣系の魔物達よりも移動速度が速い為、先頭に居た空を飛ぶ三角形の魔物達に直撃し、さっきまでは全然『BEAM・CANNON』の一発も当たらなかったのに、レクサスの言われた通りの方法から飛び出した光の弾には嘘のように空を飛ぶ魔物達を次々と射抜いた。

「当たってる！…………でも、これは？」

雨の如き降り注ぐ光の弾は小さ過ぎてカスリもしなかった空を飛ぶ三角形の魔物達を既に大半を墮としてしまい。

弾が当たらない隙間なんて微塵もないと思わせる攻撃にカレンは、攻撃が当たった喜びとは別にこれは何なのかと疑問を抱くと、それに答えるように『ガジェット』の剣格部分に在る水晶なような物、正しくは『ランプ』から文字が浮かび上がった。

「『BEAM・BALKAN』？ 『BEAM・CANNON』とは違う、別の攻撃……………」

浮かび上がった文字にはそう書かれており、カレンはトリガーの押し方によって、ビーム攻撃が変化するとレクサスの助言のお陰で知る事が出来た。

「（これなら、イける！）」

「パ、パロツ！ パ、パツ！！」

『BEAM・BALKAN』の攻撃範囲なら対抗出来ると確信したカレンは、トリガーを押し放しにして、光の弾を放出し続け、相手の牙が届かない間合いから空を飛ぶ三角形の魔物達を一気に殲滅させた。

「ガ、ガウガウ！！」

「！」

先頭に居た小さいが空を飛べて、何より素早くて頼りにもなる種族の違う仲間が全匹瞬殺されて、それを目の当たりにした獣系の魔物達は大損害の戦力低下に意表を突かれて急停止し、このまま突っ込んでカレンの相手をしたら自分達も殲滅されると思ったのか、狙う目標を急変更し、アイシャ達の方へ走って行った。

「行かせるかっ！」

アイシャ達の所へは行かせまいとカレンはトリガーから指を離して、大剣を元の形に戻し、そして、両手で大剣を自身の頭上に振り上げ、次は『力のマナ』を練り込み、その次は練り込んだ『マナ』を大剣に流し込んだ。

「ごうはじん剛破神！！！」

力一杯大剣を振り下ろしたカレンは刃の部分を地面に叩き付け、流し込まれた『力のマナ』はうまくコントロール《制御》された結果、風の塊と成り、地面に着いた衝撃で大剣から解き放たれ、地中に入り込んで地面に一本の線を作りながら地面の中を駆け走り、突進している獣系の魔物達の先頭ら辺に向かって、斜め後ろから接近した。

「！！！！」

地中を駆け抜けた風の塊は、先頭を走っていた魔物達の真下まで辿り着いた途端、急に膨れ上がる様に爆散し、先頭と先頭の後ろに居た、合わせて計4匹の獣系は爆散で生まれた衝撃波とついでに爆散よって粉々になった岩の破片も一緒になって4匹を吹き飛ばした。

「ガ、ガウ！ ガウガウッ！！」

今度は同族がやられて、獣系の残りはやられた同族達を心配して横目で様子を窺い、確認して動揺しながらも停止は決してせず、むしろ自分達の意地を見せつけるかのように今よりも、もっと速度を底上げして、まるでやられた仲間達の犠牲を無駄にしない為にも決死の表情で、アイシャ達に襲い掛ろうとした。

「……………先が見えぬ、闇の果てに待ち受ける、望む者、拒む者どちらも共々、千の叫びと共に？ 冥？ へ引きずり込む、魔の手！」
詠唱が続いていたアイシャは、やっと詠唱が終わったのか、閉じて

いた目をゆつくりと開いて、現在の状況を把握する。

「ロロ、私の隣に！」

「お、おう！」

進路変更して自分達の方へ気迫溢れた形相で接近して来る残りの獣系達を向かい撃とうとしたロロであったがアイシャに呼び出され、即座に強力な一撃の準備が整ったと察知し、すぐさまアイシャの隣に並んだ。

「死^{ディ}へ誘^{モン}う手^{ハンド}！！」

仕上げの魔法の名前を発すると、アイシャを中心にロロ達の足元から大きな黒い魔法陣が出現し、そして、黒い魔法陣から何十本の真っ黒な腕が伸び出し、その何十本の腕は現れては直ぐ手を握り拳して、当初の半数以下になってしまったまだ健在中の獣系達の元へ次々と飛んで行き、拳の雨を降らせた。

「「「「！！！！！！！！！！」」」」

無我夢中に近い心境で突っ走っていた残りの獣系達は、アイシャの黒い魔法陣から伸びて来た真っ黒な腕達にあと一歩手前で追い返されるように一匹残らず殴り飛ばされ、そのまま受身を取れず地面に叩きつけられた獣系達は志半ばにノックダウンされる。

「よっしゃ！！！」

「ふう……………カレン、無事？」

「うん！ 僕なら大丈夫だよ！」

大群から分離しても40近くも居た魔物群れを撃退して、手をパーからグーにして喜びの掛け声を叫ぶロロとは別に詠唱中はずっと目を閉じていたので、囃役のカレンがどうなったのか心配して、安否を確かようと周囲を見渡すアイシャに二人の元へ駆け寄って、自身が無事であることを元気な姿を見せて証明するカレン。

「これで、全員無事だな！」

「いや、まだミツルギの方が……………」

襲い掛かって来た魔物群れを倒して、カレンとアイシャ自分を含めて三人無事である事に安心仕切ったロロは、もう一人の人物の存在

をすっかり忘れており、カレンはミツルギの事を話そうとした瞬間、当人のミツルギが一瞬にして、カレン達の目の前に現れた。

「ふむ、さすがに無事のような、カレン」

戦っているのに汗や疲れ等、微塵も感じられない実に平静そうな姿で戻って来た理由は、発言から察するにミツルギもカレンの安否を確かめに来たようだった。

「ミツルギ！」

「うおお！？ お、お前、何時の間に！？」

笑みを浮かべるカレンは登場の仕方には一切気にする様子は無く、それよりも一人で戦っていたミツルギが無事で良かったと安心するが、それとは異なって、神出鬼没な登場の仕方に口口は取り乱すくらいビククリした。

「あれっ？ 魔物はどうしたの？」

「大方倒したぞ、ほら」

お互いの無事を確かめるとカレンはミツルギが戦っていた魔物大群はどうなったのかと気になって、見る限り怪我など何処にも見当たらない本人に尋ねるとミツルギは殆ど倒したと発言し、証拠に残った魔物達が居る所を指で指して示した。

「おおっ！ もうあれだけしかないのかよ！？」

口口は驚愕した、何故なら指が指した場所には魔物はもう一目で数えるぐらいしか居らず、127匹も居た魔物達が僅か数分で15匹しか、そこに立って居なかったのだから。

「あんだけなら、こいつは楽勝だな！」

「ドルドルッ！！！」

「？」

沢山居た魔物は最早見る影もなく、残り15匹しか居ないのなら、もう勝負は決まったなと楽観的になって、油断している口口にその残った魔物達の中でまだやる気が有って、外見は幾つ物の岩がくっ付いて出来た球状の岩の塊で下の方には細い足がはみ出ており、そして球体の中央にはポツカリと空いた小さい穴から顔を覗かした変

な魔物が、ロロ目掛けて自身の岩の一つを砲弾のように投げ飛ばした。

「ど、ど、わったった!?? な、何だ、あいつは!!!?」

油断しきった自身目掛けて飛んで来た岩の砲弾に眉を最大限に上に上げて、眼を疑って仰天しながらも飛び跳ねて器用に避けたロロは、想定外の方法で岩を投げ飛ばして来た変な岩の塊の魔物に眼を付ける。

「ロロ、よそ見しちゃいけないよ!」

「わ、悪かったな!」

まだ戦いは終わってもいないのに油断して、オマケによそ見もしていたロロにカレンは珍しく少々吊り目になって注意し、これにも予想外だったロロはやや不貞腐れた顔で自身の落ち度を認めながらも反論する。

「気を付けて、あの魔物は『ロック・プートン』! 自分の身体に幾つも岩をくっ付けて、敵の攻撃からは身体に付いた岩で身を守って、自分が攻撃する時は身体に付いた岩で敵を攻撃すると言った、攻守共に厄介な魔物なんだ!」

皆に気を配りつつ、アイシャはさっきのロロの投げ掛けの疑問に答えるかの如く、変な岩の魔物の正体と戦闘の特徴を明かし、危険性を露わにさせた。

「ドルッ!」

「!」

説明が終わった途端、早速他のロック・プートンも自身の岩を岩の砲弾のとして投げ飛ばし、狙った的はミツルギ^{まじ}だった。

「フッ」

真正面から降って来る岩の砲弾にミツルギはまたしても嘲笑うかのように鼻で笑い、しかも、その場から移動する素振りも見せなかった。

「ミツルギッ! あぶなっ—————」

逃げる気がないと感付いたカレンはもう遅いが避けるよう、叫ぼう

としたが、それよりも早く、当のミツルギは逃げない代わりに流れるような動作で、顔面に降って来た岩の砲弾を剣の爪先でソツと突いた。

「「「!!」」」

爪先で軽く突かれた岩の砲弾はたったそれだけで弾道が大きくズレ、命中地点のミツルギには当たらず、上昇して通り抜け、約50メートル程の間合いが在った後ろ壁に衝突し、岩が重力に従って、落ちて行くまでを目撃したカレン達は何とも信じられないと言いたげな表情に変わっていた。

「け、剣の爪先だけで……………」

「岩の軌道を……………」

「変えた……………?」

間近で一部始終を捉えていた口ロ、アイシャ、カレン達三人はミツルギの神業と言っても過言じゃない物体への弾き技に揃って見惚れるぐらい啞然とした。

二つの伝説

自身の身に訪れた危機を涼しい顔で軽々と回避したミツルギに他の三人は驚愕の相を浮かべながら、まだ戦闘中なのに呆けた。

「「「ドルドルッ！！！！」」」」

「「「！」」」

三人が呆けている間、この機を見逃さず、まだ他のロック・プートン達が人間で言うなら隙ありっ！という風に一斉攻撃を始め、不覚にもカレン達は魔物達の鳴き声でそれに気付いたが、その頃にはとっくに岩の砲弾の雨が真上から降り注いでいた。

「皆、伏せて！」

「「「っ！」」」

甲高いアイシャの声が響いて、唐突でも男子全員は素早い反応でしゃがみ込み、それを見計って、未だに健在している足元の黒い魔法陣から、再び黒い何十本の腕が復活し、真上から降り注いで来た岩の砲弾を零さずに一つ残らず、黒い腕達が見事にキャッチした。

「返すよっ！！」

黒い魔法陣から伸びている黒い腕達を操って、アイシャはキャッチした岩達を送って来たロック・プートン達に送り返した。

「ど、ドルどどっ！！？」

送り返された岩の砲弾にロック・プートン達は見掛け通り、岩の塊だからトロイのか、避けるどころか反応出来ずにモロ直撃してしまい、更にはぶつかった反動で身体のバランスが崩れて横転してしまった。

「ドル……………ドル！」

敵の攻撃を利用して自分の武器にし、その敵の意表を突いたアイシャの機転の利いた反撃だったが、敵のロック・プートン達は何事も無かったかのように平然と起き上がった。

「効いてねえな……………どうやったら倒せるんだ、あいつ等

？」

様子から観察して、同じ岩に守られているロック・プートン達にはあまり効果の無い一撃だったみたいで、そんな強固な防御力を持つ彼らをどうやったら、倒れるのか口口はロック・プートンの事を説明してくれたアイシャご本人に聴いてみた。

「倒す方法は二つ。岩の中に隠れている本体を倒すか、身に纏っている岩を全部ひっぺ返すか、このどちらかだね」

「成る程、単純明快だな」

ロック・プートンの倒し方はアイシャの話に因ると倒す選択肢は二つ、球体状の岩の塊の中で小さい穴から顔を覗かせている本体を倒すか、もしくは本体に張り付いている岩を全て剥がすかであり、口口はその分かりやすい倒し方に冷笑した。

「ふ〜む、この状態（『セフティ・モード』）では、あのロック・プートン達を倒すのは時間が掛りそうだ」

自身の細長い剣の形をした魔装器とロック・プートン達を見比べるようにミツルギは右のコメカミに人差し指を当てて、如何にも悩ましい表情で悩み事を呟いていた。

「仕方ない……………此処は、素直に？あれ？でやるか」

うんと頷いて何かを決断したミツルギはコメカミから指を離すと、前触れも無く、細長い剣の形を魔装器の刀身から至る所に切れ目のような物が浮かび上がり、同時に『ソード』と呼ばれたサソリのような姿をした『核^{コア}』の両眼から強い光を放った。

「（！ これは……………ミツルギは自分の魔装器を？あれ？に変化させる気だ！）」

異変が起こったミツルギの魔装器の様子を見て、カレンは自身の魔装器が姿を変える前の予兆に似ていると思った時、ミツルギの魔装器は『DETROIT・MODE^{モード}』に変わるのだと悟った。

「（……………なら僕も！）」

自分も続いて『デトロイト・モード』に変化させようとカレンは、チラッと大剣の剣格部分に在る『ランプ』を覗いた。

「(色の輝きが戻っている! よし、イける!!)」

『ランプ』の色の輝き具合で、『デトロイト・モード』時での稼働に必要な不可欠な『メイン・マナ』の貯存している『マナ』の量が分かるので、カレンはそれを確かめると『ランプ』は以前のように青い輝きを取り戻しており、これならば『デトロイト・モード』に変化できると確信したカレンは直ぐに強く念じて、それに応えて魔装器はミツルギのと同じく大剣の刀身から切れ目が浮かび上がり、剣格部分に差し込まれた『核^{コア}』である『ストライク』の背中から淡いライトピンク色の光を放つ珠が現れた。

「PURGE・ON^{オン}!」

掛け声のようにミツルギは呟くと『核^{コア}』である『ソード』の剣を生やした尻尾を後方に倒して、そのまま『ガジェット』の中へ押し込み、一方カレンも『ストライク』の背中^{バック}の珠を奥へ押し込んだ。

『PURGE・O^オ

N^ン』

両方の魔装器から発せられた『取り外しを行なう』という意味を持つ言葉と共に、両方の幾つも切れ目が浮かび上がっていた刀身部分が外れ飛び、魔装器の力を『抑える《セーブ》』していた切れ味皆無の刀身だと思われていた? 鞘? が外れた事によって、二つの魔装器は『セフティ・モード』から『デトロイト・モード』に変わった。

『コード・ブレイヴ』

『ブレイヴ』と名乗ったミツルギの魔装器は? 鞘? が外れて当初の姿とは異なり、刀身部分は鏡のように透き通った銀色のもっと細長い刀身が現れ、刀身の中央には灰色の線が刃先から刃の根元まで伸びており、外見的は剣と言うより刀に近い物になった。

『コード・ゼオラル』

続いて『ゼオラル』と名乗ったカレンの魔装器はいつもと同じ、刀身の大きさは大して変わらないが形的にスリムとなり、刃の部分も山吹色に染まって鋭くなり、これで二つの剣は剣としての在るべき鋭さに変貌を遂げた。

「「「!」」」」

そして、ミツルギとカレンの魔装器が『デトロイト・モード』になった時、何故かカレン以外の三人が揃ってカレンの魔装器に眼を向けた。

「「「（ゼオラル？）」」」」

何かの聞き間違いかと自身の耳を疑ったような表情で、ロロ、アイシャ、ミツルギの三人は『ゼオラル』と間近で名乗ったカレンの魔装器に眼を奪われた。

「「「「ドルドルッ!!!!」」」」」

「「「!」」」」

三人がカレンの魔装器に気を取られている隙にロック・プートン達は再度、岩の砲弾を投げ付けたが、ロック・プートン達から唯一、眼を離さなかったカレンだけがいち早く反応して、片手で大剣を振り被って、刀身に『力のマナ』を流し込んだ。

「剛魔^{キョウマ}!」」

薙ぎ払う様にカレンは大剣を水平に振るい、それに合わせて刀身に流し込んでいた『力のマナ』を空中の岩の砲弾に向けて解き放ち、放出された『マナ』は魔装器が『デトロイト・モード』になったお陰で？魔術？の威力と大きさが通常の三倍にハネ上がるから、『マナ』は巨大な風の塊と成って、岩の砲弾全てを包み込み、粉々に打ち碎いた。

「「「ドルドルッ!!!!」」」」

岩の砲弾の脅威は去ったが、まだ終わった訳ではなかった。攻撃の手を休ませない残りのロック・プートン達が、タイミングを見計らって時間差攻撃を仕掛けようとしていたのだ。

「「「させん!」」」」

数体のロック・プートン達が岩の砲弾を投げ出す寸前にミツルギはそれを阻止すべく、眼にも止まらぬ動作で身を低くして刀を水平に振るった。

「「「「?!」」」」」

ロック・プートン達とミツルギ達の間合いは約100メートル程在り、本来ならミツルギが刀を振ったところで、届く距離なのではないのだが、ミツルギの細長い刀の刃はしっかりと数体のロック・プートン達に届いていた。

何故届いたかと言うと、魔装器である細長い刀の刀身が何処までも伸び続けるゴムように数体のロック・プートン達の所まで伸びて、弾丸のようなスピードで届いた細長い刃は球体状の岩の塊の中央の穴に居る本体から上の辺りをスパッと数体同時に引き裂いた。

「まだまだ!」

「「!?!?」」

もう攻撃する手段を無くすためにミツルギは追いつきの如く、伸びた刀の刃を鞭のように操り、数体のロック・プートン達に乱れ切りを喰らわせ、全身に纏っていた幾つもの岩を一つ残らず全て引き剥がした。

「け、剣が……………伸びた!?!」

念には念を入れて数体のロック・プートン達を丸裸にした後、約100メートル伸びていた刀の刀身が急速に縮み始め、これもまたゴムのようにバチンッと元通りの長さに戻り、そして、すぐ近くで戦いぶりを最初から最後まで眺めていたロロはミツルギの常識外れの攻撃に口を開けたまま啞然とした。

「冷たく鋭く、無慈悲な心のように、永久の水よ、刃と化せ!」

ミツルギの攻撃を同じく傍で見ていたが、ロロと違ってアイシャは顔に一片の驚くも戸惑いも見せず、呪文の詠唱に集中しており、アイシャの周りから水の魔法の証でもある銀色の光が無数に溢れ出しており、推測するまでもないが彼女は水の魔法を出す気だった。

「アイス ジャベリン氷の一太刀!!」

片手を前に翳して、すぐ手を斜め下に振り下ろした瞬間に仕上げの魔法の名前を唱えると、アイシャの身体の前から銀色の魔法陣が出現し、その魔法陣から鋭く尖った氷の大剣が勢い良く飛び出して、真っ直ぐに一体のロック・プートン目掛けて走って行った。

「ドルッ！」

野生の勘でアイシャが魔法で出した氷の大剣に当たったら危険だと、感じ取った一体のロック・プートンは、身体が鈍くて避けきれないが何とか避けようと身体を少しズラした。

「!??」

ずれたお陰で空中を走って来た氷の大剣が中央の本体にはギリギリ当たらず、命中箇所は本体の横の岩に当たったのだが、それでも岩の球体の横半分が氷の大剣によって切断され、横半分を失った岩の塊の球体は脆くも崩れ始め、一体のロック・プートンはアイシャの攻撃にやられずには済んだが、くっ付いていた岩全部が取れてしまう羽目になってしまった。

「はっ! しまった、ボーーーーっとしている場合じゃなかったぜ! 俺様も反撃だ!!」

少し間、呆然と皆の戦いを眺めていたロロはやっと正気に戻り、ミツルギとアイシャが反撃に乗り出したのなら自分も反撃に移ろうと、鞆から矢を取り出し、弓に矢をセットして、まだ残っているロック・プートンの一体に狙いを付け、ロロは瞬時に? 練った? 『力のマナ』を矢に流し込み、次は『力のマナ』をうまくコントロールし、矢の刃に眩い白い光を宿らせた。

「一点矢!^{いってんや}!!」

弓の糸から離されて、超高速で宙を駆ける白い光を宿した矢はロロが狙いを付けた一体のロック・プートンに白い線を描いて飛び向かった。

「ド、ドルッ!」

ロロが狙った一体のロック・プートンも野生の勘で白い光を宿した矢に直撃したら命が危ないと悟り、岩の球体の下から生えている足を折り曲げてしゃがみ込み、全長を少しでも下げて、球体の中央の穴に居る自分本体への命中を避けようとした。

「!!!」

しゃがみ込んで全長を僅かでも低くしたのが幸いして、白い光を纏

った矢は本体にはスレスレで当たらず、倒されずに済んだが、代わりに本体の上の岩に矢が命中し、命中した岩の箇所は光を纏った矢に貫通され、本体が潜んでいる岩の球体の中央の穴とそっくりな穴がもう一つ出来上がった。

「ドルル……………ッ!??」

岩の球体に風穴が空いた程度で済んで良かったと思いきや、そんなロック・プートンの気持ちを裏切るかのように、光輝く矢に貫通した箇所から岩が次々と崩れ始め、まるで崩れ落ちる砂山のように岩の塊はロック・プートンから全て剥がれ落ちてしまうのだった。

「「ド、ドルドル!?!」」

数は元から少なかったとは故、同族達が瞬く間に戦闘力と身の守りを一遍に奪われ、動揺を隠せないまだ岩の塊を身に着けている残りの三体のロック・プートン達は動揺の所為で、攻撃の手を休めてしまう。

「（貰った!）」

砲弾攻撃を一旦中断した隙を見逃さず、カレンも反撃に移ろうと、『力のマナ』を練って即座に大剣に流し込み、？魔術？を発動させるための要、『マナ』のコントロールを速やかに済ますと、カレンの大剣の刀身が真っ白な光に包まれた。

「ぜっこうざん絶光斬!!!」

光に包まれた大剣を両斜めに振るうと、真っ白い光が文字を書くように、空中に白い線の×《ばってん》が浮かび上がり、カレンは大剣を今度は水平に振るって、その×に―《水平の線》を加えた。

「「!!!!!!」」

最後の水平斬りが発射ボタンだったのか、×に―が追加された途端、合計三本の白い線は光の刃と化して、岩の塊の球体を保っている残り三体のロック・プートン達の所へ、鳥の如く羽ばたいて行った。

「「ド……………ルッ!!!」」

超高速で飛び交う三本の光の刃に三体のロック・プートン達は『あれに当たったら死ぬ』と野生の勘で察するが、頑丈だけど重い岩の

鎧を装着している自分達では到底、避けきれない事も察し、少し躊躇うも生き残る事が最優先だと判断し、球体の中央の穴から岩の塊を衣服のように脱ぎ捨てて、その直後、三つ岩の球体は三本の光の刃にそれぞれ真っ二つになるが、本体は直前に脱出したので、辛うじてロック・プートン達は生き永らえた。

「「ドルドル!!」」

「「「!」」」

これで全匹のロック・プートン達は岩をバツサリと剥がされ、最後に丸裸になった三体のロック・プートン達はやっと勝ち目のない戦いだと認め、そう思ったら颯爽と背を向けて一目散に来た道（巨大なトンネル）の奥へと撤退し、それを目撃した、他の魔物達も戦意喪失や死を恐れて、三体のロック・プートン達に釣られて続々と来た道へ帰って行った。

「敵の後退を確認……………」

「……………終わったみたいだね」

「ん、そうだな!」

「はぁ……………一時はどうなるかと思った」

逃げて行く魔物達の背中が完全に見えなくなったのを見計って、アイシャは警戒の表情を解いて、魔物達の撤退報告を周囲に伝え。自分の眼でも確かめたが報告を聞いて、カレンは表情を和らげ、肩の力を抜き、終わったと誰かに同意を求めるように呟き。

その呟きにミツルギは眼を閉じながら刀を腰に掛けて、激戦だったにも関わらず息は乱れてはおらず、逆に余裕に満ちた表情で清々しく相槌を打ち。

そして、ロロは曲げた両膝に身体を乗せるように両手を乗せ、やっと戦いが終わった事に安心と共に長い溜息を吐きだして、ブワツと疲れた顔を表に出した。

「「「ところで、カレン……………」」」

魔物の大群の対戦が終焉して、空間内が静まり返える程安全になったところで、ミツルギ、ロロ、アイシャの三人がカレンに何か話を

持ち掛けようとしたが、偶然的に三人はセリフも声も被って言い止まり、お互いの視線を交わし合う。

「戦い所為で聞きそびれたが、改めて聞くけど……………カレン、そいつは誰だ？」

この『ホワイト・マウンテン白霧山脈』の洞窟内で自分達以外の他の人間に会えるとは全然、思っていなかったロロは、会った時から気になっていたカレンと親しそうに接するミツルギについて、知り合いっぽいカレンに問い質した。

「ああ、うん、彼は……………」

「待て、カレン。君が俺の自己紹介をやる必要はない、何故なら我が二つの名の家には『自分の自己紹介は自分でやる』という共通の家訓が在るんだ。だから君の連れへの俺の自己紹介は俺自身にやらせてくれ」

「……………分かった、ミツルギがそう言うなら」

ロロに問われてカレンはミツルギの事を紹介しようとしたが本人からストップを掛けられ、家訓とは一体何なのか、意味が分からなかったが、ミツルギが自分で自己紹介をやると申し出たので、特に断る理由など当然ないカレンは素直に自己紹介をバトンタッチする。

「ゴホンッ！ 申し遅れた、カレンの連れのお二人。俺は『ルーレイ』家第112代当主及び『神楽』家第111代当主の『ミツルギ・神楽・ルーレイ』と言う者だ。以後お見知りおきよ」

「……………え？」

準備の咳払いの後、ミツルギは片手を首の下の辺りにそっと置いて、たったそれだけで優雅で礼儀正しく見える姿で挨拶と自己紹介をロロとアイシャに送ると、二人はキョトンと豆鉄砲を喰らったかのような顔で、小さく呟いた。

「神楽……………」

「……………ルーレイ？」

眼を見開いて二人はそれぞれミツルギの名前の中に在った『神楽』と『ルーレイ』という言葉を確認するように聞き返す。

「『神楽』と『ルーレイ』………まさか、君は」

「あの？伝説の英雄達の子孫？………なのか？」

「ふむ、まあ………世間的にはそう呼ばれているな！」

どうゆう訳かは知らないが様子と言動から推測するに二人はミツルギの『神楽』と『ルーレイ』の名を知っているみたいで、真相を明かしたい追求心に駆られたアイシャとロロは度胸試しをしているような顔付きで？英雄の子孫？に当たる人物かなのかと、ミツルギに恐る恐る尋ねてみると、当人はそれを世間的と言ってさらっと肯定した。

「ほ、本物なのか？」

「疑うか？ これを見てもか？」

やけにあっさりと肯定されたのでロロは簡単には信じず、疑ってみたが、証拠を見せ付けるようにミツルギは両手の薬指にそれぞれ付いた色も刻印も違う綺麗な指輪を二人の前に突き付けた。

「それは………大貴族の証『大貴族の証明輪』！^{グレートノーベルリング} ！ ！
そして、その刻印は………」

「『神楽』と『ルーレイ』の刻印！ ………って事は」

綺麗なだけではなく、指輪は大貴族の証であるようで、しかも、二つのそれぞれの指輪の刻印が『神楽』と『ルーレイ』の名を示す物らしく、これが止めになったロロとアイシャはミツルギの正体を完全に確信した。

「マジかよ………マジで、あの『神楽』と『ルーレイ』
なのかよ!？」

二つの指輪が決定的な証拠になり、ロロはゆっくりと眼が丸くなり、信じられない物を見ているような驚いた形相で確定された事実亲身体を微かに震わせ、興奮してしまう。

「ねえ、どうしたの二人共？ ミツルギの名前がどうかしたの？」
毎度毎度、約一人だけ話に付いて来ていないカレンは二人が何故、ミツルギの名前に対して訳有りの反応を見せるのかを尋ねた。

「どうしたのってお前、あの『神楽』と『ルーレイ』だぞ！ 分か

らないのか!？」

「いや、そんな事言われても……………僕にはさっぱり……………」

「……………」

様子の変化と興奮に近い心境を指摘されてロロは有名人に会ったら驚かない方がおかしいと言わんばかりに『神楽』と『ルーレイ』の名前が一体何を示しているのか、分らないのかと問い掛けたら、カレンはお手上げのポーズをして愛想を浮かべながら正直に知らないと答えると四人全員の間で沈黙が生まれた。

「お前、それ……………冗談だよな？」

「冗談じゃないよ、僕は本気で言ってるよ」

冗談であって欲しいと願うような眼差しと怪訝そうな顔のロロの聞き返しにカレンは本気で知らないと思わず即答する。

「マジで知らねえのかよ……………田舎者にも程があるだろう!？」

いつものやり取りだが、今回のロロはカレンの世間知らずにいい加減頭にきたらしく、顔を俯いた後に全身をプルプルと震わせ、そして、非難するように音量の高い声で怒鳴り、今度は違う意味で興奮する。

「ロロ、落ち着いて」

軽くブチ切れて、フーフーと猫のように息を荒くするロロにアイシヤは怒りを鎮めようと肩に手を乗せて、落ち着かせようとした。

「ねえ、ミツルギ? 二人が君に言っている? 伝説の英雄の子孫? って、一体何の事?」

理由は分かってはいないが成り行きでロロを怒らせてしまったカレンは、質問しようにも今の彼に質問したら駄目だと場の空気を読んでそれを理解し、アイシヤの方も興奮しているロロを落ち着かせているから邪魔をしてはいけなさとこれも空気を読んで、カレンは二人への質問を断念した。

それでここは、話題の原因でもあるミツルギ本人に直接聞いてみよ

うとカレンは、二人が言った『神楽』と『ルーレイ』に関連する？
伝説の英雄の子孫？について尋ねた。

「ふむ、簡単に言うと、俺の二人の先祖は今から約400年前に訪れた、世界全体の危機を救った英雄の二人なんだ」

「世界を救った？」

事情を知らない人から見たら、異常なまでの世間知らずのカレンにミツルギは特に様子の変化は見当たらず、今まで通り且つ親切に自身の先祖の話を開始する。

「世界を救った事を詳しく説明すると、ここから少し歴史を辿る事になる。400年前、おとぎ話上の人物だと思っていた魔人『アルタイル』が突如として、世界に降臨し、おとぎ話通りの常識を越えた異常とまでも呼べる程の力を駆使して、各国々に混乱を齎し、世界中の人々を恐怖と絶望で支配して、この世界『アメストラル』を自分だけの物にしようと企んだんだ」

「魔人『アルタイル』？」

「だが、その『アルタイル』の野望を止めんとせんと現れた、英雄達が存在したんだ」

「英雄達って事は……………もしかして、ミツルギの先祖の人達の事？」

淡々と話を進めるミツルギの正体を知る為にはこの世界『アメストラル』の歴史を辿る事になり、そこから魔人『アルタイル』という世界の支配を企む人物が登場し、続いてその魔人の企みを阻止するために現れた、英雄達が登場すると聞いて、カレンはその英雄達の中にミツルギの先祖達が居ると予測した。

「ああ、俺の先祖、初代『ルーレイ』と『神楽』は魔人『アルタイル』を共に力を合わせて倒した勇者『トラル』の仲間だったんだ」

「勇者『トラル』？」

「『トラル』も存じないのか？ 勇者『トラル』と言えば、400年前の最大の英雄の名前さ！ 凶悪な力を持った魔人『アルタイル』を、我が身を犠牲にしてまでも倒し、世界を救い、世界を変え、そ

して、世界の導いた偉大な人物で、400年経った今でもその名は世界中の何処でも語り継がれている程の有名人中の有名人、それが『トラル』さ」

400年前の英雄と呼ばれているミツルギの先祖の話の過程で出て来た勇者『トラル』と言う人物は説明の内容的に飛躍している部分も在ったりしたが、掻い摘んで言うと『トラル』は魔人『アルタイル』を倒して世界中を救った、現代でも超有名な大英雄らしい。

「『神楽』と『ルーレイ』並びに………まさか、勇者『トラル』まで知らない奴がこの世に居るなんてな」

ほんの少し前まで興奮していたがアイシャの迅速な鎮静に数秒で怒りが治まり、落ち着きを取り戻したロロは話に介入して来た。

「『トラル』の事は例え世界中の辺境地に住んでいる連中でも、知らない奴は一人も居ないっていうぐらいの有名なんだぞ。色々な本にも載っているし、学校の歴史の教科書にも大々的に載っている事も有れば、『トラル』を崇める宗教も在るって話だ」

「その勇者『トラル』と共に世界を救った功績で、仲間達も人々から英雄と称えられ、『トラル』の次に有名な英雄の『神楽』と『ルーレイ』の末裔がそこに居る彼がそうなんだ」

過去の人物でも世界中の隅々に伝わっている勇者『トラル』の有名度と現代でも彼を取り上げる物の多さを説明するロロとは別に、ミツルギは『トラル』と一緒に世界を守り、後に英雄と称賛された仲間の末裔だから有名だとアイシャは眼を指し向けてカレンに告げる。「でも、本当に驚いた。こんな所である『神楽』と『ルーレイ』に出会えるなんて」

「だよな！ 俺様もぶったまげたぜ………あの伝説の英雄の子孫を生で拝める機会が訪れる日が来るとは、思ってもみなかった」

以上の説明からミツルギの先祖は余程の有名人のようで、ロロはともかく冷静沈着で喜怒哀楽の表情が乏しかったアイシャまでもが驚きを抑えきれないようで、二人は伝説の英雄の末裔ミツルギとの対面に感激

に似た感覚を体感する。

「？伝説？か……………君達が今日此処で？伝説？に出会えたと言うのなら、俺も今日此処で、？もう一つの伝説？に会えたと言う事になる！」

先祖が世界中に知れ渡る伝説級の有名度の恩恵でロロとアイシャから感銘的な眼差しを送られ、例え先祖に対する物だったしても悪い気がしないのかミツルギは誇り高そうに笑みのシワを増幅させた。そして、笑みを絶やさぬままミツルギはこの場に自分という？伝説？の英雄の血を引き継ぐ者の他にもう一つ、？伝説？が在ると語り、視線をカレンに向き変えた。

「カレン、君の持っているその魔装器は『ゼオラル』で、間違いはないか？」

「へっ？……………ああ、うん。一応そうだけど、それがどうかしたの？」

もう一つの？伝説？が此処に在ると言ったミツルギが、何故かカレンに魔装器の名前は『ゼオラル』か、と尋ね始め、自分は？伝説？の話とは全く無関係だと思っていたカレンはいきなり話を振られ、意表を突かれるも戸惑う事無く、その通りだと肯定した。

「やはり！聞き間違いではなかったのだな！」

良い方の予感的中したように今度はミツルギが興奮の笑みを浮かべる。

「ああ、そうだ！忘れてたって……………え？」

ロロも同じ事を探ねようとしていたようでミツルギに先を越されて、その事を思い出すと同時にカレンの質問の返事を聞いて、身体を硬直してしまう。

「えっと……………カレン、もう一度確認するようで悪いけど……………君の、その魔装器は『ゼオラル』で、間違いはないんだよね？」

ついさっきミツルギが『神楽』と『ルーレイ』の名を語った時と同じように、アイシャは本日二回目の眼の見開きを披露しながら、恐

る恐るカレンに問い掛けた。

「まあ、名前は確かに『ゼオラル』って事は間違いないけど……
………それよりも三人とも、一体どうしたの？　僕の魔装器が
どうかしたっていうの？」

コロコロと態度が変わっていくロロ及びアイシャにカレンは、二人
の態度の変わりような原因は自分の魔装器が関係している事は質問
の内容で明らかになっているので、ミツルギも含めて三人に自分の
魔装器ついて何か有るのかと尋ね返した。

「どうしたのって………お前が持っている魔装器は———
———」

「君が持っている魔装器は？勇者『トラル』が持っていた魔装器？
なんだ」

「え………？」

割り込むようにロロが言おうとした事をミツルギが先に答え、その
返って来た答えの内容がカレンの耳に入って、脳に伝わった時、衝
撃が身体中を走り抜けた………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994y/>

ユニヴァース

2011年11月15日01時01分発行